

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(129)

南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(XXVI)

(伊集院IC～市来IC間)

向
栲
城
跡

むかい がこい じょう あと
向 栲 城 跡

(日置市東市来町)



2008年3月
鹿児島県立埋蔵文化財センター



向柁城跡遠景



中世出土遺物集合

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）建設に伴って、平成9年度から平成10年度にかけて実施した日置市東市来町伊作田に所在する向楯城跡の発掘調査の記録です。

向楯城跡は、標高約50mの独立台地上にあります。調査の結果、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が発見されました。

特に、中世から近世にかけての空堀・帯曲輪・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・炉跡などの遺構や遺物などが発見され、中世山城を知るうえで、貴重なものとなっています。

こうした遺跡の成果が積み上げられることによって、鹿児島県の歴史の解明が進むものと期待しています。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

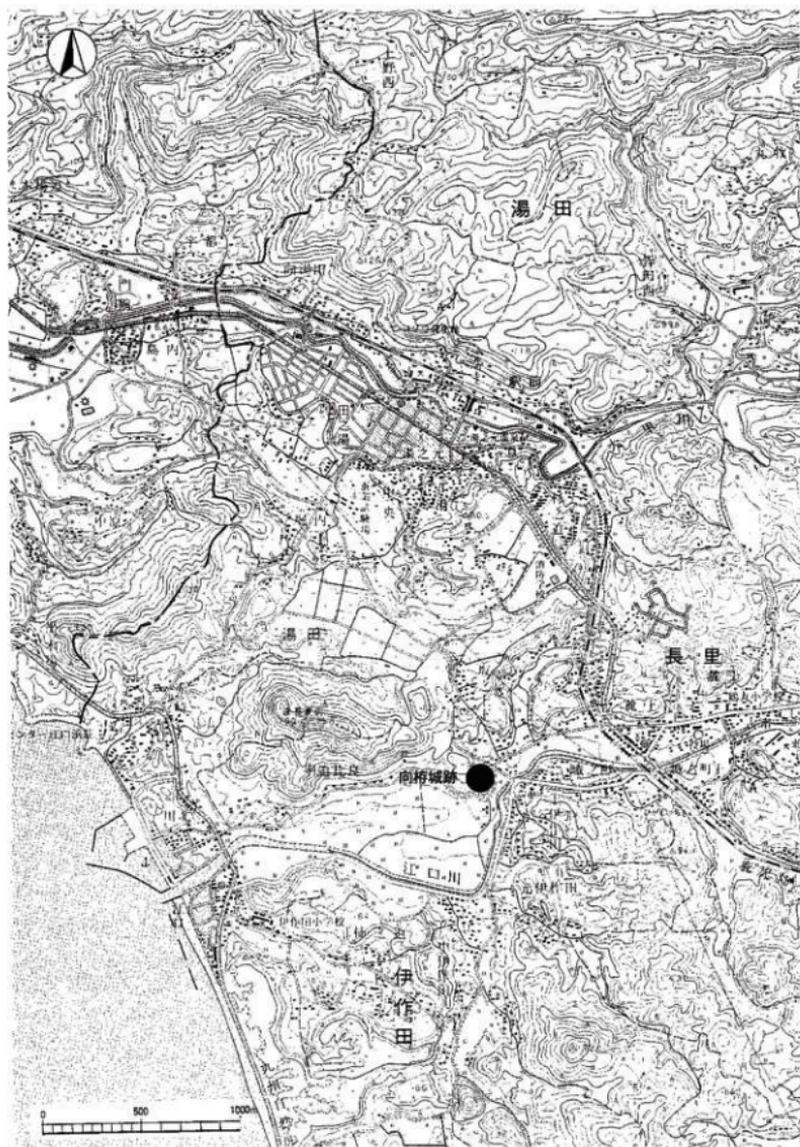
最後に調査に当たりご協力をいただいた国土交通省鹿児島国道事務所、日置市（旧東市来町）教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成20年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	むかいがこいじょうあと							
書名	向橋城跡							
副書名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXVI							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第129集							
編著者名	牛ノ濱 修・鶴田 静彦・木之下悦朗							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 Tm0995-48-5811							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
		市町村	遺跡番号					
むかいがこいじょうあと 向橋城跡	あ ちほりんのあきし 鹿児島県日置市 ひがしちやまのちゆういざむら 東市来町伊作田 あづわのこい なかのこい 字上橋・中橋・ しもめこい 下橋	462162	2917	31° 39' 17"	130° 20' 17"	確認調査 19961120) 19961225 本調査 19970421) 19980324 19981008) 19990316	16,000 (12,000)	南九州西回 り自動車道 鹿児島道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
向橋城跡	集落跡 中世城館	旧石器 縄文草創期～ 縄文晩期 古墳 古代 中世 近世	配石遺構1基、集 石7基 堅穴住居跡11軒 円形周溝1基・土 坑4 空堀、曲輪・掘立 柱建物跡3軒・炉 跡19基 掘立柱建物跡1軒		剥片尖頭器・ナイフ 細石刃核・細石刃・石鏃・ 隆帯文土器・無文土器 阿高・市来・並木・黒川式 土器、成川式土器、破鏡 須恵器・土師器・墨書土器・ 古銭 肥前・薩摩焼等			
遺跡の概要	標高約50mの独立台地上に所在する複合遺跡である。旧石器時代ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・ナイフ形石器、旧石器時代末～縄文時代草創期にかけての細石刃・細石刃核や隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また、古墳時代の堅穴住居跡や古代の円形周溝遺構が検出され、出土遺物も成川式土器や須恵器・土師器とともに、破鏡・墨書土器等貴重な出土もあった。中世から近世にかけては空堀・帯曲輪・堀切・堅穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などの中世山城の遺構が検出された。							



第1図 向柵城跡位置図

例 言

- 1 この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）建設に伴う向楯城跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県日置市東市来町（旧日置郡東市来町）伊作田字上楯・中楯・下楯に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、国土交通省から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査事業は、平成9年4月21日～平成11年3月16日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成18・19年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、国土交通省が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の実測・写真の撮影は、調査担当者が行った。なお、遺構実測の一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、空中撮影については株式会社バスコに委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て、鶴田静彦・木之下悦朗が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て、鶴田静彦・木之下悦朗が行った。
- 11 石器の実測・トレースの大部分は、(株)九州文化財研究所及び大成エンジニア(株)に委託し、監修は牛ノ濱修が行った。
- 12 陶磁器の実測・トレースの大部分は、(株)九州文化財研究所及び株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、監修は鶴田静彦が行った。
- 13 遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定及び樹種同定は、株式会社加速器分析研究所及び古環境研究所に委託した。また、残留磁気測定については、古環境研究所に委託した。
- 14 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 15 本書の執筆は、第I章・第II章・第IV章を牛ノ濱 修、第V章第2節の縄文草創期を新東見一、その他の第V章を木之下悦朗、第III章・第VI章を鶴田静彦、第VII章第1節を鶴田静彦、第2節を池畑耕一、第VIII章第1節の建物関係及び炉跡を松元佑輔、それ以外の遺構を鶴田静彦、第IX章第1節を木之下悦朗、第2節を関明恵が執筆した。また、第XI章は、文末にそれぞれの文責を記した。
- 16 本書の編集は、鶴田静彦、木之下悦朗が行った。
- 17 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、向楯城跡の遺物注記の略号は「ムカイ。」である。

目 次

巻頭図版	
序文	
抄録	
例言	
目次	
第I章 発掘調査の経過	1
第1節 西回り自動車道建設に至るまでの経過	1
第2節 向椿城跡発掘調査経緯	7
第3節 調査の組織	7
第4節 調査の経過（日誌抄）	9
第II章 遺跡の位置と環境	14
第1節 遺跡の位置及び自然環境	14
第2節 歴史的環境	14
第III章 発掘調査の概要	20
第1節 発掘調査の方法	20
第2節 遺跡の地形及び層序	22
第IV章 旧石器時代の調査	25
第1節 ナイフ形石器文化	25
第2節 細石刃文化	28
第V章 縄文時代の調査	60
第1節 遺構	60
第2節 遺物	68
第VI章 古墳時代の調査	144
第1節 遺構	144
第2節 遺物	167
第VII章 古代の調査	171
第1節 遺構	171
第2節 遺物	182
第VIII章 中世の調査	191
第1節 遺構	191
第2節 遺物	264
第IX章 近世の調査	291
第1節 遺構	291
第2節 遺物	295
第X章 科学分析	308
第XI章 発掘調査のまとめ	362
写真図版	371
あとがき	431

挿 図 目 次

第1図	向栢城跡位置図	第39図	凹石・敲石・磨石(2)……………	59	
第2図	南九州西回り自動車道関係遺跡位置図……	6	第40図	縄文時代遺構配置図……………	61
第3図	向栢城跡の位置及び周辺遺跡……………	17	第41図	縄文時代草創期遺構配置図及び地形図……	62
第4図	周辺地形及び発掘範囲……………	20	第42図	縄文時代草創期1号集石……………	63
第5図	向栢城跡全遺構配置図……………	21	第43図	縄文時代草創期2号集石……………	64
第6図	土層柱状断面図……………	22	第44図	縄文時代草創期配石遺構……………	64
第7図	G-7・8・9東壁断面図……………	23	第45図	縄文時代草創期土器出土状況(№466)……	64
第8図	F・G・H-10、G-8北壁断面図……	24	第46図	縄文時代集石遺構等位置図……………	65
第9図	Ⅶ層出土遺物全ドット図……………	29	第47図	縄文時代集石遺構3・4号……………	65
第10図	Ⅶ層石材別分布図……………	30	第48図	縄文時代集石遺構5・6・7号 及び黒曜石集積遺構……………	66
第11図	ナイフ形石器文化期出土遺物分布図…	31	第49図	黒曜石集積出土遺物……………	67
第12図	ナイフ形石器・台形石器……………	32	第50図	縄文時代草創期土器出土状況……	69
第13図	尖頭器……………	33	第51図	縄文時代草創期出土土器……………	70
第14図	スクレイパー(1)……………	34	第52図	縄文時代早期出土土器(1)……………	72
第15図	スクレイパー(2)……………	35	第53図	縄文時代早期出土土器(2)……………	73
第16図	スクレイパー(3)……………	36	第54図	縄文時代早期出土土器(3)……………	74
第17図	スクレイパー(4)・二次加工剥片…	37	第55図	縄文時代早期出土土器(4)……………	75
第18図	二次加工剥片……………	38	第56図	縄文時代早期出土土器(5)……………	76
第19図	楔形石器(1)……………	39	第57図	縄文時代早期出土土器(6)……………	77
第20図	楔形石器(2)……………	40	第58図	縄文時代早期出土土器(7)……………	78
第21図	石錐・剥片……………	41	第59図	縄文時代早期出土土器(8)……………	79
第22図	細石刃・細石刃核分布図……………	42	第60図	縄文時代早期出土土器(9)……………	80
第23図	細石刃(1)……………	43	第61図	縄文時代早期出土土器(10)……	81
第24図	細石刃(2)……………	44	第62図	縄文時代早期出土土器(11)……	82
第25図	調整剥片……………	45	第63図	縄文時代早期出土土器(12)……	83
第26図	細石刃核(1)……………	46	第64図	縄文時代早期出土土器(13)……	84
第27図	細石刃核(2)……………	47	第65図	縄文時代早期出土土器(14)……	85
第28図	細石刃核(3)……………	48	第66図	縄文時代早期出土土器……………	85
第29図	細石刃核(4)……………	49	第67図	縄文時代前期～中期出土土器(1)…	86
第30図	ブランク……………	50	第68図	縄文時代前期～中期出土土器(2)…	87
第31図	石鏃分布図……………	51	第69図	縄文時代前期～中期出土土器(3)…	88
第32図	石鏃・土器分布図……………	52	第70図	縄文時代後期出土土器(1)……………	89
第33図	石鏃(1)……………	53	第71図	縄文時代後期出土土器(2)……………	90
第34図	石鏃(2)……………	54	第72図	縄文時代後期出土土器(3)……………	91
第35図	石鏃(3)……………	55	第73図	縄文時代後期出土土器(4)……………	92
第36図	石鏃(4)……………	56	第74図	縄文時代後期出土土器(5)……………	93
第37図	石核……………	57	第75図	縄文時代後期出土土器(6)……………	94
第38図	凹石・敲石・磨石(1)……………	58			

第76図	縄文時代後期出土土器 (7)……………	95	第119図	縄文時代前期～晩期出土石器 (11)……	137
第77図	縄文時代後期出土土器 (8)……………	96	第120図	縄文時代前期～晩期出土石器 (12)……	138
第78図	縄文時代後期出土土器 (9)……………	97	第121図	縄文時代前期～晩期出土石器 (13)……	139
第79図	縄文時代後期出土土器 (10)……………	98	第122図	縄文時代前期～晩期出土石器 (14)……	140
第80図	縄文時代後期出土土器 (11)……………	99	第123図	縄文時代前期～晩期出土石器 (15)……	141
第81図	縄文時代後期出土土器 (12)……………	100	第124図	縄文時代前期～晩期出土石器 (16)……	142
第82図	縄文時代後期出土土器 (13)……………	101	第125図	縄文時代前期～晩期出土石器 (17)……	143
第83図	縄文時代後期出土土器 (14)……………	102	第126図	古墳時代遺構配置図……………	145
第84図	縄文時代後期出土土器 (15)……………	103	第127図	住居跡配置図……………	146
第85図	縄文時代後期出土土器 (16)……………	104	第128図	1号住居跡及び出土遺物……………	147
第86図	縄文時代後期出土土器 (17)……………	105	第129図	2号住居跡出土土器……………	148
第87図	縄文時代後期出土土器 (18)……………	106	第130図	3号住居跡……………	148
第88図	縄文時代後期出土土器 (19)……………	107	第131図	3号住居跡出土土器 (1)……………	149
第89図	縄文時代後期出土土器 (20)……………	108	第132図	3号住居跡出土土器 (2)……………	150
第90図	縄文時代後期出土土器 (21)……………	109	第133図	4号住居跡及び出土土器……………	151
第91図	縄文時代後期出土土器 (22)……………	110	第134図	5号住居跡及び出土土器……………	152
第92図	縄文時代後期出土土器 (23)……………	111	第135図	5号住居跡出土土器……………	153
第93図	縄文時代前期～晩期出土土器底部 (1)…	112	第136図	6号住居跡……………	153
第94図	縄文時代前期～晩期出土土器底部 (2)…	113	第137図	6号住居跡出土土器……………	154
第95図	縄文時代後期出土土器 (24)……………	114	第138図	7号住居跡及び出土土器……………	155
第96図	縄文時代後期出土土器 (25)……………	115	第139図	8号住居跡及び出土土器……………	156
第97図	縄文時代後期出土土器 (26)……………	116	第140図	8号住居跡出土土器……………	157
第98図	縄文時代後期出土土器 (27)……………	117	第141図	9・10・11号住居跡位置図……………	158
第99図	縄文時代後期出土土器 (28)……………	118	第142図	9号住居跡……………	158
第100図	縄文時代晩期出土土器 (1)……………	120	第143図	9号住居跡出土土器 (1)……………	159
第101図	縄文時代晩期出土土器 (2)……………	121	第144図	9号住居跡出土土器 (2)……………	160
第102図	縄文時代晩期出土土器 (3)……………	122	第145図	9号住居跡出土土器 (3)……………	161
第103図	縄文時代晩期出土土器 (4)……………	123	第146図	9号住居跡出土土器 (4)……………	162
第104図	縄文時代晩期出土土器 (5)……………	124	第147図	10号住居跡及び出土土器……………	163
第105図	縄文時代晩期出土土器 (6)……………	125	第148図	10号住居跡出土土器 (1)……………	164
第106図	縄文時代晩期出土土器 (7)……………	126	第149図	10号住居跡出土土器 (2)……………	165
第107図	縄文時代出土土器製品 (1)……………	127	第150図	10号住居跡出土土器 (3)……………	166
第108図	縄文時代出土土器製品 (2)……………	128	第151図	11号住居跡……………	167
第109図	縄文時代前期～晩期出土石器 (1)……	128	第152図	包含層出土状況……………	168
第110図	縄文時代前期～晩期出土石器 (2)……	129	第153図	包含層出土土器 (1)……………	168
第111図	縄文時代前期～晩期出土石器 (3)……	129	第154図	包含層出土土器 (2)……………	169
第112図	縄文時代前期～晩期出土石器 (4)……	130	第155図	包含層出土土器 (3)……………	170
第113図	縄文時代前期～晩期出土石器 (5)……	131	第156図	古代全遺構配置図……………	172
第114図	縄文時代前期～晩期出土石器 (6)……	132	第157図	古代遺構配置図 (1)……………	173
第115図	縄文時代前期～晩期出土石器 (7)……	133	第158図	古代遺構配置図 (2)……………	174
第116図	縄文時代前期～晩期出土石器 (8)……	134	第159図	堅穴遺構及び出土遺物……………	175
第117図	縄文時代前期～晩期出土石器 (9)……	135	第160図	円形周溝遺構及び出土遺物……………	176
第118図	縄文時代前期～晩期出土石器 (10)……	136	第161図	土坑1及び出土遺物……………	177

第162図	土坑 1 出土遺物	178	第205図	空堀及び土坑群出土遺物 (1)	221
第163図	土坑 2 及び出土遺物	179	第206図	空堀及び土坑群出土遺物 (2)	222
第164図	土坑 2 出土遺物	180	第207図	空堀及び土坑群出土遺物 (3)	223
第165図	土坑 3 及び出土遺物	181	第208図	空堀及び土坑群出土遺物 (4)	224
第166図	土坑 4 及び出土遺物	181	第209図	空堀及び土坑群出土遺物 (5)	225
第167図	土坑 4 出土銭貨	181	第210図	空堀及び土坑群出土遺物 (6)	226
第168図	土坑 5	181	第211図	空堀及び土坑群出土遺物 (7)	227
第169図	埋納土師器甕出土状況	182	第212図	空堀及び土坑群出土遺物 (8)	228
第170図	埋納土師器甕	182	第213図	空堀及び土坑群出土遺物 (9)	229
第171図	古代出土遺物 (1)	183	第214図	空堀及び土坑群出土遺物 (10)	230
第172図	古代出土遺物 (2)	184	第215図	空堀及び土坑群出土遺物 (11)	231
第173図	古代出土遺物 (3)	185	第216図	空堀及び土坑群出土遺物 (12)	232
第174図	古代出土遺物 (4)	186	第217図	曲輪 2 遺構配置図	234
第175図	古代出土遺物 (5)	187	第218図	堅穴遺構 1・2	235
第176図	古代出土遺物 (6)	187	第219図	堅穴遺構 3	236
第177図	古代出土遺物 (7)	188	第220図	堅穴遺構 3 出土遺物	236
第178図	古代出土遺物 (8)	189	第221図	曲輪 3 遺構配置図	238
第179図	古代出土遺物 (9)	190	第222図	曲輪 3 出土遺物 (1)	239
第180図	中世遺構配置図	193	第223図	曲輪 3 出土遺物 (2)	240
第181図	向府城跡地形図及び横断・縦断面図	194	第224図	曲輪 3 出土遺物 (3)	241
第182図	発掘調査前空堀及び帯曲輪等	195	第225図	中世墓 1	242
第183図	発掘調査後空堀及び帯曲輪等	196	第226図	中世墓 1 出土遺物	242
第184図	発掘調査後空堀及び帯曲輪等コタ図	197	第227図	中世墓 2	243
第185図	帯曲輪 c 及び空堀 2 断面図	198	第228図	中世墓 3	243
第186図	空堀 1 出土遺物 (1)	199	第229図	中世墓 4 及び出土遺物	243
第187図	空堀 1 出土遺物 (2)	200	第230図	土坑 1 及び出土遺物	244
第188図	空堀 1 出土遺物 (3)	201	第231図	土坑 2	244
第189図	曲輪 a 出土遺物 (1)	202	第232図	土坑 3	245
第190図	曲輪 a 出土遺物 (2)	203	第233図	土坑 3 出土遺物	245
第191図	曲輪 b 出土遺物	204	第234図	土坑 4～土坑 9 及び出土遺物	246
第192図	曲輪 c 出土遺物	205	第235図	土坑 10～土坑 16	247
第193図	曲輪 1 遺構配置図	206	第236図	土坑 17～土坑 25 及び出土遺物	250
第194図	掘立柱建物跡 1	207	第237図	土坑 26～土坑 35	251
第195図	掘立柱建物跡 2	208	第238図	土坑 36～土坑 43	252
第196図	掘立柱建物跡 3	209	第239図	土坑 44～土坑 49 及び出土遺物	253
第197図	空堀及び土坑群	210	第240図	炉跡位置図	254
第198図	空堀及び土坑群断面図 (1)	213	第241図	1 号炉跡～4 号炉跡	255
第199図	空堀及び土坑群断面図 (2)	214	第242図	5 号炉跡～9 号炉跡	256
第200図	大型円形土坑 2 出土遺物 (1)	215	第243図	10 号炉跡～14 号炉跡	257
第201図	大型円形土坑 2 出土遺物 (2)	216	第244図	15 号炉跡～18 号炉跡	258
第202図	大型円形土坑 2 出土遺物 (3)	217	第245図	19 号炉跡	259
第203図	大型円形土坑 2 出土遺物 (4)	218	第246図	青磁及び土師器埋納遺構	260
第204図	大型円形土坑 2 出土遺物 (5)	219	第247図	不明遺構	261

第248圖	不明遺構出土遺物 (1) ……………	262	第269圖	出土遺物 (陶器 2) ……………	285
第249圖	不明遺構出土遺物 (2) ……………	263	第270圖	出土遺物 (天目茶碗) ……………	286
第250圖	出土遺物 (土師器) ……………	265	第271圖	出土遺物 (錢貨 1) ……………	287
第251圖	出土遺物 (須惠器・播鉢等) ……	266	第272圖	出土遺物 (錢貨 2) ……………	288
第252圖	出土遺物 (播鉢) ……………	267	第273圖	出土遺物 (錢貨 3) ……………	289
第253圖	出土遺物 (瓦質土器) ……………	268	第274圖	出土遺物 (錢貨 4) ……………	290
第254圖	出土遺物 (瓦質・土師質土器等) …	269	第275圖	近世遺構配置圖 ……………	292
第255圖	出土遺物 (石鍋) ……………	270	第276圖	掘立柱建物跡位置圖 ……………	293
第256圖	出土遺物 (青磁 1) ……………	271	第277圖	掘立柱建物跡 ……………	294
第257圖	出土遺物 (青磁 2) ……………	272	第278圖	柱穴群位置圖 ……………	295
第258圖	出土遺物 (青磁 3) ……………	273	第279圖	柱穴群 ……………	296
第259圖	出土遺物 (青磁 4) ……………	274	第280圖	磁器 (1) ……………	297
第260圖	出土遺物 (青磁 5) ……………	275	第281圖	磁器 (2) ……………	298
第261圖	出土遺物 (青磁 6) ……………	276	第282圖	陶器 (1) ……………	299
第262圖	出土遺物 (白磁 1) ……………	278	第283圖	陶器 (2) ……………	300
第263圖	出土遺物 (白磁 2) ……………	279	第284圖	陶器 (3) ……………	301
第264圖	出土遺物 (青花 1) ……………	280	第285圖	陶器 (4) ……………	302
第265圖	出土遺物 (青花 2) ……………	281	第286圖	陶器 (5) ……………	303
第266圖	出土遺物 (青花 3) ……………	282	第287圖	陶器 (6) ……………	304
第267圖	出土遺物 (青花 4) ……………	283	第288圖	陶器 (7) ……………	305
第268圖	出土遺物 (陶器 1) ……………	284	第289圖	陶器 (8) ……………	306

表 目 次

第 1 表	伊集院 I C ~ 市來 I C 間遺跡一覽表 (1) …	4	第19表	縄文時代土器觀察表 (7) ……………	338
第 2 表	伊集院 I C ~ 市來 I C 間遺跡一覽表 (2) …	5	第20表	縄文時代石器觀察表 (1) ……………	339
第 3 表	周辺遺跡 (1) ……………	18	第21表	縄文時代石器觀察表 (2) ……………	340
第 4 表	周辺遺跡 (2) ……………	19	第22表	古墳時代破鏡觀察表 ……………	341
第 5 表	旧石器時代石器觀察表 (1) ……………	324	第23表	古墳時代土器觀察表 (1) ……………	341
第 6 表	旧石器時代石器觀察表 (2) ……………	325	第24表	古墳時代土器觀察表 (2) ……………	342
第 7 表	旧石器時代石器觀察表 (3) ……………	326	第25表	古墳時代土器觀察表 (3) ……………	343
第 8 表	旧石器時代石器觀察表 (4) ……………	327	第26表	古代土師器・須惠器觀察表 (1) ……	344
第 9 表	旧石器時代石器觀察表 (5) ……………	328	第27表	古代土師器・須惠器觀察表 (2) ……	345
第10表	旧石器時代石器觀察表 (6) ……………	329	第28表	古代土師器・須惠器觀察表 (3) ……	346
第11表	旧石器時代石器觀察表 (7) ……………	330	第29表	古代土師器・須惠器觀察表 (4) ……	347
第12表	旧石器時代石器觀察表 (8) ……………	331	第30表	古代陶磁器觀察表 ……………	347
第13表	縄文時代土器觀察表 (1) ……………	332	第31表	古代石器觀察表 ……………	347
第14表	縄文時代土器觀察表 (2) ……………	333	第32表	古代土坑觀察表 ……………	347
第15表	縄文時代土器觀察表 (3) ……………	334	第33表	中世土師器・須惠器・瓦質土器等 觀察表 (1) ……………	348
第16表	縄文時代土器觀察表 (4) ……………	335	第34表	中世土師器・須惠器・瓦質土器等 觀察表 (2) ……………	349
第17表	縄文時代土器觀察表 (5) ……………	336			
第18表	縄文時代土器觀察表 (6) ……………	337			

第35表	中世土師器・須恵器・瓦質土器等 観察表 (3)……………	350
第36表	中世土師器・須恵器・瓦質土器等 観察表 (4)……………	351
第37表	中世陶磁器観察表 (1)……………	352
第38表	中世陶磁器観察表 (2)……………	353
第39表	中世陶磁器観察表 (3)……………	354
第40表	中世陶磁器観察表 (4)……………	355

第41表	中世陶磁器観察表 (5)……………	356
第42表	中世石器観察表……………	357
第43表	中世土坑観察表……………	358
第44表	古代・中世出土銭貨観察表 (1) ……	359
第45表	古代・中世出土銭貨観察表 (2) ……	359
第46表	近世陶磁器観察表 (1) ……	360
第47表	近世陶磁器観察表 (2) ……	361

図版目次

図版1	空堀遠景……………	371
図版2	土層断面図・調査中の故 勇氏…	372
図版3	旧石器・縄文時代草創期遺構…	373
図版4	縄文時代草創期集石……………	374
図版5	縄文時代集石……………	375
図版6	古墳時代住居他 (1)……………	376
図版7	古墳時代住居他 (2)……………	377
図版8	古代遺構・遺構内遺物他……………	378
図版9	発掘前の空堀……………	379
図版10	空堀近景……………	380
図版11	曲輪1から曲輪2・3を臨む…	381
図版12	曲輪1・空堀俯瞰……………	382
図版13	中世掘立柱建物跡……………	383
図版14	曲輪2全景……………	384
図版15	中世墓……………	385
図版16	炉跡 (1)……………	386
図版17	炉跡 (2)……………	387
図版18	炉跡 (3)……………	388
図版19	炉跡 (4)……………	389
図版20	大型円形土坑2他……………	390
図版21	曲輪・空堀・帯曲輪等……………	391
図版22	近世掘立柱建物跡 (1)……………	392
図版23	近世掘立柱建物跡 (2)……………	393
図版24	薩摩焼他……………	394
図版25	旧石器時代石器 (1)……………	395
図版26	縄文時代草創期出土遺物 (1)…	396
図版27	縄文時代草創期出土遺物 (2)…	397
図版28	縄文時代草創期出土遺物 (3)…	398
図版29	縄文時代早期出土遺物……………	399
図版30	縄文時代前期～後期出土遺物…	400

図版31	縄文時代後期出土遺物 (1)……	401
図版32	縄文時代後期出土遺物 (2)……	402
図版33	縄文時代後期～晩期出土遺物…	403
図版34	縄文時代出土遺物……………	404
図版35	古墳時代住居跡出土遺物 (1)…	405
図版36	古墳時代住居跡出土遺物 (2)…	406
図版37	古墳時代住居跡出土遺物 (3)…	407
図版38	古墳時代包含層出土遺物……………	408
図版39	古代遺構内出土遺物 (1)……………	409
図版40	古代遺構内出土遺物 (2)……………	410
図版41	古代遺構内出土遺物……………	411
図版42	古代出土遺物 (1)……………	412
図版43	古代出土遺物 (2)……………	413
図版44	古代出土遺物 (3)……………	414
図版45	土師器甕集合……………	415
図版46	空堀・曲輪・土坑等投弾……………	416
図版47	中世大型円形土坑2内出土遺物…	417
図版48	中世遺構内出土遺物 (1)……………	418
図版49	中世遺構内出土遺物 (2)……………	419
図版50	埋納遺構出土青磁・土師器…	420
図版51	中世出土遺物 (1)……………	421
図版52	中世出土遺物 (2)……………	422
図版53	中世出土遺物 (3)……………	423
図版54	中世出土遺物 (4)……………	424
図版55	中世出土遺物 (5)……………	425
図版56	中世出土遺物 (6)……………	426
図版57	中世出土銭貨 (1)……………	427
図版58	中世出土銭貨 (2)……………	428
図版59	近世出土遺物……………	429
図版60	薩摩焼集合……………	430

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 西回り自動車道建設に伴う発掘調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院 I C と市来 I C 間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。なお事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

- 1 一ノ谷……日置市伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90m～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平……日置市伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150mの小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A…日置市伊集院町下谷口字下永迫の標高約85m～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地し、調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……日置市伊集院町下谷口の標高約90m～100mの山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は8,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石鏃、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山…日置市伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と谷頭を含んだ、かなり急な斜面からなる調査面積は6,300㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期）、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは、縄文時代

- 早期の遺構で、遺跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。
- 6 大田城跡…日置市伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は3,500㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
 - 7 堂平窯跡…日置市東市来町美山の標高約85m～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・こね鉢・搦鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
 - 8 池之頭…日置市東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80m～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
 - 9 雪山…日置市東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鎌・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原・土坑等から薩摩焼（茶家・土瓶・搦鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
 - 10 猿引…日置市東市来町長里字猿引の標高約110m～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
 - 11 犬ヶ原…日置市東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鎌・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）、製鉄に関する遺物（鞆羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
 - 12 向柵城跡…日置市東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は**（本報告書）**16,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鎌と一緒に見つかった。また古墳時代の堅穴住居跡や中世～近世の空堀・帯曲輪・堀切・堅穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などの中世山城の遺構が検出された。
 - 13 堂園平…日置市東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦

地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・吉田式・塞ノ神式・轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里……日置市東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……いちき串木野市大里字上ノ原前から日置市東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50m台地西側に所在する。調査面積は81,500㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代(早期～晩期)、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……いちき串木野市大里の東シナ海を望む標高約40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面、調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土し、古墳時代は竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が出土した。

※刊行報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (31)	2001.3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (32)	2002.3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (33)	2002.9
「市ノ原遺跡 (第1地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (49)	2003.3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (50)	2003.3
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (53)	2003.3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (62)	2003.3
「下永迫A遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (72)	2004.3
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (93)	2005.3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (94)	2005.3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (95)	2005.3
「堂園平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (104)	2006.3
「市ノ原遺跡 (第5地点)」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (105)	2006.3
「堂平窯跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (106)	2006.12
「上山路山遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (116)	2007.3

第1表 南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(1) (伊集院IC～市来IC間)

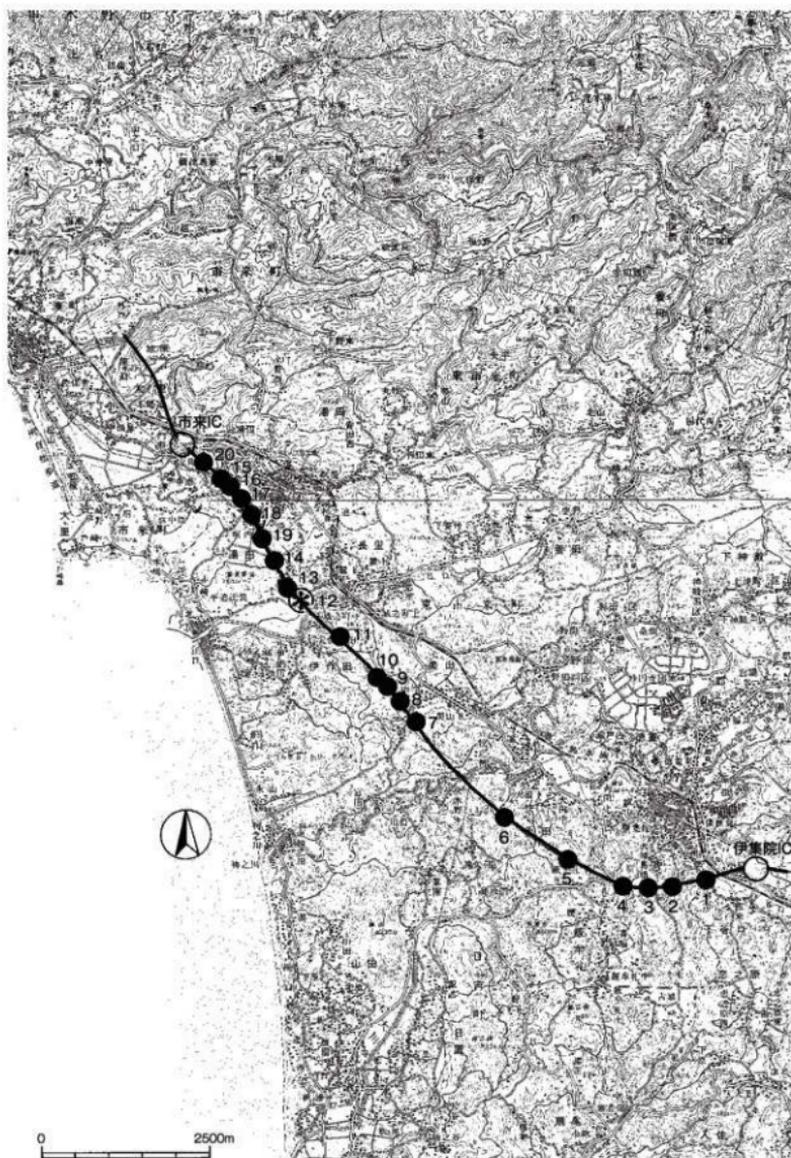
番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	調査項目	調査員	時代	概要
①	一ノ谷	日置市伊集院町 下谷口	確認H8.10 全面H8.10～11	1,250	三垣・桑波田 三垣・桑波田	中世～近世	孤立柱建物跡・土坑 (原埋文七センター報告書31・2001発行)	
②	永追平	日置市伊集院町 下谷口	確認H8.10～12 全面H8.10～H10.7	14,000	三垣・桑波田 繁島・三垣・中塚・森田・川口・大塚	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 古代～近世	礫群、湖片先頭器・ナイフ・彩形石器 細石刃 壱穴土段跡・集石・壱穴土坑、前平式・吉田式土器 青磁・土師器、陶磁器 (原埋文七センター報告書93・2005発行)	
③	下永追	日置市伊集院町 下谷口	確認H9.10 全面H10.5～7	2,600	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代～中世	土坑・集石・須恵器・土師器 青磁、白磁 (原埋文七センター報告書72・2004発行)	
④	柳原	日置市伊集院町 下谷口	確認H9.11 全面H10.5～7	8,000	池畑・三垣・元田 繁島・中原・川口・大塚	古代～中世 中世～近世	土坑・壱土・須恵器・土師器・鉄製品 ヒラタ・漆木遺構、陶磁器 (原埋文七センター報告書94・2005発行)	
⑤	上山路山	日置市伊集院町 大田	確認H9.2 全面H9.5～H10.3	6,300	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文 弥生～古墳	湖片・砂片 酒器、集石 成川式土器 (原埋文七センター報告書116・2007発行)	
⑥	大田城	日置市伊集院町 大田	確認H8.12～H9.1 全面H9.12～H10.3	3,500	三垣・桑波田	旧石器 縄文	三條空明器 集石・土坑 前平式土器、石鏡、磨石 (原埋文七センター報告書95・2006発行)	
⑦	堂平窯	日置市東市来町 美山	確認H10.2 全面H10.8～12	3,500	池畑・繁島・宮田・森田・元田他	江戸	壱土段跡、粘土溜まり・土坑・惣草 陶器、瓦、陶磁器 (原埋文七センター報告書106・2006発行)	
⑧	池之頭	日置市東市来町 美山	確認H9.8 全面H10.8～11 H12.7～8	7,500	湯之前・橋口 宮田・寺原 宮田・三垣	旧石器 縄文 古墳	ナイフ彩形石器・彩形石器・石鏡、細石刃等、細石刃 集石、前平式・吉田式・出水式、成川式土器 成川式土器 (原埋文七センター報告書32・2002発行)	
⑨	雪山	日置市東市来町 美山	確認H12.6 全面H12.6～8	2,700	宮田・三垣 宮田・三垣	縄文 古墳	前平式・春日式土器、石鏡、磨石・破石・石皿 成川式土器 深道具、短棒、石臼、陶磁器、砥石、鉄製品 (原埋文七センター報告書53・2003発行)	
⑩	猿引	日置市東市来町 長里	確認H12.5 全面H12.5～6	800	宮田・三垣 宮田・三垣	旧石器 縄文	礫群、湖片先頭器・ナイフ・細石刃等 宮田式土器、石弁・磨石・破石 (原埋文七センター報告書53・2003発行)	
⑪	犬ヶ原	日置市東市来町 伊作田	確認H9.2, H10.6 全面H11.11～H12.2	2,000	池畑・三垣 牛ノ瀬・橋口・大塚	旧石器 縄文 古墳	湖片刃等、細石刃・湖片 黒川式土器、石弁・石皿・石鏡 孤立柱建物跡、壱穴遺構、須恵器、土師器 (原埋文七センター報告書50・2003発行)	
12	向橋城	日置市東市来町 伊作田	確認H8.11～12 全面H9.4～H10.3 全面H10.7～8	16,000	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・橋手	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	湖片先頭器・ナイフ 石鏡、深帯文、前平式、市来式土器 壱穴住居跡、成川式土器 空室、帯曲輪、曲輪、渠切、壱穴遺構、孤立柱建物跡・ 分路・土坑、青磁、磨石等、鉄製品 (原埋文七センター報告書129・2008発行)	

○報告書発行済

第2表 南九州自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表(2) (伊集院|C~市来|C間)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査員	時代	概要
⑬	堂園平	日置市東市来町 伊作田	確認H8.11~H8.12 全面H10.5~H10.11	池畑・西園 八木澤・橋手	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 縄文 古代	尖頭器、ナイフ、右形石器、巖石 細石刃、細石刃 集石、吉田式、塞ノ神式、溝式土器 土坑、須恵器、土師器 (原埋文七センター報告書104、2006発行)
⑭	今里	日置市東市来町 伊作田	確認H8.11~H8.12 全面H10.5~H10.11	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文 縄文 古墳	環状、湖片尖頭器、ナイフ、右形石器 細石刃、細石刃、プラウ式、調整湖片 集石、前平式、深浦式、出水式、黒川式土器 成川式土器 (原埋文七センター報告書33、2002発行)
⑮	市ノ原 第1地点	いちき串木野市 大里	確認H8.10~H8.12 全面H9.4~H10.3	繁昌・西園、宮田 寺師・藤野	縄文 古生 古代 中世~近世	環状、前平式、春日式、黒川式土器、珠状耳飾り 掘立柱建物跡、土坑、溝、須恵器、壺蓋土器 遺跡、瓦葺墓、青磁、白磁、羽釜、染付 (原埋文七センター報告書49、2003発行)
16	市ノ原 第2地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~H8.12 全面H9.4~H10.3	池畑・繁昌、西園、宮田 八木澤・松崎	旧石器(ナイフ) 縄文 近世	ナイフ、右形石器 塞ノ神式、岩浜式土器 陶磁器 (原埋文七センター報告書130、2008発行)
17	市ノ原 第3地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~H8.12 全面H8.12~H9.3 全面H9.4~H10.3 全面H10.5~H11.3 全面H11.5~H11.7	池畑・繁昌、西園、宮田 池畑・前野、三畑、元田、西村、松村 藤野・上之畑、八木澤、三畑、藤手、赤井、大窪 前野・三畑	旧石器(細石刃) 縄文 古生~古墳 古代~中世	細石刃、細石刃 集石、刻日交器文、岩木式、前平式、吉田式、石坂式、 塞ノ神式、押野文、平布式、塞ノ神式、壺蓋土器、 深浦式、竹筒式、春日式、指筒式、市来式土器 壺蓋土器跡、土坑、溝、土坑、高橋式、人來式、黒磁式、 山ノ口式、須玖式、成川式土器 掘立柱建物跡、溝状遺構、須恵土器、土師器、青磁、白磁、石皿 割片、鈴片
18	市ノ原 第4地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~H8.12 全面H9.4~H10.3 全面H10.5~H11.3 全面H11.5~H11.7	池畑・繁昌、西園、宮田 池畑・前野、三畑、元田、西村、松村 前野・上之畑、三畑、松村、大窪 前野・三畑	旧石器 縄文 古生~古墳 古代~中世 近世	集石、壺蓋土器跡、土坑、前平式、吉田式、塞ノ九式、 押野文、平布式、塞ノ神式土器 壺蓋土器跡、土坑、高橋式土器、成川式土器 壺蓋土器跡、土坑、溝、土坑、高橋式、須恵器、土師器 防道跡、掘立柱建物跡、顔付巾、陶磁器 (原埋文七センター報告書130、2008発行)
⑲	市ノ原 第5地点	日置市 東市来町湯田	確認H8.10~H8.12 全面H9.4~H10.3 全面H10.5~H11.3	繁昌・西園、宮田 森田、中原 寺原、松村	旧石器 縄文 古生~古墳 古代~中世	(原埋文七センター報告書105、2006発行) 環状、ナイフ、右形石器、細石刃、細石刃 落し穴、集石、前平式、押野文、深浦式土器 道跡、須恵器、土師器、滑石製石皿 (原埋文七センター報告書105、2006発行)
⑳	市ノ原 第6地点	いちき串木野市 大里	確認H8.11 全面H10.7~H10.9	繁昌・西園、宮田 上之畑、栗林	縄文 古生~古墳 古代~中世	集石、土坑、塞ノ神式土器 壺蓋土器跡、土坑、目録土器 須恵器、土師器、青磁 (原埋文七センター報告書62、2003発行)

○報告書発行済



第2図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第2節 向栴城跡発掘調査経緯

向栴城跡については、建設省九州建設局鹿児島国道工事事務所（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省地方整備局鹿児島国道事務所）と文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）の協議に基づき、国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

調査は、平成8年11月20日から12月25日までに確認調査を行い、遺跡の範囲や性格等を把握した。その結果を基に、平成9年度：平成9年4月21日から平成10年3月24日まで（実働日182日）、平成10年度：平成10年10月8日から平成11年3月16日まで（実働日90日）発掘調査を実施し、報告書作成を平成18・19年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。調査面積は16,000㎡である。

第3節 調査の組織

平成8年度（確認調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所				
調査責任者	鹿児島県教育委員会				
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課				
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉元 正幸	
調査企画者	〃		次長兼総務課長	尾崎 進	
	〃		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋	
	〃		調査課長補佐	新東 晃一	
	〃		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一	
調査担当者	〃		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一	
	〃		文化財調査員	西園 勝彦	
調査事務担当	〃	主	査	前屋敷裕徳	
	〃	主	事	迫立ひとみ	

平成9年度（本調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所				
調査責任者	鹿児島県教育委員会				
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課				
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉元 正幸	
調査企画者	〃		次長兼総務課長	尾崎 進	
	〃		主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋	
	〃		調査課長補佐	新東 晃一	
	〃		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一	
調査担当者	〃		文化財主事	鶴田 静彦	
	〃		文化財主事	勇 健三	
調査事務担当	〃	主	査	前屋敷裕徳	

調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター 〃	主 査	政倉 孝弘
調査指導者	鹿児島大学歯学部 〃 鹿児島短期大学 国立歴史民俗学博物館	主 事 教 授 助 手 学 長 助 手	追立ひとみ 小片 丘彦 竹中 正巳 三木 靖 千田 嘉博

平成10年度（本調査）

事業主体者	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	調査課長補佐	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一
調査担当者	〃	文化財研究員	八木澤一郎
	〃	文化財研究員	横手浩二郎
調査事務担当	〃	主 査	政倉 孝弘
	〃	主 事	溜池 佳子
調査指導者	鹿児島県考古学会 鹿児島短期大学	会 長 学 長	河口 貞徳 三木 靖

平成18年度（整理作業）

事業主体者	国土交通省鹿児島国道事務所		
調査責任者	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	上今 常雄 (～H18.7)
	〃		宮原 景信 (H18.8～)
調査企画者	〃	次長兼総務課長	有川 昭人
	〃	次 長	新東 晃一
	〃	調査第二課長	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濱 修
整理担当者	〃	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濱 修
調査事務担当	〃	総 務 係 長	寄井田正秀
	〃	主 査	蒲池 俊一

平成19年度（整理作業）

事業主体者	国土交通省鹿児島国道事務所				
調査責任者	鹿児島県教育委員会				
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課				
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	宮原 景信		
調査企画者	〃	次長兼総務課長	平山 章		
	〃	次 長	新東 晃一		
	〃	調査第二課長	立神 次郎		
	〃	文化財第二課長	牛ノ濱 修		
整理担当者	〃	文化財研究員	鶴田 静彦		
	〃	文化財研究員	木之下悦朗		
調査事務担当	〃	総 務 係 長	寄井田正秀		
	〃	主 査	蒲池 俊一		

報告書作成検討委員会 平成19年12月 宮原所長ほか12名

報告書作成指導委員会 平成19年12月 新東次長ほか3名

企画担当者 八木澤一郎、関 明恵

第4節 調査の経過（日誌抄）

1 発掘調査

発掘調査は、平成9年度（平成9年4月21日～平成10年3月24日）、平成10年度（平成10年10月8日～平成11年3月16日）に行った。経過は日誌抄により月毎に略述する。

<平成9年度・発掘調査>

4月

確認トレンチの清掃。8・9・10トレンチ設定後、掘り下げ。

5月

グリッド設定

C・D・E-12～14区、G・H・I-9・10区、表土排除後、Ⅲa層掘り下げ、遺構検出。

竪穴住居跡1～3号、検出。溝状遺構1条、検出。

6月

C・D-12～14区、G～K-7～11区、遺構検出。

竪穴住居跡1～3号、検出。F-10区、土器集中箇所。

7月

E～H-11～13区、遺構検出。竪穴住居跡1号、検出。

土坑（古墳時代）1・2号、掘り下げ、実測。

土坑墓、人骨検出（F-11区）。小片丘彦氏（鹿児島大学歯学部教授）、竹中正巳氏（同大学歯学部助手）人骨の取り上げ（男性1体）指導のため来跡。

G-9・10区, 円形周溝遺構, 検出。集石1・2号掘り下げ, 実測。

8月

F~J-10~16区, 遺構検出。竪穴住居跡3~6号, 検出。

土坑4~6号掘り下げ, 実測。

9月

F~J-9~15区, 遺構検出。

竪穴住居跡3~6号, 検出。土坑4・5号, 掘り下げ, 実測。

河口貞徳氏(10日), 上村俊雄氏(11日), 東市来町社会教育課長(12日)来跡。

10月

F・G-7~10区, Ⅶ層(旧石器時代), 掘り下げ。

竪穴住居跡1・7・8号, 検出。炉跡1~6号, 検出。

栗島義明氏(埼玉県教育委員会・9日), 山本信夫氏・松川博一氏(太宰府市教育委員会・17日), 上村俊雄氏・本田道輝氏(鹿児島大学・23日), 中山光夫氏・上田耕氏(知覧町教育委員会・31日)来跡。

11月

F・G-7~10区, Ⅶ層(旧石器時代), 掘り下げ。

H~I-24~30区, 遺構検出。竪穴住居跡9号, 検出。

土坑8号, 掘り下げ, 実測。

橘昌信氏(別府大学・21日), 山崎純男氏(福岡市教育委員会・21日)来跡。

12月

F~H-8~11区, Ⅶ層(旧石器時代), 掘り下げ。礫群2基, 検出。配石炉, 検出。

福田裕二氏(北海道南茅野町教育委員会・18日), 高橋理氏(千歳市埋文センター・18日)来跡。

平成10年1月

F・G-9~11区, Ⅶ層(旧石器時代), 掘り下げ。

H~K-26~29区, 遺構検出。

礫群・配石炉, 検出。竪穴住居跡9~11号・炉跡1~6号, 検出。

2月

I・J-16~20区, 遺構検出。G・H-16~21区, 遺構検出。掘立柱建物跡, 検出。

土坑内より「天聖元寶」, 「景德元寶」出土。

小林達雄氏(國學院大学・23日), 三木 靖氏(鹿児島短期大学学長・24日)現地指導。

千田嘉博氏(国立歴史民俗博物館助手・25~26日), 現地指導。

3月

H・I-16~22区, H-28・29区, 遺構検出。竪穴状遺構1~3号, 検出, 実測。

3・5号墓の人骨取り上げ(男性1体), 小片丘彦氏(鹿児島大学歯学部教授), 竹中正巳氏(同大学歯学部助手)の立ち会い・指導(6日)で来跡。

河口貞徳氏(鹿児島県考古学会会長), 現地指導(10日)。

24日, 平成9年度調査終了。

<平成10年度・発掘調査>

10月

8日、平成10年度調査開始。I-18・19区
下層確認トレンチ設定後掘り下げ。
H・I-18区 掘立柱建物跡柱穴半截。
柴田博子氏（宮崎産業経営大学・16日）来跡。

11月

H～J-24～26区Ⅲa～V層掘り下げ。H-24・25区検出集石実測。
曲輪1・曲輪2間空堀清掃。H・I-27～29区Ⅵ層下部掘り下げ。
I-30・31区帯曲輪トレンチ設定後掘り下げ。
I-20・21区炉跡掘り下げ。
時枝克安氏（島根大学・30日）による炉跡の「熱残留地磁気」測定。

12月

G～I-30・31区帯曲輪トレンチ掘り下げ。
L・M-27・28区空堀掘り下げ。
I-20区、G・H-22区炉跡の検出、実測。
G-19区、K・L-30区Ⅲa層掘り下げ。
藤本強氏（新潟大学・21日）来跡。

平成11年1月

H-18区、F～H-32・33区、J・K-29・30区Ⅲa層掘り下げ。
炉跡13・17～19号検出、実測。大型円形土坑検出。
帯曲輪、空堀1・2土層断面図実測。
三木 靖氏（鹿児島短期大学学長）現地指導（19日）。

2月

F～H-20～29区Ⅲa層掘り下げ。炉跡2・4～7・9号検出、実測。
小畑弘巳氏（熊本大学・26日）来跡。

3月

F～H-22～24区Ⅲa層掘り下げ。
炉跡13～16・18号検出、実測。
検出ビット配置図及びコンタ図作成。16日調査終了。

2 整理作業の経過

整理作業は、平成18・19年度にかけて、霧島市国分上野原縄文の森に所在する鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。大まかな整理作業および報告書作成作業の経過は下記の通りである。

<平成18年度・整理作業>

4月

発掘担当者との引継ぎ。

出土状況図、コンタ図、遺構図、遺構配置図等の整理、遺構配置図の作成。

5月

遺物の水洗及び注記、各時代別遺物選別作業。遺物接合作業。

6月

時代別遺構配置図の作成。時代別（中世、古代）陶磁器の分類（陶器、磁器）。

7月

古代・中世の土師器の実測。草創期の遺物のバインダー処理。

8月

古代・中世の土師器の実測。

縄文時代の土器の接合開始（特に草創期の土器を中心とする）。

9月

古代・中世の土師器の実測、縄文時代の土器の接合。

10月

古代・中世の土師器の実測。縄文時代の土器の接合磨石、石皿等の実測。

11月

縄文時代の土器の実測。古代・中世の土師器の実測。

磨石、石皿等の実測。

12月

各遺構図のトレース準備（鉛筆トレース等の下図の作成及びレベル等の確認）。

縄文時代の土器の実測。古代・中世の土師器の実測。磨石、石皿等の実測。

C-14等の科学測定委託準備

1月

各遺構図のトレース準備（鉛筆トレース等の下図の作成及びレベル等の確認）。

縄文時代の土器の実測。

古代・中世の土師器の実測。磨石、石皿等の実測。

2月

各遺構図のトレース準備（鉛筆トレース等の下図の作成及びレベル等の確認）。

縄文時代の土器の実測。磨石、石皿等の実測。古代・中世の土師器の実測。

3月

陶磁器の実測委託準備。

縄文時代の土器の実測。古代・中世の土師器の実測。

古代・中世の土師器の実測。

次年度担当者への引継書の作成。

<平成19年度・報告書作成作業>

4月

前年度の整理作業担当者との引継ぎ。陶磁器の実測委託。

各時代のトレース。遺構図のトレース。

5月

各時代のトレース。遺構図のトレース。縄張図の作成。

遺物出土状況のデーター入力。

6月

各時代のトレース。遺構図のトレース。遺物出土状況のデーター入力。

実測委託の見直し。現場写真仮レイアウト。

7月

各時代の遺物トレース。遺構図のトレース。

遺物出土状況のデーター入力。

各時代の遺物・遺構の観察表の作成。現場写真レイアウト。

8月

各時代の遺物・遺構の観察表の作成。遺物出土状況のデーターの分析。

各時代の遺物トレース。遺構図のトレース。

9月

各時代の遺構レイアウト。遺物出土状況のデーターの分析。

遺構の観察表の作成。遺物復元。

10月

各時代の遺構・遺物レイアウト。遺物出土状況のデーターの分析。

遺構の観察表の作成。遺物復元。

11月

各時代の遺構・遺物レイアウト。原稿執筆。遺物復元。

12月

原稿執筆。遺物写真撮影。

1月

原稿及び図面の編集作業。入札。

2月、3月

遺物・写真の整理及び収納作業。

調査協力者（下記の方々に発掘調査及び報告書作成において指導・助言、協力をいただいた。敬称略、順不同）

森村健一（堺市教育委員会）、峰 和治（鹿児島大学歯学部助手）、上村俊雄、本田道輝（鹿児島大学法文学部助教授）、上園博文（旧東市来町）、時枝克安（鳥根大学総合理工学部）、小林達雄、小畑弘巳、新東晃一、立神次郎、池畑耕一、中村耕治、宮田栄二、中村和美、関 明恵、黒川忠広、岩屋高広、内山伸明、上床 真、日高正人、日高勝博、内村光伸、羽嶋敦洋、桑畑武士、松元佑輔、園田ひとみ、韓盛旭、羅善華

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び自然環境

向椿城跡は、日置市東市来町大字伊崎田字上椿・中椿・下椿に所在する。

日置市東市来町は、平成の大合併で、平成17年5月1日、伊集院町・日吉町・吹上町と合併し、51,955人の日置市となった。

旧東市来町は、薩摩半島の北西部に位置し、東は旧伊集院町、南は旧日吉町、北はいちき串木野市に接し、西は東シナ海に面している。鹿児島市から西方約28kmに位置し、東西16km、南北約9kmの細長い地域で面積は70.97k㎡、人口13,623人（平成12年10月1日国勢調査人口）である。1889年（明治22）市来郷の湯田・伊作田・神之川・長里・養母の5か村を合わせて東市来村として発足、1937年（昭和12）4月、町制を施行、1956年（昭和31）9月、旧下伊集院村の南神之川・苗代川（美山）・宮田・牧之角を合併し、平成17年5月に周辺の伊集院町・日吉町・吹上町と合併し日置市となり現在に至る。

向椿城跡のある旧東市来町の地形は、北部の重平山・中岳・大峰ヶ原など数百mの旧火山灰の山地と、南西部の中生層の低い山地を除けば、これらの山地の間を埋めた50～180m内外の火山灰（シラス）台地である。大里川・江口川は町の中央部を貫流し、南端の町境及び南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。また、それらの河川によってつくられた小さな盆地状の谷底平野がいくつも並び、そこに大里・養母・湯之元などの集落が発達している。水田は主としてこの三河川流域に沿って開け、畑地はその丘陵に分布しているが、大半はシラス台地である。シラス台地は、錦江湾奥部にある始良カルデラから噴出した火砕流が堆積した台地で、シラスは約25,000年前の火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。

江口浦の海岸には、海岸砂丘の発達が見られず、シラスの海食崖には、卓越風による風食地形が発達し、「江口蓬菜」の名がある。

薩摩半島の東シナ海側の、ほぼ全域といつていいほどに白砂青松の砂浜が続く浜は、吹上浜と呼ばれ、日本三大砂丘の一つである。南北47kmにわたる海岸線は、いちき串木野市から南さつま市にかけて3市にわたり、距離的には日本最長の砂丘である。冬は北西の風が強く、海岸の砂は内陸部に吹き溜まり、最大幅2km、最高所47m（南さつま市金峰町竹原）の吹上浜砂丘ができた。

遺跡は、日置市東市来町の南西部、伊作田地区の北西方に位置する。上伊作田集落の東後方の丘陵上にあり、標高約66mの独立丘陵のシラス台地上にあり、JR東市来駅の西側にあたる。

第2節 歴史的環境

旧東市来町では昭和62年養母の上二月田遺跡で縄文時代前期・後期の調査がなされ、仮牧段遺跡・桜町遺跡などわずかな遺跡が知られていたのみで、昭和59年度発行の遺跡地名表では寺院・城跡・窯跡を含んでも15か所が紹介されているのみであったが、平成3年から始まった北薩伊佐地区埋蔵文化財分布調査や南九州西回り自動車道建設に伴う調査が行なわれたこと等により、遺跡数が一気に増加し、現在では92か所の遺跡が周知されている。そこで、周辺遺跡と併せて主な遺跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

旧東市来町では、南九州西回り自動車道建設が始まるまでは、旧石器時代の遺跡は伊作田の老ノ原遺跡で細石刃核・細石刃が出土したことが知られているのみであったが、今では旧松元町・旧伊集院町と並んで県内でも有数の遺跡群となっている。

今里遺跡は伊作田の標高約63mの台地端の傾斜地に所在し、ナイフ形石器文化期の剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパーと細石刃文化期の細石刃核・細石刃が出土している。特に細石刃は比較的小規模な発掘にも限らず101点と多く出土し、また分類・編年等もでき、今後の旧石器文化研究に重要な遺跡となっている。猿引遺跡は長里の標高約110～115mの尾根上の台地に所在し、旧石器時代の遺跡は迫状窪みに集中して出土した。ナイフ形石器文化の礫部1基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃が見つかった。池之頭遺跡は美山の標高約80m～100mのシラス台地の尾根状部分に所在し、ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃が出土した。向栴城跡は伊作田の標高約50mの独立台地上に所在し、剥片尖頭器・ナイフ形石器が出土した。堂園平遺跡は伊作田の遠見番山から下る斜面の裾野にあり、標高約50mの平坦地に所在する。ナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃が出土した。また、湯田の市ノ原遺跡でも多くの旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代

上二月田遺跡は養母に所在し、縄文時代後期の住居跡2基・土坑2・炉跡などが検出した遺跡で、遺物には平杓式・寒ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜白式土器等が出土している。今里遺跡では早期の集石3基と早期～晩期の岩本式・前平式・押型式・深浦式・春日式・出水式・上加世田式・黒川式土器と共に、多くの石器（石鏃・石匙・磨石等）が出土している。特に独鈷状石器は注目される。池之頭遺跡では早期の集石8基と、前平式・吉田式・石坂式土器の他、春日式・並木式・阿高式・入佐式・黒川式土器が出土している。隣接する雪山遺跡では前平式土器の円筒土器と角筒土器の完形品が出土している。向栴城跡では、草創期の配石遺構・集石が多量の隆帯文土器や石鏃・敲石・石斧・石皿と共伴して出土している。前期～晩期でも轟式・阿高式・市来式・黒川式土器が出土している。市ノ原遺跡は湯田の標高約50mの台地西側に所在し、調査面積は62,000㎡と広範囲の遺跡で早期～晩期まで多種多様な遺構・遺物が発見された。特殊な遺物として竹筒式土器や耳飾り・三角壽形の土・石製品等、交易品と考えられるものも出土している。

弥生～古墳時代

調査対象地域は台地が多いせいか、弥生時代の遺跡は少ないが、上二月田遺跡で高橋式土器が出土し、市ノ原遺跡では竅穴住居や壟棺に、高橋式・北麓式・黒髪式・山ノ口式土器と石鏃・石鏃・石斧等が、共伴して出土している。

古墳時代の遺跡は多く発見されている。住居跡が検出された遺跡では向栴城跡11基、市ノ原遺跡で7基がある。遺物では成川式土器の甕・壺・高坏・手捏土器と磨石・磨製石鏃等が出土してい

る。老ノ原遺跡では成川式土器と須恵器が共伴して出土した。

古代

旧東市来町は古代においては旧市来町と薩摩国日置郡に属していたと考えられている。市来院は宝亀年間以降、郡司の大蔵氏一族が支配していた。向栴城跡では円形周溝遺構・土坑に土師器・墨書土器・須恵器・古銭と共伴して出土している。市ノ原遺跡では第1地点で掘立柱建物跡15棟・土坑が検出され、墨書土器も100点以上出土し、「春」「奉」「松」「厨」などの文字が判読されている。隣接する旧市来町では安茶ヶ原遺跡から「日置厨」の墨書土器が出土している。

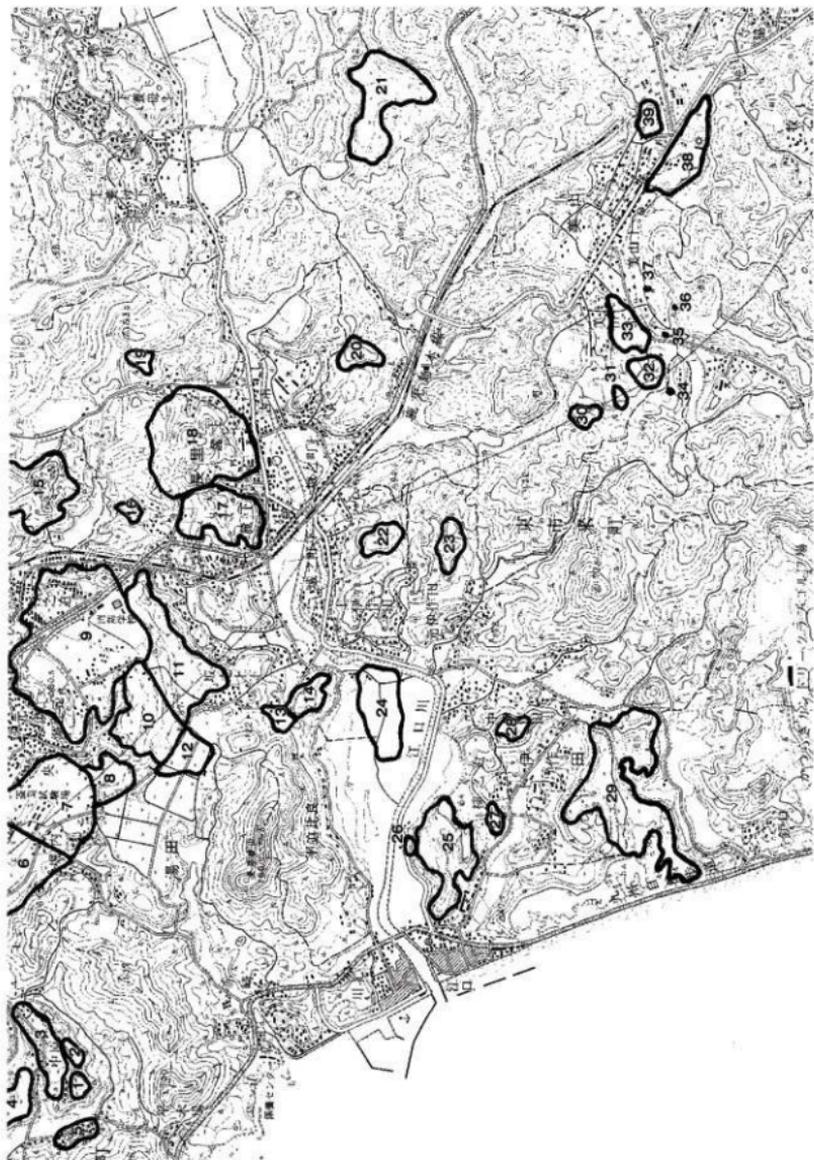
中世～近世

旧東市来町は中世山城が多く、中心となる鶴丸城は古代から、大蔵氏が居を構えて市来氏と称していた。中世、権宗姓を称した市来氏は島津軍に攻められ滅亡するが、1550年、フランシスコ・ザビエルが鶴丸城に立ち寄り、布教活動をしたとの記録も残されている。また、11年後に鶴丸城をたずねた宣教師のイルマン・ルイス・デ・アルメイダは「私たちは城に到着しましたが、これは世界で最も堅固なものの一つです。それは十の要塞に分かれている山にあるからです。そのひとつひとつが互いに離れ、つるはしで削り取ったように険しく、人間の手で作ることは不可能であると思われるほど、深い堀で囲まれています。一つの要塞から他の要塞へ行くためには跳ね橋を渡るのですが、渡るときに下を見ると、はなはだしく高いので地獄を見ているようです。全要塞の中心に本丸があって、そこに城主が住んでいます。これは鹿児島の大名家来です。」(注1)と詳細な記録を残している。

向栴城跡では、空堀、帯曲輪、曲輪、堀切、通路状遺構、大型円形土坑、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、灰跡などの遺構が検出された。また市ノ原遺跡では出水筋(薩摩街道)の道跡が検出されているが、向栴城跡でも、周辺に出水筋(薩摩街道)が通っていたことが、現地聞き取り調査や『歴史の道調査報告書 第1集 出水筋』(注2)でも判明している。

(注1) 結城了悟『鹿児島島のキリシタン』春苑堂書店 1975

(注2) 鹿児島県教育委員会『歴史の道調査報告書 第1集 出水筋』1993



第3図 向格城跡の位置及び周辺遺跡

第3表 周辺遺跡(1)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
1	下諏訪	28-11	いちき串木野市大里	縄文	土器片・打製石斧	1
2	中諏訪	28-12	いちき串木野市大里	古墳	土師器・須恵器	1
3	西ノ鼻	28-39	いちき串木野市大里	古墳・中世	土師器・陶器	2
4	平崎瀬	28-40	いちき串木野市大里	弥生～中世	弥生土器・土師器・陶器	2
5	上平山	28-41	いちき串木野市大里	弥生・古墳	土器	2
6	市ノ原 3地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	細石刃核、集石、岩本式、塞ノ神式等 竪穴住居跡、土坑、高橋式、成川式等 掘立柱建物跡、鍛冶炉、陶磁器等	2
7	市ノ原 4地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世 近世	竪穴住居跡、集石、前平式、押型文等 竪穴住居跡、土坑、高橋式、成川式等 竪穴住居跡、溝、須恵器、土師器等 街道跡、鍛冶炉、陶磁器等	2
8	市ノ原 5地点	29-60	日置市東市来町湯田	旧石器・縄文 弥生～古墳 古代～中世	雑群、落し穴、ナイフ・前平式等 弥生土器、成川式 道跡、掘立柱建物跡、土師器等	3
9	諏訪原	29-61	日置市東市来町湯田	古墳・中世	土師器・陶器・染付	2
10	森園平	29-62	日置市東市来町長里	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	2
11	浦田	29-73	日置市東市来町長里	古墳・中世	土師器	2
12	今里	29-67	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	雑群、尖頭器、ナイフ、細石刃核 集石、前平式、深溝式、出水式、石匙 成川式土器	4
13	堂園平	29-90	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古代	雑群、ナイフ・尖頭器・細石刃核 集石、古田式、塞ノ神式、轟式等 土坑・土師器・須恵器	5
14	向崎城	29-17	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳 中世～近世	配石遺構、剥片尖頭器、ナイフ、剥片 隆帯文、石鏃、前平式、市来式 竪穴住居跡、成川式 空罎、曲輪、竪穴状遺構、炉跡、青磁	本報 告書
15	古城跡	29-13	日置市東市来町長里	南北朝	石罎	6
16	番屋城跡	29-10	日置市東市来町長里	南北朝～室町	消滅	6
17	平之城跡	29-11	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空罎、古墓塔	6
18	鶴丸城跡	29-5	日置市東市来町長里	南北朝～室町	空罎、土罎、礎石	6
19	得仏城跡	29-15	日置市東市来町長里	中世	鶴丸城の出城	6
20	総陣ヶ尾	29-14	日置市東市来町長里	中世	五輪塔	6
21	馬場ヶ原	29-64	日置市東市来町長里	弥生・古墳 中世～近世	弥生土器・成川式 土師器、陶器	2
22	犬ヶ原	29-65	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古代～中世	細石刃核、細石刃、黒川式、石鏃 掘立柱建物跡、鍛冶炉、土師器、磁甎	7
23	金木山	29-66	日置市東市来町伊作田	古墳・近世	土器・陶器	2
24	西原持原	29-76	日置市東市来町伊作田	古墳・中世		2
25	伊作田城	29-12	日置市東市来町伊作田	南北朝	伊作田遺材居城	8

第4表 周辺遺跡(2)

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	遺物・備考	文献
26	古城	29-12	日置市東市来町伊作田	古墳 古代	土坑、成川式(罌・窓・高坏・鉢) 楕状遺構、土師器・須恵器・黒色土器	9 10
27	前畑	29-1	日置市東市来町伊作田	縄文・古墳 古代~中世	土坑、黒川式、石敷、石靴、石斧 竪穴住居跡、掘立柱建物跡、成川式等	8
28	椿城	29-22	日置市東市来町伊作田	中世		6
29	老ノ原	29-76	日置市東市来町伊作田	旧石器・縄文 古墳	細石刃核、前平式・春日式、黒川式 成川式	11 12
30	猿引	29-90	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文	礫群、ナイフ、台形石器、尖頭器 管燧石	13
31	雪山	29-91	日置市東市来町伊作田	縄文 近世~近代	集石、前平式 陶器・磁器・瓦・窯道具	13
32	池之頭	29-92	日置市東市来町伊作田	旧石器 縄文 古墳	ナイフ、台形石器・細石刃核、細石刃 集石、石皿集積、前平式、春日式 成川式土器	14
33	池之平	29-78	日置市東市来町伊作田	古墳・近世	土器・土師器・陶器	6
34	五本松窟	29-13	日置市東市来町伊作田	江戸	町指定史跡	15
35	堂平窟	29-84	日置市東市来町伊作田	江戸	窟跡	16
36	御定式窟	29-14	日置市東市来町美山	江戸	町指定史跡	15
37	南京風山窟	29-15	日置市東市来町美山	江戸	町指定史跡	15
38	水窟	29-79	日置市東市来町美山	中世~近世	土師器・陶器・磁器	2
39	大田城壘跡	29-6	日置市東市来町美山	南北朝~室町	五輪塔、青磁・白磁、須恵器、瓦器	15

引用文献

- 1 『市来町郷土誌』 市来町 1982
- 2 「北條・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(1)」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(61) 1992
- 3 「市ノ原遺跡5地点」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(105) 2006
- 4 「今里遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(33) 2002
- 5 「堂園平遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(104) 2006
- 6 「中世城館」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(40) 1987
- 7 「犬ノ原遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(50) 2003
- 8 「前畑遺跡・伊作田城跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1995
- 9 「古城遺跡Ⅰ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 1996
- 10 「古城遺跡Ⅱ」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 2004
- 11 「老ノ原遺跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 1996
- 12 「老ノ原遺跡2」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 1998
- 13 「猿引遺跡・雪山遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(53) 2003
- 14 「池之頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(32) 2002
- 15 『東市来町郷土誌』 東市来町教育委員会 1987
- 16 「堂平窟跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(106) 2006

第三章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

向椿城跡の調査は、国土交通省の設計図面のセンターラインをもとに10m×10mのグリッドを設定して、重機で表土を除去して行った。

遺跡の主体が、中世の山城であるため、便宜上、グリッドの6列～15列部分までを曲輪3、15列～23列を曲輪2、24列～29列までを曲輪3とし、それより北側を空堀部分と呼ぶことにした。なお、近隣の人々は曲輪1を本丸と呼んでいたこと、小字が北から上椿、中椿、下椿であること

の2点を考慮したものである。

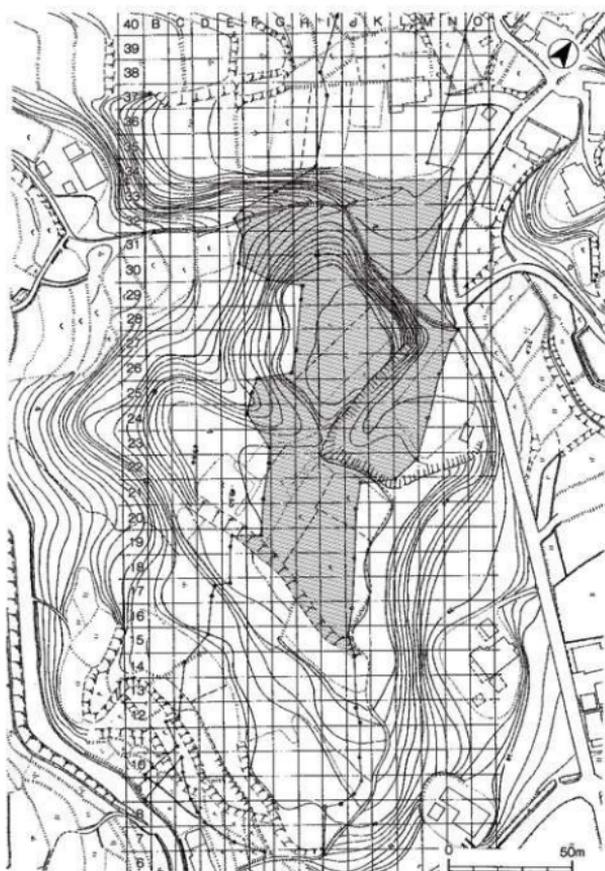
平成9年度は工事着手時期との関係から、遺跡の中では、標高の一番低い畑地部分と曲輪3の部分に年度の前半の力を注いだ。その結果、畑地部分からは、近世の建物跡とその一括資料(17世紀)と思われる遺構・遺物検出された。

また、曲輪3からは、旧石器・縄文・古墳・古代・中世と幅広い時代の遺物遺構が検出された。

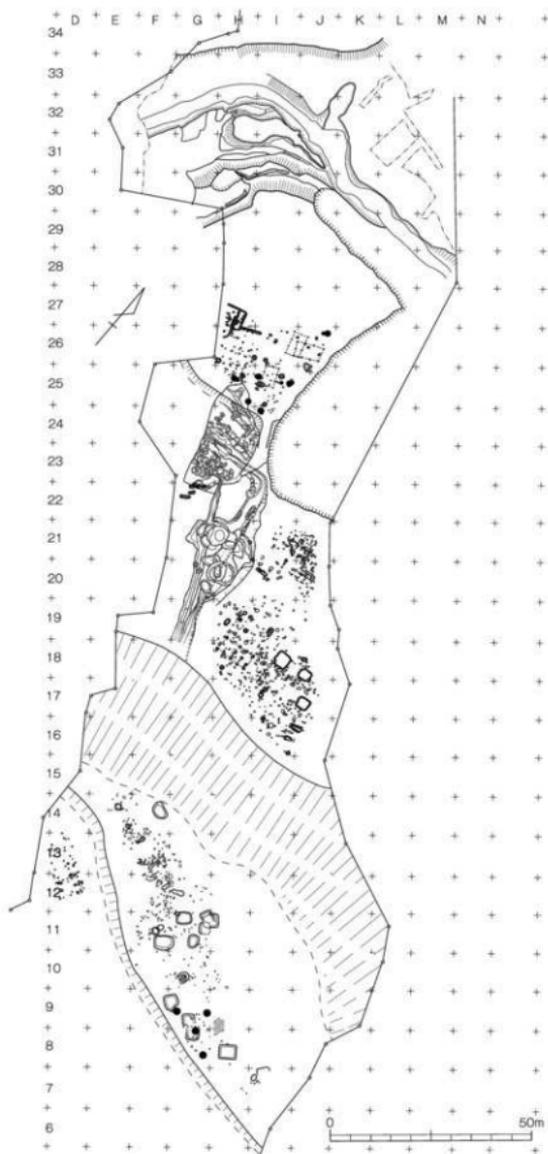
平成9年度の後半は、二ノ丸部分(曲輪2)東側と本丸部分(曲輪1)の遺構の調査を行った。

また、雑草、灌木や竹類の繁茂が著しい夏場を避けて、平成10年の当初に北側の空堀部分の伐採を行った。

平成10年度は、2班に分かれて、曲輪2の西側の空堀及び土坑群の調査と空堀部分の調査を同時並行で行った。特に空堀の調査



第4図 周辺地形及び発掘範囲



第5図 向柁城跡全遺構配置図

は、堀底から曲輪1までの比高差が10m以上もあり、崩落の危険性もあった。そこで、廃土により一旦ある程度の高さまで埋め戻しを行い、その廃土と同時に表土を除去しながら、遺構の検出を行った。

第2節 遺跡の地形及び層序

向椿城跡は、10数メートルの深い空堀を隔てた北側には、標高180.0mの遠見番山という急峻な山を背にした、本山城の付属部分とも考えられる堂園平遺跡が存在する。この空堀の南側に曲輪1が存在し、標高約50mと一番高い。また、大規模な造成が行われたためか、広い面積の平坦地を有する。ただし、この曲輪1の東側は、数年前に大規模なシラスの採取により消滅している。

その南側が曲輪2であり、曲輪1よりやや低く、南へ傾斜している。曲輪3は、曲輪2とは、かなりの比高をもって山城としての曲輪を形成している。この曲輪の南端は、標高約30mである。発掘範囲以外の東西部分については、曲輪2及び曲輪3の東側は、なだらかな傾斜であり、台地の縁辺には、土壘状の盛土も存在している。西側は急な斜面であり、空堀から続き、現在も人道として用いられている道へとその傾斜は至っている。

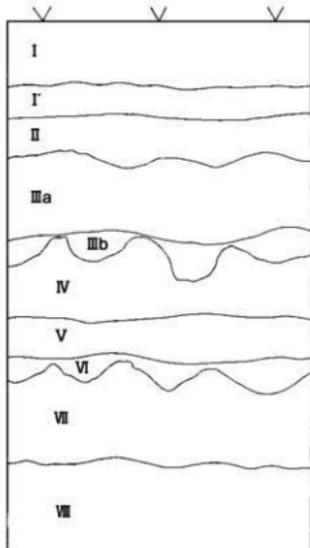
向椿城の層序は発掘対象範囲が、10,000m以上に及ぶことや山城という起伏に富んだ地形であることから、場所によってかなりの変化があった。また、古墳時代以降は、各時代毎に当時の生活に適した地形に造成されていたようである。

たとえば、第5図でわかるように、曲輪3の北東側斜面近くの平坦地には全く遺構が存在しない。つまり、近世以降に造成が行われたと言える。また、中世の項で詳しく述べるが、曲輪3とは逆に空堀部分では帯曲輪状に盛土を行って、畑地としていた部分もあった。

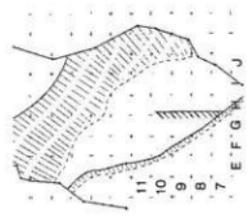
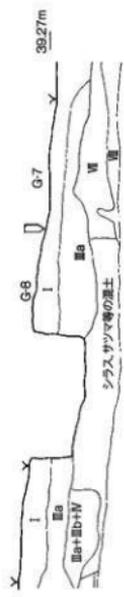
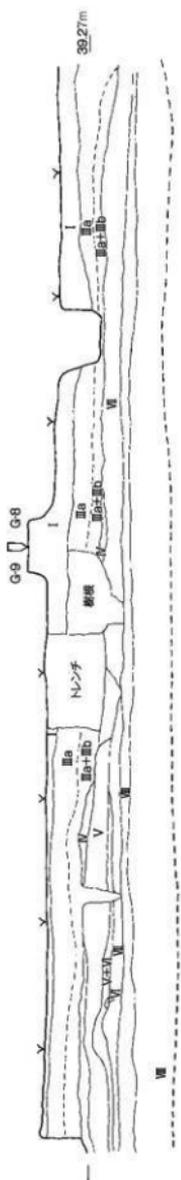
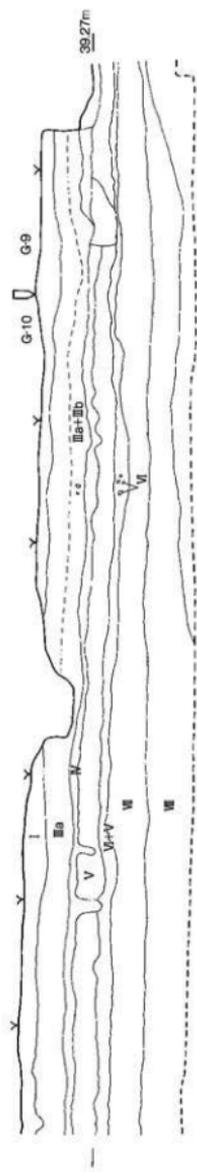
上述のような状況から、遺構は存在するものの遺物包含層の残存度は良好な状態ではなく、表土から出土する遺物が非常に多かった。遺物包含層として、良好な残存状況であったのは、調査区南端の旧石器時代・縄文時代草創期のみと言っても過言ではない。ただし、この部分も台地先端の崖ざりぎりまで遺構や遺物が検出されることから、以前はまだ南へ延びていた台地であったことが考えられる。

本城の標準的な層序は、以下の通りである。

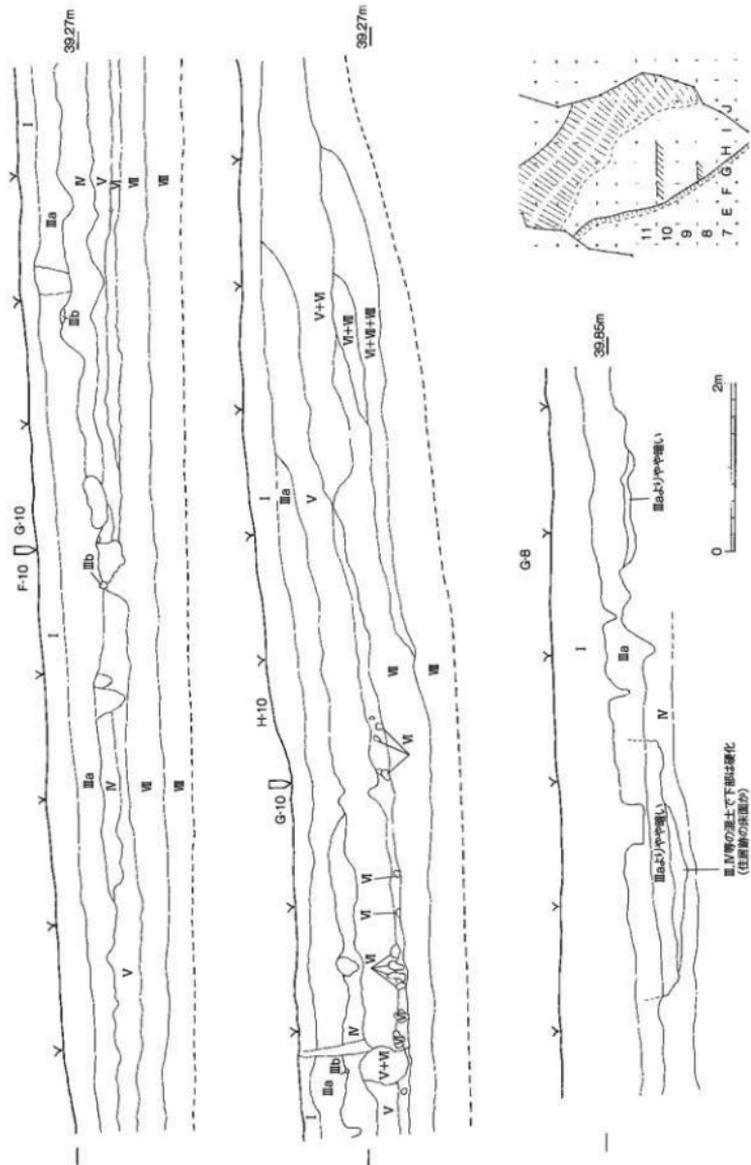
- I層：現耕作土と旧耕作土に分けられる。
- II層：主に中世の包含層であるが、残存度はよくない。
- III層：アカホヤ火山灰で一次・二次堆積に分けられる。
- IV層：乳白色土で縄文時代早期の包含層である。
- V層：茶褐色土で縄文時代早期の包含層である。
- VI層：薩摩火山灰で、部分的に存在する。
- VII層：暗紫色粘質土で、旧石器時代の包含層である。
- VIII層：シラス



第6図 土層柱状断面図



第7図 G-7・8・9東壁断面図



第8図 F・G・H-10, G-8北壁断面図

第Ⅳ章 旧石器時代の調査

第1節 ナイフ形石器文化

Ⅷ層からは、旧石器～縄文時代草創期の遺物が出土した。台地は古墳時代遺構の集落や、中世山城により削平された部分が多く、F・G-8～12区に集中して出土した。遺構は配石遺構・集石等が検出されたが、これらの遺構は縄文時代草創期の項で取り上げる。

主な遺物は、ナイフ形石器文化のナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・尖頭器・三稜尖頭器・スクレイパー・二次加工剥片・楔形石器・石錐・剥片と細石刃文化の細石刃・細石刃核・調整剥片・石鏃・凹石・敲石・磨石等が出土した。

石材は、黒曜石・頁岩・安山岩・チャート・砂岩・凝灰岩等であり、黒曜石は肉眼的観察により県内産の三船・上牛鼻・平木場、県外産の桑ノ木津留・腰岳・針尾などの産地のものがみられた。

第10図は石材別にⅧ層出土状況を示しているが、黒曜石・安山岩は全体的に出土していることを示しているが、この遺跡の特徴である凝灰岩がG-10・11区に集中していることが特筆される。出土状況からもブロックの可能性もあったが、一地域に集中していたことからブロック別に取り上げなかった。

旧石器時代の石器に用いられた石材には黒曜石・頁岩・安山岩・チャート・砂岩・凝灰岩等であり、黒曜石は肉眼的観察により下記のとおり分類した。

黒曜石三船…… 黒色を呈する黒曜石であり、気泡が多く県内では南大隅町長谷・鹿児島市三船・大口市日東・猩々・五女木などがあるが、本遺跡の黒曜石は、鹿児島市吉野町三船原産の特徴がみられるため三船原産とした。三船の原石は、強く溶結した柱状節理の発達した吉野火砕流の中にレンズ状の黒曜石が含まれている。黒曜石は灰色っぽい黒い線が入ることもある。

黒曜石上牛鼻… ガラス質が弱く、一見石炭を思わせるものである。風化が著しく進み、淡黒褐色を呈するが内面は真っ黒であり光を通さない。気泡は少なく軽石が若干混じる良質の黒曜石である。褐色のペルトが入ることもある。薩摩川内市樋脇町上牛鼻、いちき串木野市平木場の原石と推定される。

黒曜石腰岳…… ガラス質の黒色を呈するもので、気泡が少なく良質の黒曜石である。佐賀県腰岳の原石と推定される。

黒曜石針尾…… ガラス質が弱く、灰褐色を呈し光を通さない。気泡は少なく良質の黒曜石である。長崎県針尾島周辺の原石と推定される。

ナイフ形石器 (第12図・1～7)

1～5は頁岩を石材に用いたナイフ形石器である。1は片側縁にブランディングが施され、基部は片面からのブランディングを施している。2は基部が欠損しているが、片側縁にブランディングを施したものである。3も基部が欠損しているが、片側縁に片面からの丁寧なブランディングで背面を施したものである。4はやや大型の縦長剥片を素材に用いたもので、片側縁にブラン

ティングが施してある。5も大型の縦長剥片を素材に用いたもので、片側縁に片面からのブランディングを施している。刃部には使用痕が認められる。6は砂岩を石材に用いたもので、先端部を欠損しているが、基部は片面からのブランディングを施して成形している。7は上牛鼻原産の黒曜石を石材に用いたもので、ナイフ形石器の基部である。片面からの丁寧なブランディングにより基部を成形している。

台形石器（第13図、8～14）

8は桑ノ木津留原産の黒曜石を石材に用いたもので、不定形剥片を横位に利用し、両側縁は両面からの丁寧なブランディングにより成形されている。9・10は上牛鼻原産の黒曜石を石材に用いている。9は不定形剥片を横位に利用し、両側縁に両面からのブランディングを施したものである。10は縦長剥片を横位に利用し、両側縁は片面からのブランディングと平坦剥離により成形されている。11は珪質凝灰岩を石材に用いたもので、縦長剥片を横位に利用し、片側縁は片面からのブランディングで成形している。12は玉髄を石材に用いたもので、不定形剥片を利用し、両側縁に片面からのブランディングを施し成形している。刃部に使用痕が認められる。13・14は三船原産の黒曜石を用いたものである。両側縁を平坦剥離により成形している。刃部には使用痕が認められる。

剥片尖頭器（第13図、15～18）

15～18は剥片尖頭器である。15～17は頁岩を石材に用いている。15は先細りの縦長剥片を素材としたもので、打面付近にはノッチ状の基部加工が、左側縁部には二次加工が施されている。16は厚みのある縦長剥片を素材に用い、打面付近に粗いノッチ状の基部加工を施し、先端部には腹部からの調整剥離が施されている。製作途中の剥片尖頭器と考えられる。17は縦長剥片を用い、打面付近にノッチ状の基部加工を施したものであるが、摩耗が激しく使用痕が認められない。左側縁部には節理面が残る。18は粘板岩を素材に用いた剥片尖頭器である。これも摩耗が激しく使用痕等は認められないが、やはり打面付近にノッチ状の基部調整が施されている。

尖頭器（第13図、19）

19は瑪瑙の縦長剥片を素材に用いた尖頭器で、両側縁を腹面側からの急角度でブランディングを施し、打面付近に基部調整を施しているものである。これは、大口市小原野遺跡で出土し、宮田栄二氏が「小原野型尖頭器」と名称したものである。

三稜尖頭器（第13図、20・21）

20・21は黒曜石を素材に用いた三稜尖頭器である。20は先端部のみであるが、一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離のあるもので断面は三角形を呈している。21は上牛鼻産の横長剥片を石材に用い、先端部が欠損し基部のみであるが、やはり一面に剥離痕をもち、二面に調整剥離のあるものである。断面は台形を呈す。

スクレイパー（第14～17図、22～63）

22～26は上牛鼻産の黒曜石を石材に用いたスクレイパーである。片側辺に調整剥離を施し、刃部としている。27は良質な腰岳産の黒曜石を用いたもので、腹面からの剥離によって刃部を形成している。29～47は三船産の黒曜石を用いたもので、やはり一側面に片面からの調整剥離を加えているものである。30は先端部の両側辺に片面からの調整剥離を施したスクレイパーである。形

態的に石錐の可能性もあったが、使用痕等からスクレイパーで取り上げた。48は凝灰岩、49はチャートを石材に用いたもので、側辺部に二次加工を施したものである。50は瑪瑙の大型剥片を石材に用いたもので下縁部に調整剥離を施し、刃部を形成している。51・52は鉄石英・硬質頁岩を用いたもので片側辺に調整剥離を施している。53・54は頁岩の縦長剥片を使用し、側辺部に調整剥離が施されている。55～62は安山岩を石材に用いたもので、一側辺部に調整剥離が施されたものである。

二次加工剥片（第17・18図、64～81）

64～81は一部破損しているが、調整剥離等の二次加工がみられるものである。72・74は調整剥片の可能性もある。76は楔形石器の可能性もあったが潰れ等が顕著でないので二次加工剥片で取り上げた。

楔形石器（第19・20図、82～99）

82・83は上牛鼻産の黒曜石を用いた楔形石器である。横長剥片を用い上・下端に調整剥離を加え、その上に使用による潰れがみられる。83はやや厚みにある剥片を用いたもので、上・下端部に使用による潰れがみられる。84は三船産の黒曜石を用いたもので、やはり横長剥片を用いたものである。上・下端部に潰れがみられる。85～99は本遺跡の特徴である安山岩を石材に用いたものである。やや厚みにある剥片を用い、楔状に成形し2～3辺に潰し痕のみみられるものである。85・86は剥片を利用し、二側面に潰しがみられる。87はやや大型の縦長剥片を用い、両側辺からの剥離によって楔状に成形したもので、上下部に潰し痕がみられる。90は厚みのある剥片を用い、上下端からの加撃により縦断面を楔形に成形している。上端部には使用によると思われる潰し痕が顕著にみられ、下端は欠損しているが一部に潰し痕が残っている。97・98は幅の狭い厚みのある剥片を用いたもので、一側辺に潰し痕がみられるものである。

石錐（第21図、100～102）

100～102は安山岩を石材に用いた石錐である。100はやや厚みにある縦長剥片を用い、両側辺部に交互剥離による粗いタッチを加えて、先端部を鋭利にし、錐部を形成している。先端部は欠損している。101も同様の石材を用い、片側辺は片面からの調整剥離を施し、片面には両面からの調整剥片を施し錐部を形成している。先端部には使用による磨り痕が若干みられ、断面は台形を呈している。100・101とも頭部と錐部の境が明瞭でない。102は幅広の安山岩剥片を用いた石錐である。頭部と錐部が明瞭なもので、頭部は背面からの剥離により円形状を呈している。錐部は両面からの交互剥離により丁寧な作り出されている。錐部は長さ1.2cmを測り、断面は球状を呈す。

剥片（第21図、103～110）

103・104は砂岩・頁岩の縦長剥片であり、この剥片は頭部調整が顕著に施されており、打面は平坦な自然面である。103は両側辺部に使用痕がみられ、104は背面側に二次加工を施している。スクレイパーの可能性もあったが、加工痕と破損部が重なったため剥片で取り上げた。

105～110は黒曜石のやや厚みにある剥片を用いた使用痕のある剥片である。

第2節 細石刃文化

第22図は細石刃と細石刃核の石材別出土状況である。凝灰岩の細石刃核がG-10区に集中し、また細石刃も周辺に散布していることから、このG-10区周辺で細石刃を剥出したものと考えられる。この第22図でわかるように細石刃は集中する傾向にあり、槍先等に装着したものがそのまま残った可能性もある土器同様の出土状況を示していることから、草創期土器の使用範囲と重複している。

石鏃と土器の相伴関係であるが、土器は傾斜部に集中し、石鏃はやや山手の方で出土する傾向にある。

細石刃（第23・24図，111～244）

細石刃は約150点出土し、そのうち134点を実測した。分類は頭部・中間部・尾部に分類し、それぞれ特徴のあるものを示した。

111～119は頭部から尾部まであり、半裁されていないものである。石材は腰岳・針尾・上牛鼻・三船産の黒曜石と安山岩である。3cmを超える長いものもある。

120～134は打点をもつ頭部のみのものである。調整のため半裁し破棄したものと思われる。石材は黒曜石（腰岳・針尾・桑ノ木津留・上牛鼻）、凝灰岩、頁岩、安山岩と豊富である。

135～180は本遺跡で一番多く出土したもので、打点をもつ中間部の細石刃である。石材も良質の黒曜石（腰岳・針尾・上牛鼻）を用いているものが多く、三船産、凝灰岩もみられた。168は瑪瑙を石材に用いているものである。

181～228は打点のある頭部と尾部を半裁した中間部である。やはり良質な黒曜石（腰岳・針尾・桑ノ木津留・上牛鼻産）を多用し、凝灰岩も用いている。中には長さ2cmを超えるものもある。

229～239は、打点のある頭部を半裁したものである。黒曜石・凝灰岩を用いている。

240～244は尾部のみで、石材は黒曜石である。

調整剥片（第25図，245～251）

245・246は針尾産の黒曜石を用いた打面再生調整剥片である。247も同様の調整剥片で細石刃剥出部がみられる。248・249は凝灰岩を用いた調整剥片である。250・251も安山岩を石材に用いた調整剥片である。

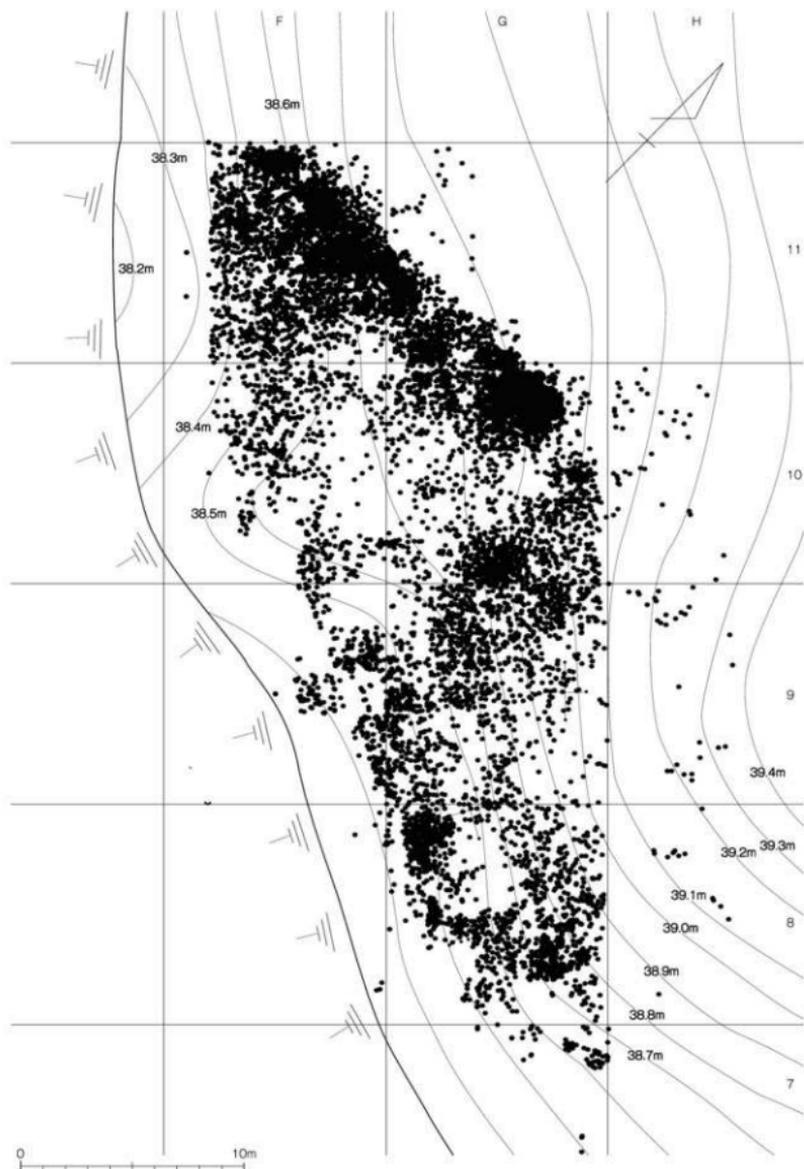
細石刃核（第26～29図，252～319）

細石刃核は68点の出土であった。石材は凝灰岩が多く45点で有り、遺跡全体の6割弱である。そのほか黒曜石（針尾1・上牛鼻13・三船9）の石材もある。

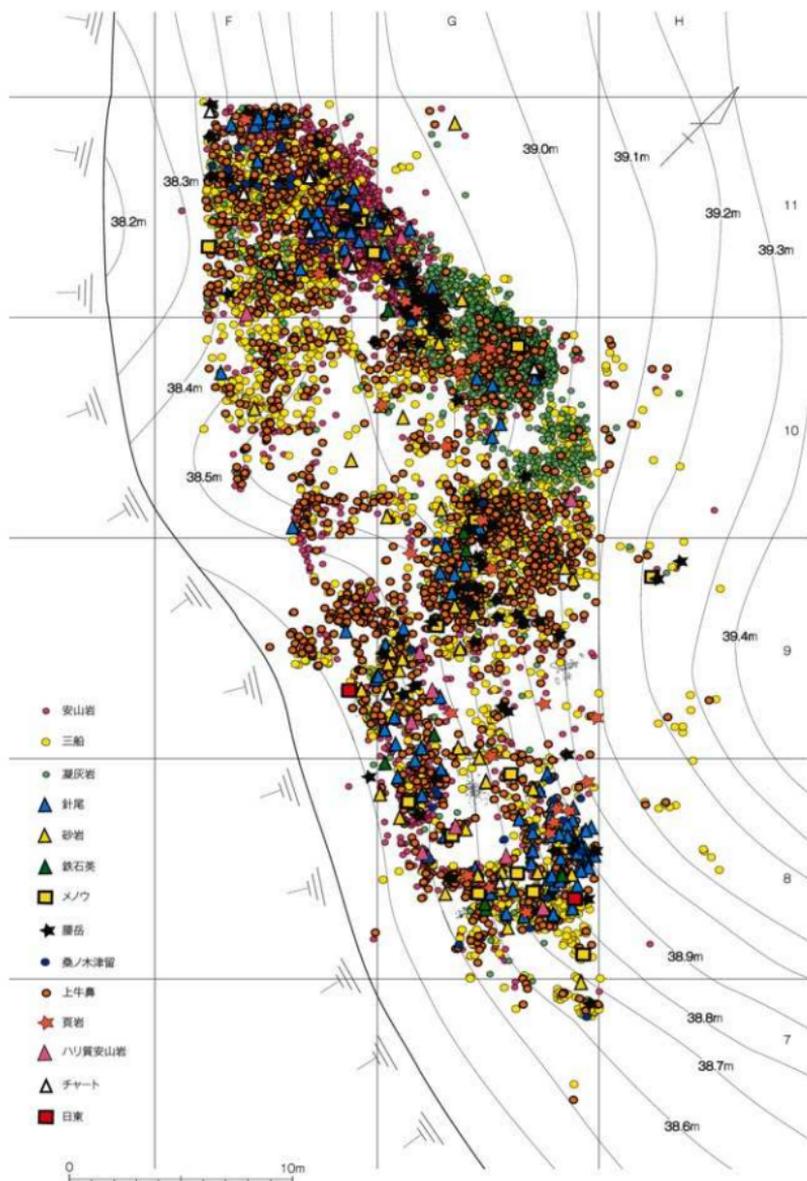
252は針尾産の黒曜石を素材に用いたもので、礫を半割したものを素材に用い、平坦な打面からの調整剥離によって成形し、正面には細石刃作業面がみられ、下縁調整が施されている。

253～265は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いたものである。円礫を半割し、その時得られた平坦面を側面・打面にし、打面からの調整剥離によって成形を行っているものである。自然面を残すものも多くみられる（253～255・258・264）。256・258は細石刃剥出作業面と平行する後背面を有し、後方に傾斜する打面である。

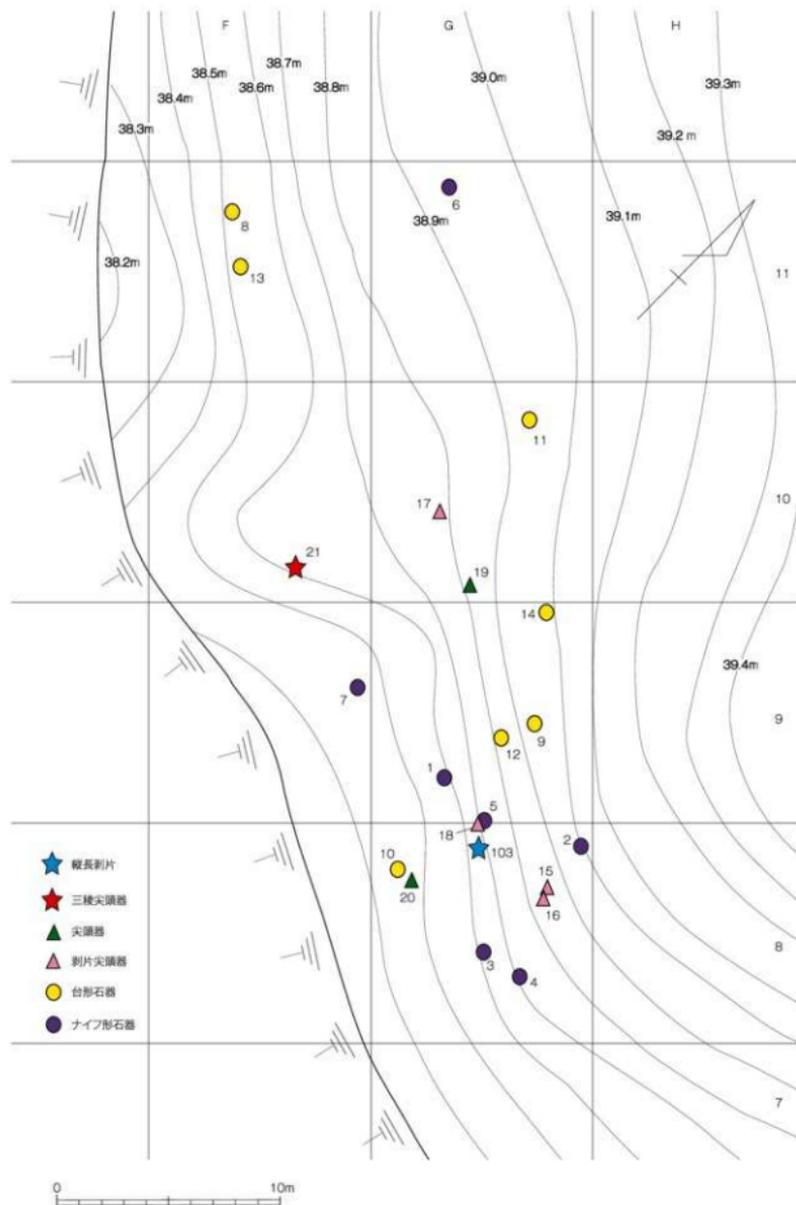
266～273は三船産の黒曜石を素材に用いたものである。やはり、礫を半割しその時得られた平坦面を側面・打面にし、打面からの調整剥離によって成形を行っているものである。これらは平



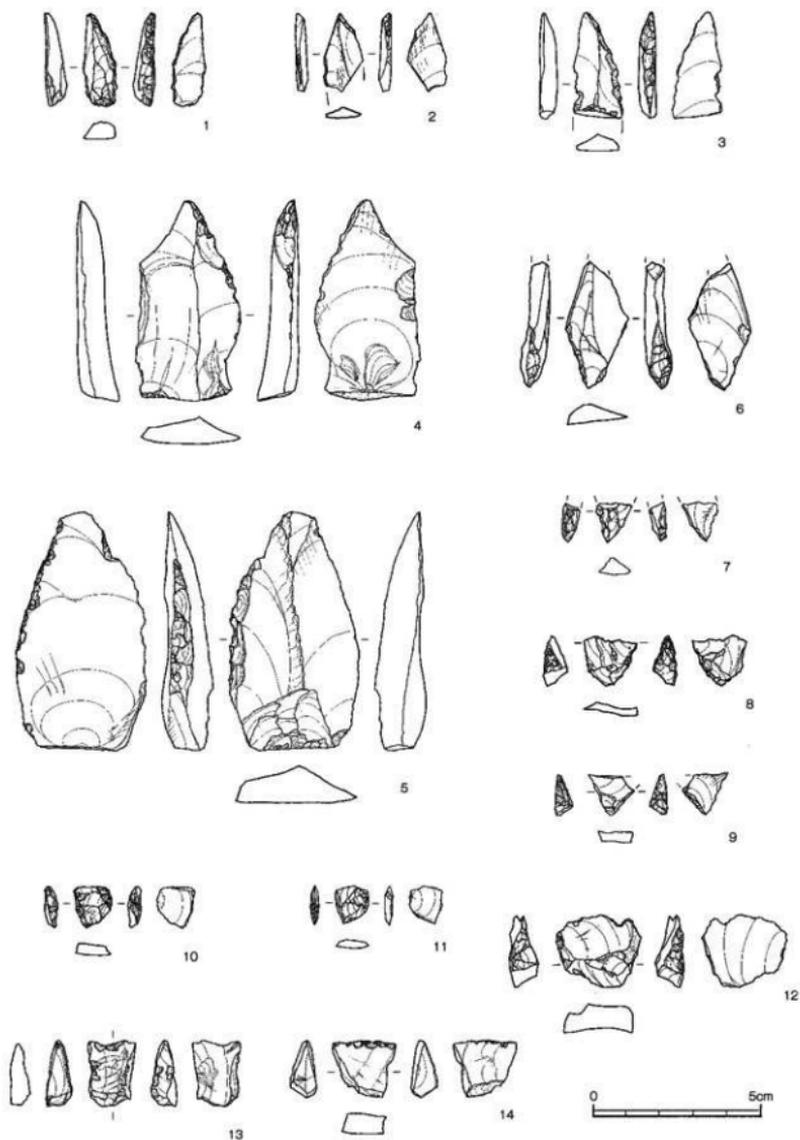
第9図 VII層出土遺物全ドット図



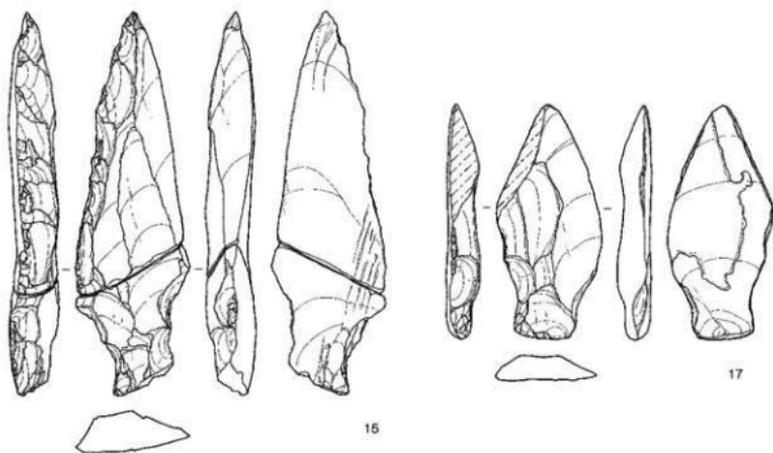
第10図 VII層石材別分布図



第11図 ナイフ形石器文化期出土遺物分布図

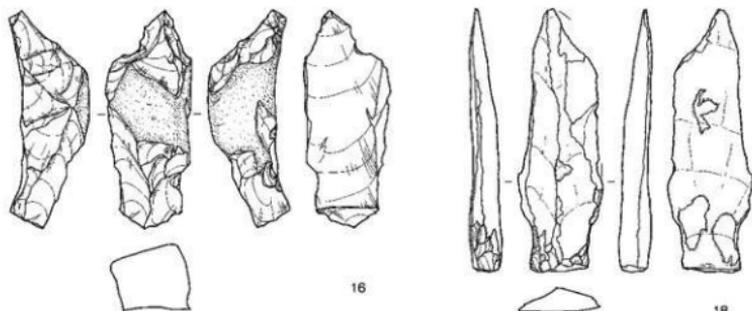


第12図 ナイフ形石器・台形石器



15

17



16

18



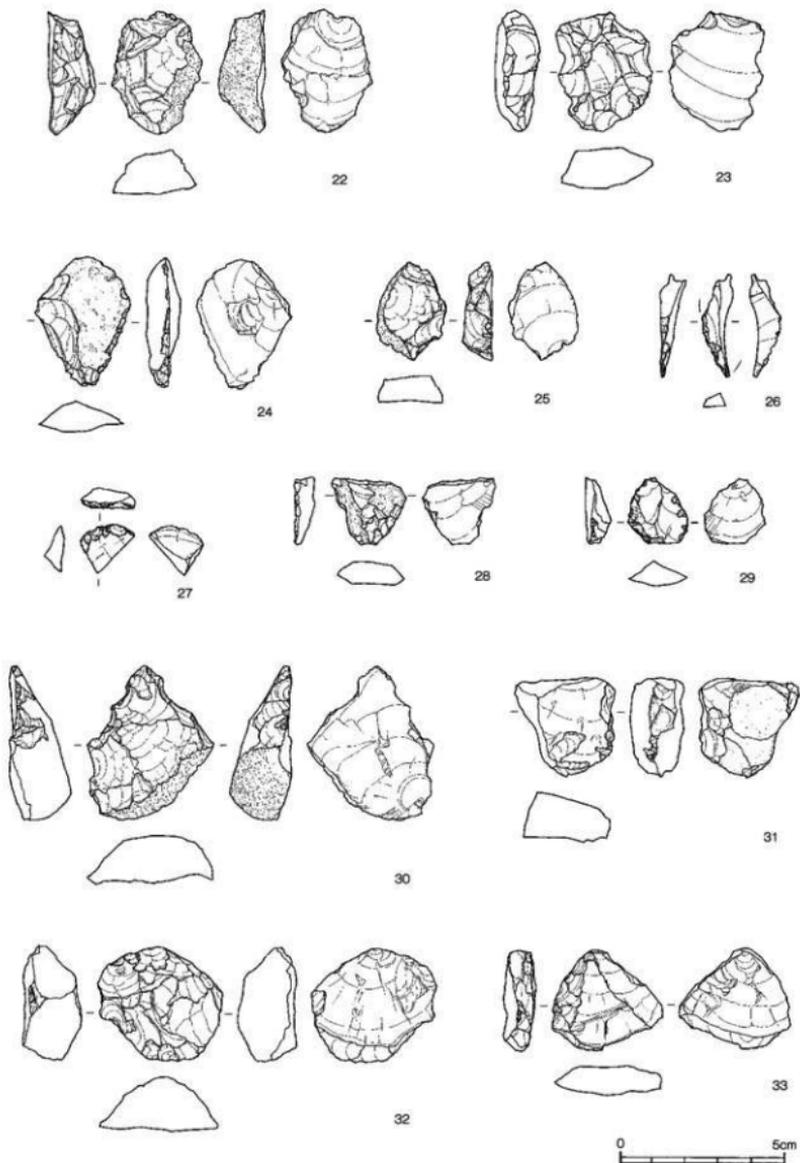
19

20

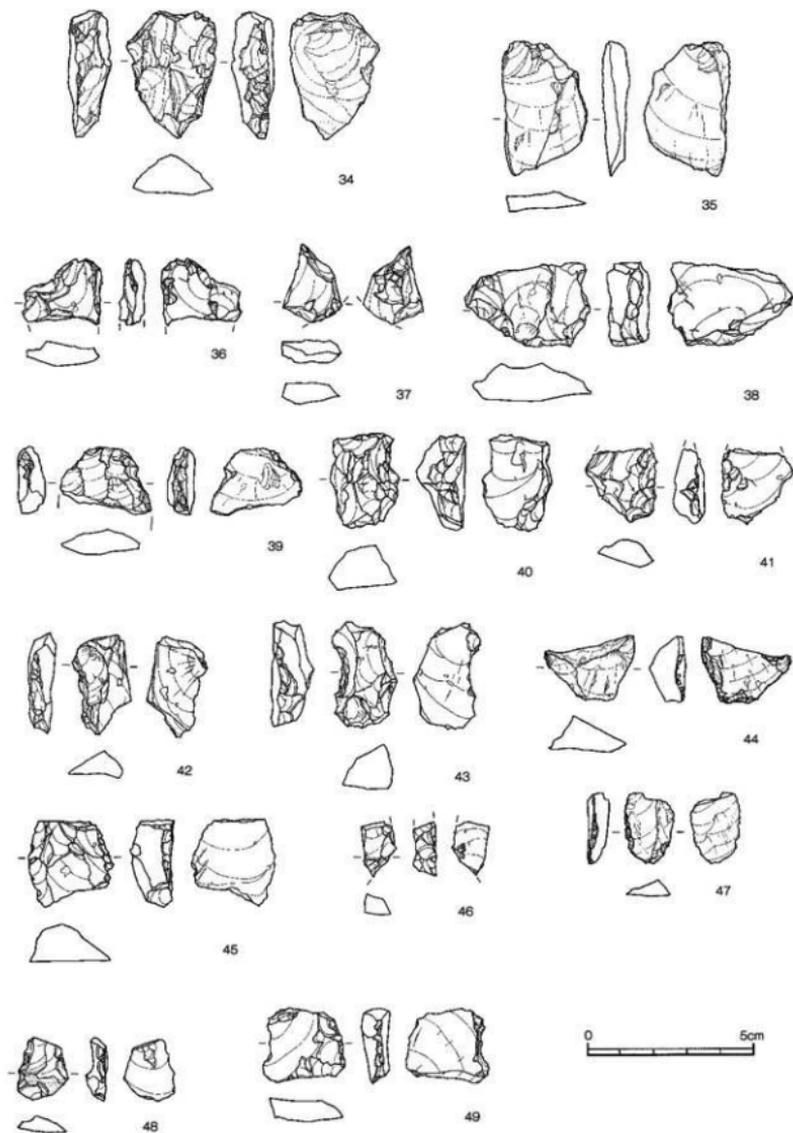
21



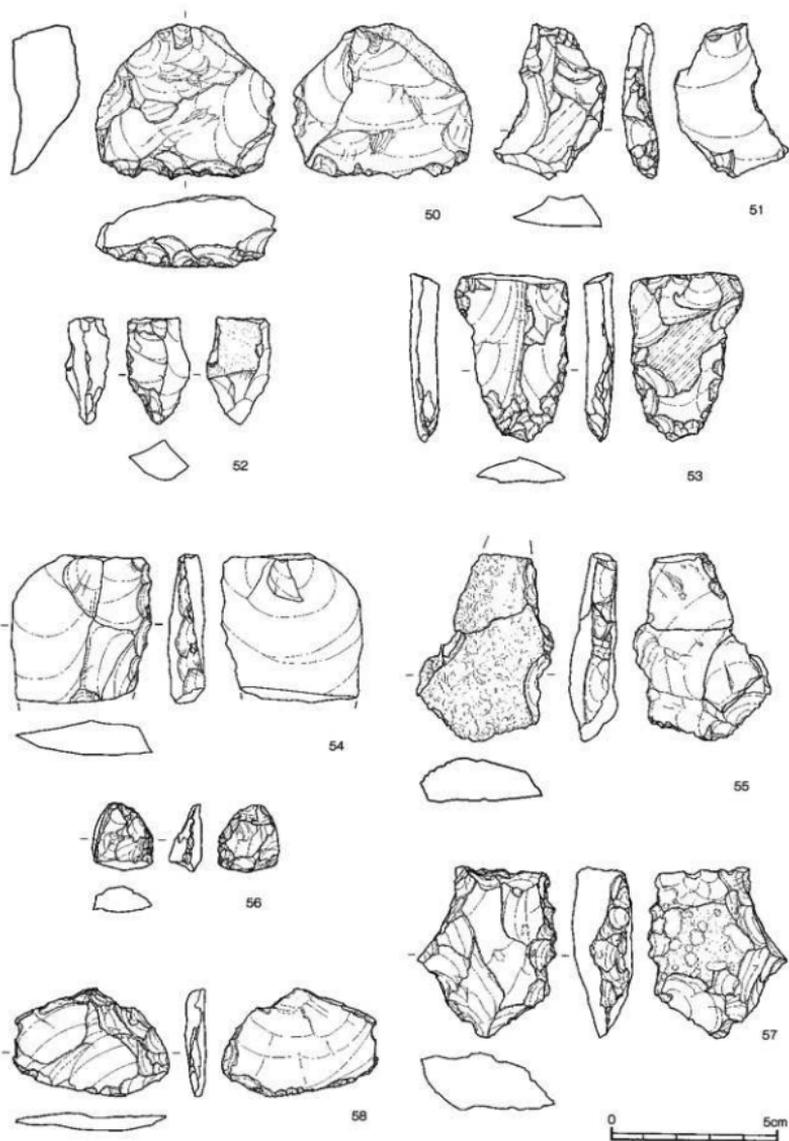
第13圖 尖頭器



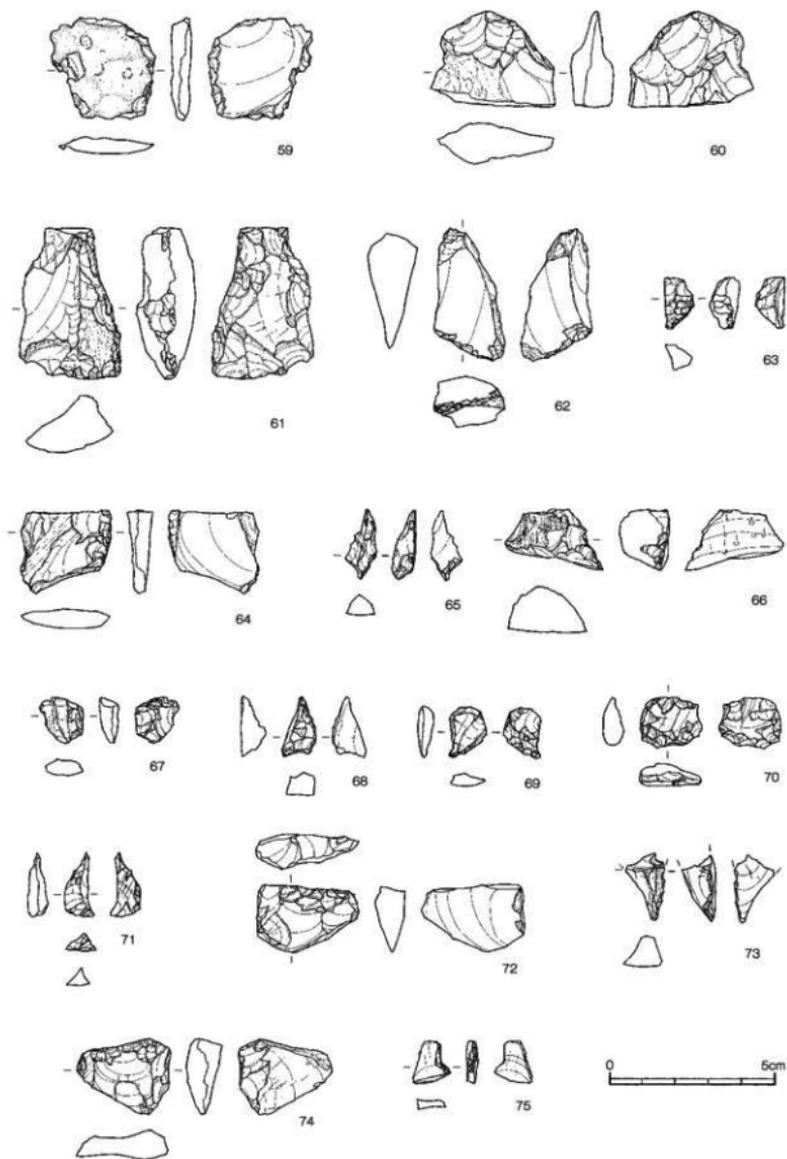
第14図 スクレイバー (1)



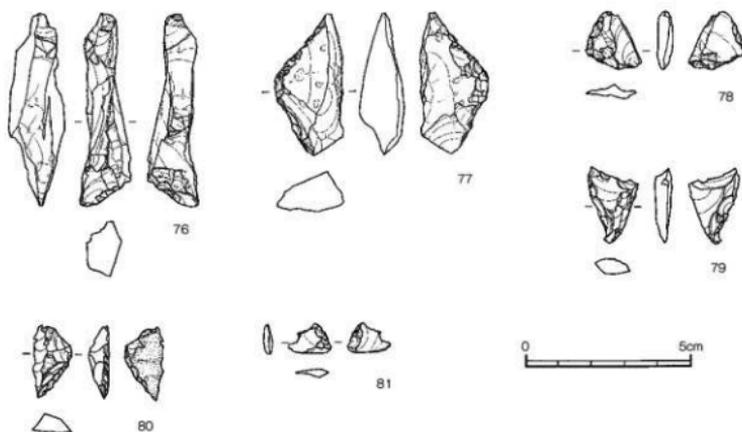
第15図 スクレイパー (2)



第16図 スクレイパー (3)



第17図 スクレイパー (4)・二次加工剥片



第18図 二次加工剥片

坦な打面から側面調整を施したものである。船野型細石刃核として分類されるものである。

274は気泡の多い茶褐色を呈した黒曜石で原産地が特定できないものである。平坦な剥離面を打面とした剥片素材の細石刃核であり、求心状に剥離したもので側面部に細石刃作業面がみられる。

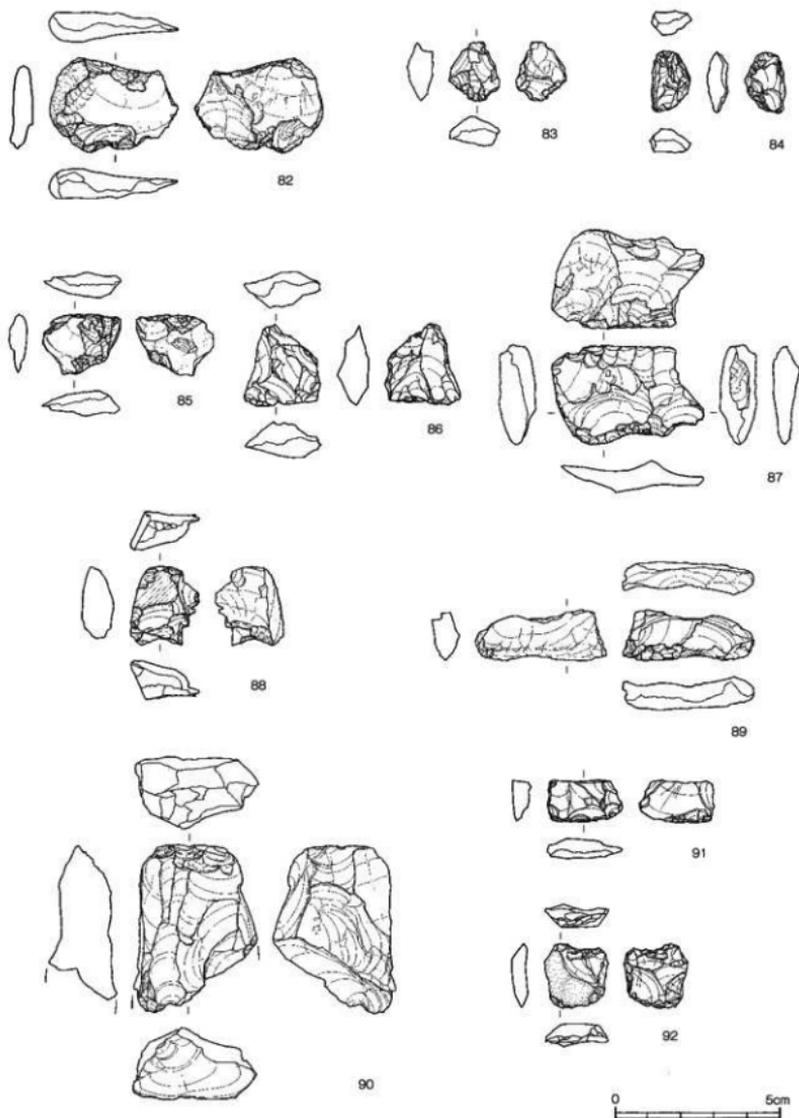
275～319は凝灰岩を素材に用いたものである。この凝灰岩は節理面で板状の剥片になるものである。275～280は楔形を呈した細石刃作業面が1面みられるものである。278・280は自然面を残している。280は側面が欠損している。

281は円礫を半割し、その時得られた平坦面を側面・打面にし、打面からの調整剥離によって成形を行っているものである。細石刃作業面が3面みられる。

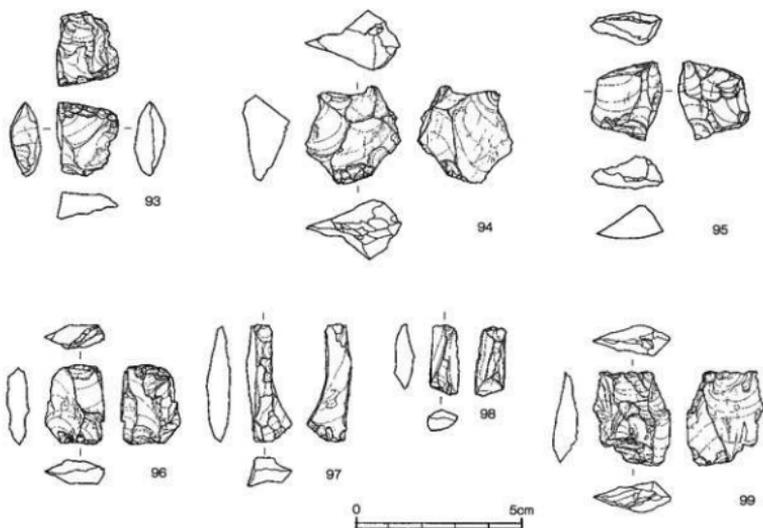
283は幅狭な平坦な打面から側面調整が施されたもので、下縁からの調整が施されている。この凝灰岩質の細石刃核は石材が軟質なため、欠損している箇所が多く分類するのに困難な面がみられた。

287・288は細石刃剥出作業面と平行する後背面を有し、後方に傾斜する打面をもつものである。下縁調整が施されている。

289～296は細石刃作業面が1面みられるものである。297・299は2面細石刃作業面がみられ、298は4面に細石刃作業面がみられる。下半分は欠損している。305～307・309・310は節理面が残っているもので、下縁調整を施して成形を行っている。308・312は打面を欠損しているものである。313は礫を半割したものを素材に用い、打面からの調整剥離によって成形したもので1面の細石刃剥出作業面が認められる。314は過半分が欠損しているもので、やはり1面の細石刃作業面が認められる。315は平坦な打面から側面調整が施されたもので、船野型細石刃核として分類されるものである。316は下縁調整を施した細石刃核である。317は打面に自然面を残している



第19图 楔形石器 (1)



第20図 楔形石器 (2)

が細石刃剥出を行ったが、再生の際に欠損したと思われる。319は節理面を多く残した細石刃核である。

ブランク (第30図, 320~329)

320・321は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いた細石刃剥出のみられないブランクである。

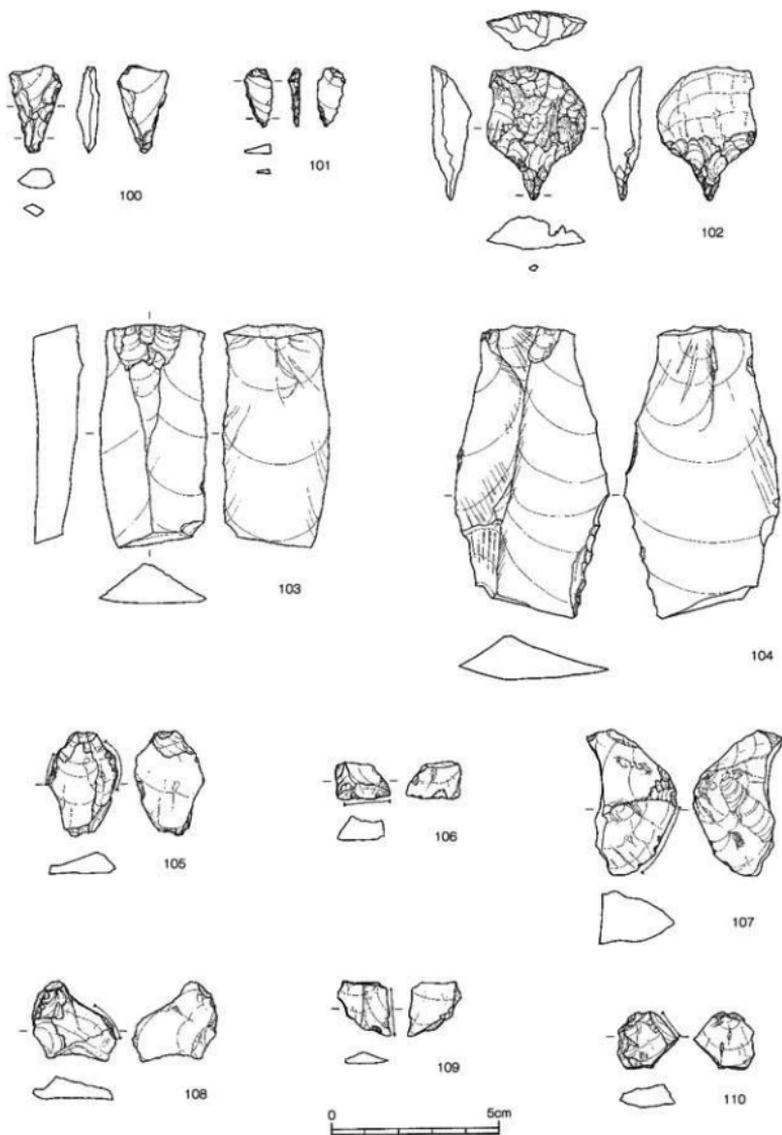
320は礫を半割したものを素材にし、その時得られた平坦面を側面・打面にして、打面からの調整剥離を施して成形していて下縁調整は施されていない。321も礫を半割したものであるが、下縁調整が施されたものである。323~327は三船産の黒曜石を素材に用いたブランクである。やはり礫を半割したものを素材にし、平坦面を打面になっている。325・327は下縁調整が施されている。328は平坦な自然面を打面にしたものである。329は凝灰岩を素材に用いたもので、礫を半割して打面を成形し、その面から調整剥離を施して成形している。下縁部が欠損しているため詳細は不明である。

石鏃 (第33~36図, 330~426)

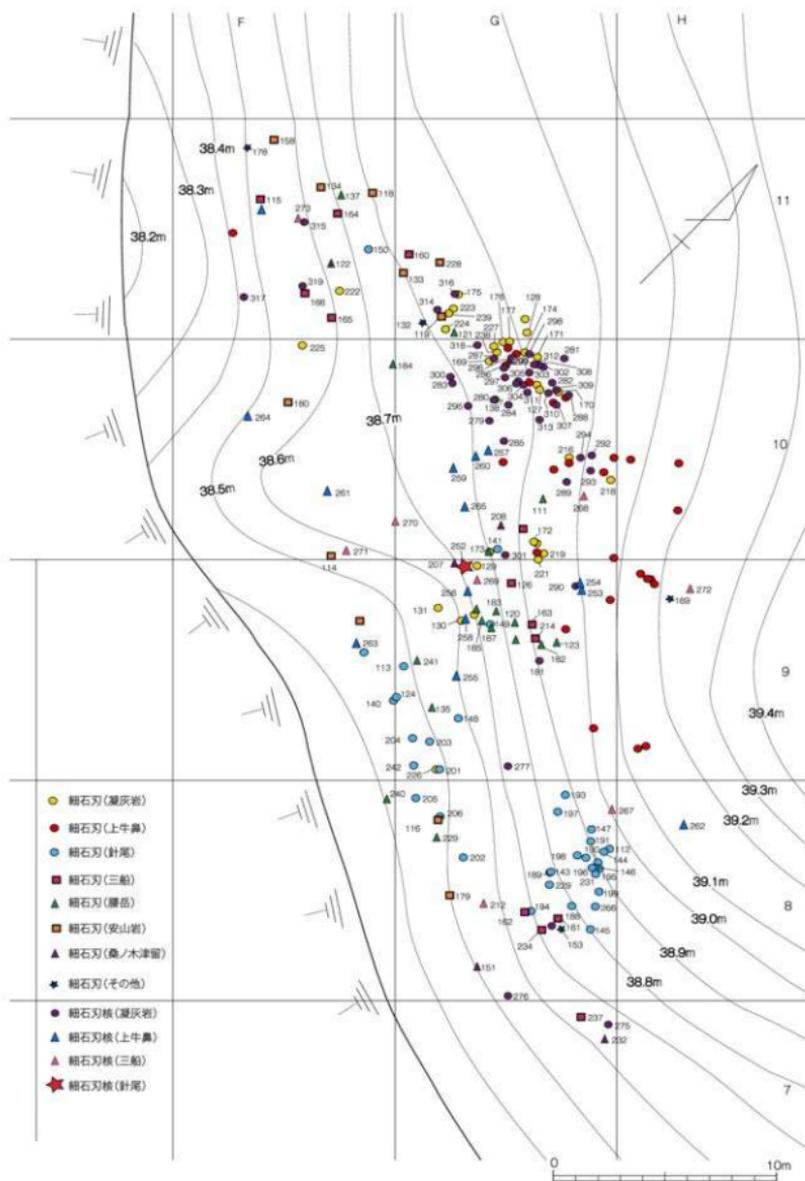
石鏃は遺跡南西部に集中して出土した。分布状況はⅦ層からの出土であり、細石刃・細石刃核等も出土しているが、縄文草創期の土器と出土状況はほぼ一緒であり、縄文草創期の石鏃と推定される。

石鏃の形態は、平基鏃・鋏形鏃等多種であり、また石材も安山岩を主体とするが、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英などを用いている。

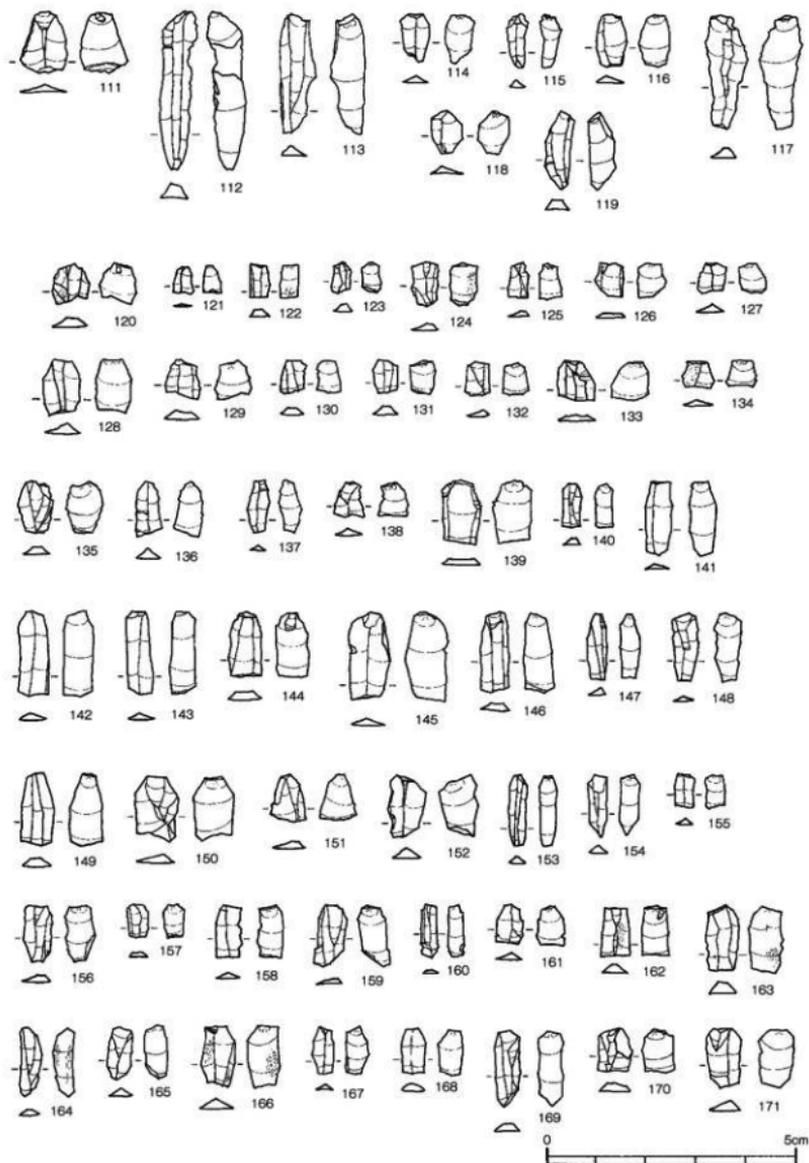
石鏃の形態は下記のとおり分類した。



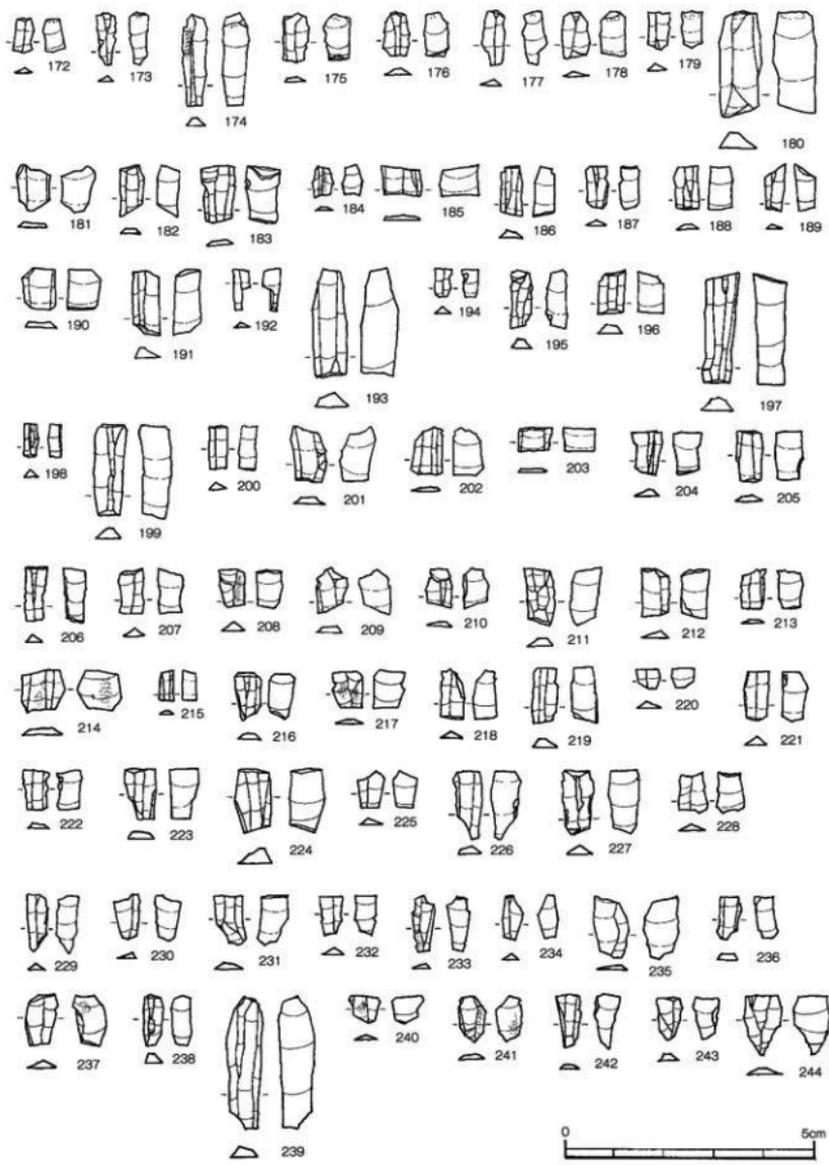
第21図 石錐・剥片



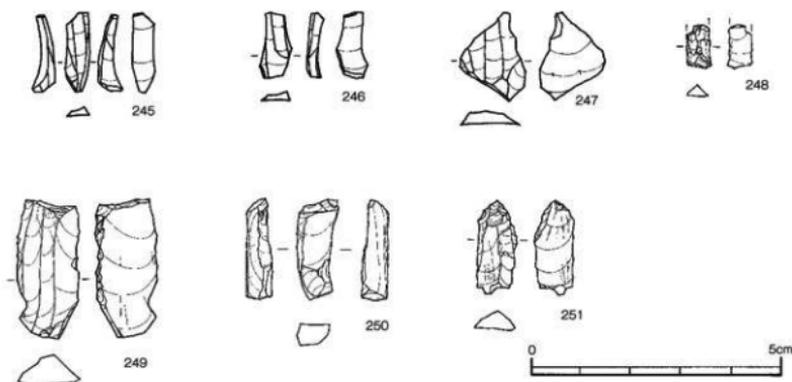
第22図 細石刃・細石刃核分布図



第23図 細石刃 (1)



第24図 細石刃 (2)



第25図 調整剥片

- A類…側辺部が直線的で、基部に挟りがある。
 B類…側辺部が弯曲し、基部に挟りがある。
 C類…側辺部が直線的で、基部が直線である。
 D類…側辺部が弯曲し、基部が直線である。
 E類…基部の片脚が違う。
 F類…基部が膨らむもの。

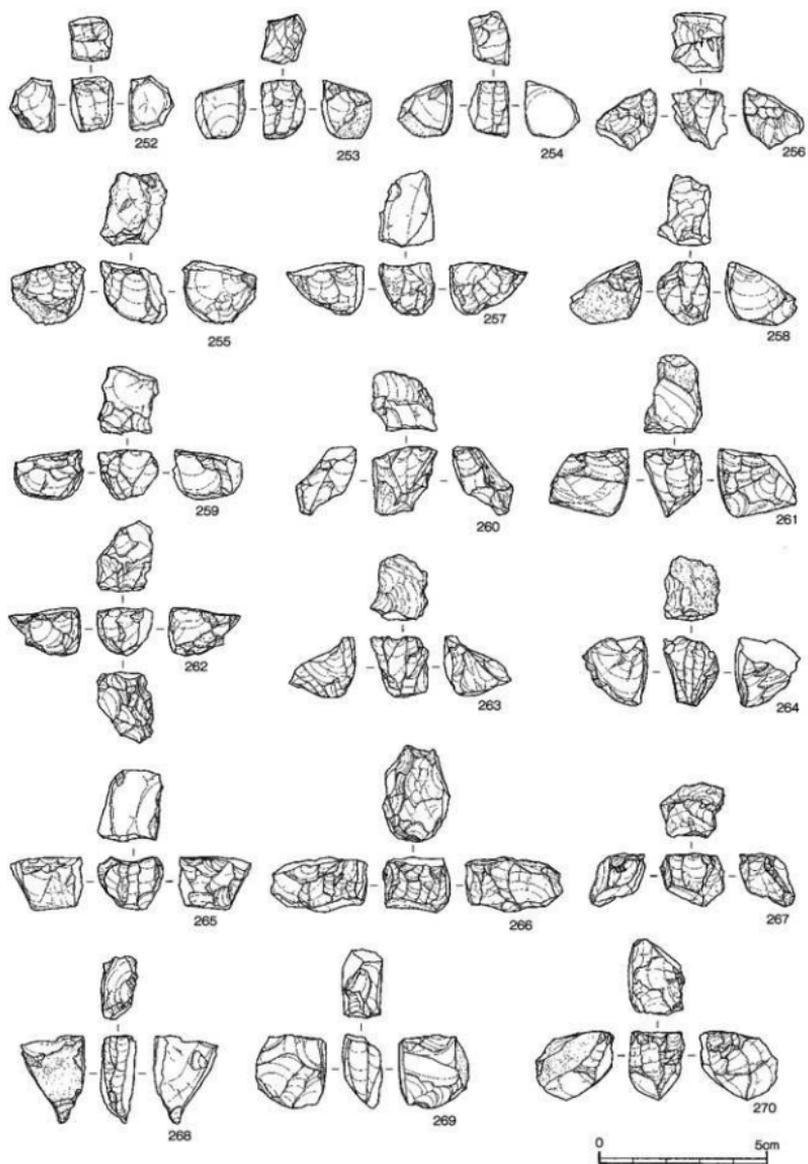
石鏃分類図

A 類	B 類	C 類	D 類	E 類	F 類

330～356は安山岩以外の石材を用いた石鏃である。

330・331はA類の石鏃で、側辺部が直線的で基部に挟りがあるものである。基部の逆刺は鋭く挟りが浅いものである。片脚が欠損し石材は鉄石英・頁岩である。

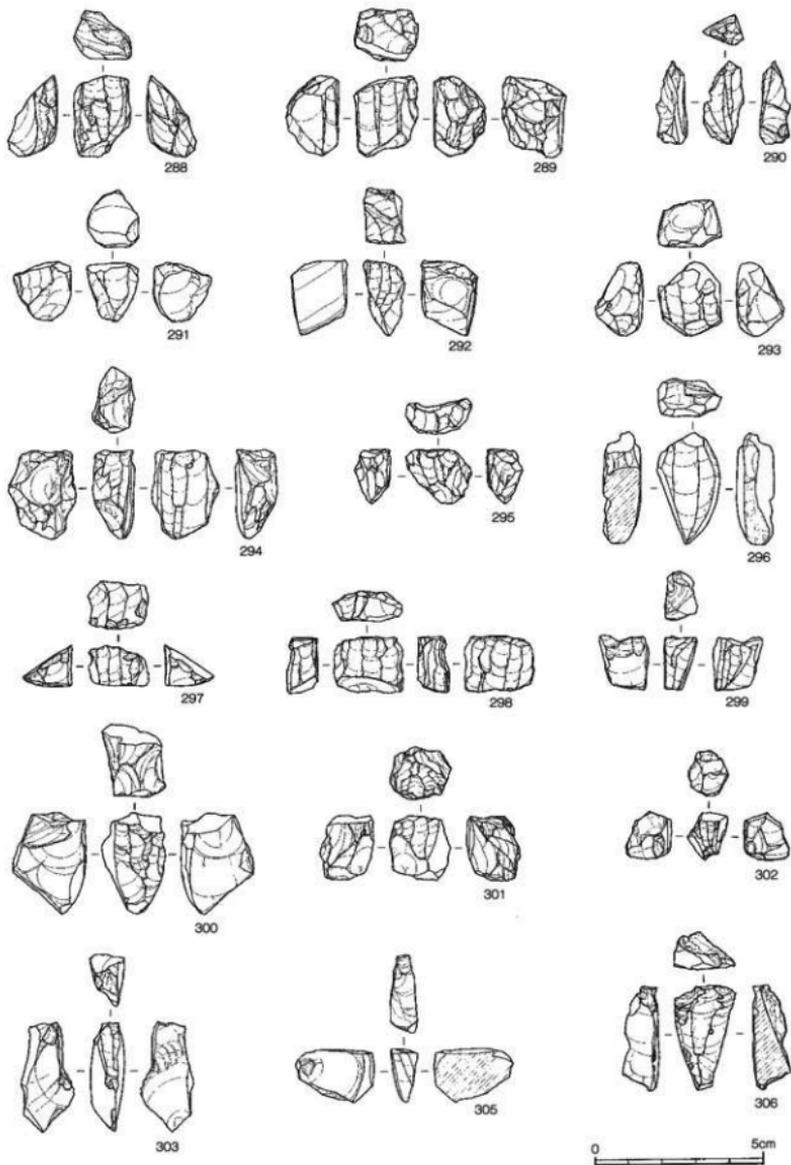
332～337はB類の石鏃で、側辺部が外弯的で基部に挟りがあるものである。332は黒曜石(針尾)を石材に用いたもので、やや横長の小型鏃である。先端部は鋭く側辺は外弯し最大幅は下方にある。基部の逆刺は鋭く挟りはやや浅い。334は側辺・基部を欠損しているが、頁岩を石材に用いた製作途中の石鏃と思われる。先端部は円く側辺は外弯している。336はチャートを石材に用いたもので、先端部が欠損しているが側辺部が外弯し最大幅を下方にもつものである。基部の逆刺は円く挟りの深いものである。Ⅶ層出土の石鏃では例外的に挟りの深いものであり、また石材の



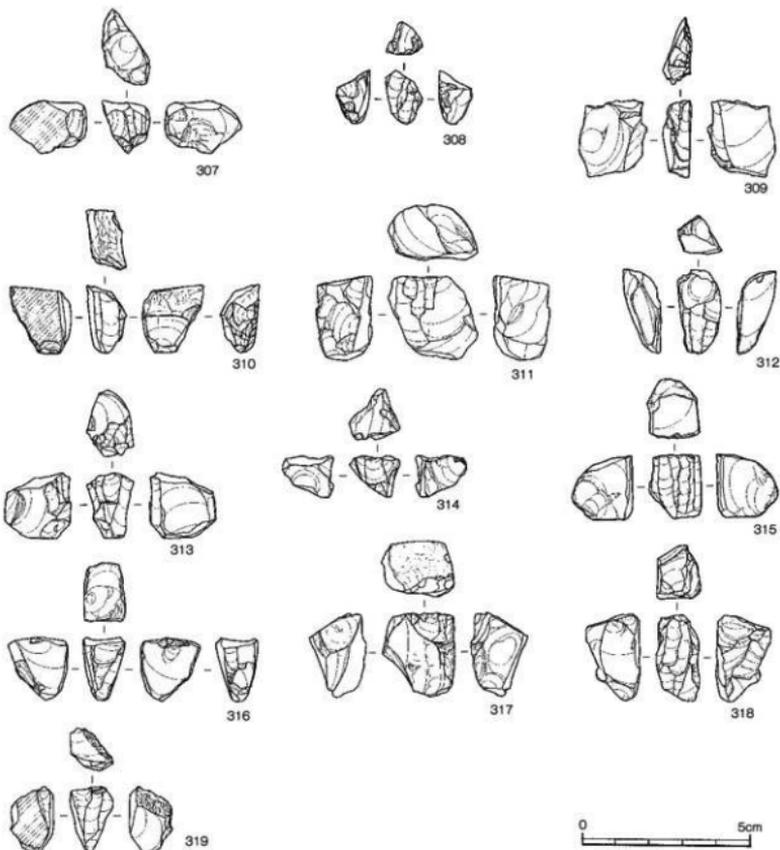
第26図 細石刃核 (1)



第27図 細石刃核 (2)



第28図 細石刃核 (3)



第29図 細石刃核 (4)

チャートもその他のⅥ層出土の石鏃とは異質であり、層位の混入の可能性もある。

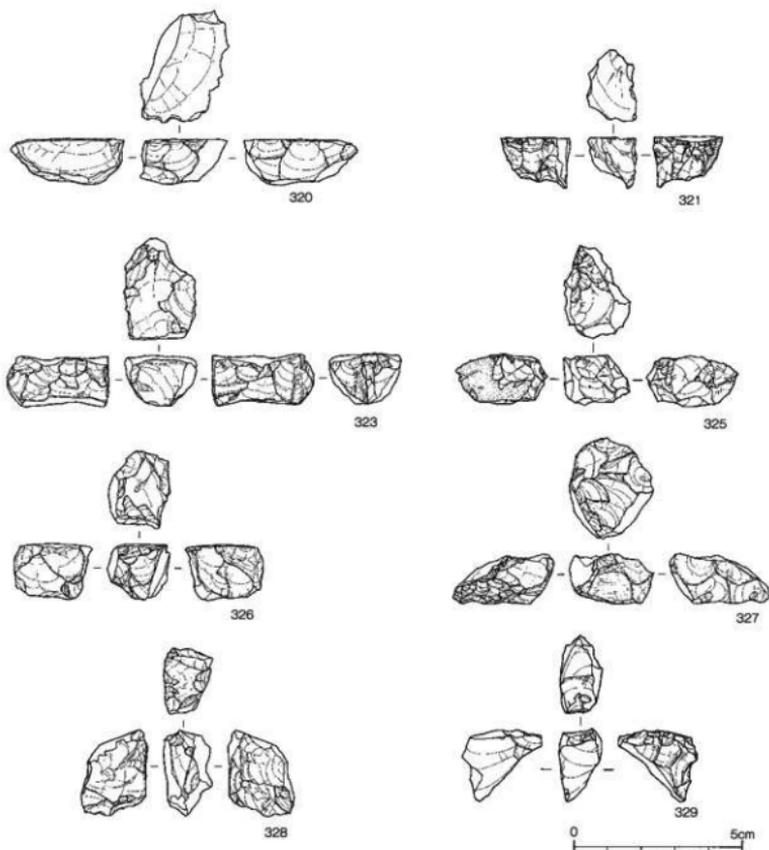
338～343はC類の石鏃で、側辺部が直線的で基部も直線的なものである。340～342は小型鏃で、いずれも調整剥離を丁寧に行っている。

344～348はD類の石鏃で、側辺部が外弯的で基部は直線的なものである。

344・345・348は側辺部が鋸歯状を呈している。349の石材は頁岩を用いたもので、先端部が円く幅狭な石鏃である。側辺は外弯し中央部付近に最大幅があるものである。基部は細くなり直線的である。350は硬質頁岩を石材に用いた剥片鏃で、片側面のみ調整剥離を施している。基部は片脚の長さが違うものである。

350～356は片脚の長さが違うE類である。

357～426は安山岩を石材とする石鏃である。



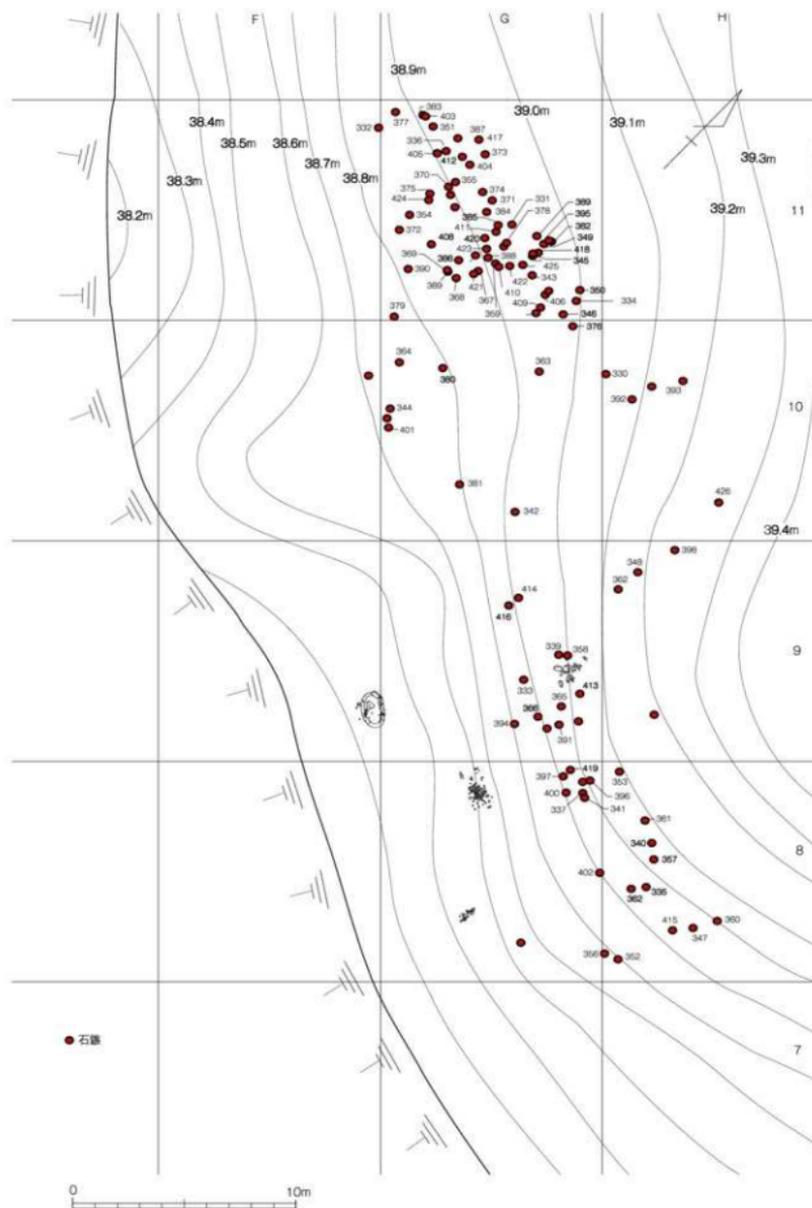
第30図 ブランク

A類 (357～381)

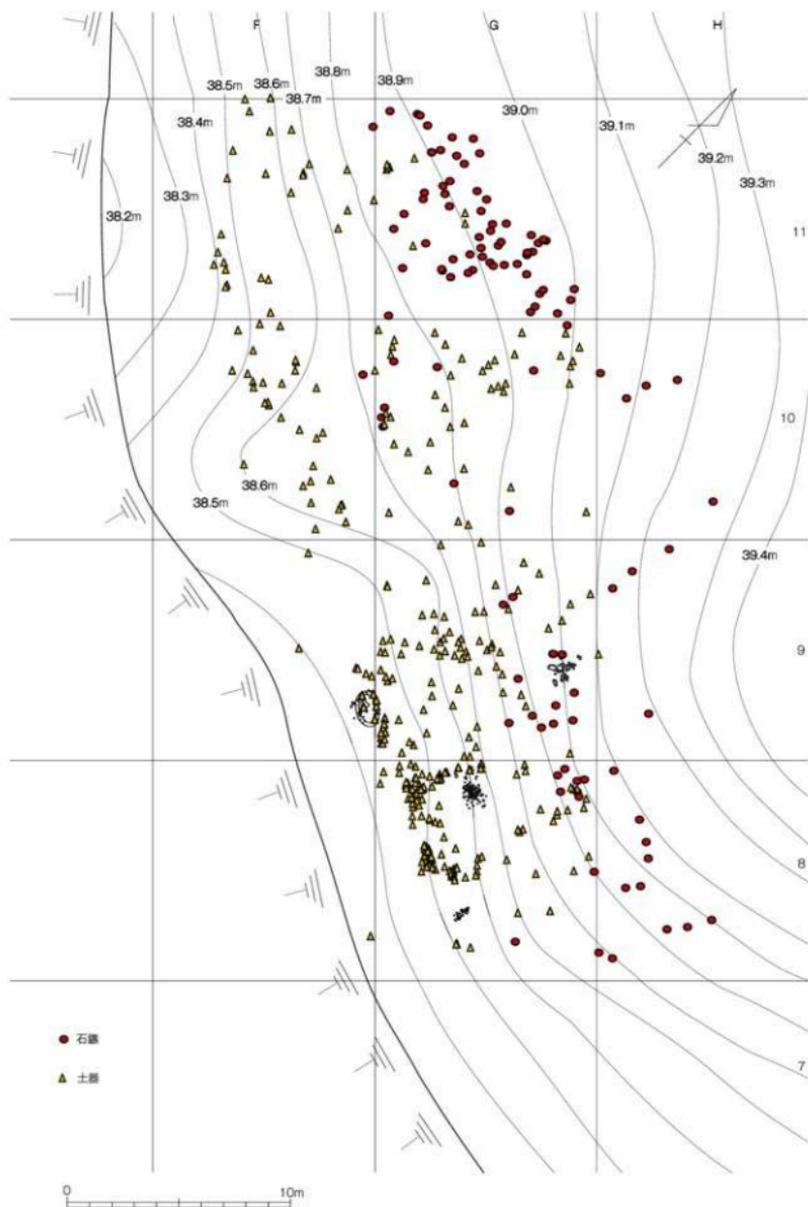
側辺部が直線的で基部に挟りがあるものである。357は幅狭の小型の剥片鏃である。基部の挟りは浅い。361は先端部を欠損しているが、やや深い挟りをもつものである。363・366・374は剥片鏃である。367は側辺部が鋸歯状を呈す。375・376は側辺がやや内弯気味のものである。基部の逆刺は円く挟りはやや深い。

B類 (382～395)

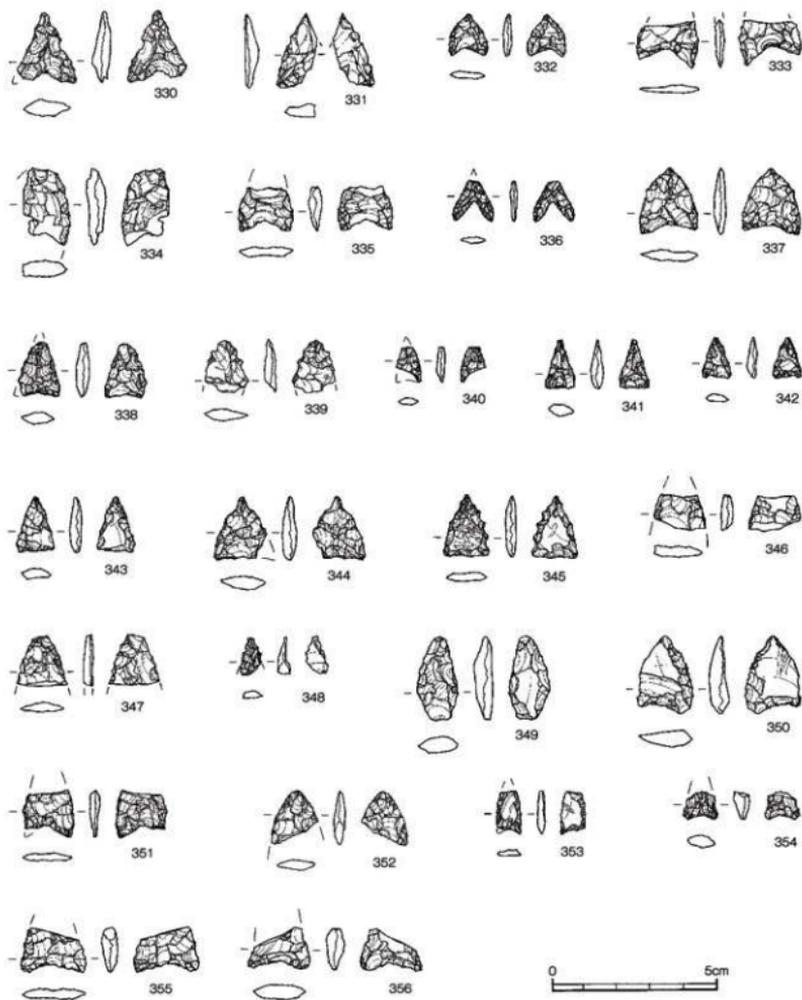
側辺部が外弯し基部に挟りがあるものである。382・383は先端部がやや鈍く側辺は外弯し、基部の逆刺は鋭く挟りがやや深いものである。やや横長の石鏃が多い。393は縦長の石鏃であるが基部が欠損している。395は剥片鏃で基部調整のみ施したもので製作途中と思われる。



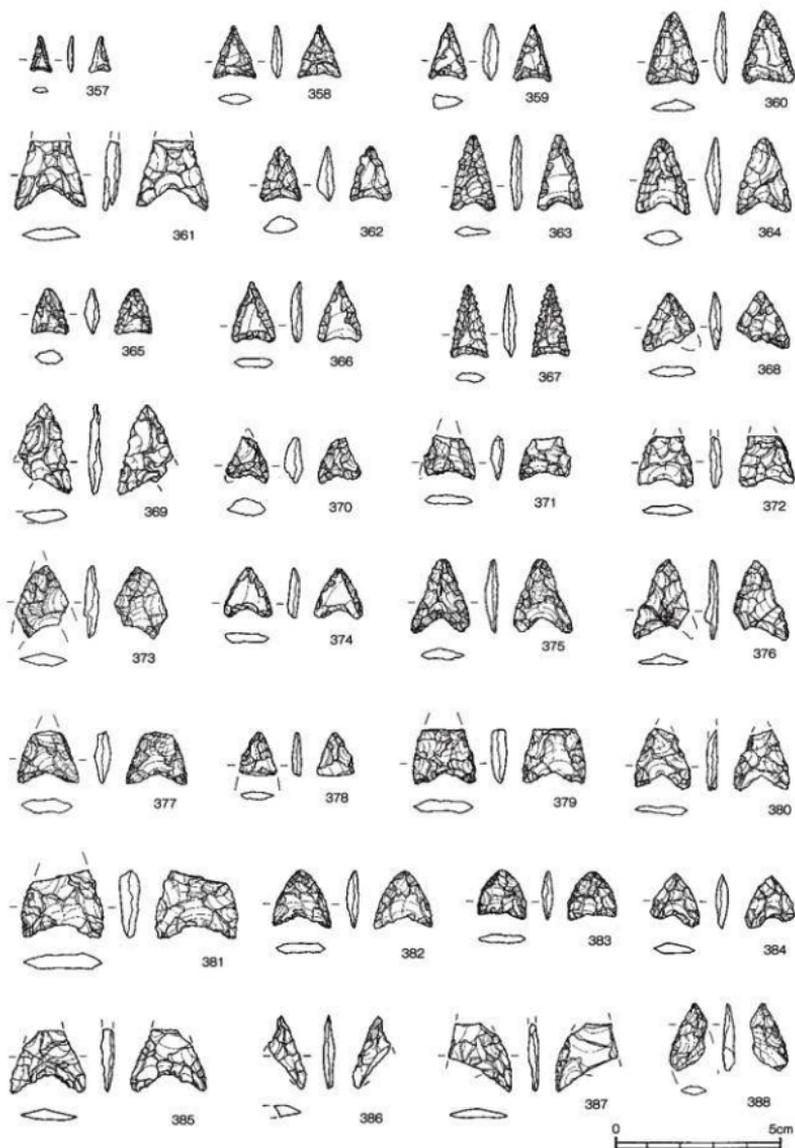
第31図 石鐵分布図



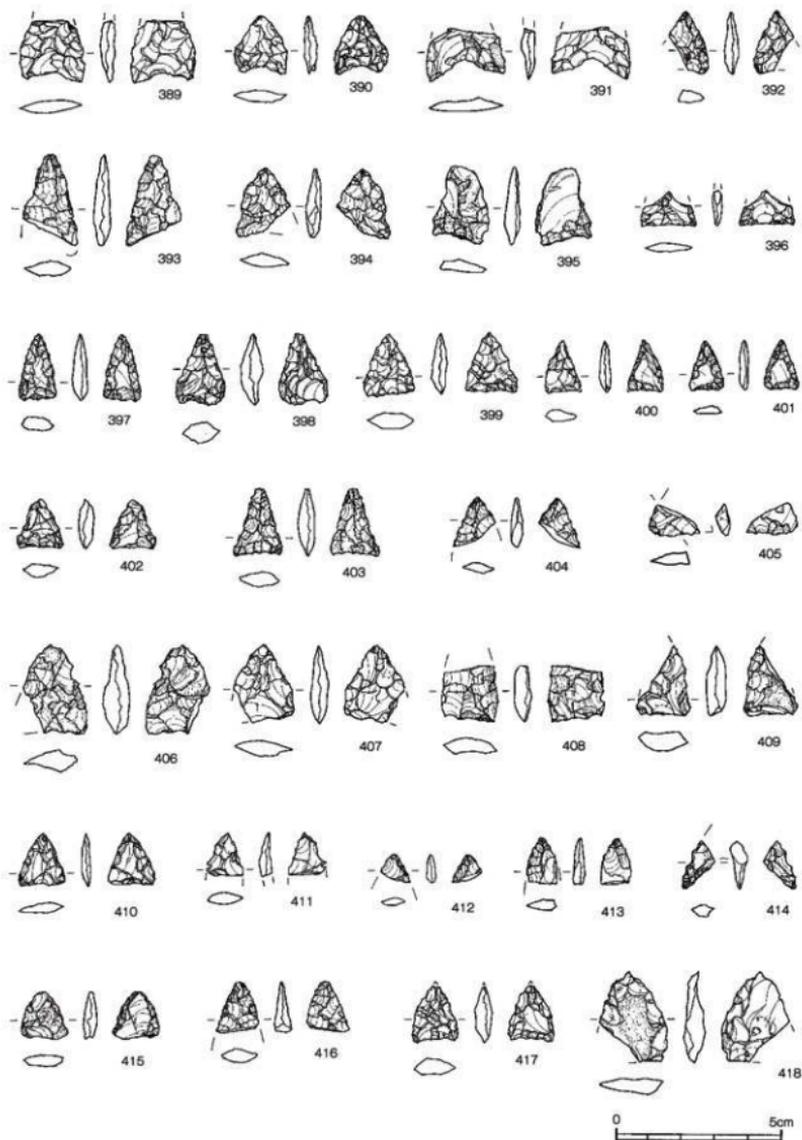
第32図 石器・土器分布図



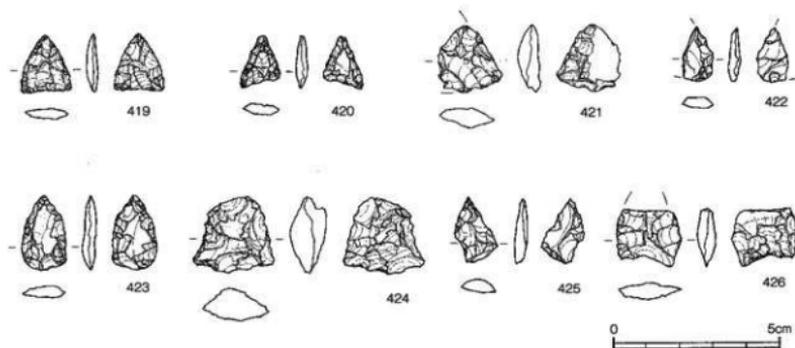
第33圖 石鏃 (1)



第34図 石鏃 (2)



第35図 石鏃 (3)



第36図 石鏃 (4)

C類 (396~412)

側辺部が直線的で基部も直線的なものである。396は先端部を欠損しているが基部が直線的なものである。397~403は幅狭な石鏃で基部は直線的であるが若干弯曲しているものもある。400~402は剥片鏃である。403は先端部が鈍く側辺はやや内弯するものである。404~409は一部欠損のみられるものであるが外弯し、基部が直線的なものである。407~409は五角形鏃に類似している。

D類 (413・415~419)

側辺部が外弯し基部が直線的なものである。418は剥片鏃で一部自然面を残している。419はやや横長のもので調整剥離が丁寧に施されている。

E類 (420~425)

基部に膨らみをもつものである。421は欠損品であり、側辺部の調整のみで製作途中と思われる。423は側辺が外弯し五角形を呈したものであり、基部は膨らんでいる。424は先端部が欠損しているもので基部に膨らみがある。425の先端部は鋭く側辺が直線的なものである。

F類 (426)

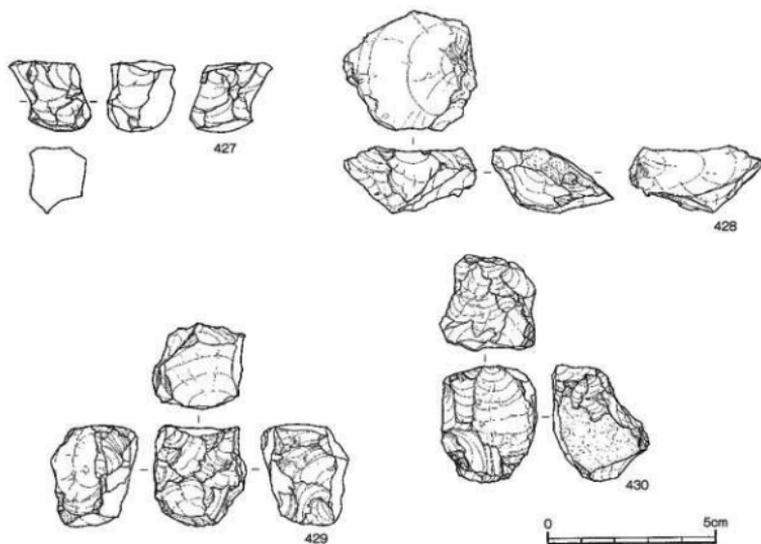
426は片脚が違うものである。

ただし、414は片脚のみであるが、基部の挟りが深く、336同様ほかのⅦ層出土の石鏃とは異質なものである。この2点については、他層からの混入の可能性もある。

石核 (第37図, 427~430)

Ⅶ層出土の石核であるが、ナイフ形石器文化・細石刃文化に共通するものであったので、この項でまとめた。427・428は上牛鼻産の黒曜石を、429・430は三船産の黒曜石を石材に用いている。

427は平坦な剥離面を打面とし、小型の剥片を剥いでいる石核であり、一部に自然面を残している。428は平坦に近い剥離面を打面とした剥片素材の石核であり、片面に求心状の剥離を行った石核である。429は平坦な剥離面を打面とし、正面と右側の打面方向の2方向から小型の剥片を剥いでいる石核である。430も平坦な剥離面を打面とし、剥片を剥いでいる石核で自然面を残し



第37図 石核

ている。

凹石・敲石・磨石（第38～39図）

凹石・敲石・磨石は元来分類すべきであろうが、形態の類似性や使用痕跡の複合性など、分類が難しく同一の項で取り扱うこととした。

凹石（431）

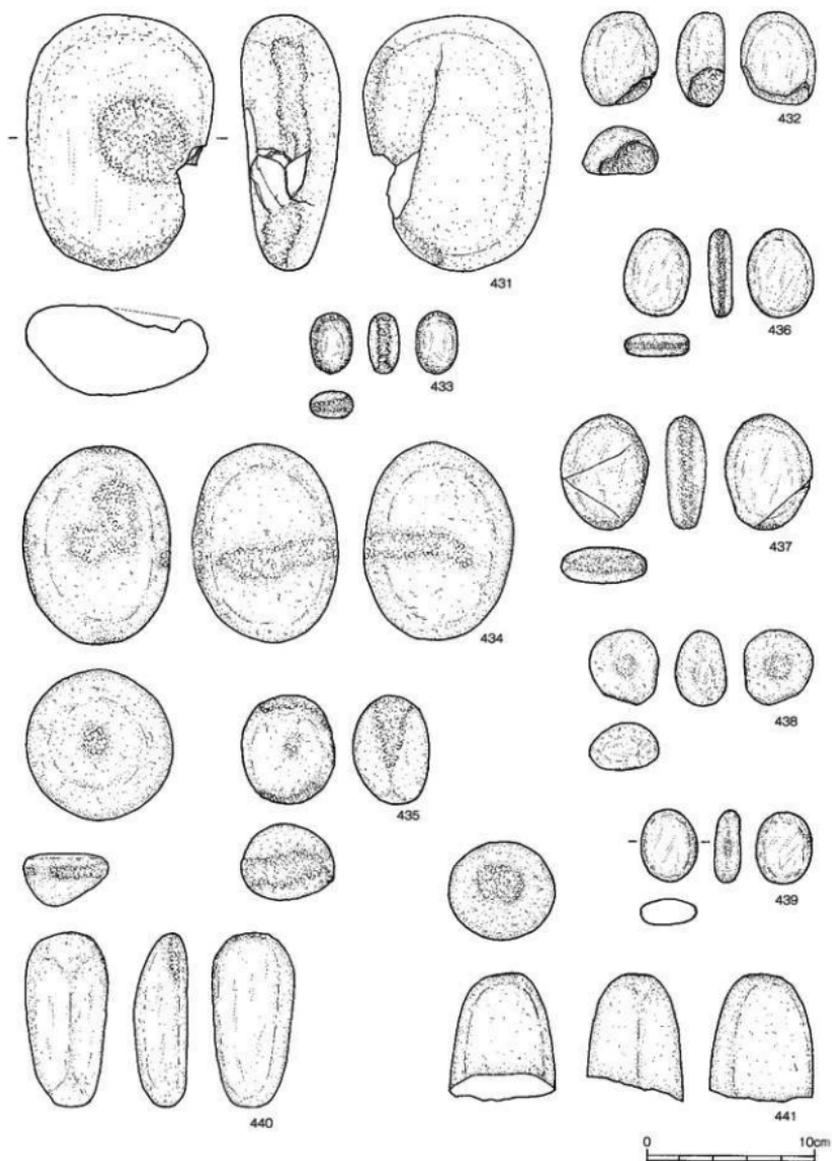
Ⅶ層出土の凹石は1点のみである。砂岩製の大型川原石を石材に用い、裏の平坦面縁辺部に径5cm程で深さ1.2cmの凹部をもつものである。平坦面には磨り面がみられ、片側縁部には敲打痕がみられる。

敲石（432～442）

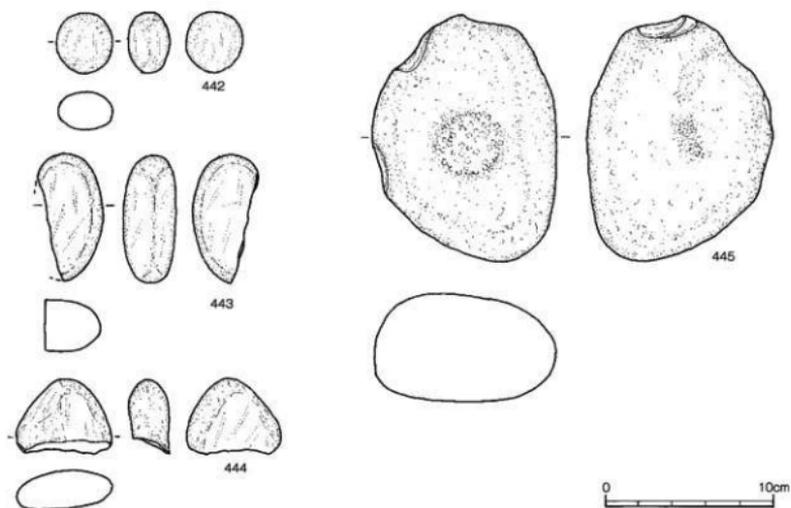
Ⅶ層出土の敲石は25点であり、そのうち9点の実測を行った。

432は、扁平な砂岩製の川原石を石材に用い、側縁部に敲打痕のみられるものである。表裏面ともに磨り面がみられる。これらは、石器製作に用いられたハンマーとも考えられる。

433～437は安山岩の楕円川原石を石材に用いた敲石で、433は上下両端と表面中央部に敲打痕がみられる。また裏面には若干の磨り面もみられる。434は上下端部と中央部に一巡するような敲打痕がみられる。440・441は棒状の敲石である。440は断面三角形の砂岩川原石を石材に用い、上端部に敲打痕がみられるもので、裏面の平坦面には磨り面がみられる。441は砂岩で棒状の川



第38图 凹石·敲石·磨石(1)



第39図 凹石・敲石・磨石・台石 (2)

原石を石材に用いたもので、上端部に敲打痕がみられるものである。

磨石 (443・444)

Ⅶ層出土の磨石は18点であり、そのうち2点の実測を行った。443・444とも扁平な砂岩製の川原石を用い、磨り面のみられるものである。

台石 (第39図, 445)

Ⅶ層出土の台石は1点のみの出土である。安山岩製の川原石を石材に用い、表面の中央部に約2cm幅の敲打痕がみられるものである。その他に磨り面・敲打痕等が認められなかったので、台石として取り扱った。

第V章 縄文時代の調査

縄文時代の遺構は、調査区の南西側において、縄文時代草創期の遺構及び土器や石鏃が良好な状態で検出された。また、調査区の中央部よりやや北側、つまり、曲輪1の南側で、集石遺構5基と黒曜石の原石の集中か所が検出された。

しかし、第Ⅲ章でも述べたように、山城による土地の造成等により、遺物包含層の残存状況は良好なものではなく、早期から晩期までの各時期の遺物が多量に表土から出土した。

第1節 遺構

1 草創期

草創期においては、G-9区を中心として2基の集石遺構と配石遺構1基及び1個体に近いと思われる土器・配石遺構や小片ではあるものの大量の土器片や石鏃等が検出された。

ただし、第Ⅳ章の旧石器時代で述べたように、草創期の遺物は、大量の細石器文化期の遺物と同一層より出土し、時期区分には苦慮した。集石遺構は磨石と思われるものを含んでいること、配石遺構は、県内の数か所で検出されている舟形配石炉にその形態が近いこと、検出面がⅦ層をやや掘り下げたレベルであることなどから、縄文時代草創期のものとして判断したものである。

また、これらの遺構の立地を見ると、9列より南側に位置し、崖面まで数mしかないことから、旧石器時代及び縄文時代草創期には、この台地はまだ南側へ舌状に延びていたものと考えられる。

・1号集石（第42図）

1号集石は、G-9区の西側で検出された。検出面は、Ⅶ層である。中央部分に大きめの安山岩の板石状のものを配している。板状の安山岩の大き目の破片が多いことから、被熱により破砕したものと思われる。他には、砂岩の円礫も用いられている。大き目の石が集中する部分が中心部と考えられ、西から東へ長楕円状にこれらの石は分布している。掘り込みはされなかった。

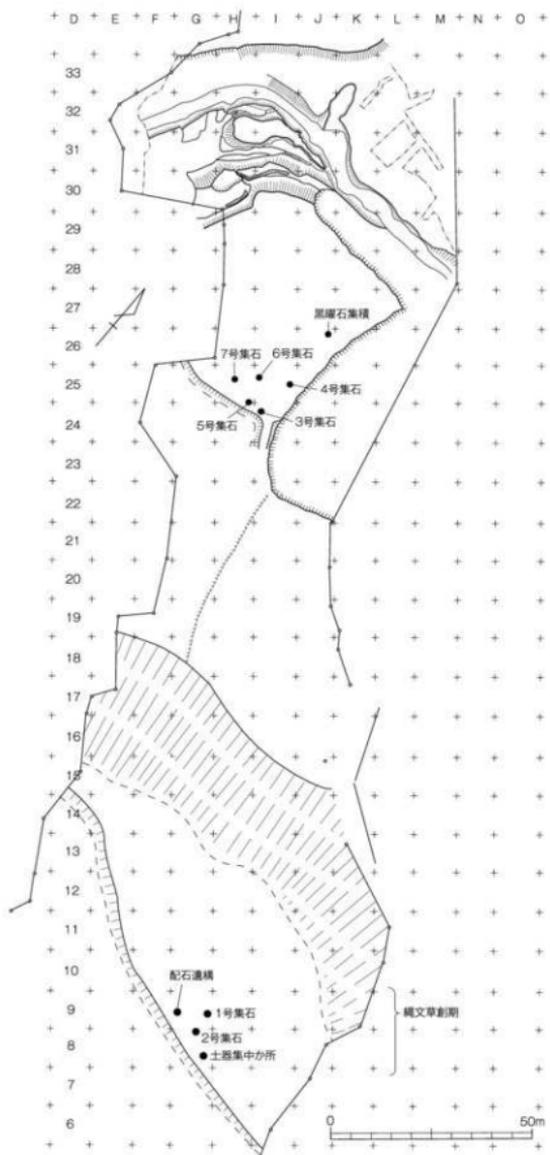
・2号集石（第43図）

2号集石もⅦ層で検出された。1号集石より6mほど南にあり、1号集石に比するとその規模は大きくない。人頭大から数cmの大きさの石で構成されている。1号集石と比べると、大きめの板状の石を用いていることや安山岩や砂岩を用いていること、掘り込みを有しないなどの共通点がある。

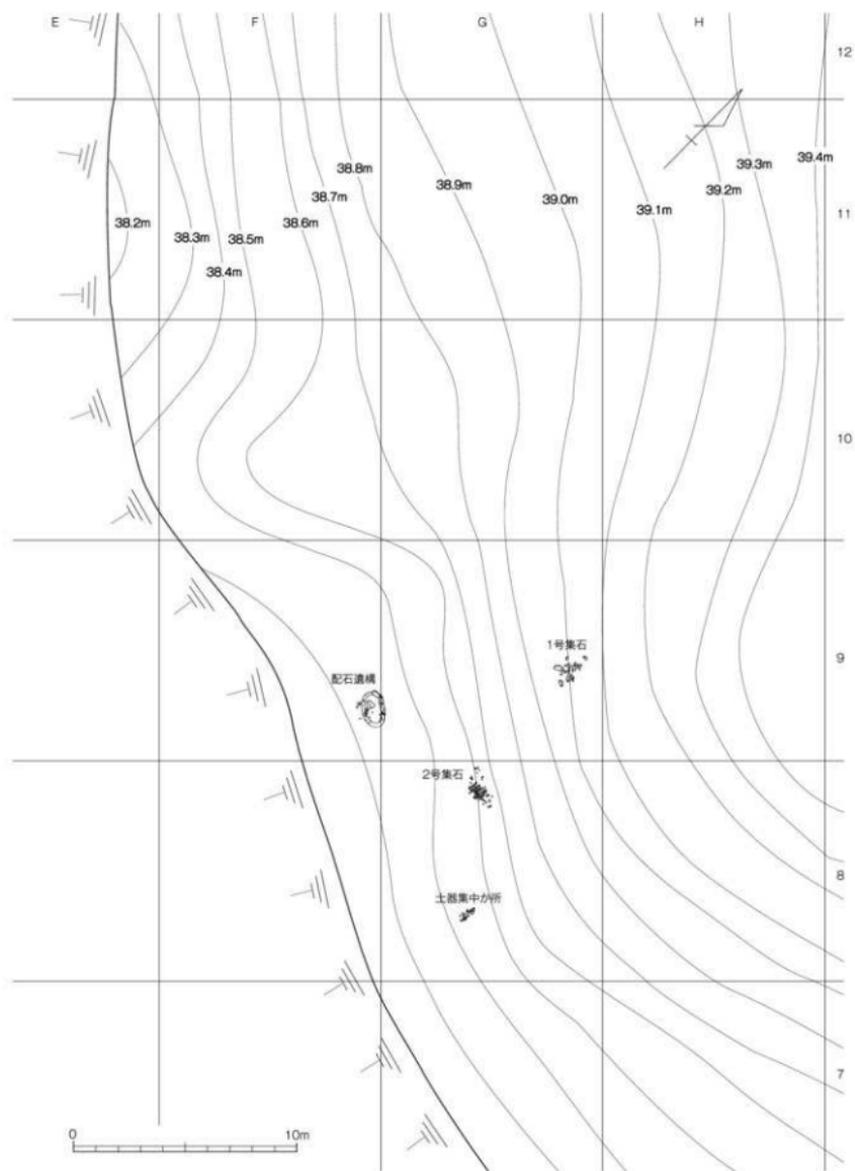
・配石遺構（第44図）

配石遺構は、2号集石の西側約5mの地点、Ⅶ層面で検出された。約90cm×50cmの長楕円形で、検出面からの深さは約20cmである。検出面部分には、10cm×20cm程度の煉瓦状の安山岩が整然と3枚並べられていた。検出面にそって浅い窪みがあったことから、楕円状に板石を配していたと思われる。

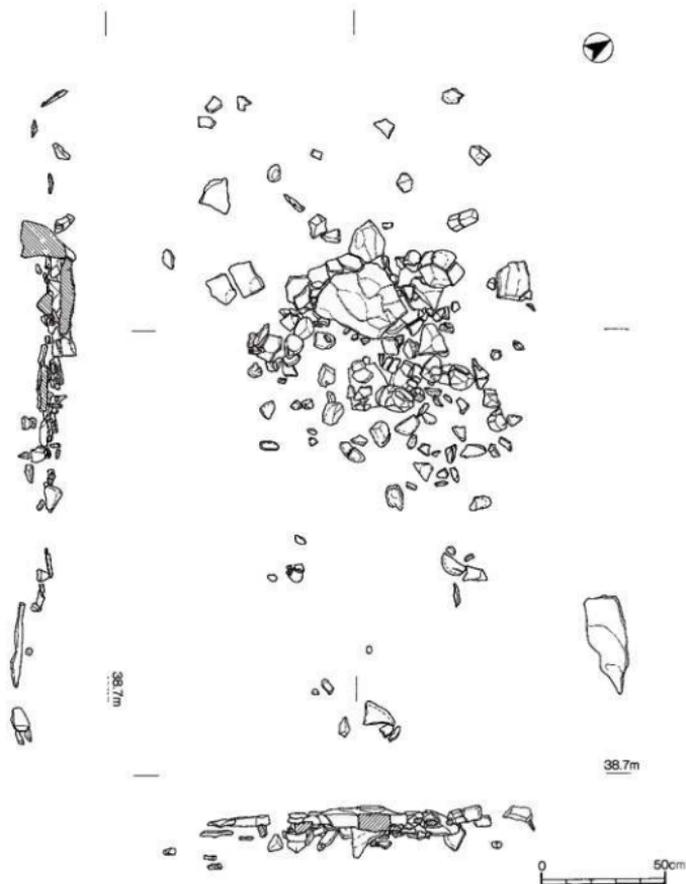
また、埋土及び遺構の周辺からは、草創期の土器が出土している。



第40図 縄文時代遺構配置図



第41図 縄文時代草創期遺構配置図及び地形図

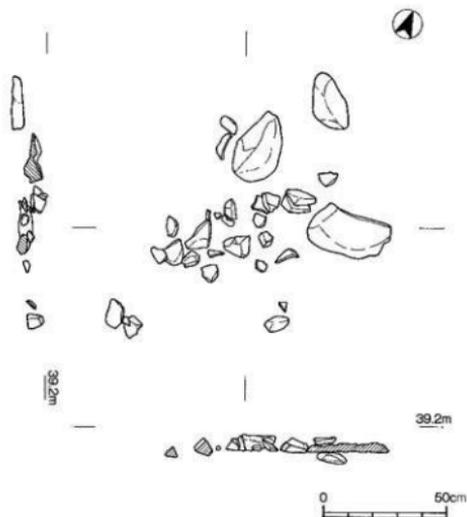


第42図 縄文時代草創期1号集石

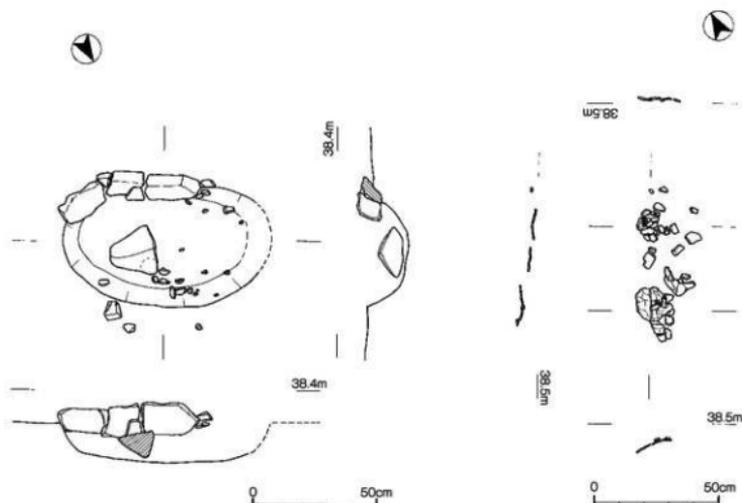
・土器集中か所 (第45図)

G-8区の中央部において、他の遺構とほぼ同様にⅦ層をやや掘り下げたところで、一個体に近い状態と思われる土器を検出した。出土した土器は非常に脆かったため、現場で薬品処理を行った。その後、土ごと切り取って持ち帰り、埋蔵文化財センターで再度薬品処理を行って接合作業を行った。

検出当初は、完形に近い状態に復元が可能かと思われたが、土器が非常に脆かったために完全に接合したものは少なかった。接合を行い、図上復元したものが、第51図の466である。その特徴等については、遺物の項で述べることにする。



第43図 縄文時代草創期2号集石



第44図 縄文時代草創期配石遺構

第45図 土器集中か所 (No.466)

2 早期

IV層検出の集石遺構は、I-25区周辺を中心に検出されている。3号集石～6号集石である。ただし、アカホヤの一次堆積であるⅢb層がブロック状に存在するため、その時期は、縄文前期以降の可能性も否めない。

・3号集石

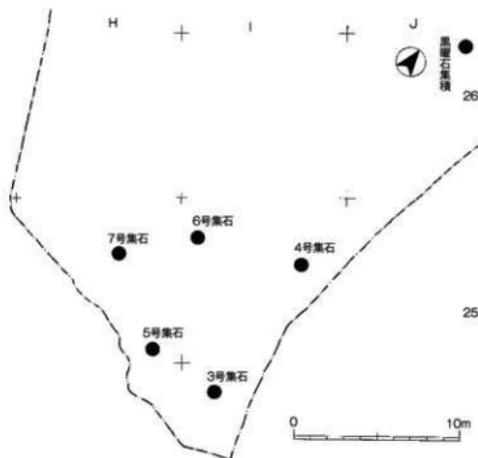
3号集石は、拳大程度以下の円礫や角礫で構成されている。特に大き目の礫が集中している。東側及び北側がこの集石の中心であると思われる。

・4号集石

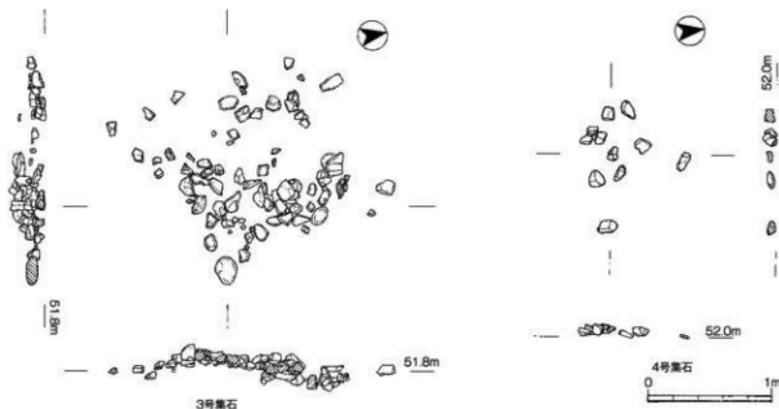
4号集石は、11個の拳大の安山岩と砂岩で構成されたもので、全ての礫がほぼ同じレベルである。

・5号集石

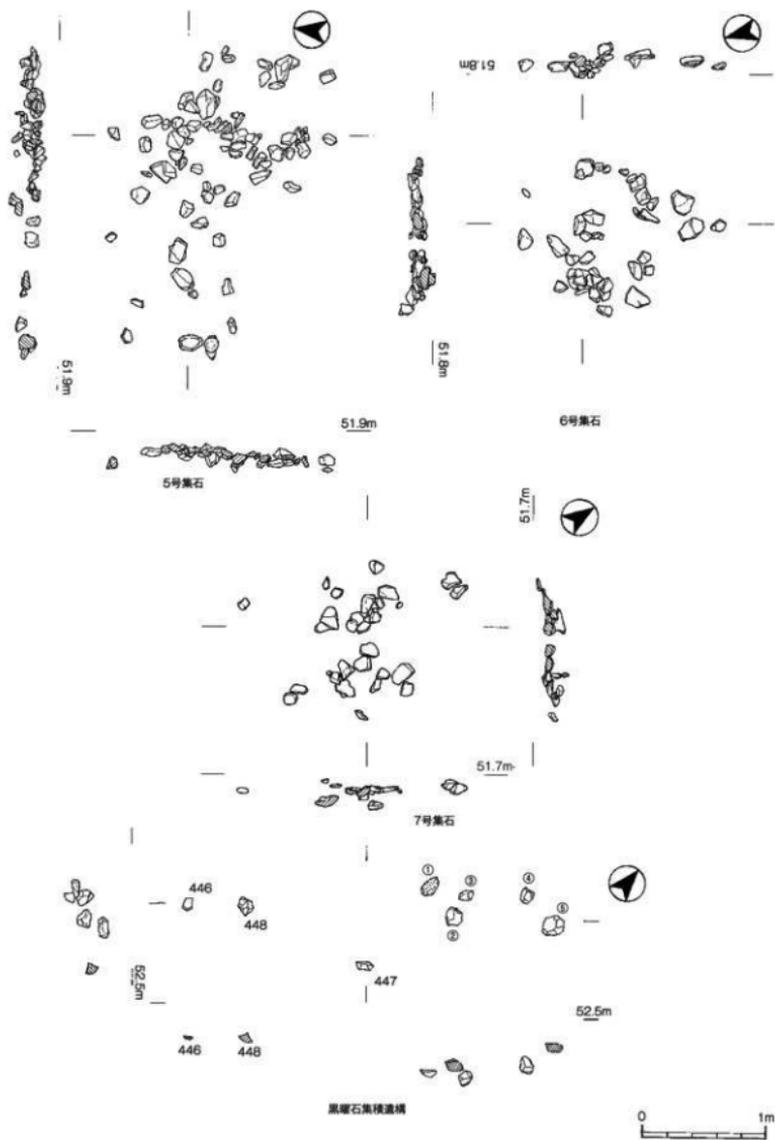
5号集石は、3号集石の5mほど西側にあり、約40個の角礫を中心として、構成されている。東側に大き目の礫があり、集中度も高い。4号集石と同様に全ての礫がほぼ同じレベルである。



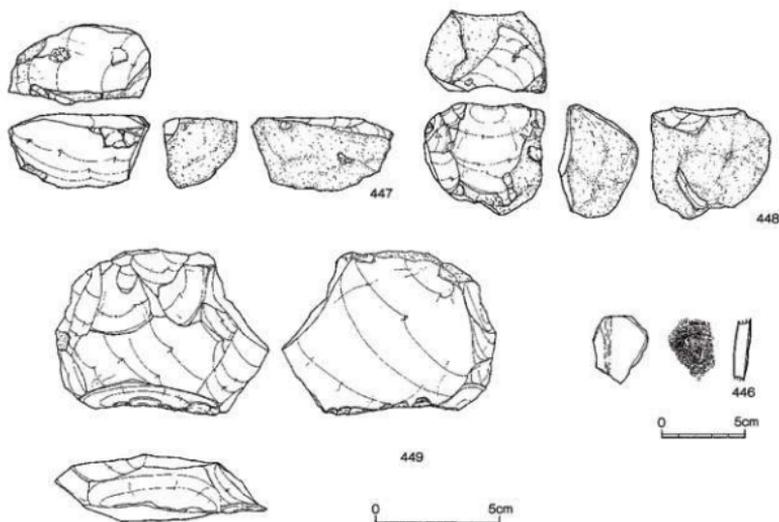
第46図 縄文時代集石遺構等位置図



第47図 縄文時代集石遺構3・4号



第48図 縄文時代集石遺構5・6・7号及び黒曜石集積遺構



第49図 黒曜石集積出土遺物

・6号集石

6号集石は、検出された集石の中では、もっとも北側にある。一見、5号集石を小さくしたように見えるが、数個の大き目の礫が被熱して破砕したもので、石質も同様のものが多い。また、4号集石から6号集石のすべてにおいて、掘り込みは検出されなかった。

3 前期

・7号集石

3号集石から6号集石は、IV層の検出であったが、7号集石は、アカホヤの一次堆積であるIII b層から検出されている。円礫と角礫の中間的な礫20個程度で構成されており、東側と西側に分割されたように見える。また、検出層から、縄文前期以降と考えられる。

・黒曜石集積遺構

この遺構は、J-26区のIII層から検出されたもので、7個の黒曜石と1個の土器が3×2mの範囲から検出された。また、この集積からやや離れた地点で、449の黒曜石が出土している。

449は三船原産の気泡の多い黒曜石を用いたスクレーパーである。大形剥片の打点部を残し、先端部を半裁して、一側縁部に粗い調整剥離を両面から加えて刃部になっている。

出土した7個の黒曜石は、全て上牛鼻原産の黒曜石で447と448以外は原石である。447と448は自然面を残しながら礫を半裁したものである。ほとんどが原石としてこの地に持ちこまれたものである。446は、深鉢の薄手の胴部片で、縦位の微隆帯を施す深浦式であり、周辺からも同様の遺物が出土している（第49図）。次の表は、黒曜石集積遺構出土の原石の法量である。

黒曜石集積遺構観察表

遺物番号	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	原産地	備考
447	3.0	5.7	3.0	57.08	上牛鼻	石核
448	4.5	4.6	3.2	73.43	上牛鼻	石核
①	5.9	4.0	2.4	61.84	上牛鼻	原石
②	4.6	3.8	3.8	95.36	上牛鼻	原石
③	5.7	3.7	2.8	86.85	上牛鼻	原石
④	5.2	4.8	4.0	121.63	上牛鼻	原石
⑤	5.2	4.7	3.3	118.03	上牛鼻	原石

第2節 遺物

縄文時代の遺物は、草創期から晩期まで各時期の遺物が出土しているが、安定して出土したのは草創期のみで、他は後世のピット、土坑、竪穴、空堀などや表土から出土したものが多かった。また、層的にも狭い範囲の残存か所が多かったため、出土状況の分布図の掲載は草創期だけにとどめた。

1 草創期

草創期の遺物としては、土器片、石鏃、磨石、凹石類が出土した。石鏃やその他の石器についての出土状況分布図、実測図等は、旧石器時代の最後の部分に掲載した通りである。

(1) 土器 (第51図 450～466)

確認調査時の遺物も含めて、約336点の土器がF・G-8～11区を主に出土し、接合を実施した結果、資料数としては17点(450～466)になった。土器の器種としては、深鉢形土器で、口縁部・胴部・底部(丸底)がある。

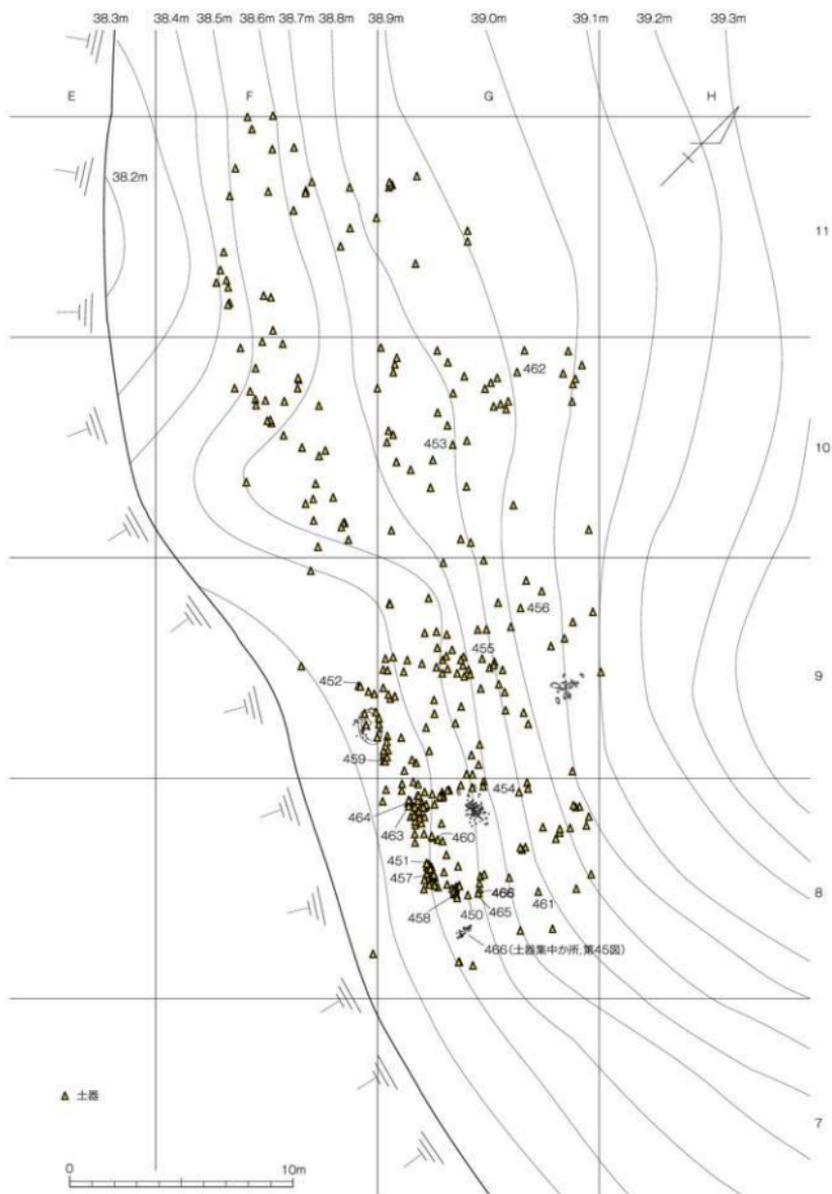
深鉢形土器は、いわゆる隆帯文土器と呼ばれる土器がほとんどである。

450～453は、口縁部片である。450と452には口唇部には刻目が施され、451・453は無文で丸みを呈した仕上げがみられる。口縁部の器形は若干内弯気味で、幅広の隆帯文を巡らせるタイプである。器壁厚味は8mmから10mmの肉厚である。450・451は口縁部上端部に隣接して2条以上の隆帯文が巡り、453は1条が巡る。隆帯文は、幅10mm～17mm、高さ5mm～10mmの幅広の太い隆帯が特徴である。452には僅かに貝殻の肋頂部の押圧痕が確認されるが、他は無文の刻目である。

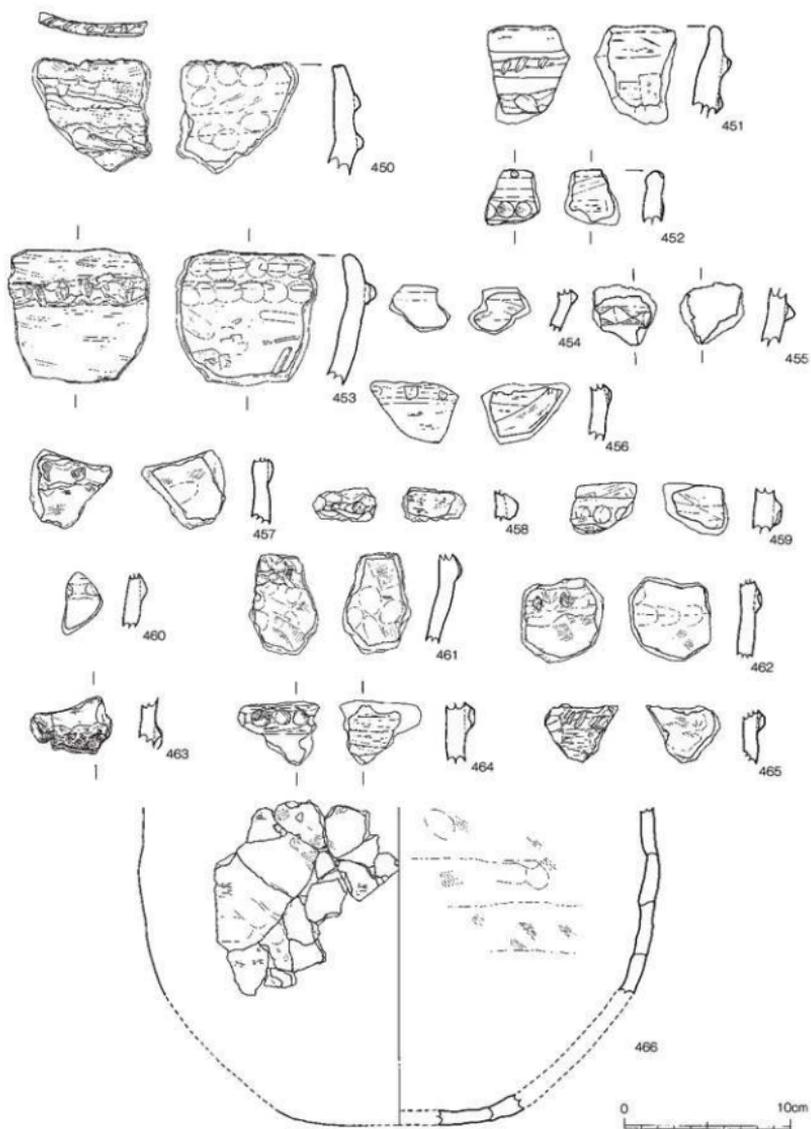
454～465は口縁部に近い胴部片で、1条の隆帯文が確認される破片である。隆帯は、口縁部とほぼ同じで、幅広の太めのタイプである。463の刻目には明らかに貝殻の肋頂部の押圧痕が確認される。また、器表面の剥離が著しいが、455・464にも僅かに確認され、口縁部同様に肋頂部の押圧痕が施される刻目が存在することが判明した。

466は胴部から底部片の一括資料である。胴部と底部は直接接合しないが、図のように器形を還元出来る。器壁厚味は約6mm程度で、2cm程度の輪積み手法が確認される。

隆帯上の刻目については2種に分けられる。刻目が細く深いものはへら状の施文具で、刻目が幅広く浅いものは貝殻の肋頂部の押圧痕を施すタイプである。



第50図 縄文時代草創期土器出土状況



第51図 縄文時代草創期出土土器

2 早期 (第52図～第66図)

縄文時代早期の土器は、包含層としては、IV層及びV層からの出土である。ただし、包含層からの出土は多くない。出土遺物は、前葉では前平式系及び貝殻押圧文ないしは押引文等を施すもの、後葉では、押型土器や塞ノ神式土器等が出土している。

・土器 (第52図～第65図)

467～530は貝殻条痕による文様が施されているものである。器形は大まかに円筒形と角筒形とに分かれるが、不明瞭なものが多い。467～493はやや太めの貝殻条痕文が施されているものである。この内、467～473は円筒形の口縁部片である。467は、口縁部上端に斜位の貝殻刺突文を施す。470は、貝殻刺突文を3列に密に施すものである。471の胴部には、貝殻条痕文の後に貝殻刺突文による連点状の施文が施されている。472は、縦位の貝殻条痕文が重ねられている。473は、縦位の貝殻刺突文を施した後に下位に横位貝殻刺突文を巡らせる。

474・476は角筒形の口縁部片である。477～493は胴部片である。条痕文のみの477と二重施文の478～493とに大別できる。器形は、477・478が円筒形で479～493が角筒形である。479は角部に近い破片で、流水文の他に貝殻刺突文による連点文が見られる。488は、角筒形の胴部片である。貝殻条痕文の上に短い沈線文を菱形状に施文されている。487は、緩やかな角部を有する。流水文から菱形状に斜位の貝殻刺突文が施されている。494～511は、貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねるものである。497～499は、やや縦位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が重ねられる。500は口縁部に近い。クサビ状の貼付文が見られる。

512～519は底部片である。512はレモン形の可能性も考えられる。512～514はやや太めのキザミ目が施される。515～519は角筒形の可能性が高い。518と519は胎土色調から同一個体と考えられる。

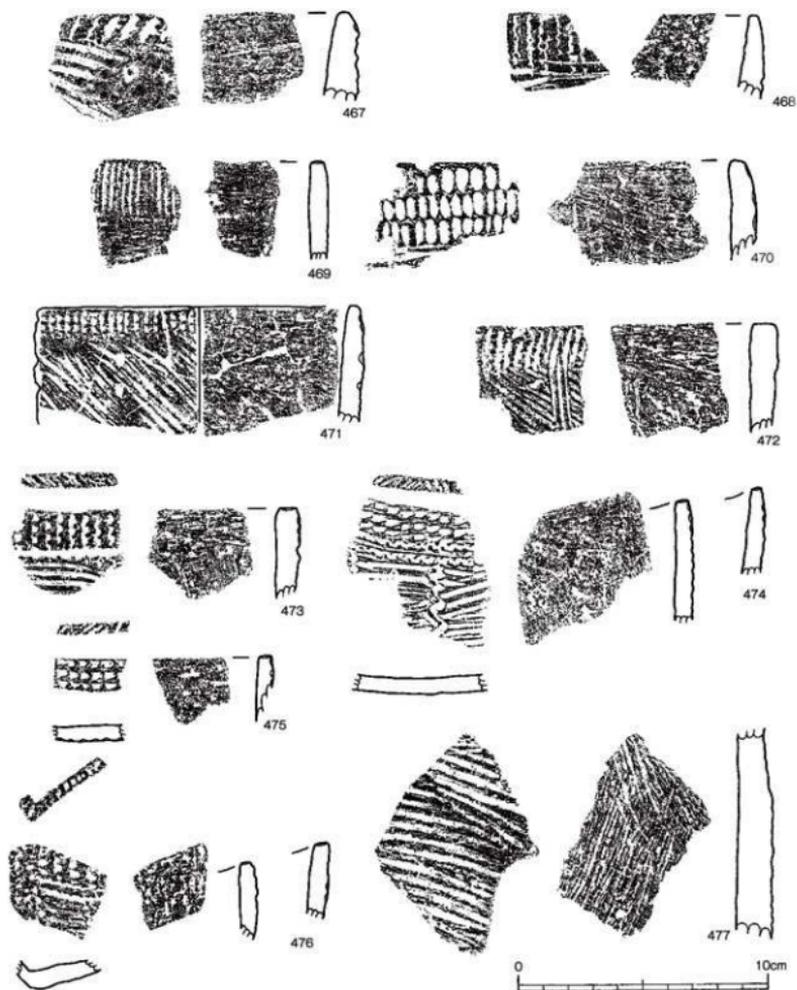
520～529は胴部に貝殻押圧文ないしは押引文を施すものである。520は、口縁部がわずかに外傾する。口唇部にキザミ目が施され、口縁部には連点状の貝殻刺突文がめぐりその下位に縦位に連点状の貝殻刺突文が施されている。530は、口縁部が外反し、斜位の貝殻刺突文が施されている。

531～579は器面に押型文を施す一群である。山形文を中心に、楕円文や条線文などが出土している。531～558は山形押型文である。胎土や色調などから同一個体の可能性が高い。口縁部は外反して、胴部でわずかに膨らむ器形を呈する。口唇部は平坦に仕上げられ、押型文が施文される。口縁部から胴部に至るまで縦位の押型文を主体とするが、場所によっては斜位になる。口縁部内面にも押型文が施され、これは横位に施文される。559は同一器面上に山形文と楕円文とが施される。560・561は楕円文が施される。押型の粒は、長軸で5mm程度、短軸で3mm程度である。562～564はやや間延びした山形文である。

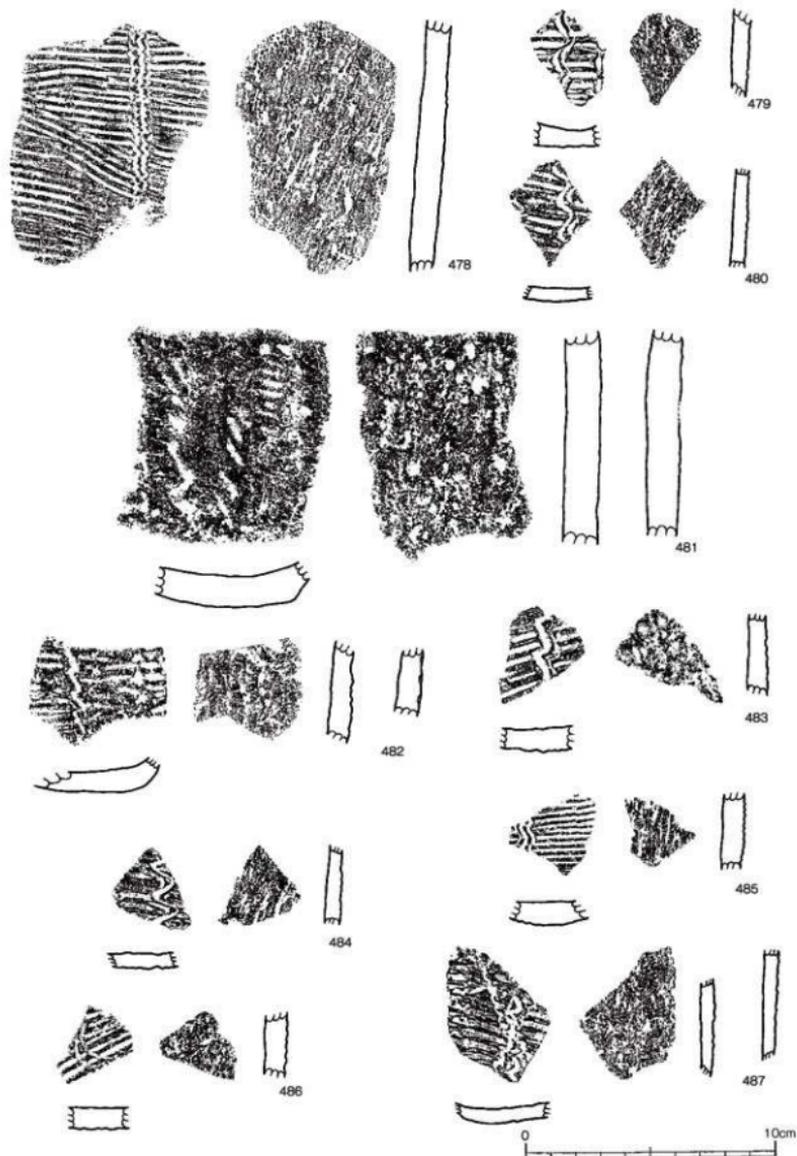
565～580は条線押型文である。口縁部がわずかに外反し、胴部はわずかに膨らんで径の小さな底部へと至る器形を呈する。胎土や色調などからこれらは同一個体の可能性が高い。内面は全体的に丁寧なナデが施されている。

581は口縁部が外反して頸部でしまり胴部でわずかに膨らむ器形を呈する。口唇部はやや丸みを帯びている。内面は丁寧にナデが施され、口縁部内面には縄文が施文されている。

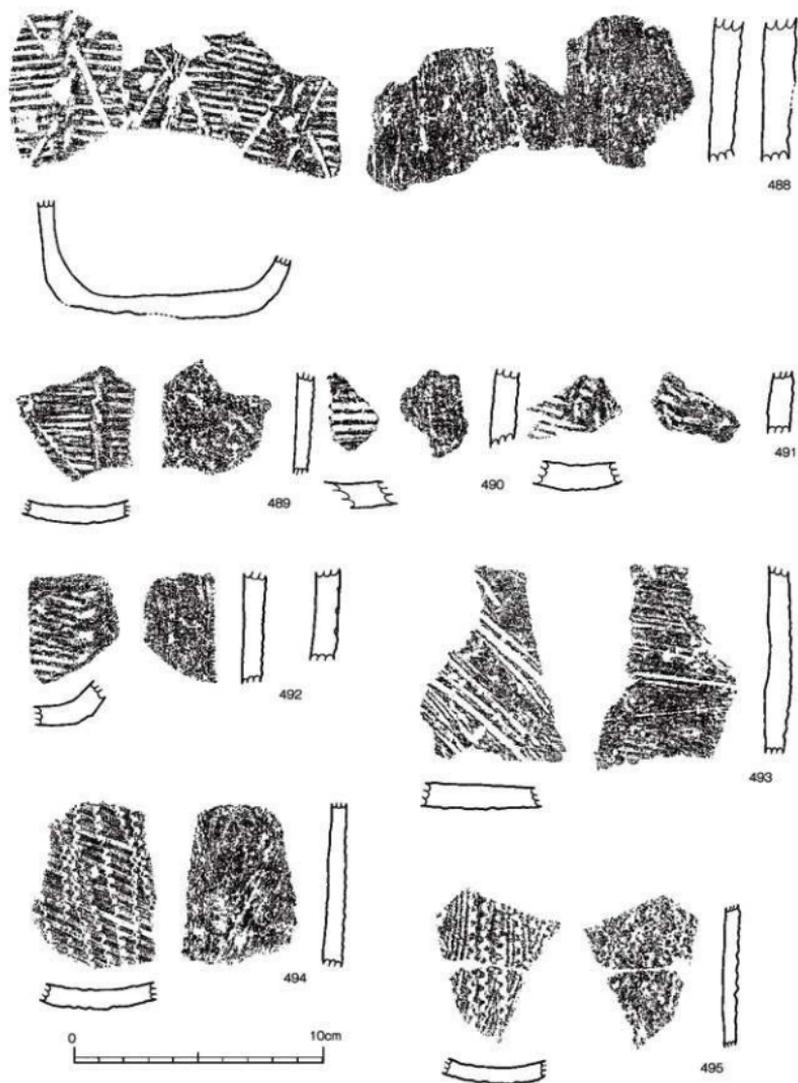
582～600は口縁部がラッパ状に外反する器形を呈する。582～586は胎土や色調から同一個体で



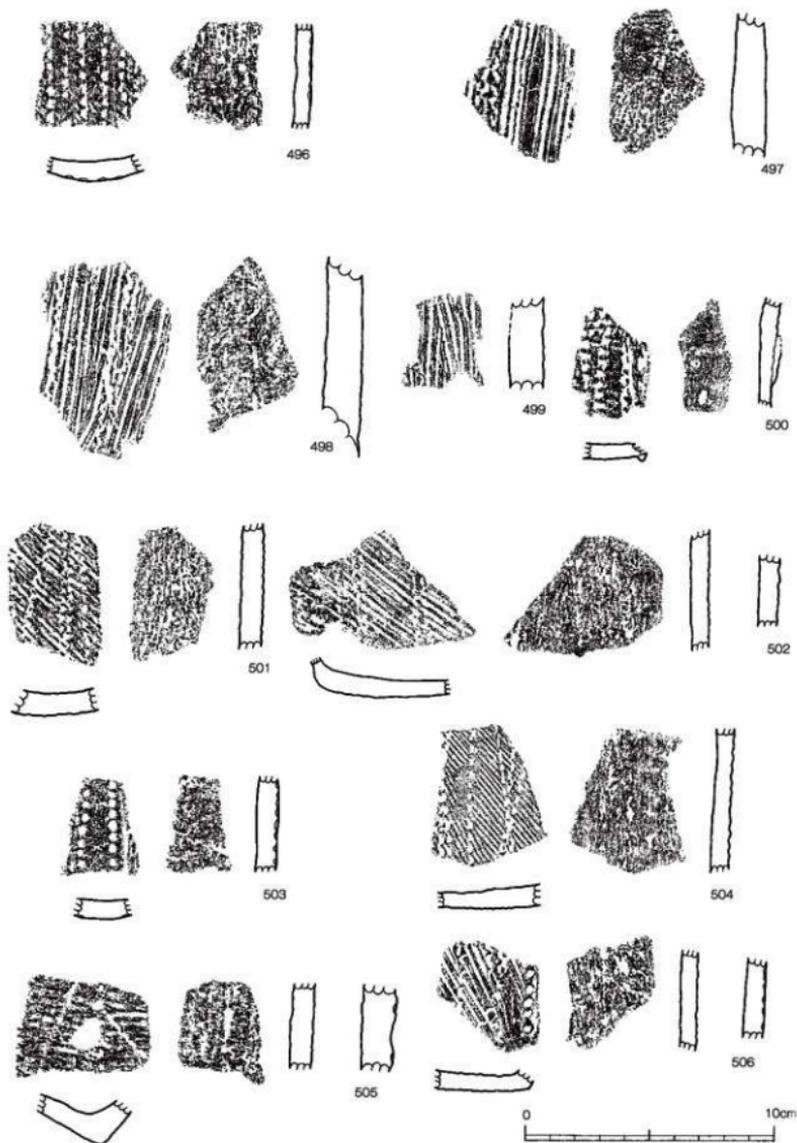
第52図 縄文時代早期出土土器 (1)



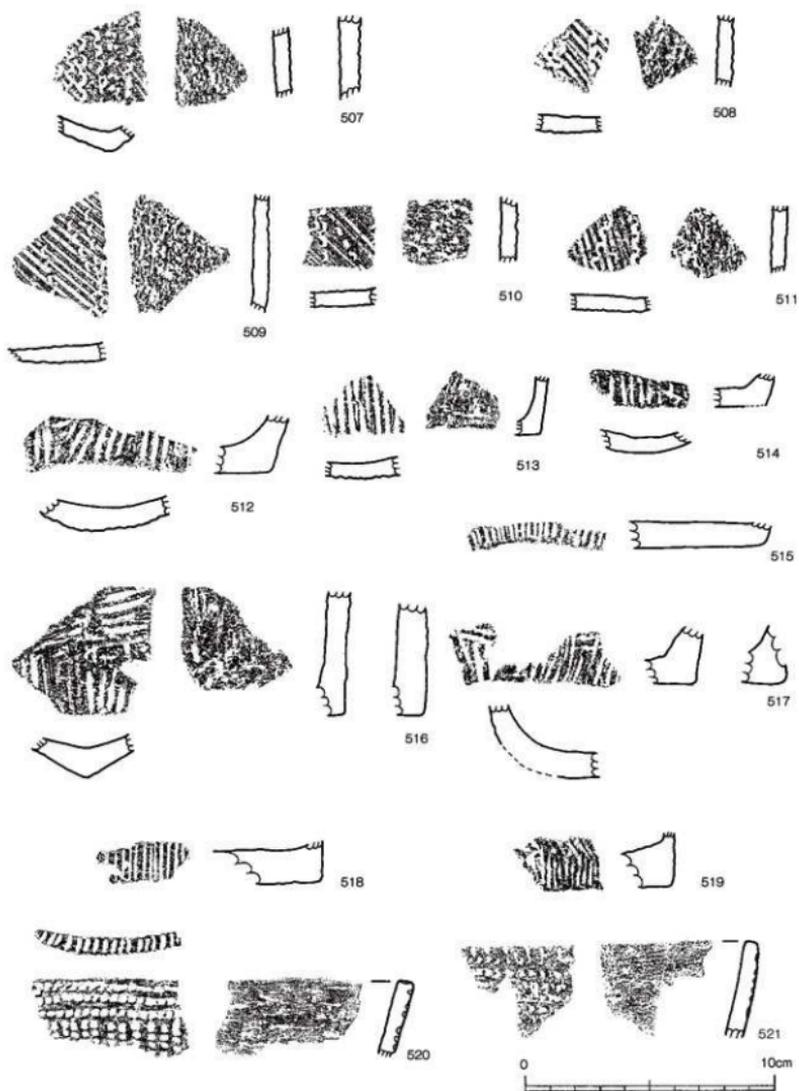
第53図 縄文時代早期出土土器 (2)



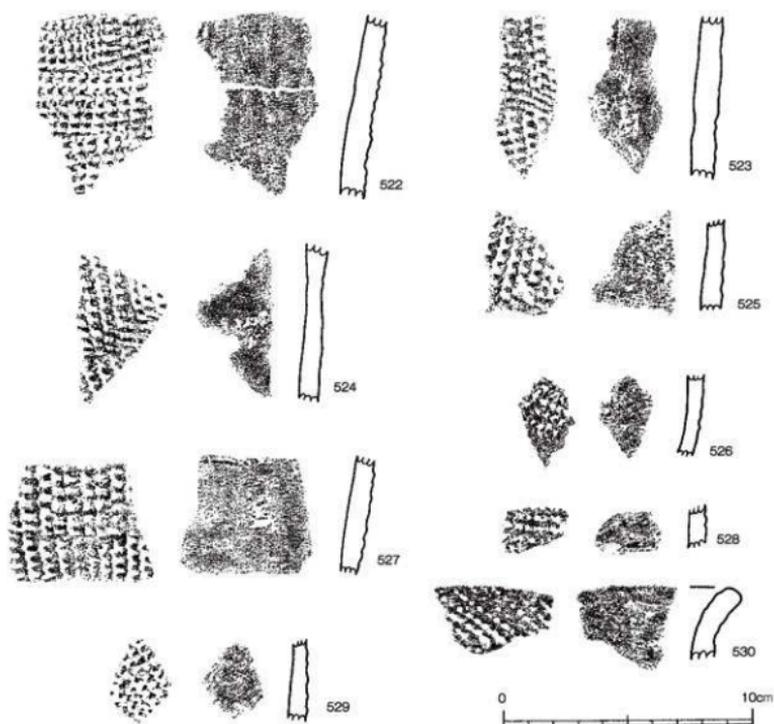
第54図 縄文時代早期出土土器 (3)



第55図 縄文時代早期出土土器 (4)



第56図 縄文時代早期出土土器 (5)



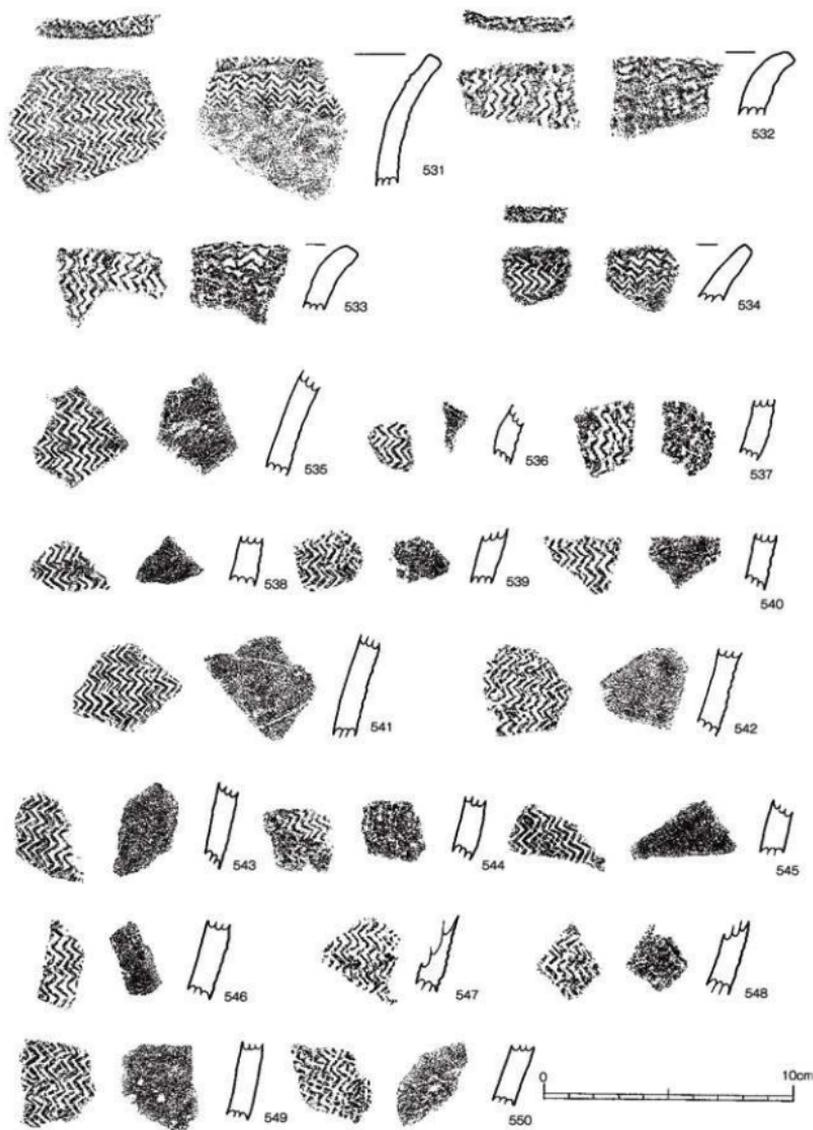
第57図 縄文時代早期出土土器 (6)

あると思われる。口唇部端部にはキザミ目が施される。施文前には器面全体が丁寧になでられている。口縁部上位と胴部との境には4本1組の沈線が横位に施され、その間に4本1組の斜位の沈線が施される。587～590は網目撚糸文を縦位に無文部を左右に有しながら施文されている。591は口縁部がわずかに「く」の字状に屈曲する。592～596は口縁部片である。592は口唇部外端と口縁部下位にキザミ目が施され、その間に撚糸文が施されている。なお、593～596は同一個体と思われる。599～600は沈線間に網目撚糸文が施されている。沈線の外側には連点文が並行する。

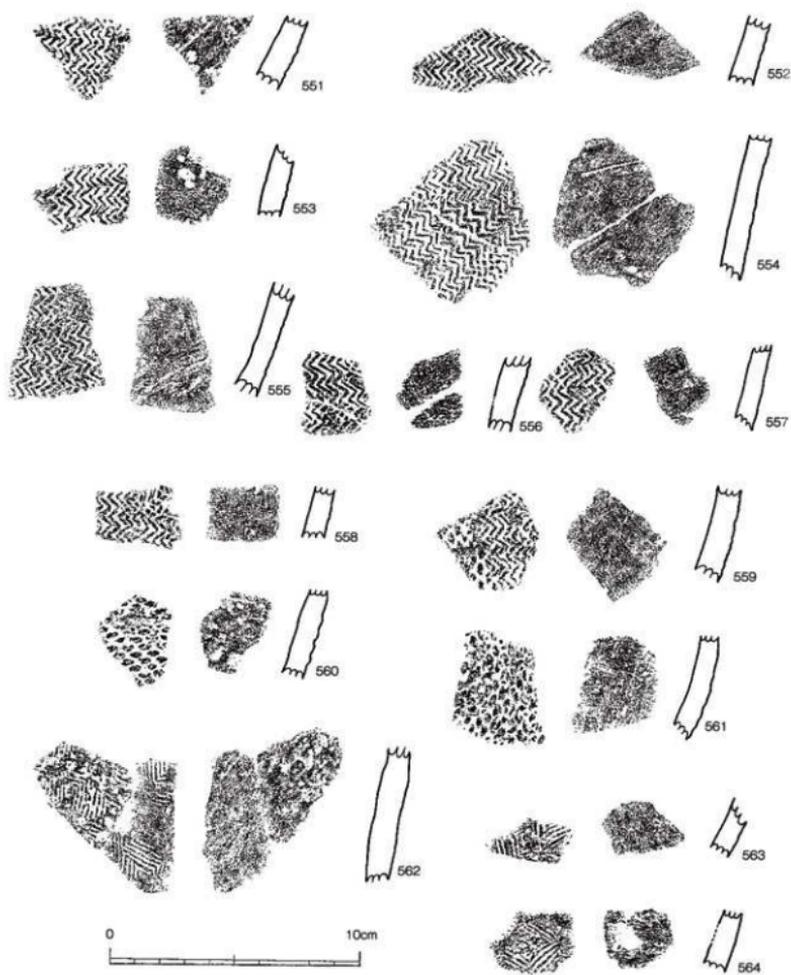
・石器 (第66図)

縄文時代早期の石器の出土は余り多くない。これも、今まで述べてきたこの山城の変遷からの層の残りの悪さによるものであろう。

601は、V層から出土した石鏃で、細身の二等辺三角形に深く丁寧な抉りを施した石鏃である。石材は、安山岩である。602は、側縁部に調整剥離を施したスクレイパーであり、石質は鉄石英である。603はIV層、604はV層から出土した円礫を用いた砂岩の磨石である。



第58図 縄文時代早期出土土器 (7)



第59図 縄文時代早期出土土器 (8)



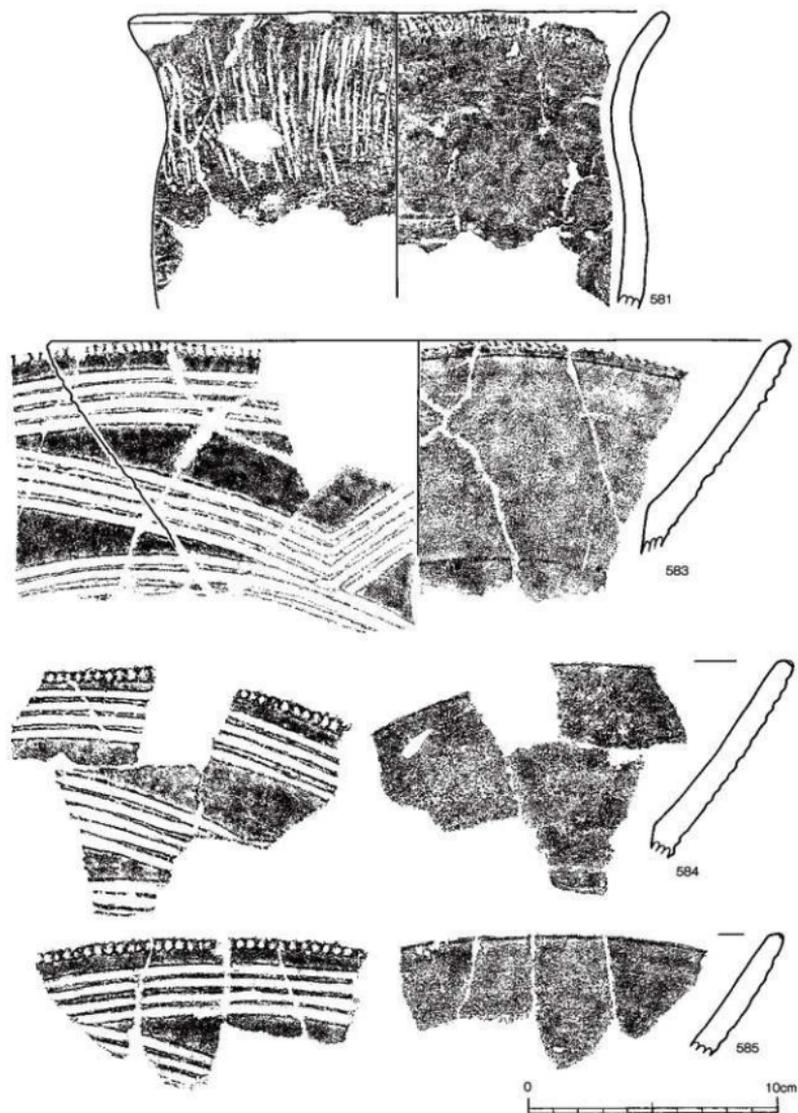
第60図 縄文時代早期出土土器 (9)



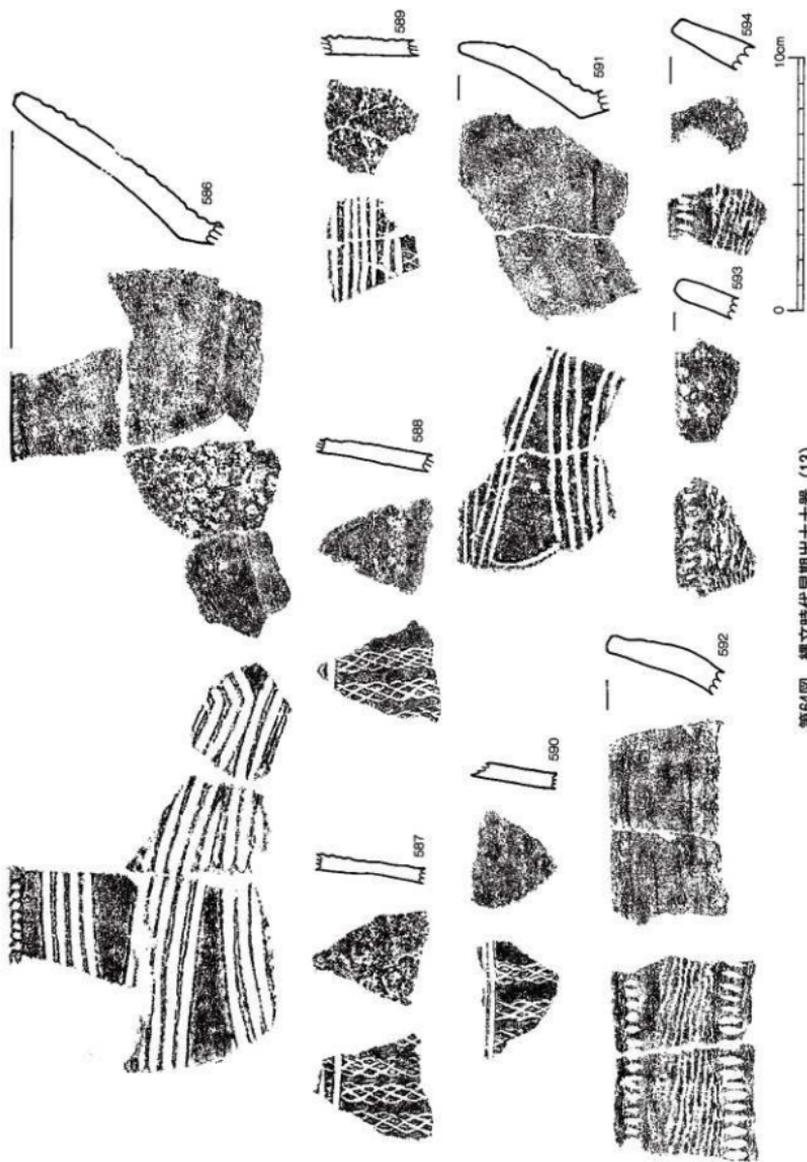
第61図 縄文時代早期出土土器 (10)



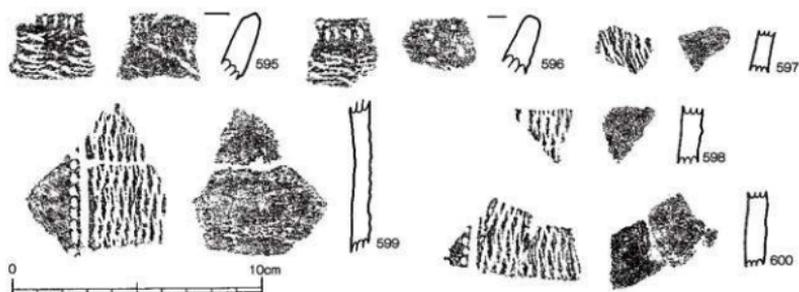
第62図 縄文時代早期出土土器 (11)



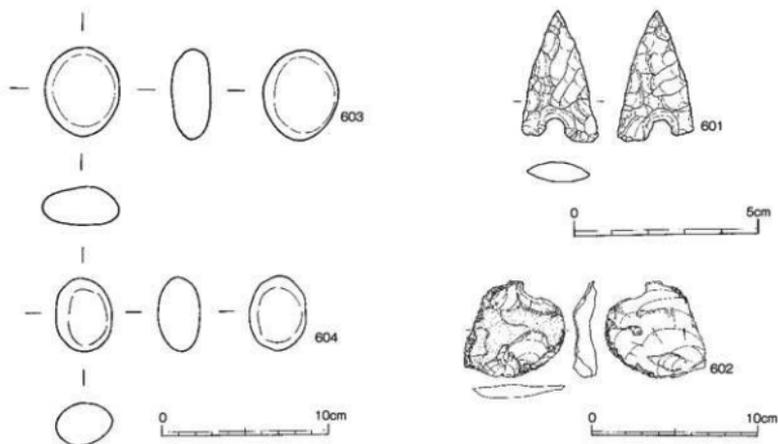
第63図 縄文時代早期出土土器 (12)



第64圖 縄文時代早期出土土器 (13)



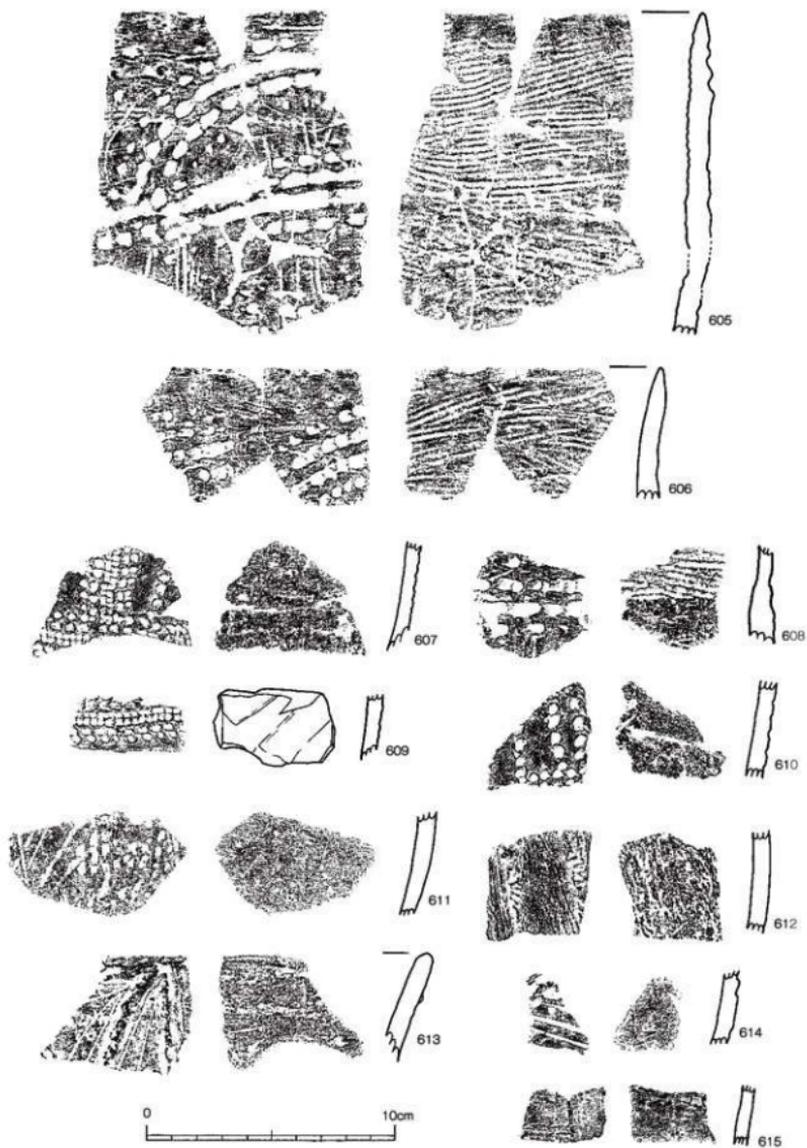
第65図 縄文時代早期出土土器 (14)



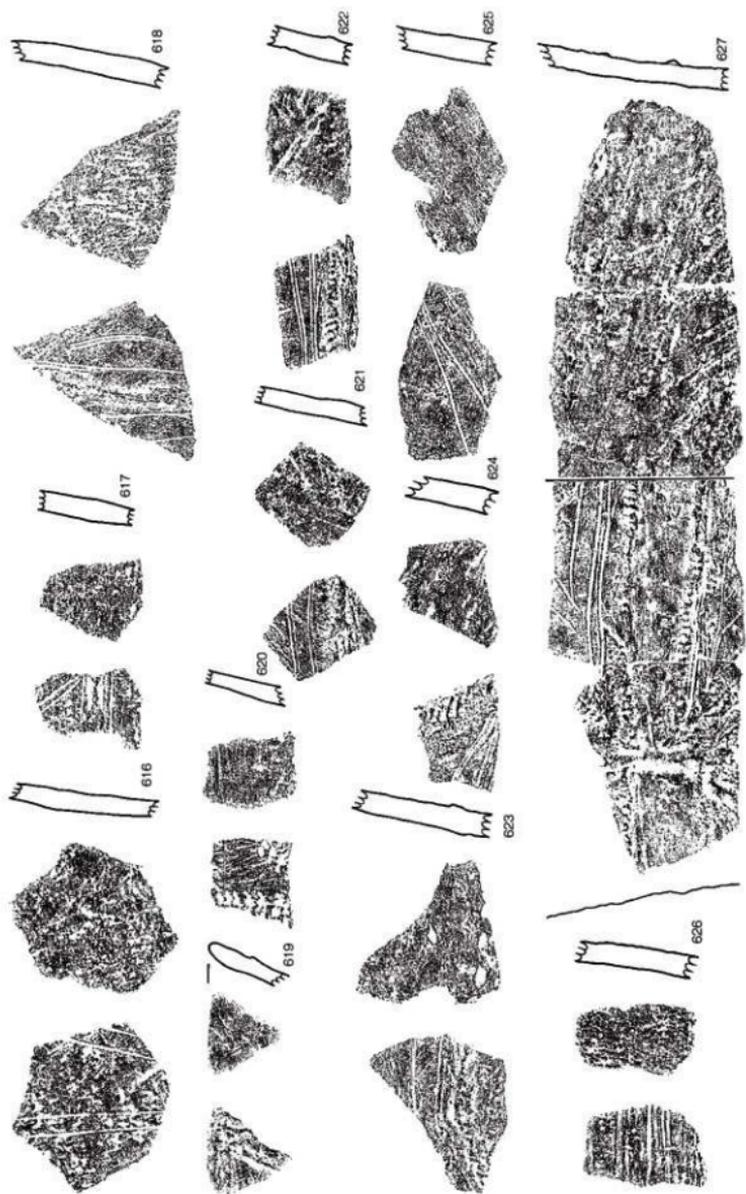
第66図 縄文時代早期出土土器 (15)

3 前・中期 (第67図～第69図)

605～639は、縄文時代前期・中期の遺物である。605は内外面に貝殻条痕を施し、外面はこれをナデ消した後に、押し文に近い連点文を施している。607・609・610はやや薄手の土器である。605は、608と同一個体の可能性が高い。613～615は微隆帯が施され、その間に細い沈線文が施される。614は細沈線文と押し状の連点文が施される。616は細沈線文のみが見られる。618は微隆帯とやや不規則な浅い沈線文が見られる。627は縦位と横位の微隆帯の他に斜位の微隆帯を有する。この微隆帯の貼り付けは弱く、部分的に剥落している。内面には、ケズリ痕が明瞭に残る。631は密な押し文で、629は相交弧文が見られる。632は押し文に見えるが相交弧文である。634・635・640は多量の滑石が混入され二又状工具による刺突文が施され、その間に太めの凹線文が施

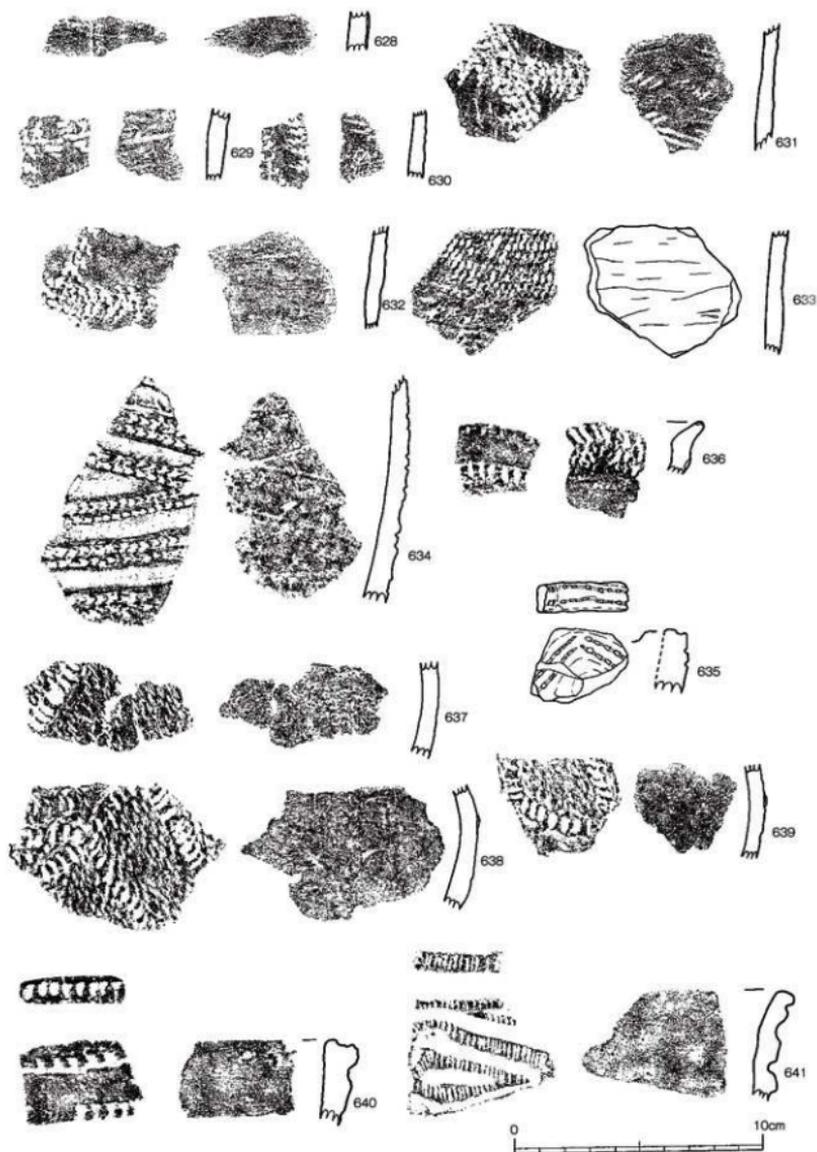


第67図 縄文時代前期~中期出土土器 (1)



第68図 縄文時代前期～中期出土土器 (2)





第69図 縄文時代前期～中期出土土器 (3)

される。また、641は、凹線を施しその凹線と凹線の間の部分に縦位の密な刻みを施すものである。636～639は粗い縄文が施されているものである。

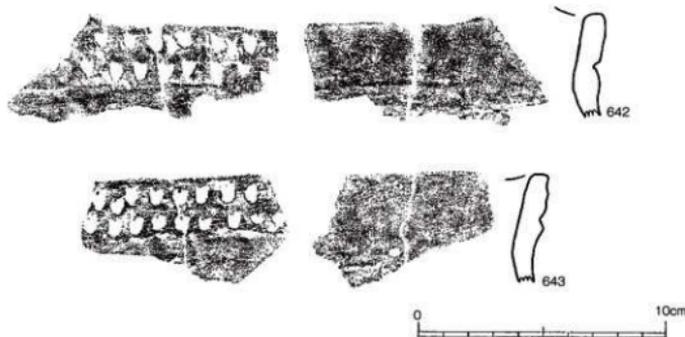
4 後期

・土器（第70図～第99図）

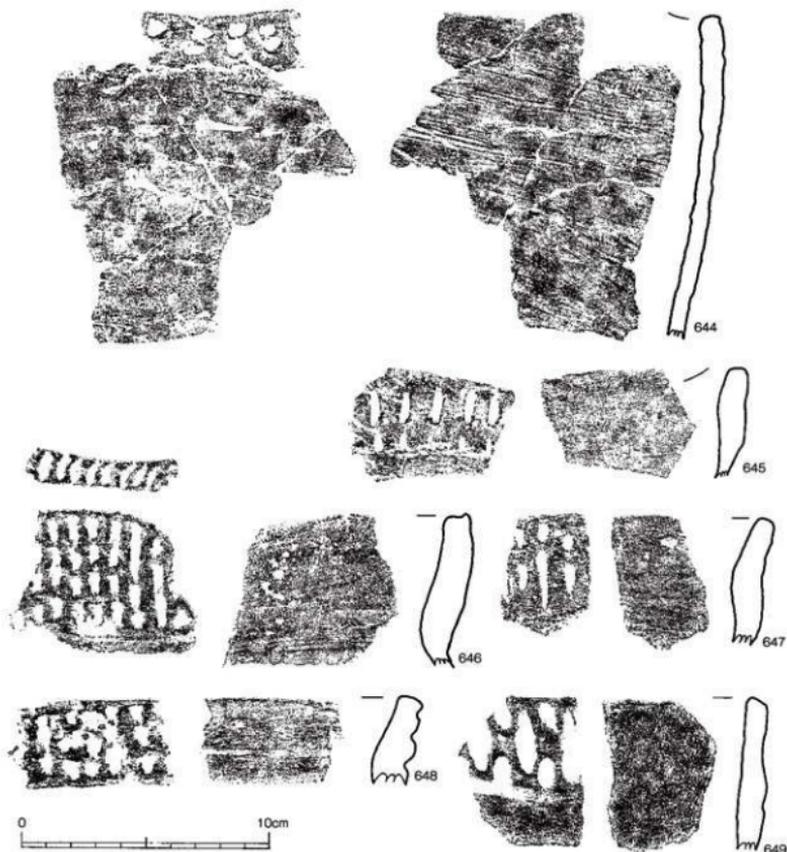
縄文時代後期の土器は、以下の8つに分類した。

- ・642～650の口縁部に刺突文が、主体的に施されている土器。
- ・651～668は口縁部に凹線文もしくは沈線文が、直線的に（希に曲線を）用いて明確に表現されている土器。
- ・669～694の深鉢の口縁部に粘土紐を付け裝飾し、刻目や刺突文沈線を施した土器。
- ・695～735の断面三角形を呈する土器。
- ・736～741の無文土器。
- ・742～759の磨消条痕文を施した土器。
- ・760～777の縄文時代前期～晩期の土器の底部。
- ・778～792の市来式土器の台付皿形土器。

642～650図は、口縁部に工具状の刺突文による文様が施されているものである。口唇部は、647を除き、ほぼ平坦である。642～644は同一個体と思われる。径5mmの棒または円柱状で、先端部や円筒部に刻目を施した工具によって刺突文が施してある。刺突の方法は、口縁部を斜め下から上に刺し、粘土を斜め上手前に掻きだしている。口縁部～胴部に向かって1列ずつ2行に刺突文を施している。調整については、内面は横位に貝殻条痕が施してある。645は、口縁部に2又状の工具を、上から下に粘土を掻き取って刻目文を施している。646は、口唇部に半截竹管文状の文様が連続して施文してある。口縁部には、3mm幅の角状ないし板状の工具を押し当て、斜め上手前に掻き取っている。口縁部～胴部に向かって一列ずつ刺突文を施している。3～4行の刺突文になっている。口縁部中位から外反気味に肥厚し、口唇部では直口している。647は、口縁部中位からやや内弯し、口唇部は外反している。円筒状の工具の円筒部を押し当てて手前に引き抜いてい



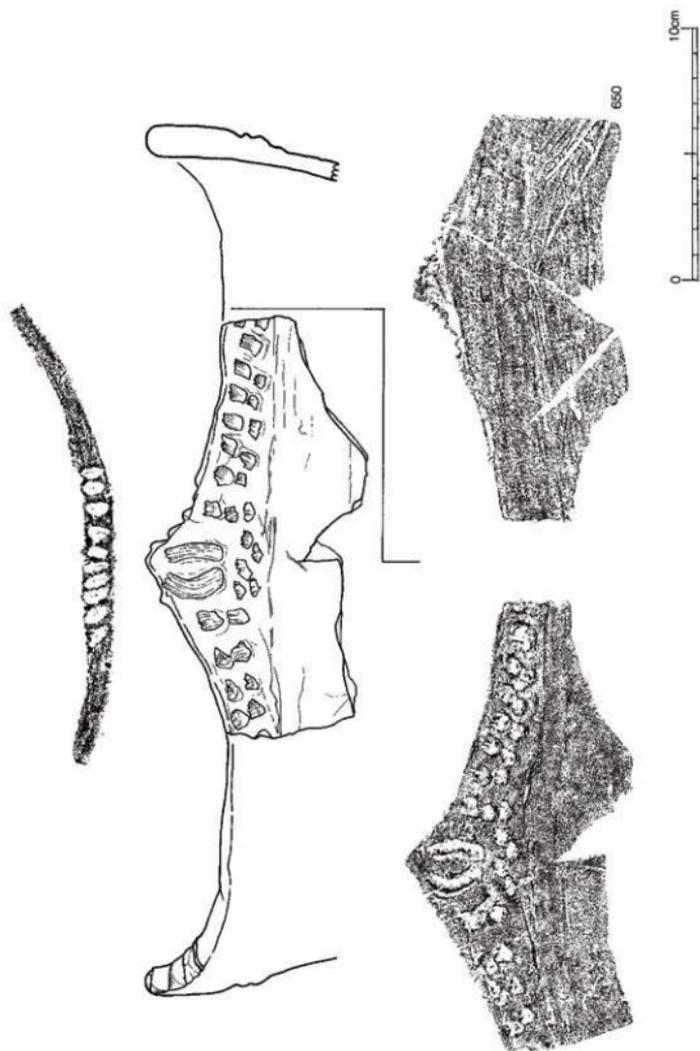
第70図 縄文時代後期出土土器 (1)



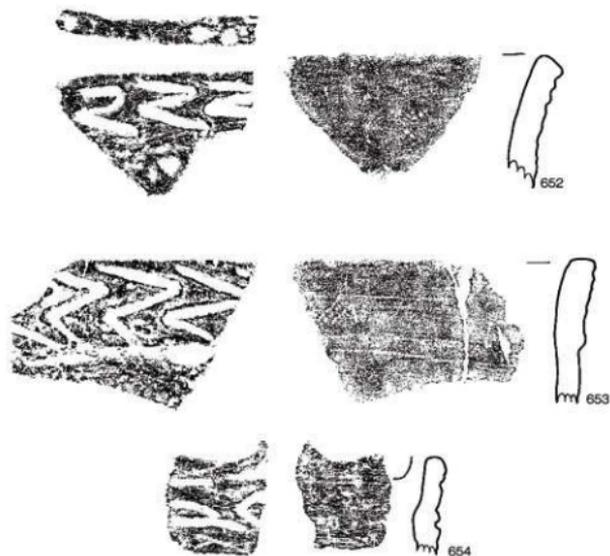
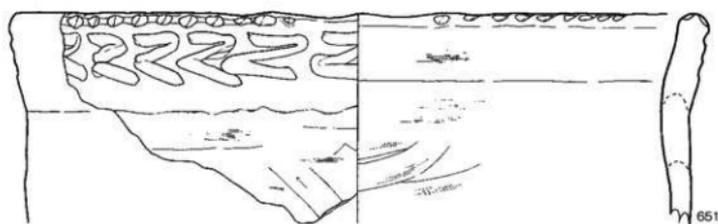
第71図 縄文時代後期出土土器 (2)

る。649も同様に文様を1本、2本と交互に連続して施している。648は、板状か角状の工具を斜め上から下にあてて手前に引き抜いている。650は、波状口縁をなし、その頂上部の口唇部には、刻目を施している。口縁部下部から上部に向かって板状か角状の工具で刺突をしている。波状部から右側は、斜め上から刺突文を施し、左側は、左斜め下から上に向かって刺突し、左斜め手前に掻き出している。波状口縁の頂上部に施文されている()状の文様は、上から下へ工具によって押し引かれている。

651~668は、口縁部に直線的な凹線文あるいは、沈線文の特徴を強く持つ土器である。南福寺系の土器と比定できる。651~653は、口縁部にZ字の連続する凹線文がある土器である。651・652は、口唇部に内側と外側に指先状の工具ないし、指先で互い違いに施されている部分がある。653の口唇部は平坦で直口している。654はZ字が簡略化され、「2」字になっている。659~661は、V・A・左斜め方向・右斜め方向への斜線を基本とする直線である。662~663は、曲線(隅丸方形

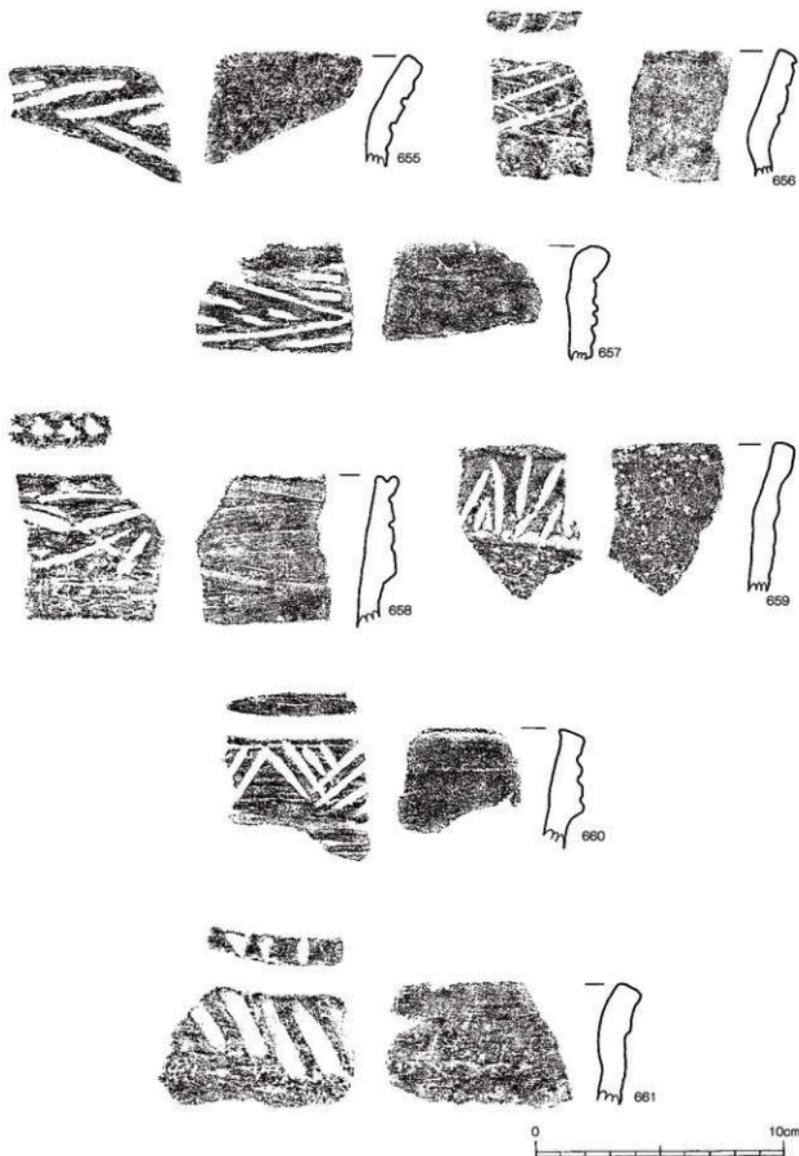


第72図 縄文時代後期出土土器 (3)

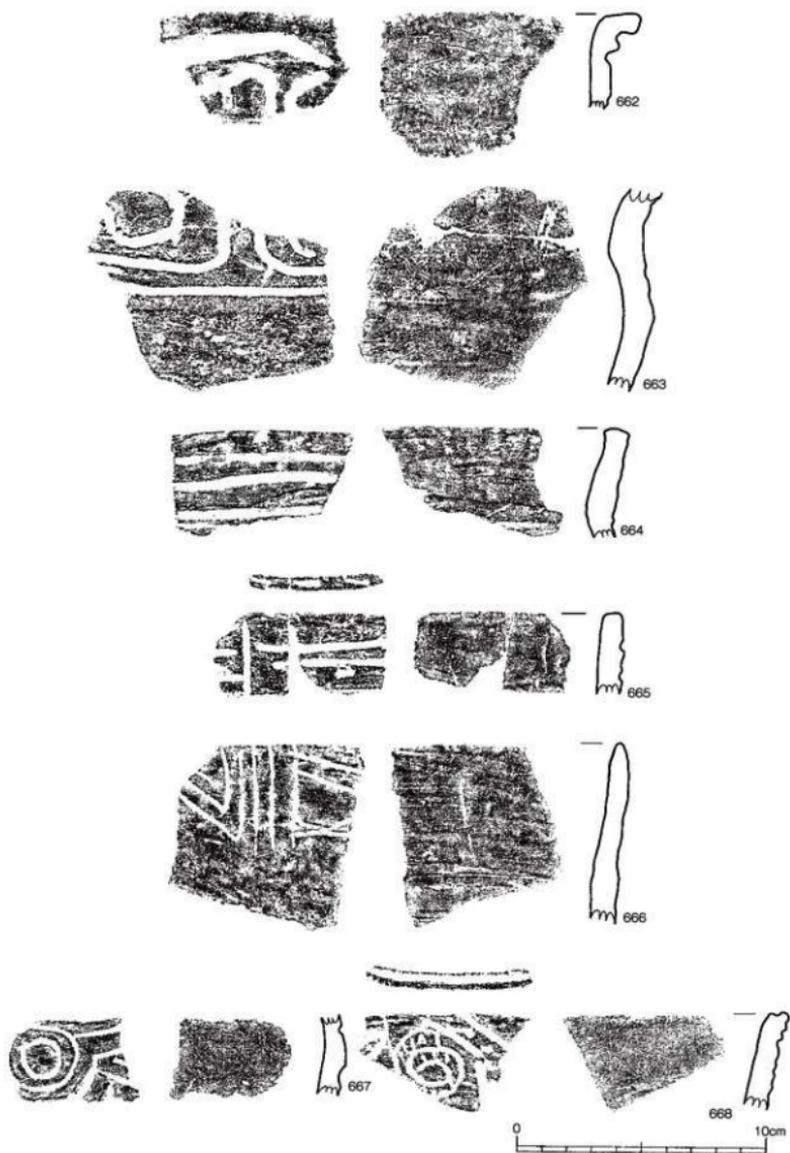


第73図 縄文時代後期出土土器 (4)

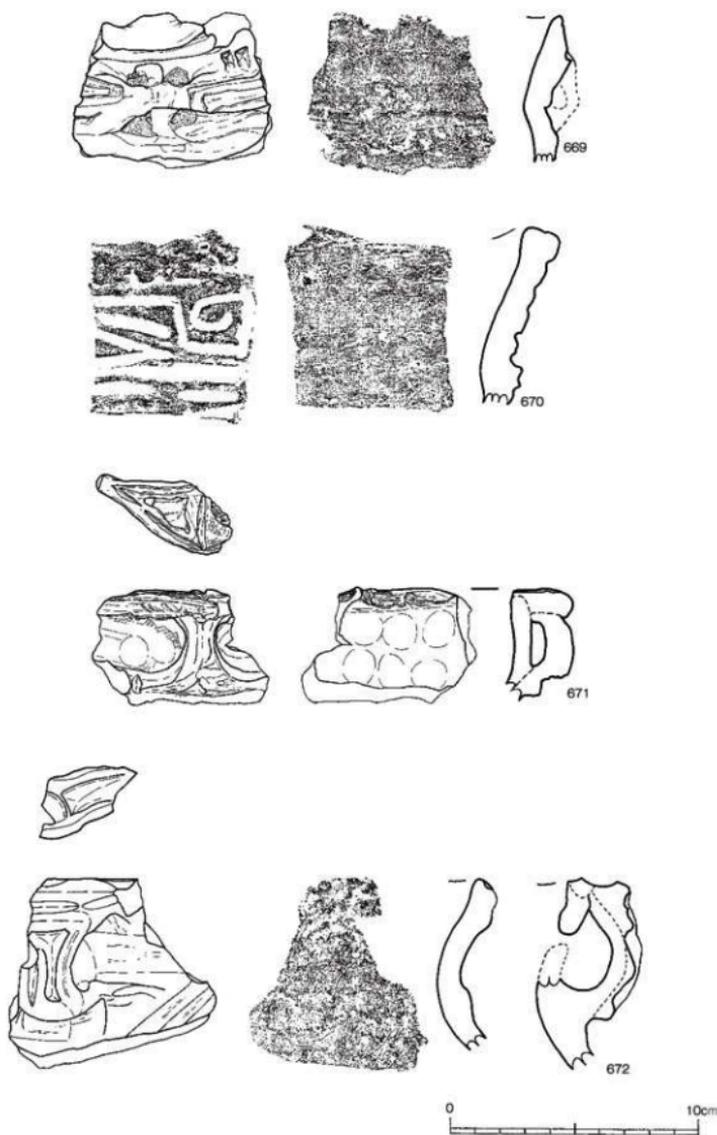
や円形等)に特徴を持つ土器である。662は、深い沈線文を呈している。664~666は、直線を不規則に組み合わせた沈線文が施されている。654~658は口縁部に施文された文様が、Z字から<字もしくは、>字の直線的な文様に変化している。651~653は凹線文、654~668は沈線文である。口唇部については、656・661は刻目、658は先が鋭い物で突き刺したと思われる刺突文が施されている。665は、口唇部に添って点線状に刺突文が、668は口唇部に添って1条の沈線文が施されている。667と668の口縁部の施文、丸と直線を組み合わせた沈線文である。667は鐘崎式土器の可能性もある。



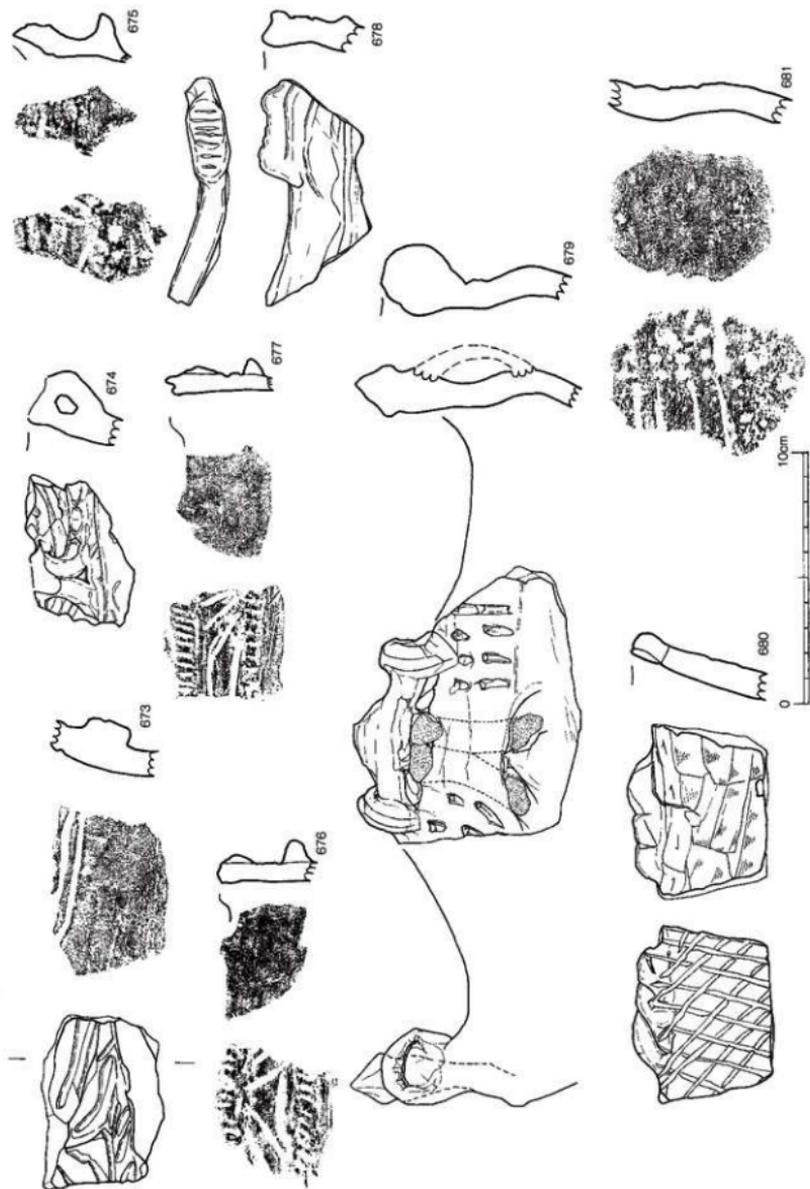
第74図 縄文時代後期出土土器 (5)



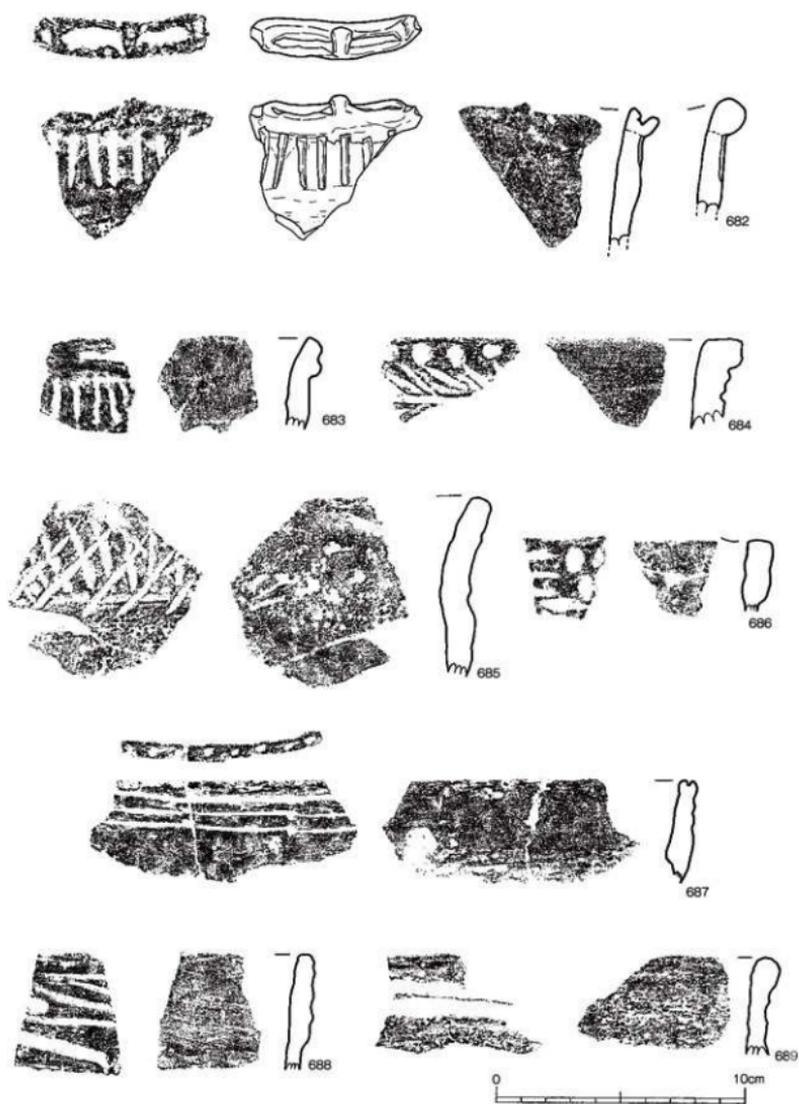
第75図 縄文時代後期出土土器 (6)



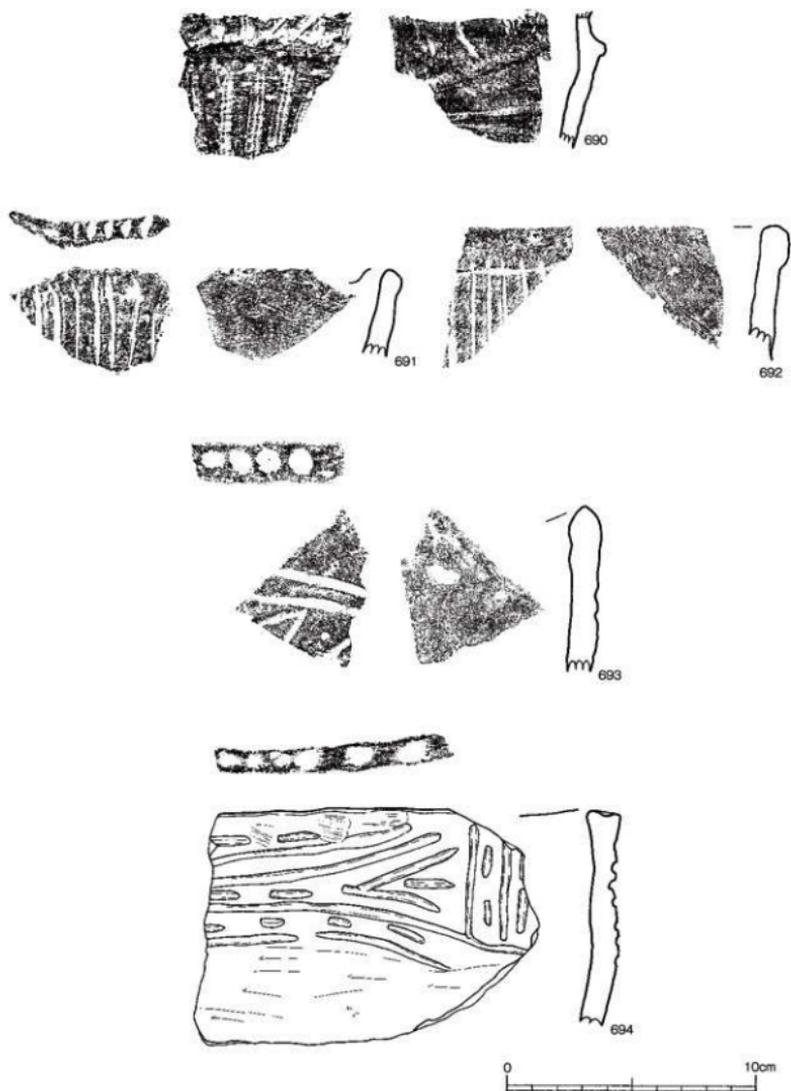
第76図 縄文時代後期出土土器 (7)



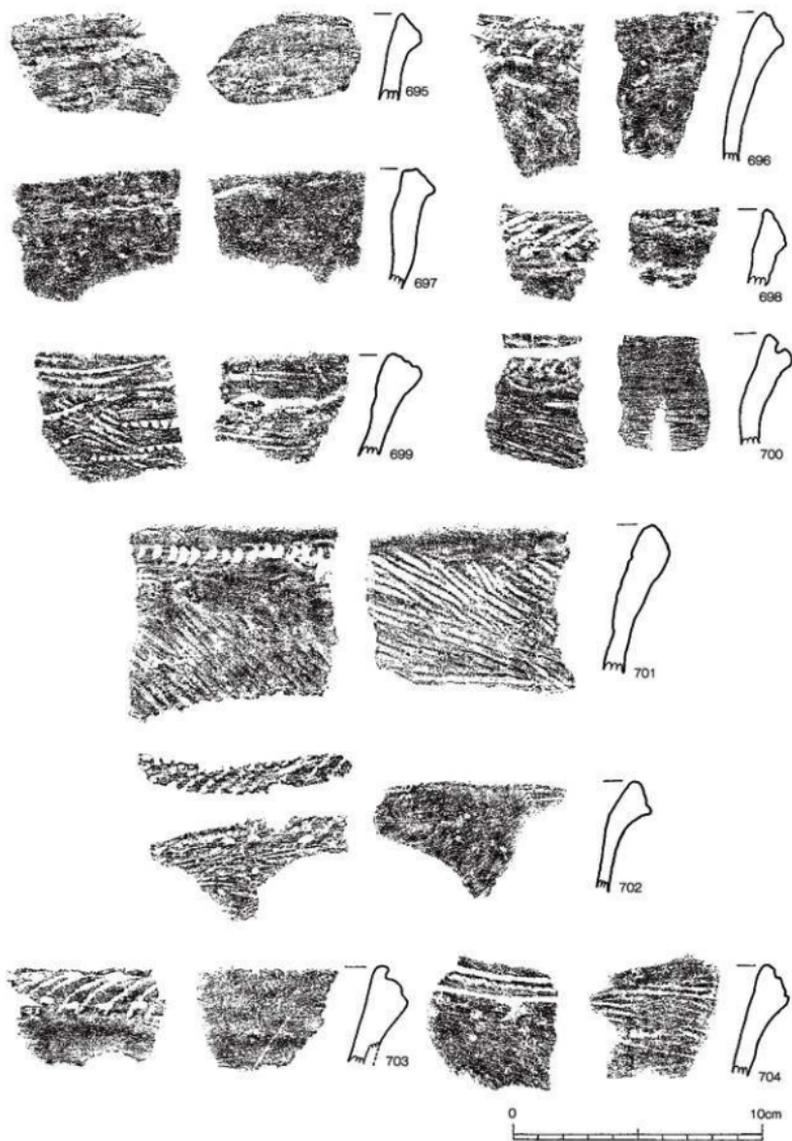
第77図 縄文時代後期出土土器 (8)



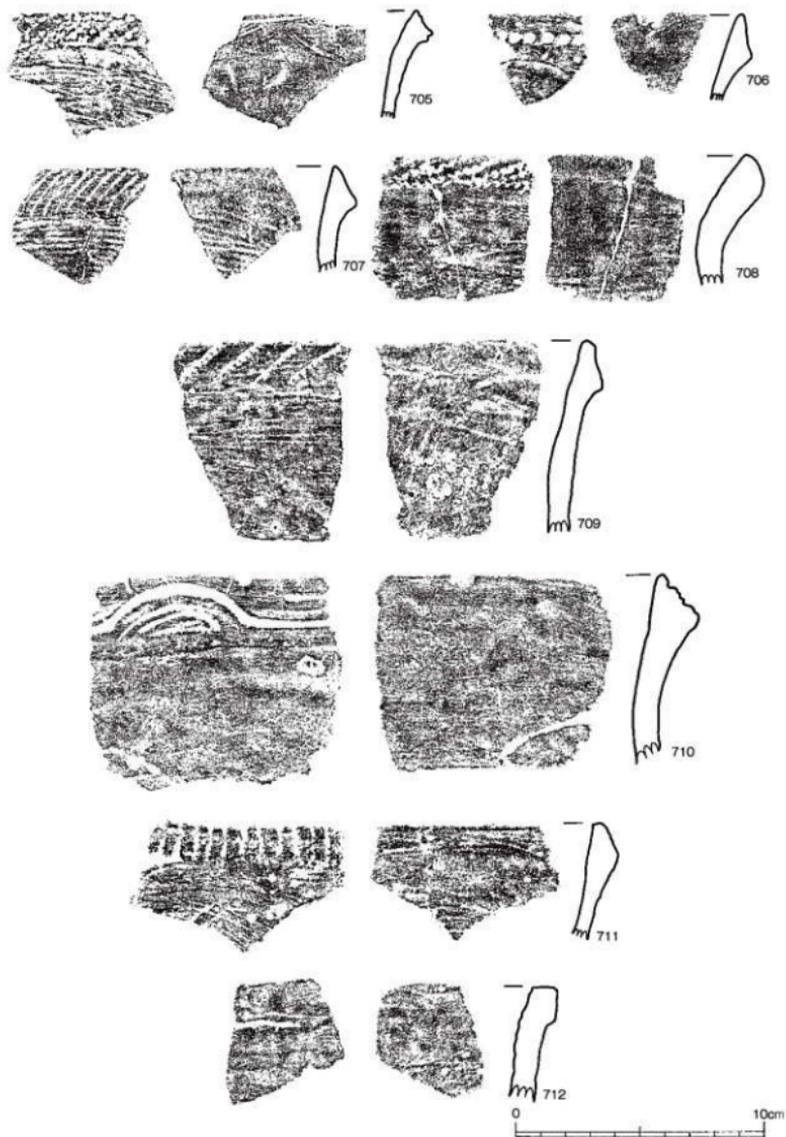
第78図 縄文時代後期出土土器 (9)



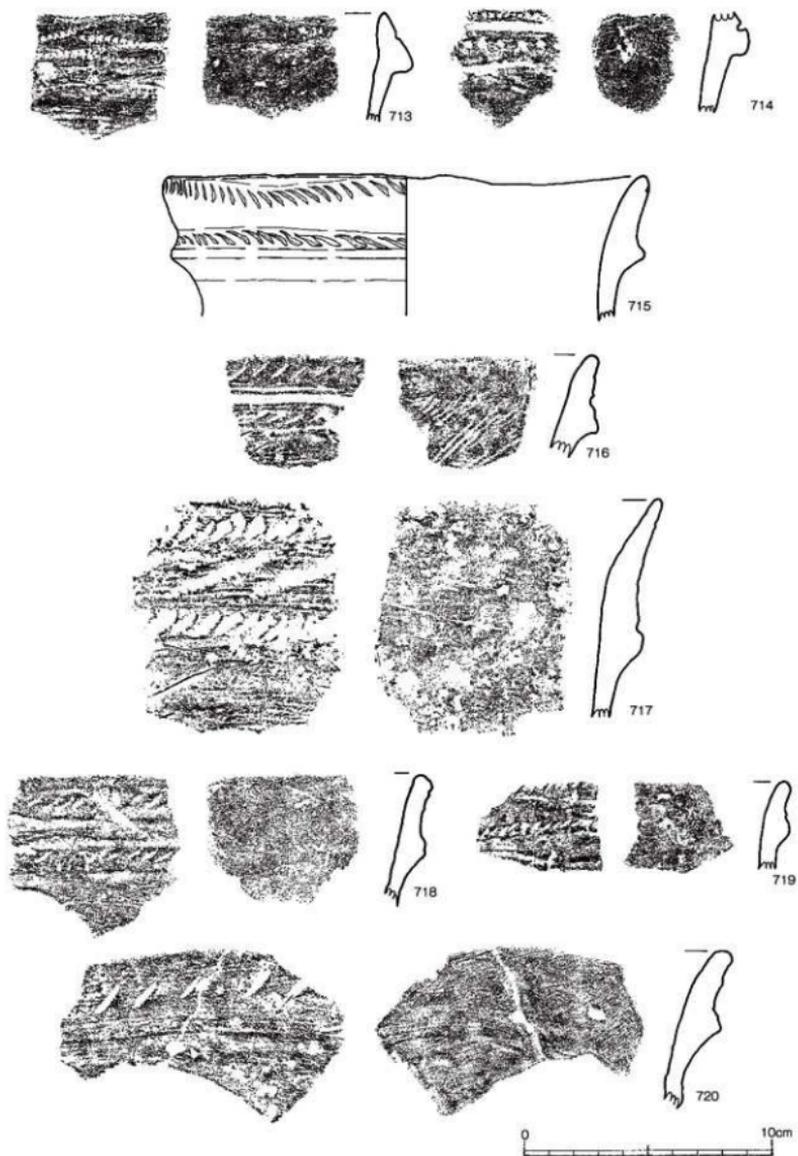
第79図 縄文時代後期出土土器 (10)



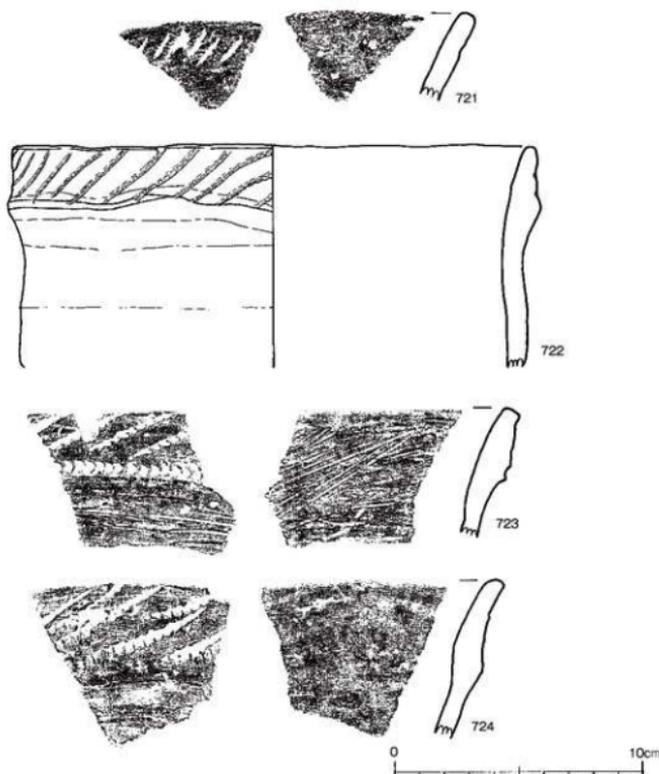
第80図 縄文時代後期出土土器 (11)



第81図 縄文時代後期出土土器 (12)

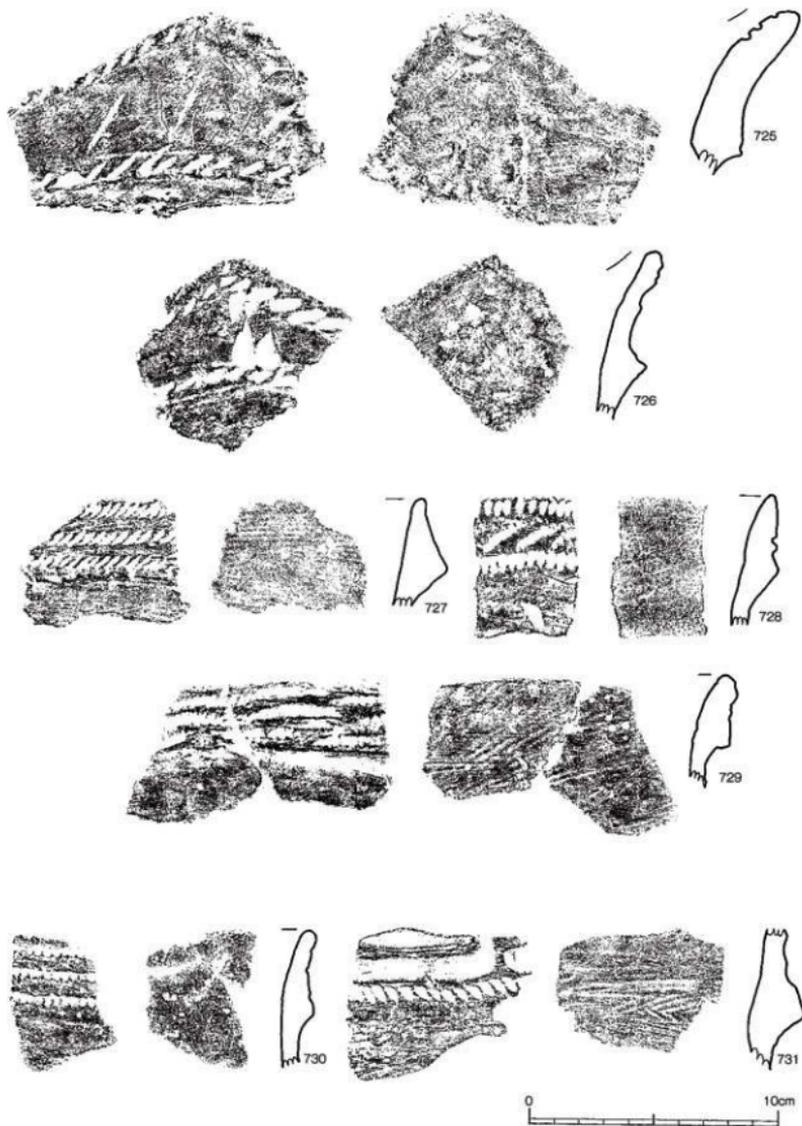


第82図 縄文時代後期出土土器 (13)

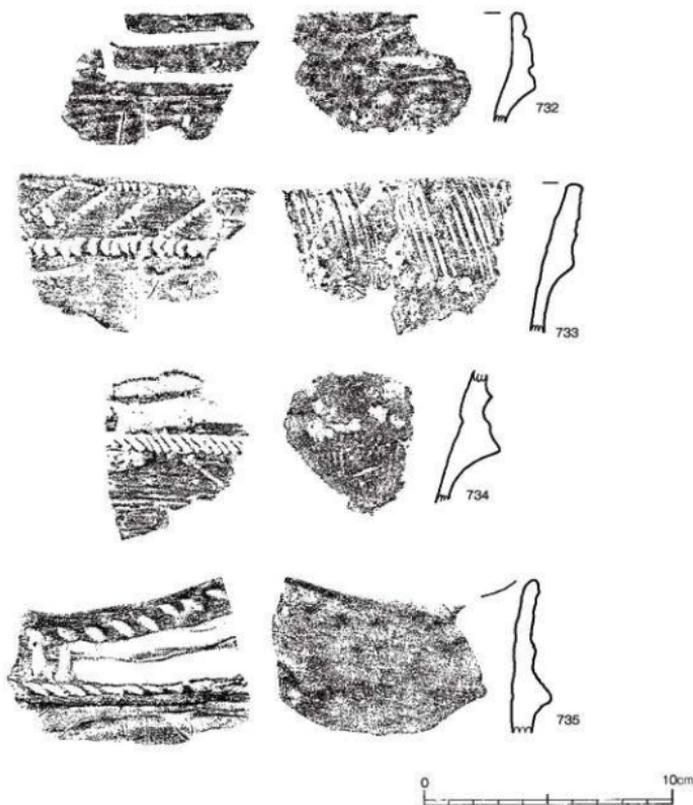


第83図 縄文時代後期出土土器 (14)

669～694は、651～668の表現に新たに口縁部に粘土紐を加工し、沈線文・刺突文を、繊細でかつ巧みに装飾を施した南福寺系の土器である。胎土は、672・682・688・689には滑石が含まれている。671は、赤色の塗料（丹と思われる）が確認された。また、内面は指頭圧痕が確認される。器形では、669・671・672・674は橋状把手が施されている。670・681・686・687・688・689・693・694は複雑な模様を凹線文や沈線文で施されている。673・675・676～680・682～684・690～692は、口縁部に粘土を貼り付け、成形したり、沈線文・凹線文を組み合わせたものである。676・677は、同一個体であると考えられる。口唇部については678・691は刻目、682・687・693は刺突文が施されている。679は波状口縁の部分の装飾が施されている。口縁部は粘土紐を組合わせており文様帯には橋状把手の痕跡が上下に2か所あり、その左右には2列に、角状ないし板状の工具を押し当て、斜め手前に掻き取っている。695～735は、口縁部の文様帯が断面三角形を呈している土器である。市来式土器の深鉢に比定するものである。695～724の口縁部は、水平を呈する平口縁、725～735は波状口縁の可能性が高い。695～714は、文様帯が小さく初期のものと考えられる。

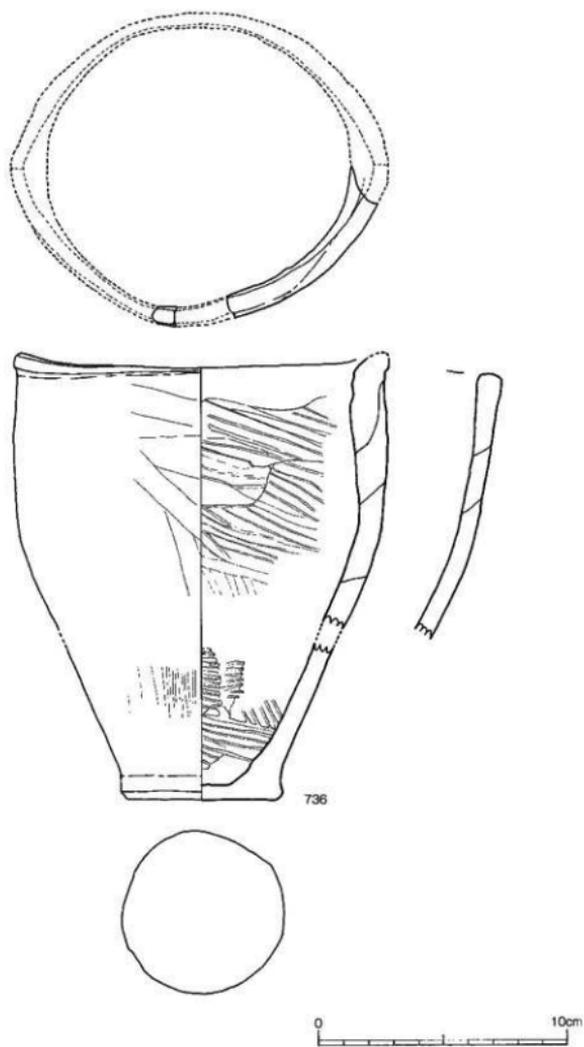


第84図 縄文時代後期出土土器 (15)

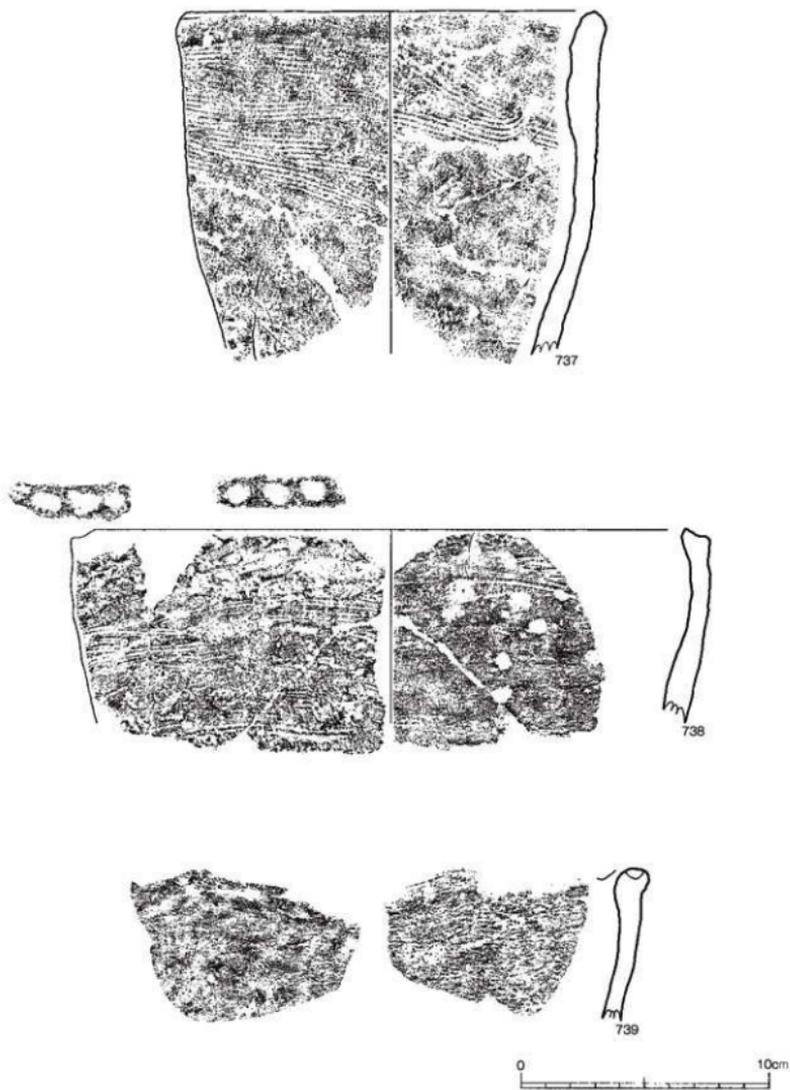


第85図 縄文時代後期出土土器 (16)

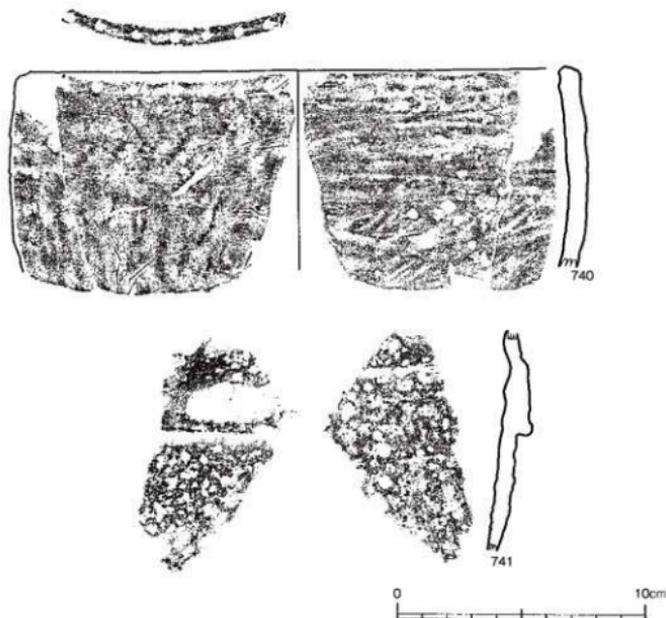
695～710は基本的に口縁部が外反し、711～714は内弯するものである。695・697は無文で、一番初期のものと考えられる。696・698・702・703・706・708・709は文様帯のみに貝殻刺突文が711は縦方向に、713は横方向に3行、左斜め方向への斜線が施されている。699は文様帯や胴部に貝殻刺突文が施され、700は口唇部に添って文様帯に沈線が1条、外面側に斜位の刻目が上下に施されている。701は、文様帯に半裁竹筒文が連続に施されている。内外面共に貝殻条痕文の調整がある。704は、文様帯に2条の沈線文の間に貝殻刺突文が、706は刺突文が1列に、710は沈線文と貝殻条痕文を交互に2条ずつ、714は貝殻条痕文・沈線文と刺突文が施されている。712は、口唇部が平坦で断面四角形を呈している。715～735は、695～714に比べ、文様帯が広く、文様帯の下部が肥厚している、新しい時期の土器である。715～721、723～731、733～735は外反し、732は内



第86図 縄文時代後期出土土器 (17)



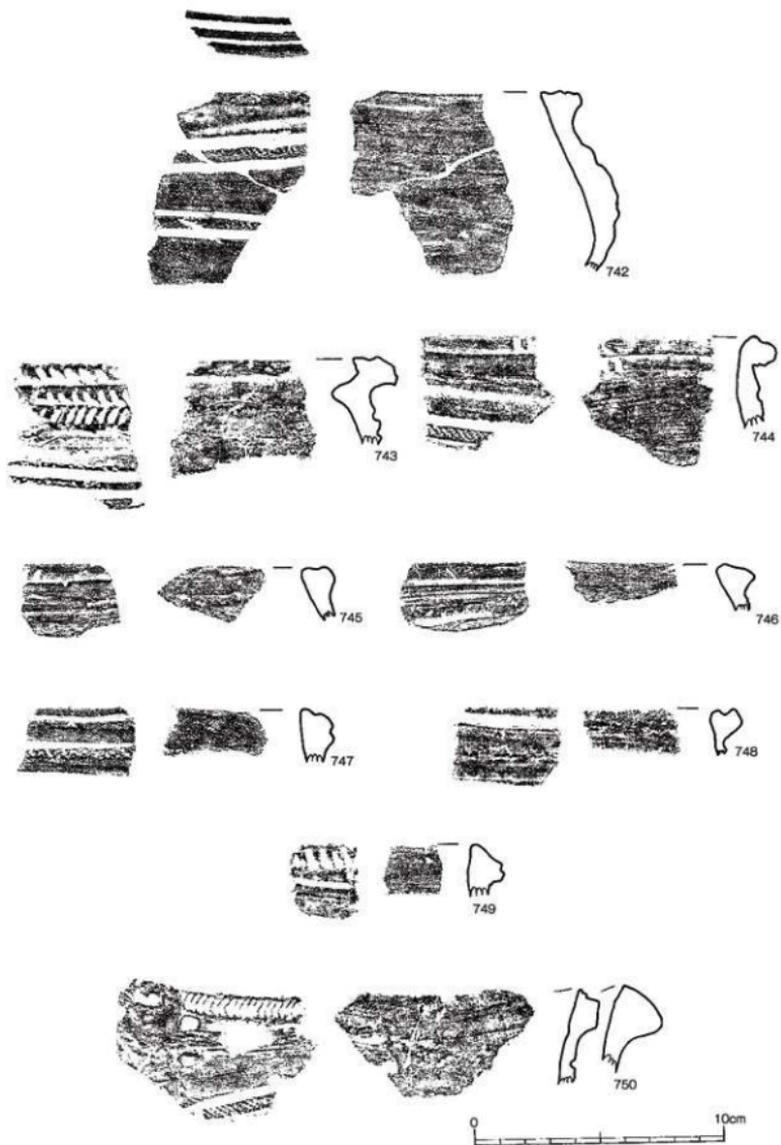
第87図 縄文時代後期出土土器 (18)



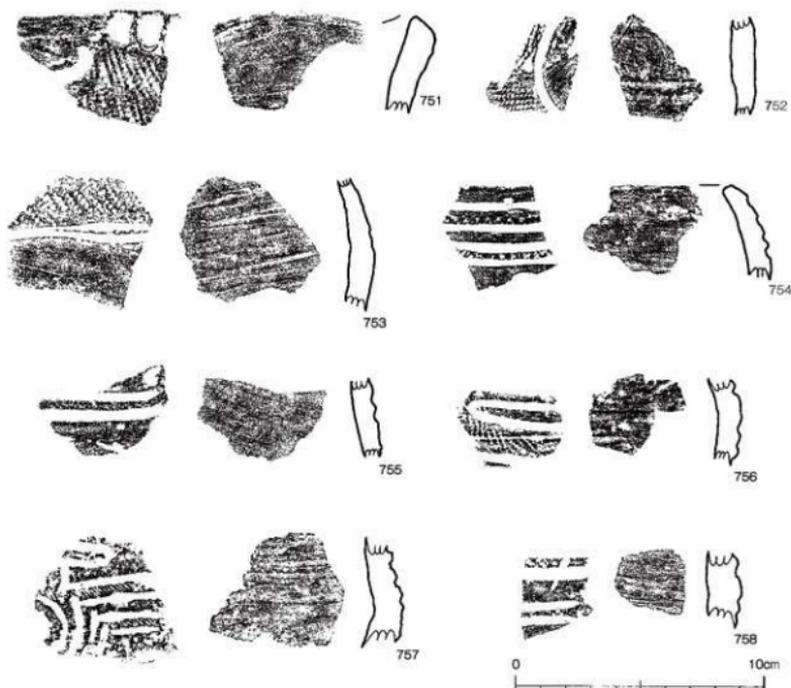
第88図 縄文時代後期出土土器 (19)

湾している。722は口縁部は若干外反気味ではあるが、直立している。713～722は斜位に刻目が施されている。713は右斜め方向に、それ以外は左方向に刻目が施されている。文様帯に722は1行、713～720は文様帯の上下の刻目間に、無文もしくは凹線文・沈線文もしくは貝殻条痕文が施されている。715・719は無文、718は沈線文、716は凹線文、717は貝殻刺突文が施されている。722・724は、左下方向へ斜位に貝殻刺突文が1列、723はそれに加え、下に横斜位から円筒状の工具による刺突文が施されている。725と726は山頂部である。文様帯には上下に、左下方向へ斜位に刻目を施し、その間には、723は左下方向へ斜位に、長さ2cm～3cmの刻目・凹線文・刻目が施されている。725は、内面の山頂部、横位に刻目が施されている。727は3条の刻目、728は上下に縦方向の刻目が、間には左下方向へ斜位に貝殻条痕文が、729・730は貝殻条痕文が3条、731と734・735は隅丸方形の凹線文と刻目と下に右下方向へ斜位に刻目、732は二重に隅丸方形の沈線文が、731と734の凹線文の下に左下方向へ斜位に刻目文が施されている。733は貝殻刺突文が、口唇部付近と文様帯、文様帯下部には先の丸い工具による刺突文が連続している。内側の調整については、729は斜位に、733は下から上に向かって貝殻条痕文が施されている。

736～741は無文土器である。736は、波状を呈し上面観はレモン形である。外面にケズリ、内面は斜位に、口縁部付近にいくに従って横位に、貝殻条痕文が施してある。737は、内外面共に、口縁部から胴部中央部にかけて横位に貝殻条痕文が施され、また内部から新たに粘土が重ねて貼り



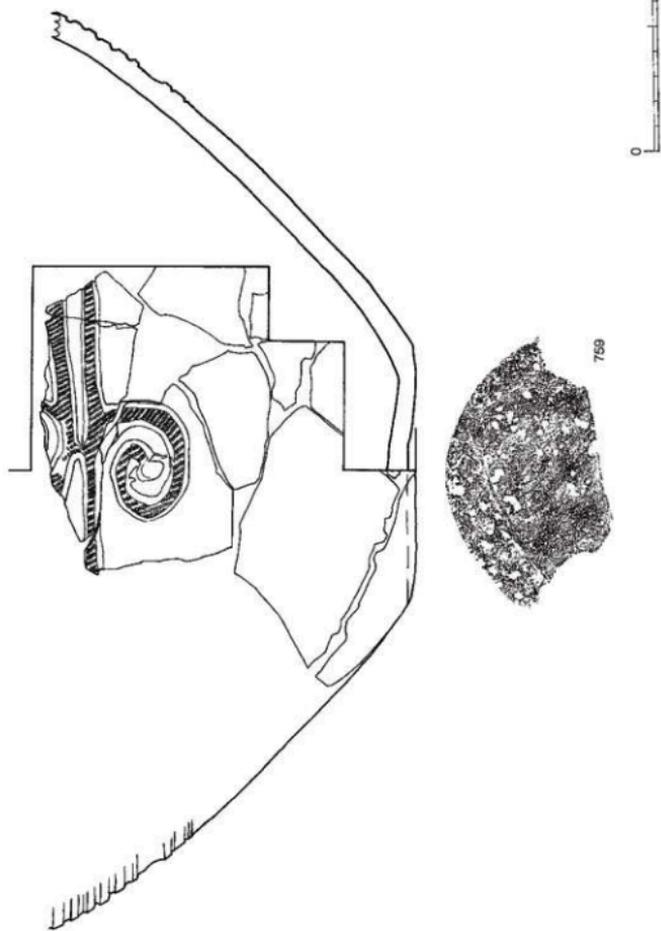
第89図 縄文時代後期出土土器 (20)



第90図 縄文時代後期出土土器 (21)

付けており、その分肥厚している。738は口唇部が平坦で、若干外側に傾斜し連続した凹点文が施してあり、口縁部付近は文様帯らしい凸部が外面に残り、調整の痕が伺える。南福寺式土器の深鉢の可能性がある。738は、口縁部は平坦で、若干内側に内弯し、口縁部は長さ3cmの凹点文が施されており、口唇部が1cm程盛り上がっている。739は、口唇部には約1cmおきに刺突文が施されている。741は、断面が口縁部付近に広い文様帯と思われる凸部が確認されるが、剥離が多い。特徴的には市来式土器の新しい時期を呈し、口縁部中位で2段階に内弯している。剥離や口唇部の欠損で、市来式土器と比定するのは難しい。

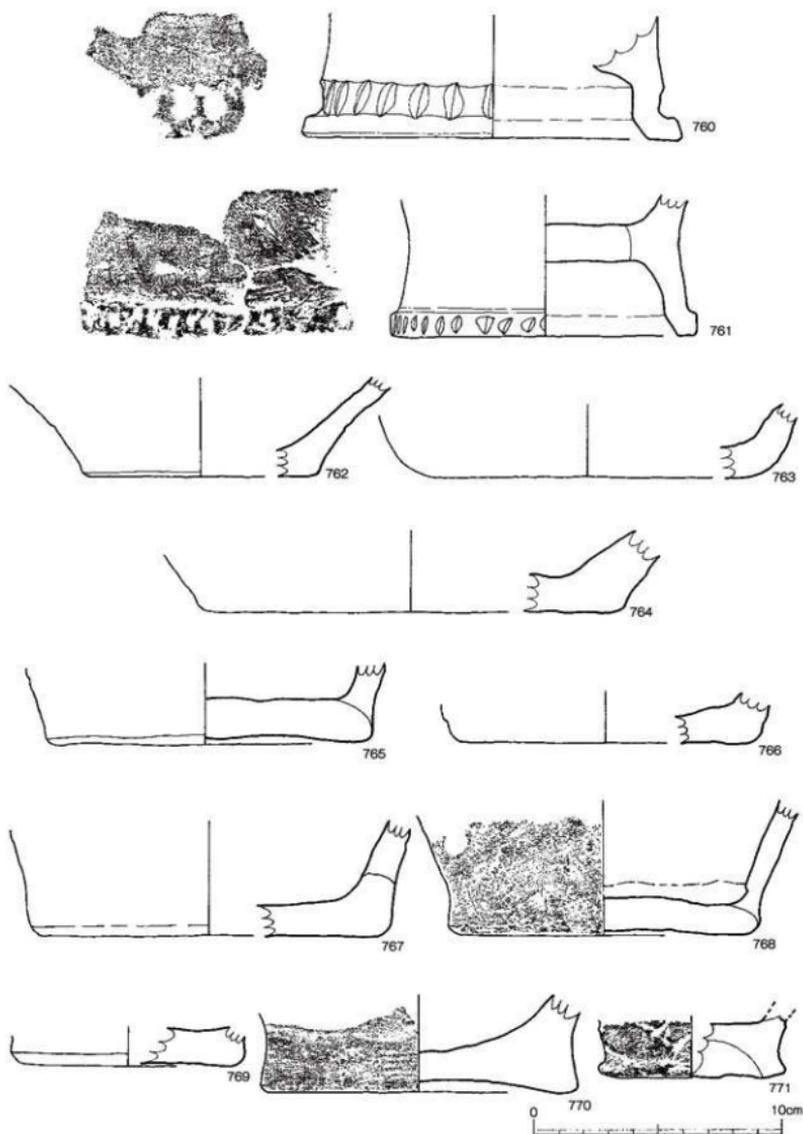
742~759は、磨消縄文の文様を呈する土器である。ミガキ・ケズリ・ナデを施され、胴部に入組渦巻文もしくは、入組鉤手文様を呈している。形状は頸部で強く外反し、胴部中位が張り出している。鉢もしくは浅鉢である。鐘崎式土器に比類されるものである。口唇部については、742は2条の沈線文、743は外面、上面2段と3段に刻目、744~748は凹線文、749は沈線文および斜位の刺突文、750は肥厚し、刺突・刻目文・沈線文・穿孔が、751は刻目が施されている。751は鐘崎式土器ではない可能性が高い。759は、胴部から底部を円化できた。口縁部付近の外面の胴部は入組渦巻文を呈している。残存していない上部の胴部も対称的な入組渦巻文があったものと推



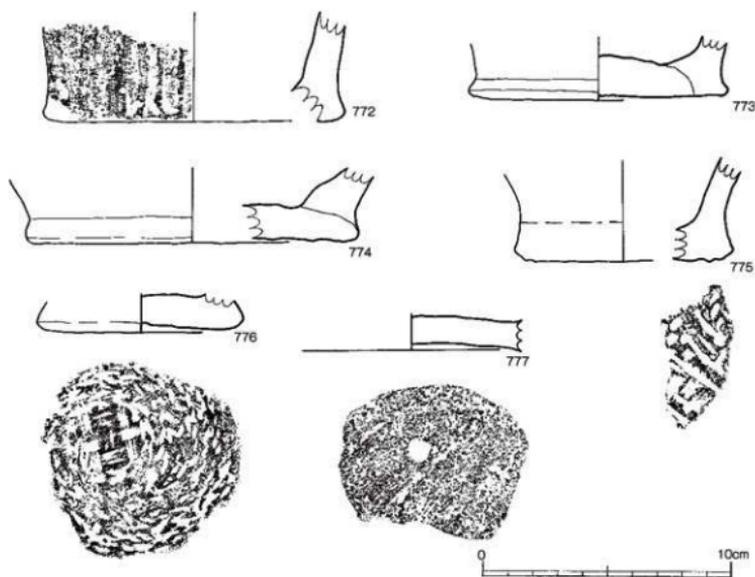
第91図 縄文時代後期出土土器 (22)



第92図 縄文時代後期出土土器 (23)



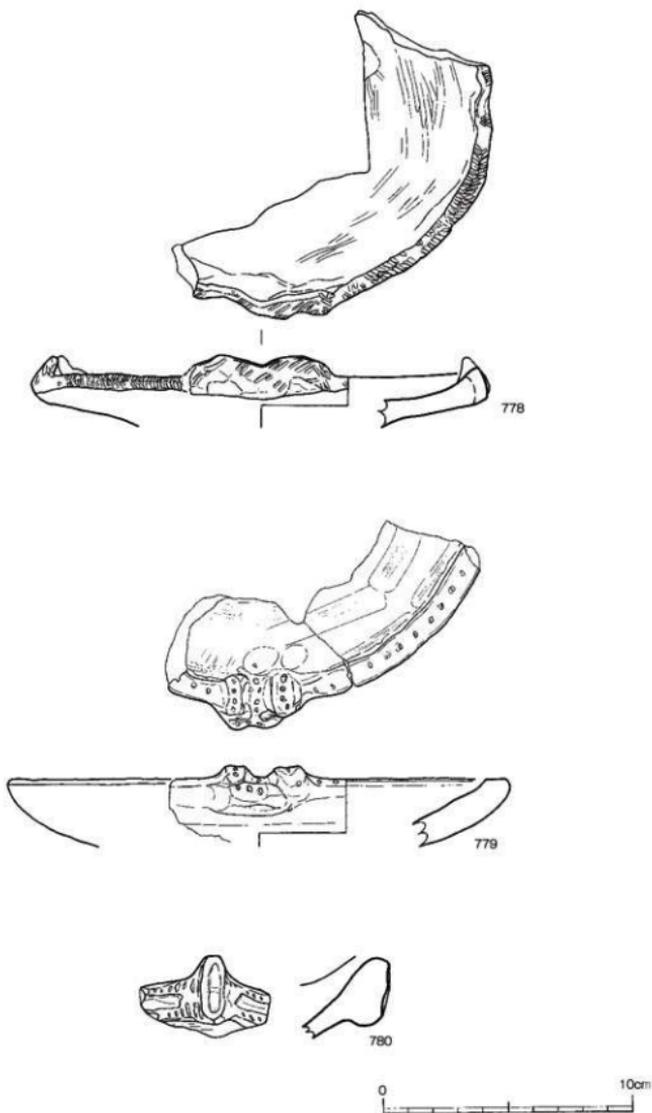
第93図 縄文時代前期～晩期出土土器底部 (1)



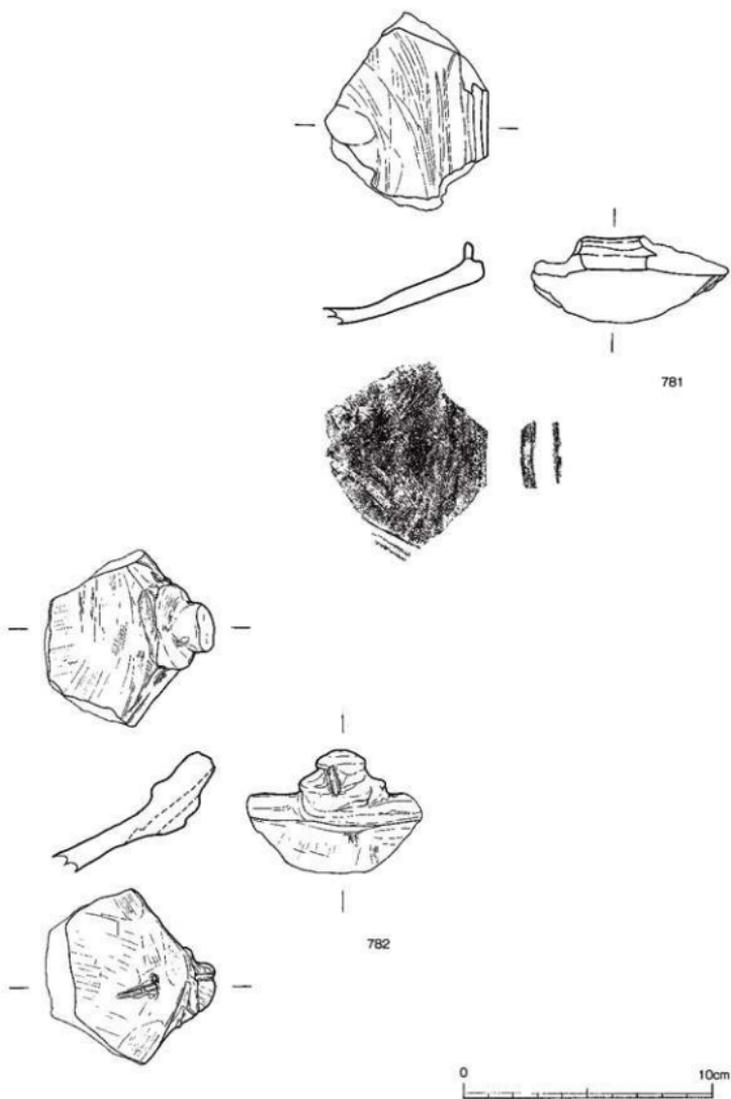
第94図 縄文時代前期～晩期出土土器底部 (2)

測される。磨消縄文の部分には赤色塗料が付着しており、分析の結果、顔料の量が少なく鉄分と確認されたが、丹とは確認ができなかった。また、758は、下の沈線文にも赤色顔料が確認できた。743は、口縁部中位から「く」の字状に外反している。744は、口縁部中位からL字状に、若干下方へ屈曲している。

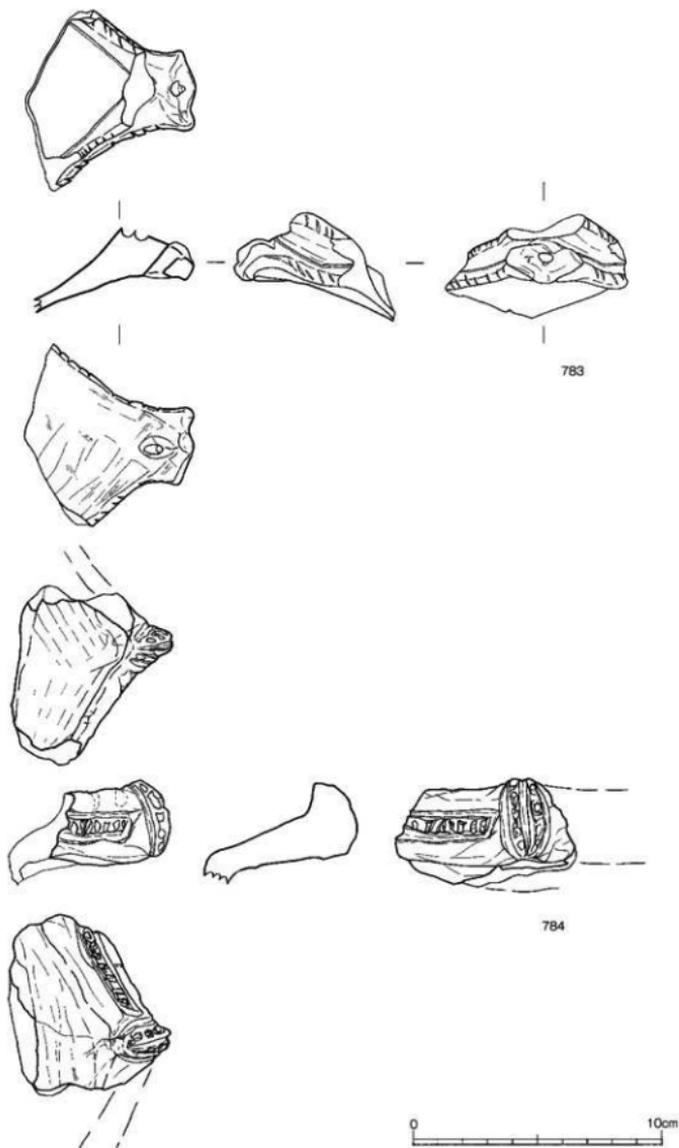
760～777は底部である。760・761は、脚部である。下部に刻目が連続して施されている。縄文時代後期の南福寺式土器の深鉢の可能性が高い。762～776、768・770以外は、円盤状の底部に円筒状の粘土を載せ、積み上げて土器を作り、770は円盤状の底部と一回り大きい胴部を個々に作り隙間を新たに粘土で撫で、埋めて、繋いで土器を作ったと考えられる。765は、底部と胴部の接続痕をナデで隠している。767は、底部の縁の上に伸ばし胴部の下部を作成し粘土を重ねて上へ伸ばしている。768は、その円盤状の底部の縁に粘土を円筒状に、そして若干反気味に積み重ね、その痕跡をナデで、隠していることが、胴部の接続痕を見て取れる。特に胴部と底部との接合部は指頭で執物にナデ消した痕跡が伺える。771の底部は脚部のついた底部にその後、粘土を加えて充実高台にしている痕跡を欠損部分から見て取ることができる。776が、充実高台風の平底をもつものである。775・776は網代底である。766は胎土に、楕円球形の礫（長径1.5cm、短径6mm）が含まれていた。777は、底部の裏に球状の小石もしくは種子の痕跡と思われる凹部が伺える。762～764は、外側にやや開いてまっすぐ伸び平底をもつ。765～767は、底部から口縁部に向かっ



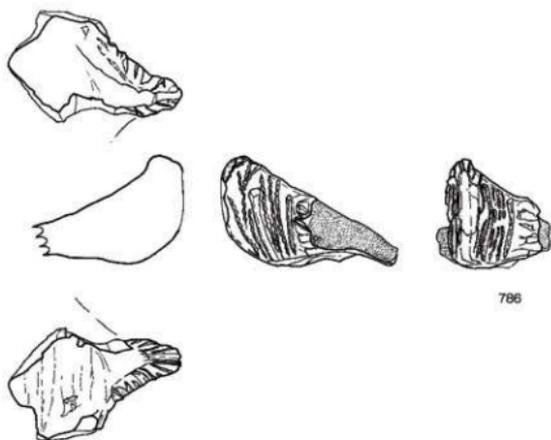
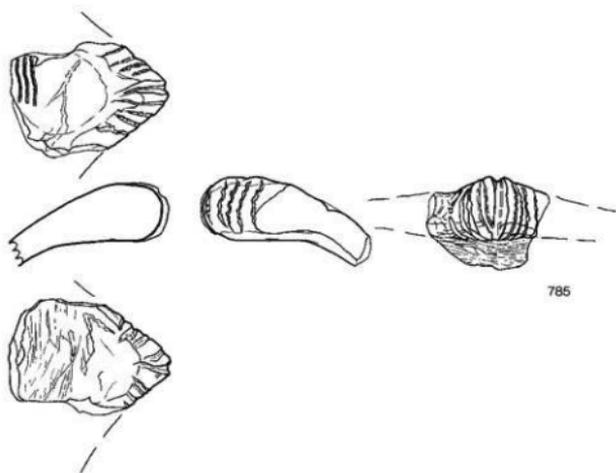
第95図 縄文時代後期出土土器 (24)



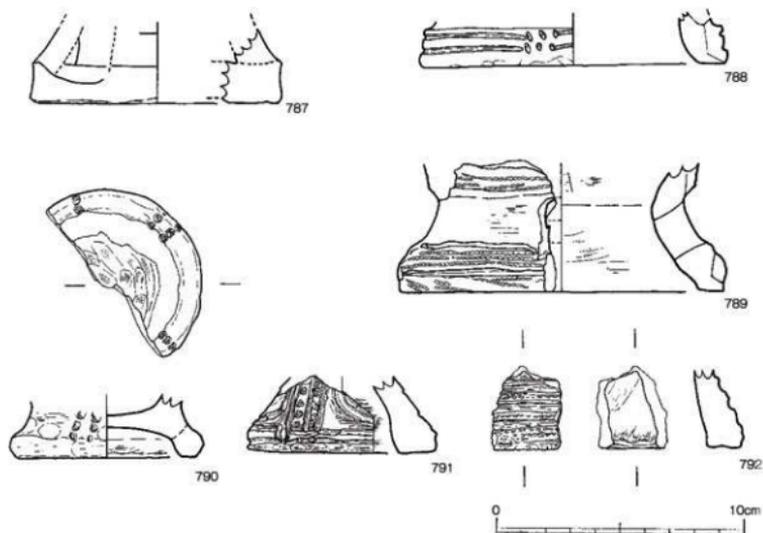
第96図 縄文時代後期出土土器 (25)



第97図 縄文時代後期出土土器 (26)



第98図 縄文時代後期出土土器 (27)



第99図 縄文時代後期出土土器 (28)

て直口気味に立ち上がっている。

778～792は、市来式土器の台付皿形土器と考えられる。778～786は皿部、787～792は脚部である。上面観については、778～780は円形、783～786は方形、781・782は円・方形と判別が不可能のものである。反しのある土器は、781・784・786である。僅かにあるのは778・779・782・783・785である。不明確なのは780である。778は粘土紐を波状にしての装飾した口唇部以外は刻目状に施し、779は口唇部とその装飾部に径が約2mmの刺突文が施されている。780の装飾は、口縁部に刻目文・沈線文が施され、船の船首を連想させる形になっている。781の装飾については、口唇部に沈線文を施すことにより5mm程度の反しの部分をつくっている。782の装飾部は、2段の楕円の筒が重なった形を呈し、径2mm、長さ5cm程度の穿孔が外面部に施してある。783は2段に皿を重ねたような形になっている。上段にあたる部分の口縁部の先端は欠損し、下段にあたる部分は径4mm、長さ2cmの穿孔が外面部に施してある。口縁部には刻目文が施してある。784の装飾部は、先端部には3条の沈線文を施し、その間に刺突文が施してある。口縁部には方形の沈線文、その中に刻目状の刺突文が施されている。高さ1.5cm、厚さ9mmの反しがついている。785の装飾部は、先端部に沈線文を施し、その両脇を4条ずつ貝殻刺突文が施されており、舌状の形を呈している。786の装飾部は、先端部は欠損しているものの、貝殻刺突文と沈線文を組み合わせた文様になっている。船の船首を連想させるような形状を呈し、僅かながら反しが施されている。780・785・786は、市来式土器の深鉢の可能性も考えられる。787以外は脚部が確認されている(787は欠損が激しいため)。787・791は、透かし穴の痕が何える。788は、脚部の底部に新たに沈線文・

工具による刺突文底部を帯状に貼り付けた痕跡、789は底部の沈線文の間に施された貝殻条痕文の帯を後で貼り付けられた痕跡が断面から2か所伺える。789・792は貝殻刺突文・沈線文が交互に、790は工具による刺突文が施されていた。

5 晩期（第100図～第108図）

・土器

縄文時代晩期の土器は、浅鉢形土器と深鉢形土器が出土している。

・深鉢形土器

793～810は深鉢形土器である。793～799は、その口縁部で、796以外は、内湾する口縁である。793・796・797は外面に数条の工具状の施文具により沈線を施すものである。他は条痕による調整である。内面の調整は、条痕の後にナデ調整を行っている。

800～802と805は胴部最大径の部分であり、いずれも条痕とナデを中心とした調整である。特に805の内面の調整は粗い。803・804は底部から立ち上がり胴部最大径へと至る部分の破片である。

806～807は口縁部が「く」の字状に内湾するもので、807は「く」の字状に内湾した後、直線状に立ち上がり、口縁端部をやや外反させるものである。復元口縁径は、40cmを越えるほどの大型のものである。808・809は厚さや大きさなどからして、これらの深鉢形土器あるいは、これらに類似したものの胴部屈曲部以下の破片である。調整は、外面が条痕、内面が条痕後ナデである。809の内面は特に丁寧なナデである。

810は、底径が5cm程度の小型の深鉢で、底面はやや丸みを帯び緩やかな弧状に胴部へと立ち上がるものであるが、口縁部の形状については判然としない。

・浅鉢形土器

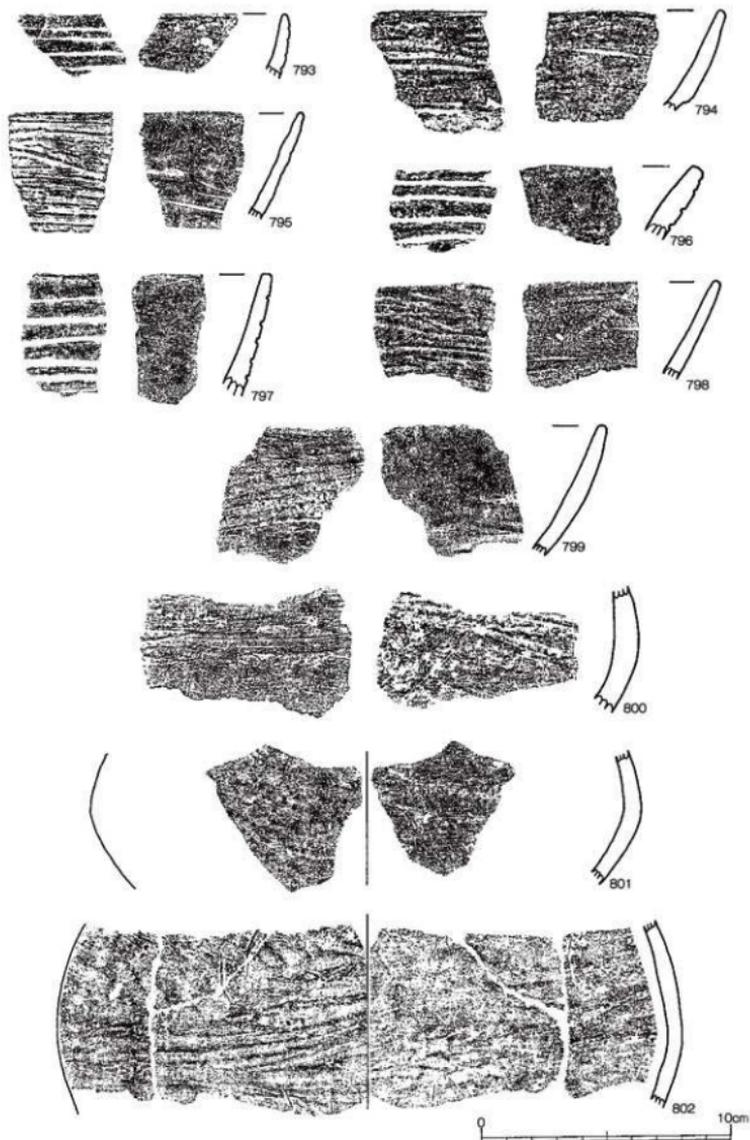
811～819は、浅鉢形土器の胴屈曲部から外反して立ち上がる口縁部である。811～815は口縁端部が垂直気味に立ち上がり、外面に沈線を施すものあるいは、814・815のように沈線状の窪みを部分的にもつものである。816・817は先端がやや玉縁状、818・819は先端を鋭く収めるものである。814～825は、胴屈曲部である。820は、浅鉢形土器にしては、内外とも荒いナデ調整を施している。他は丁寧なミガキである。822は、屈曲部外面に沈線を施す。

826～831は、ボール状の器形と思われるもので、826～828、830のように内湾した口唇部に凹線を施し、先端が細くなるもの、829のように外面に沈線を施すもの等がある。831は、浅鉢形土器底部から立ち上がる部分の可能性もある。

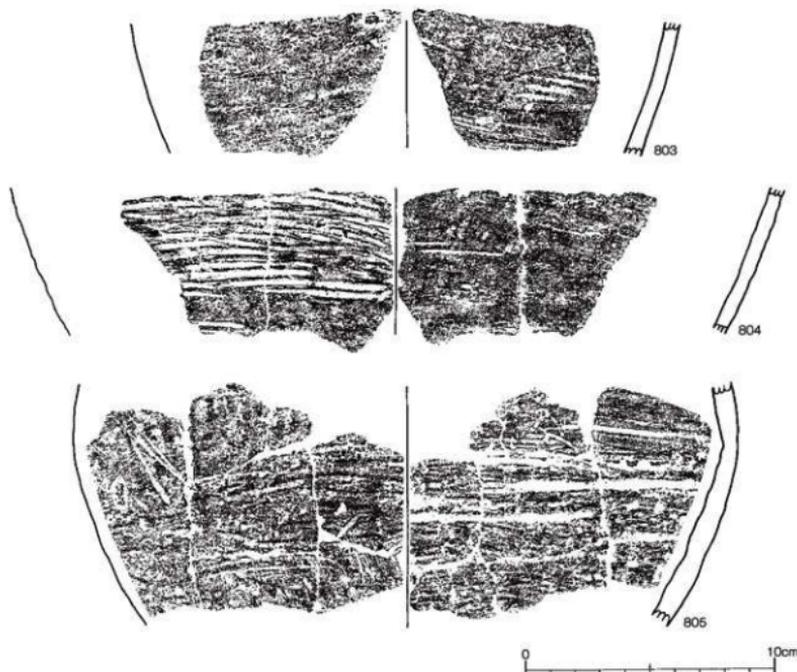
832～837は、胴部が大きく内側へ屈曲し、口縁部が「く」の字状に外反する浅鉢の一群である。832～834は、やや丸みを帯びた口縁端部に外面を主として浅い沈線を施すものである。853も同様の口縁部を有するものと考えられる。836・837は、口縁端部に装飾的風に関内外に丁寧な沈線や凹線を施すもので、837は、この時期特有の「ヒレ」状の突起を有するものである。

・土製品（第107図・第108図）

縄文時代前期以降の土製品は、そのほとんどがⅢ a層を中心とする層から出土したため、晩期の部分で一括して取り扱った。また、土製品の全てがメンコである。



第100図 縄文時代晩期出土土器 (1)



第101図 縄文時代晩期出土土器 (2)

直径は、約2cm～4cm程度のものが平均的であるが、839や845のように直径が6cm～8cm程度のももある。839～846までは、縄文時代後期の無文及び沈線を施したものと思われ、他は、縄文時代晩期の深鉢形土器を加工したものようである。

また、847は胴部の屈曲部、851は底部から胴部へ立ち上がる部分、854は口縁部、856は底部の加工品と思われる。

・石器 (第109図～第125図)

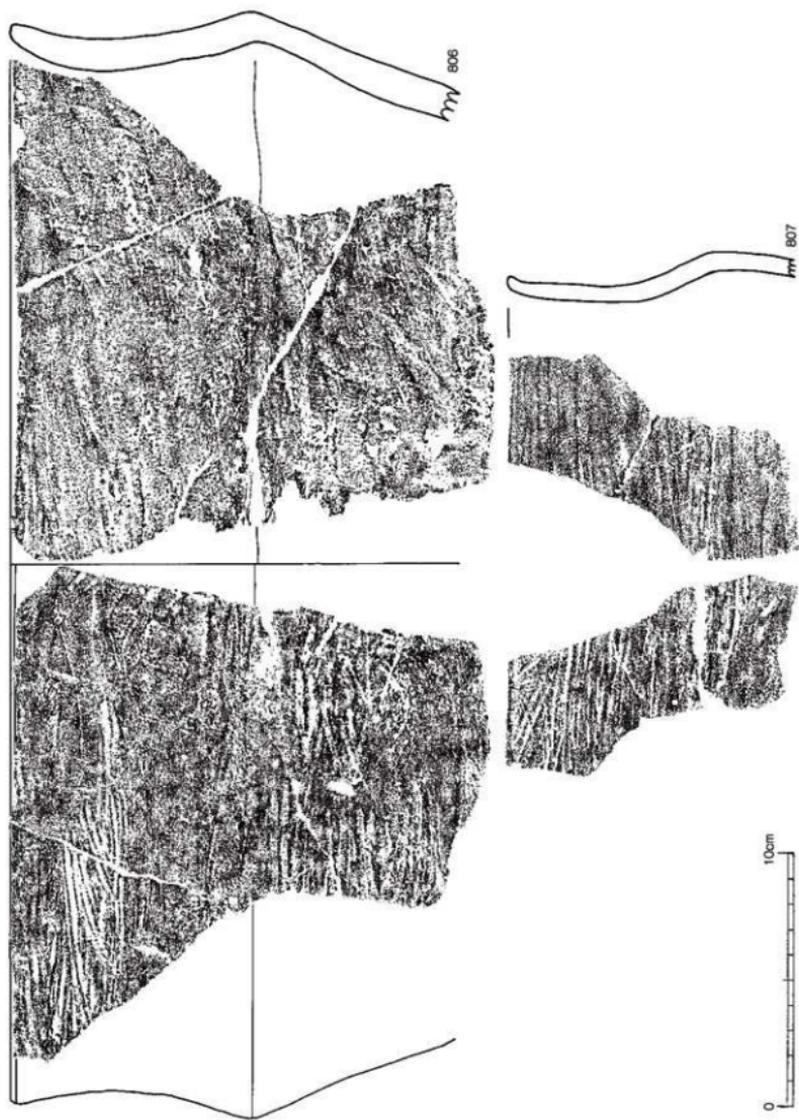
縄文前期以降の石器は、ほとんど同一層より出土したことから、土製品同様に晩期の部分で一括して扱った。

・石鏃 (第109図)

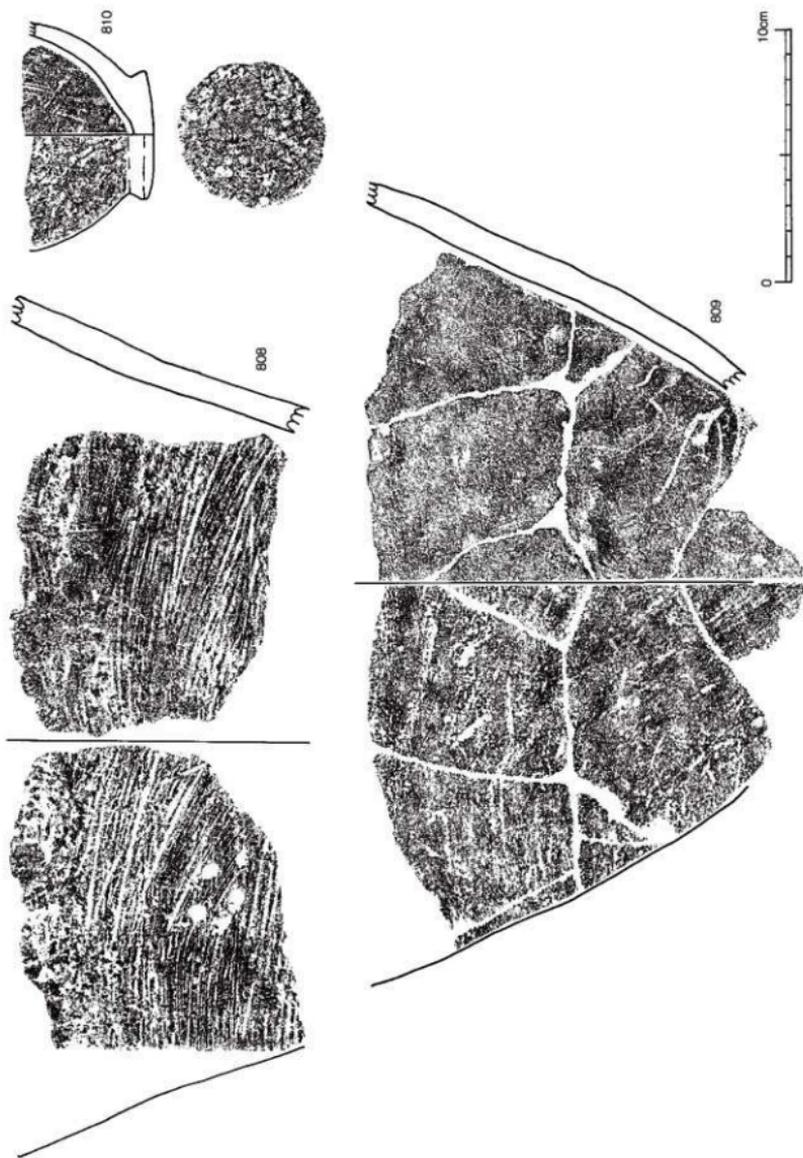
857～860は、石鏃である。857は、両面に自然面を残し、基部は抉りを有しないものである。858～860は、ほぼ正三角形の形状で基部の抉りは、浅い弧状のものである。859は、基部も緩やかな弧状を呈する。

・石匙 (第109図)

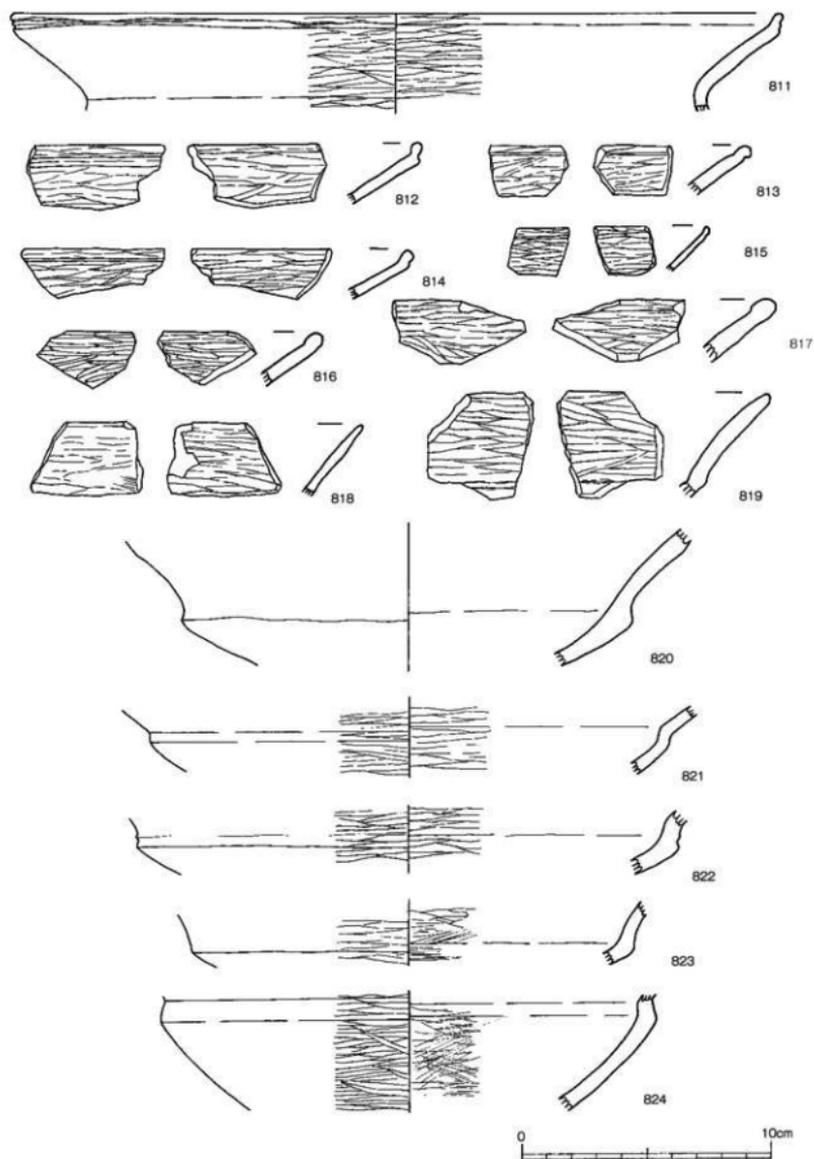
861～863・865は、石匙である。石質は、861と863が鉄石英、862が頁岩である。861は全面に丁寧な加工を施すものである。862は、刃部を中心に丁寧な加工を施している。刃部が「U」の字状



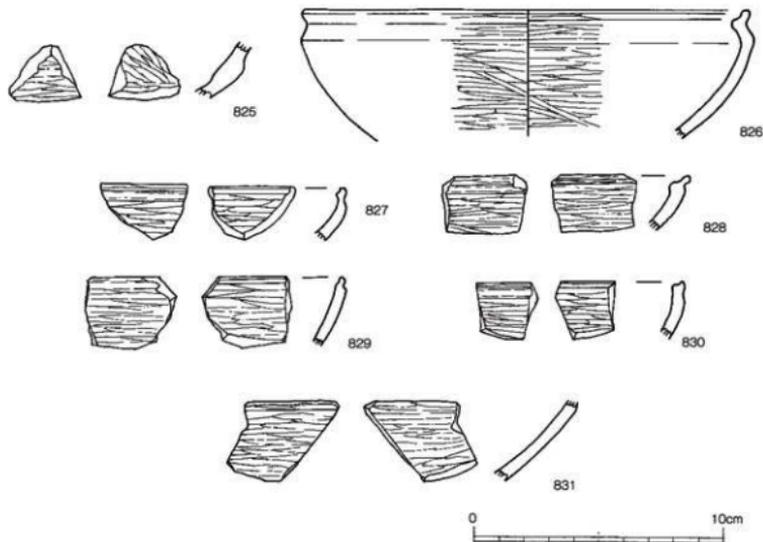
第102図 縄文時代晩期出土土器 (3)



第103図 縄文時代晩期出土土器 (4)



第104図 縄文時代晩期出土土器 (5)



第105図 縄文時代晩期出土土器 (6)

の形状となっているのがこの石匙の特徴である。863は、作出の段階で鋭い刃部が形成されたためであろうか、刃部の細かな調整はほとんど行われていない。865は、横長剥片を縦に用い、一方の側縁部を中心に加工を行い、刃部を形成しているものである。

・剥片類 (第109図・第110図)

864は最大長が5.2cm、幅2.6cmで断面が三角形の上牛鼻産の黒曜石である。側縁の下端に使用痕と思われる剥離が見られるものである。866は、メノウ製の剥片で下端部に微細な使用痕と思われる剥離が見られるものである。

・スクレイパー (第110図)

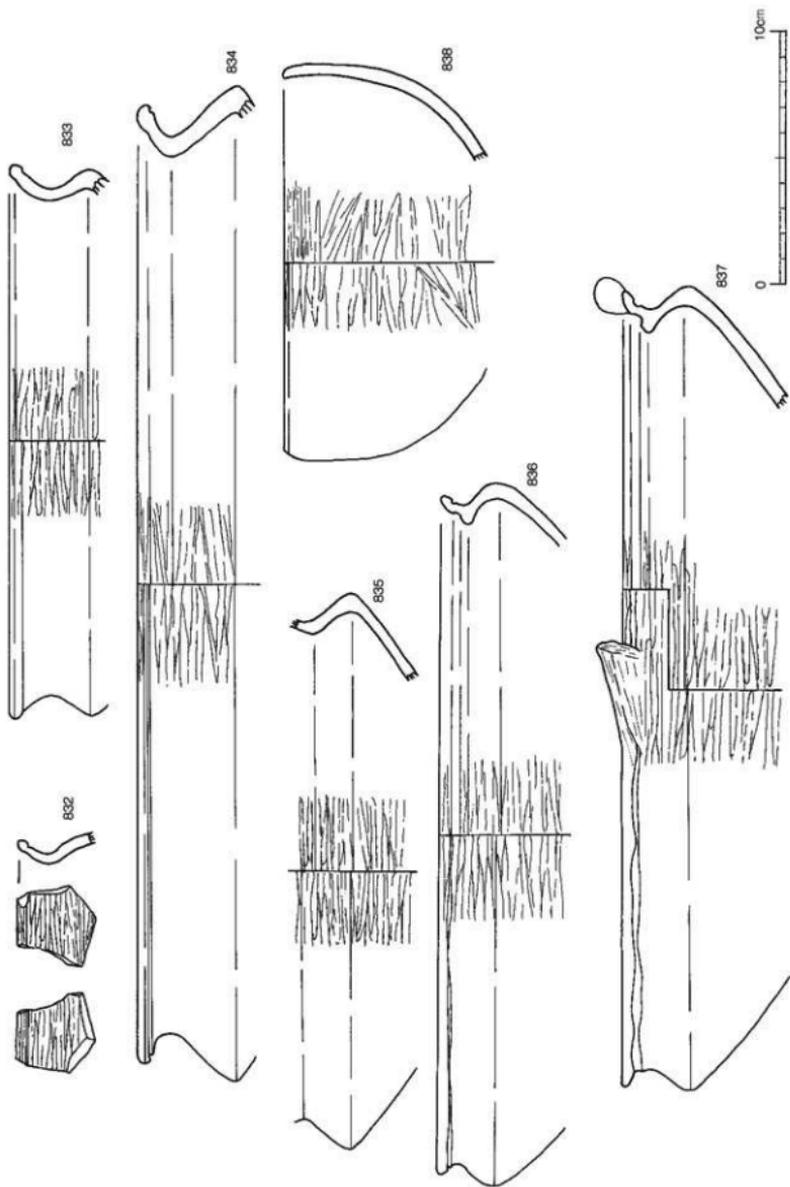
867は、チャート製の縦長剥片の一方の側縁部に丁寧な交互剥離を施したもので、ややくはみ気味に刃部を形成している。

・石斧 (第111図～第113図)

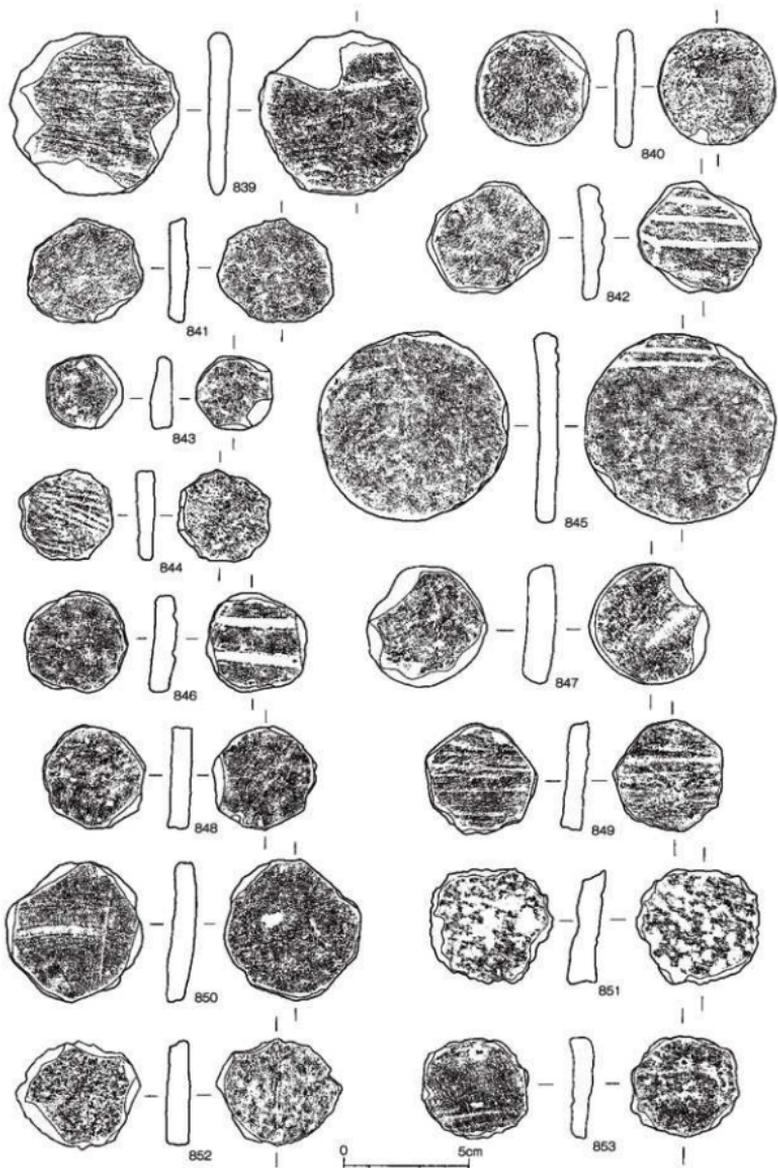
868～883は、打製・磨製の石斧類であり、その石質の大半は頁岩と砂岩である。

866は、磨製石斧の半欠品を再利用したものである。特に、先端部(旧刃部)を中心に敲打具として用いられていたものと思われる。

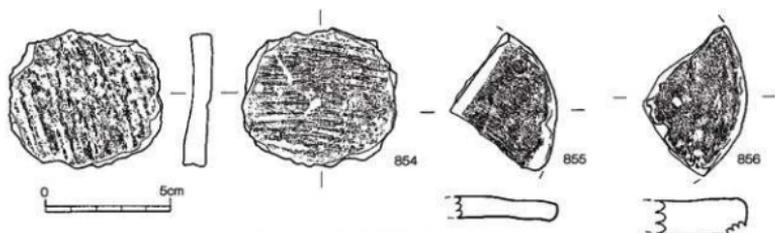
869～872は、打製石斧である。869と870は、半欠品であるが、短冊形を呈していたものと思われる。869は、一部に敲打成形が見られる。871は、両面から丁寧な剥離を施し、側縁部も鋭く仕上げている。872は、縦長剥片を用いて、丁寧に成形し、その後、刃部を中心として研磨をおこなっている。



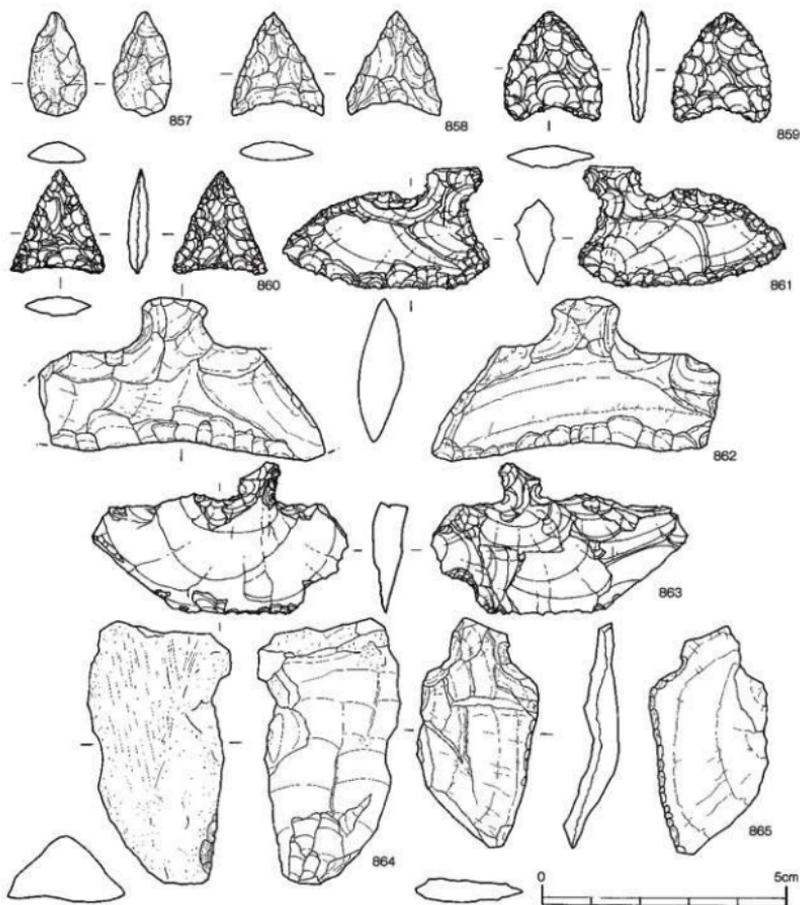
第106図 縄文時代晩期出土土器 (7)



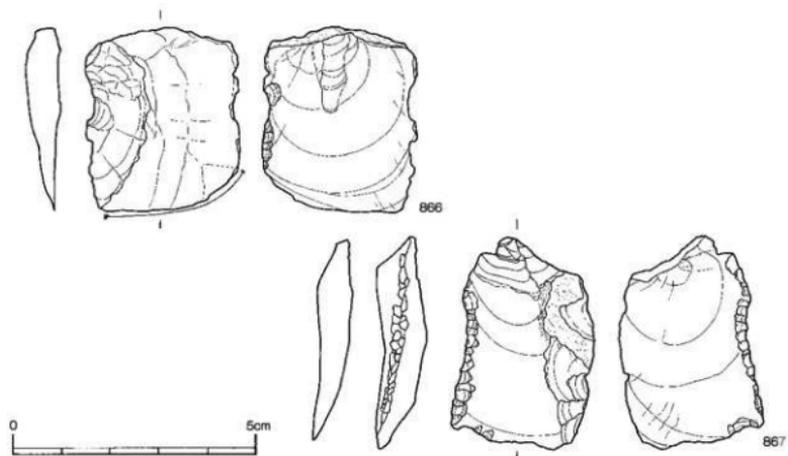
第107図 縄文時代出土土製品 (1)



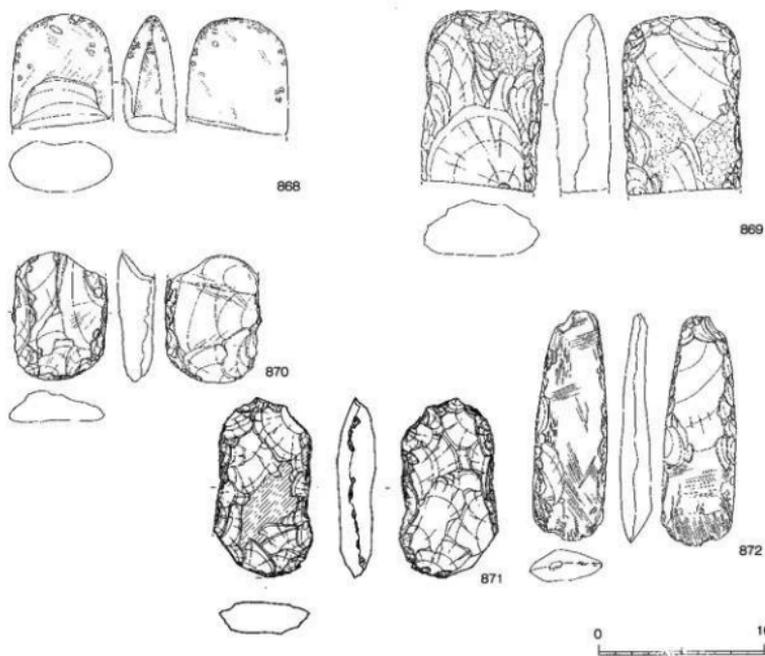
第108図 縄文時代出土土製品 (2)



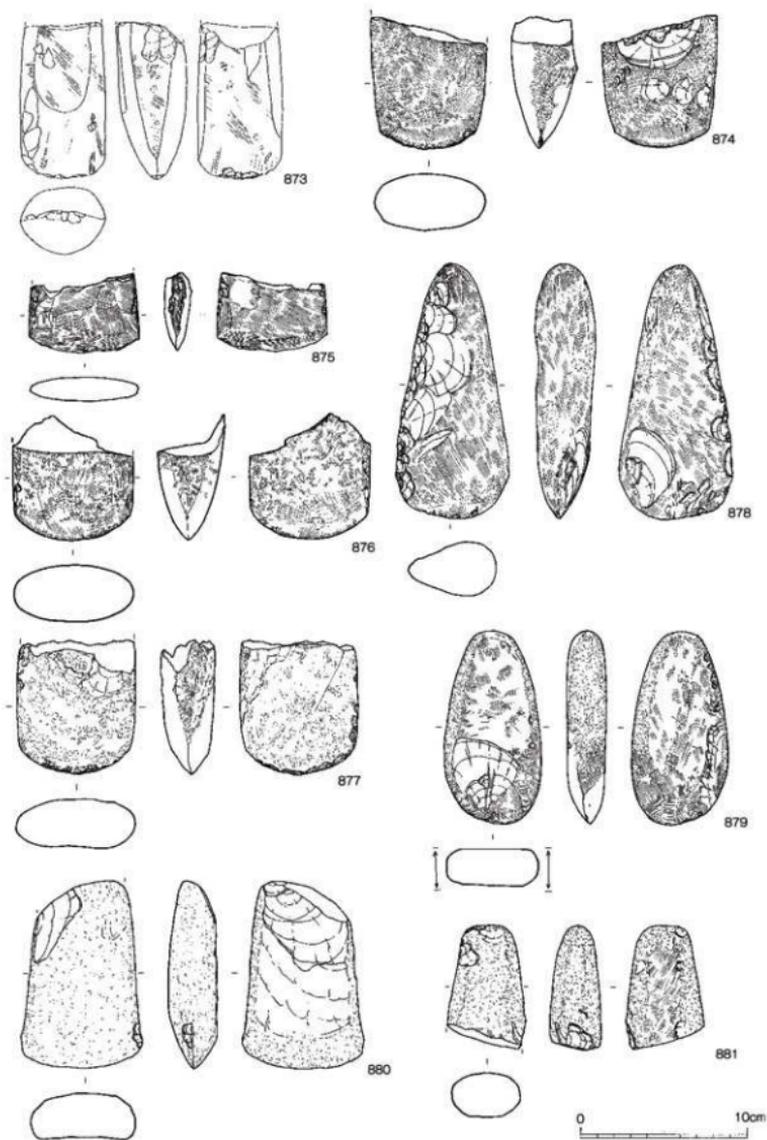
第109図 縄文時代前期～晩期出土土石器 (1)



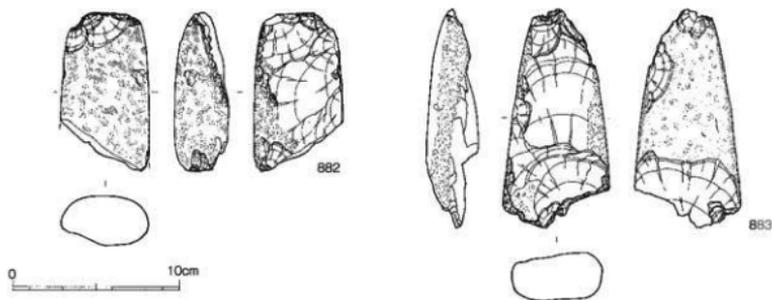
第110図 縄文時代前期～晩期出土石器 (2)



第111図 縄文時代前期～晩期出土石器 (3)



第112図 縄文時代前期～晩期出土石器 (4)



第113図 縄文時代前期～晩期出土石器 (5)

873～883は、基本的に敲打成形と研磨の両方を用いて石斧を製作している。887・880・881・882・883は、敲打による成形が主であり、他はその逆である。特に878は基部に若干の敲打が見られるだけでほとんどが研磨による成形である。また、879は、敲打成形したのか、あるいは、側縁部を敲打具としたのかと思えるほど、側縁部の敲打痕が著しい。

・磨石・敲石・凹石 (第114図～第124図)

円礫を用い、磨石のみの機能をもったもの、磨石と敲石の機能を持ったもの、磨石・敲石・凹石の機能を併せ持ったものや変形した自然の礫を敲石としたもの等がみられる。

884～925は自然礫の円礫や棒状の礫を磨石等として用いたものである。926～937は、磨石と敲石の機能をもつもので、部分的に敲打痕が見られる。938～943は、凹石である。特に940は両面ともよく使い込まれており、断面が瓢箪状を呈している。

944は、下端部が扁平になるまで使いこまれた敲石であり、側縁にも部分的に敲打の跡が見られる。

・石錘 (第124図)

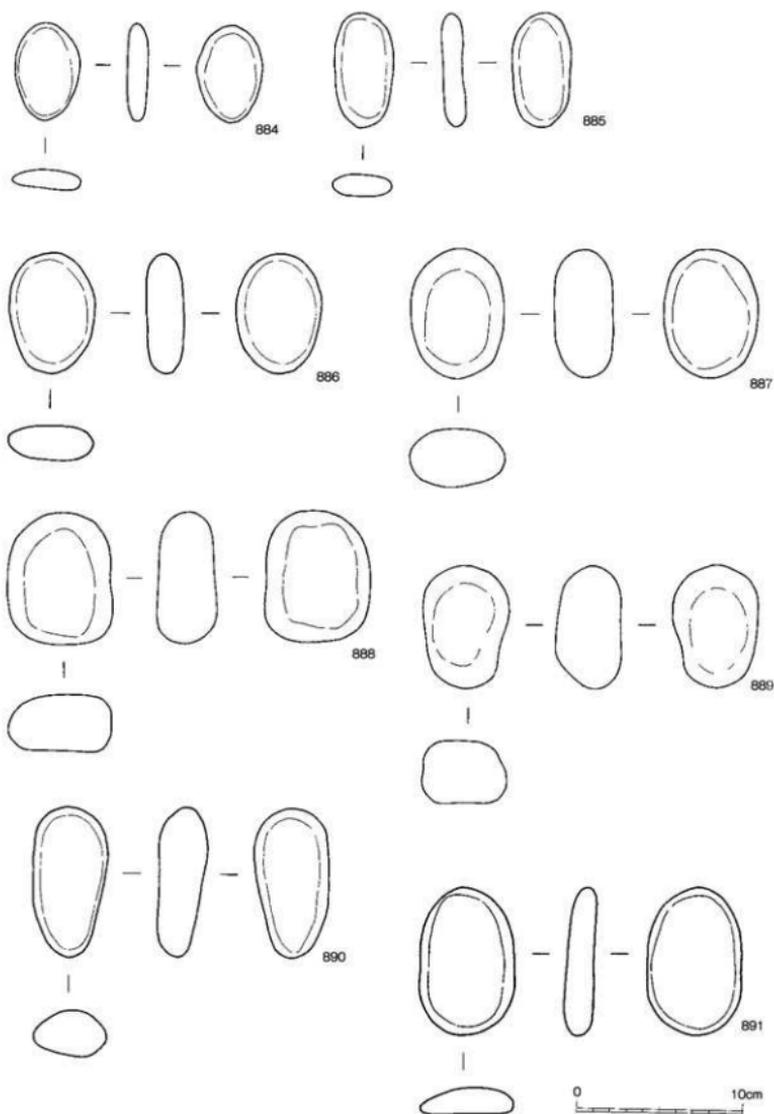
945は、最大径が約4.5cm程度で厚さが約1cmの石錘である。上下端とも数回の打撃で凹部を作り出している。

・軽石製品 (第124図)

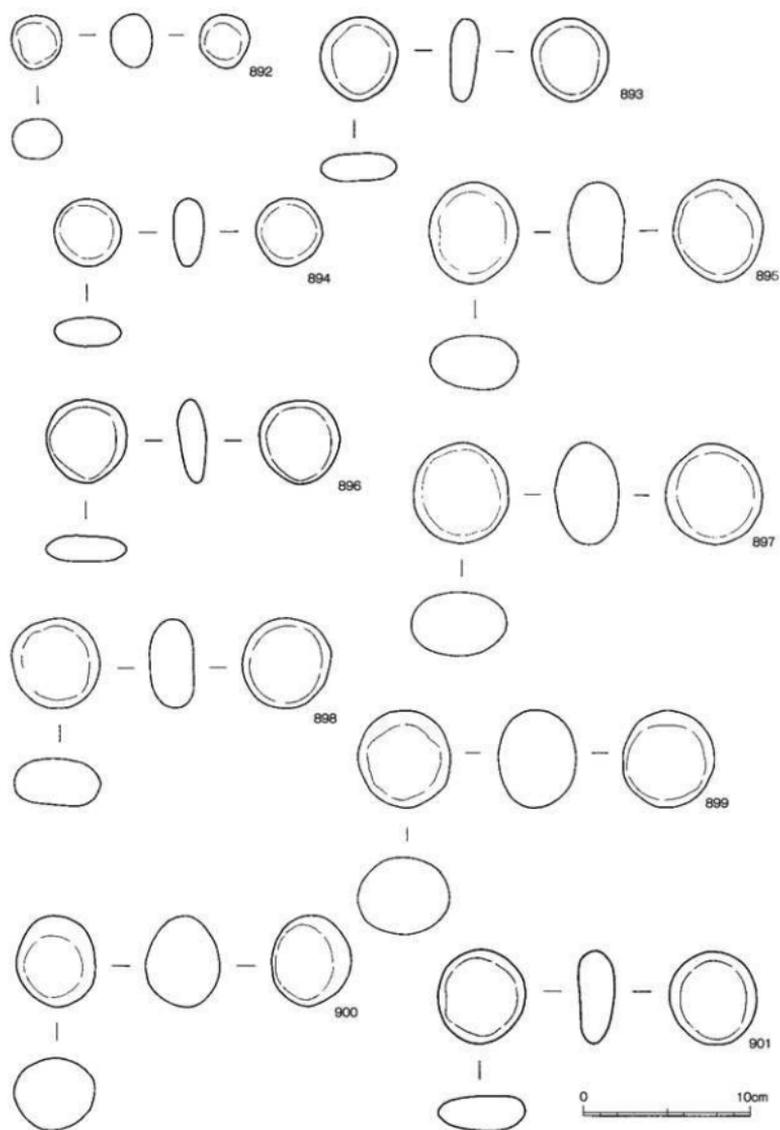
946・947は、軽石製品である。両方とも円形で扁平に加工されている。946は、直径が約4.5cm、947は、約9.5cmである。947は、両面からと思われる穿孔が施されている。

・石皿 (第125図)

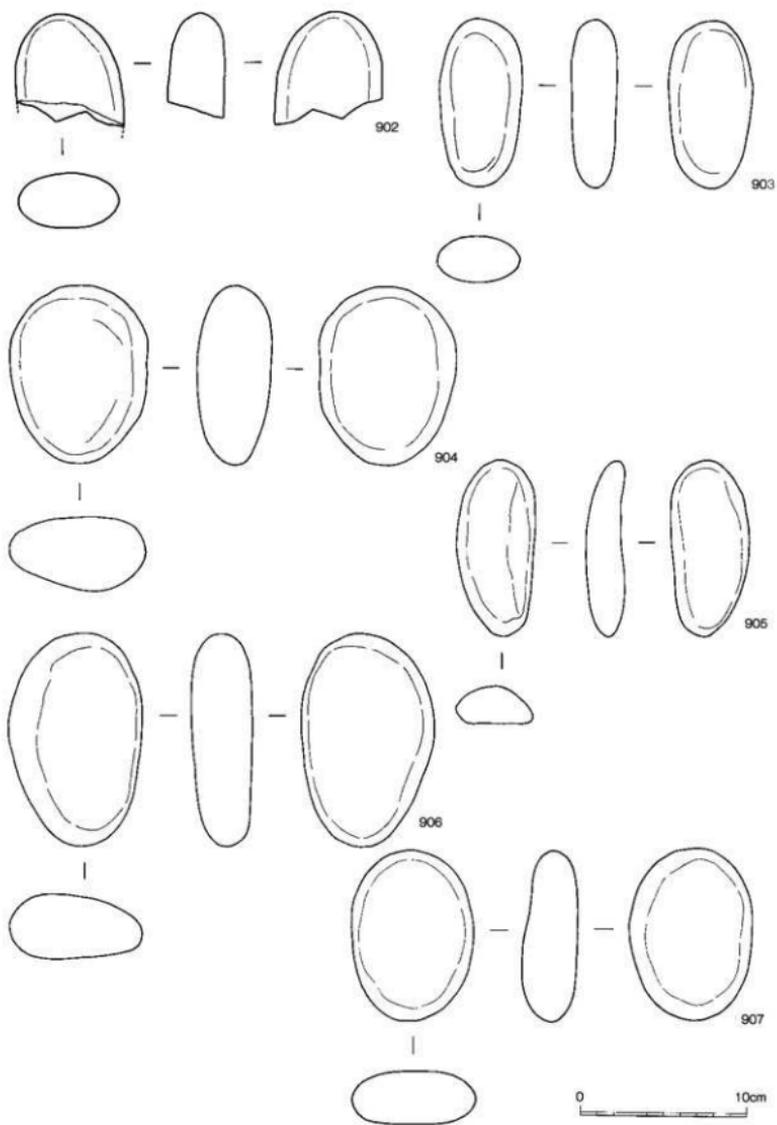
948・949は、安山岩製の石皿である。948は、平坦で片面のみが使用されている。949は、片面が大きく窪むほど使い込まれている。下端部の窪みは、注ぎ口か、移動用の紐掛けの可能性もある。



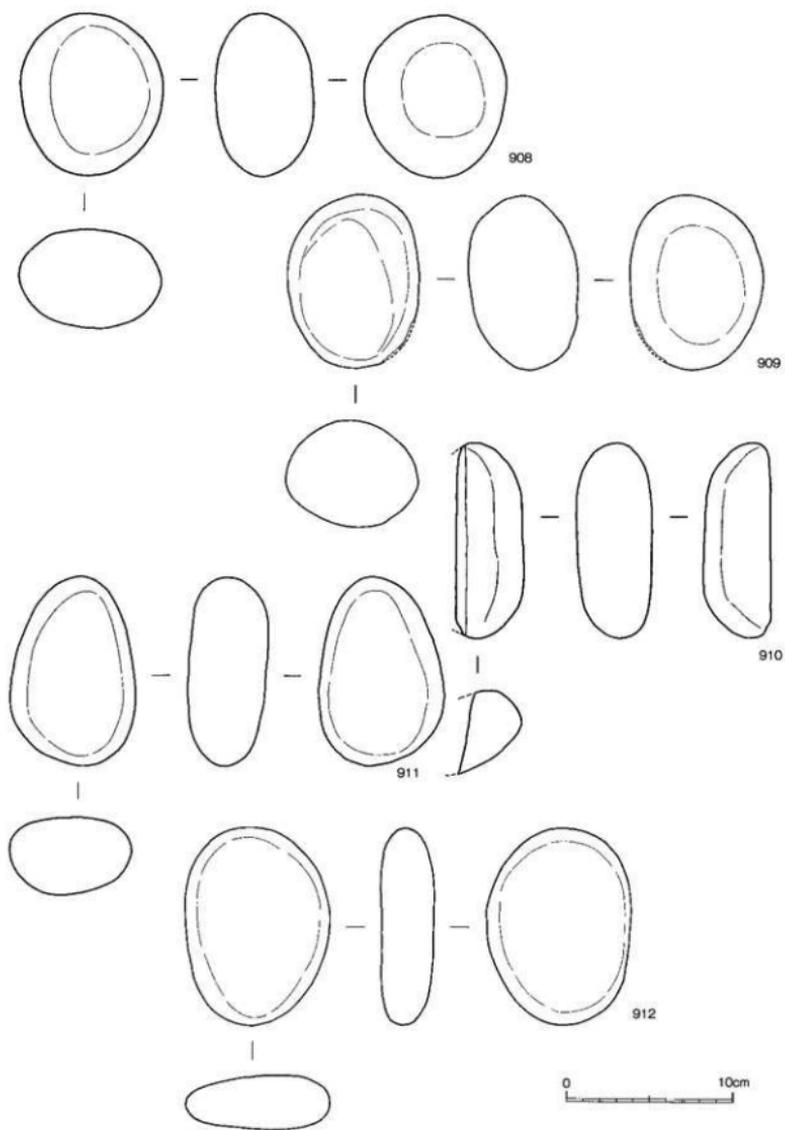
第114図 縄文時代前期～晩期出土石器 (6)



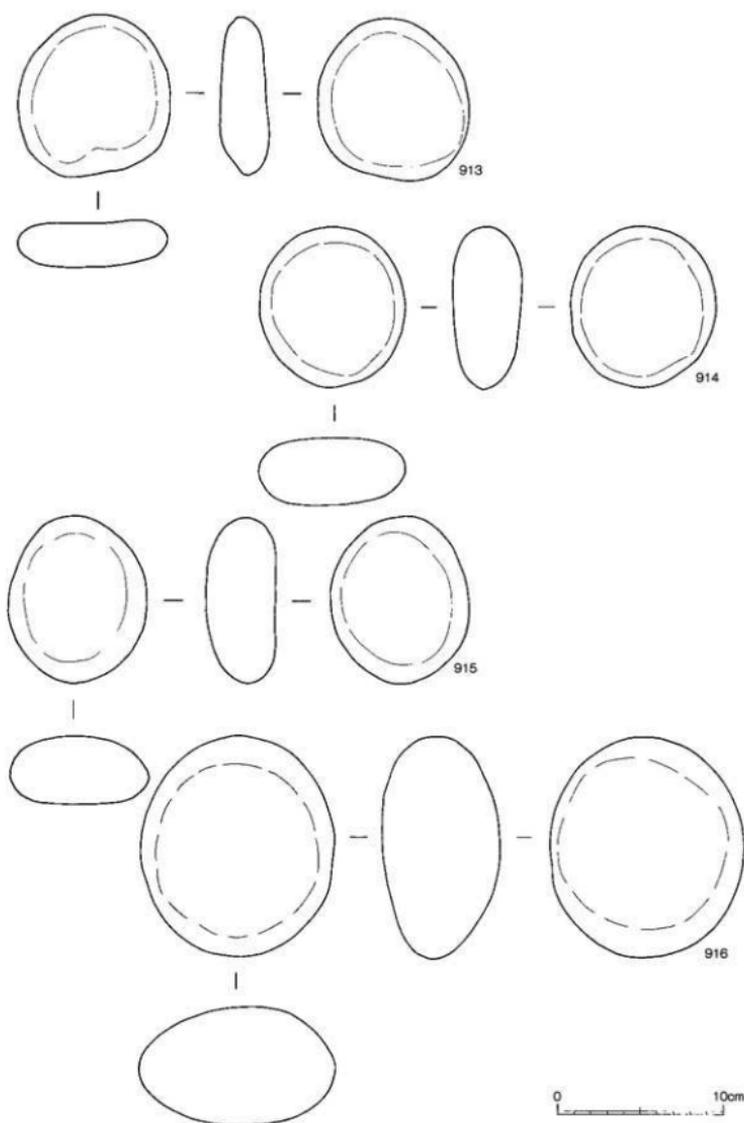
第115図 縄文時代前期～晩期出土石器 (7)



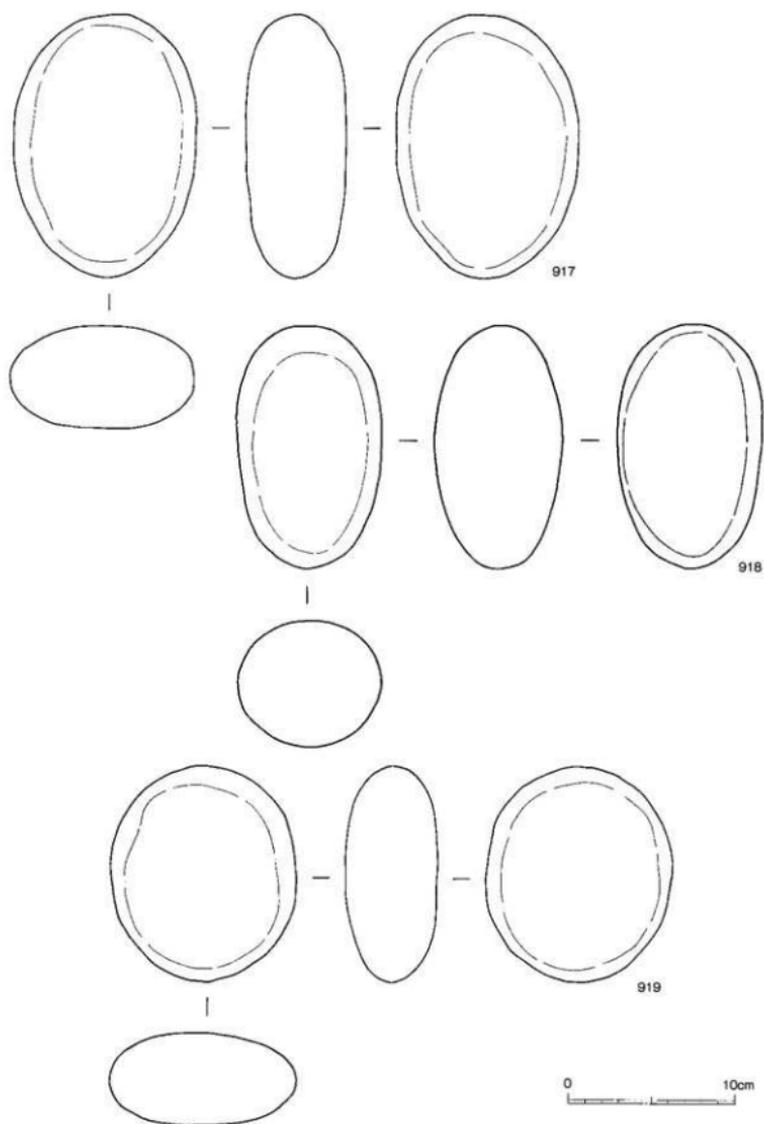
第116図 縄文時代前期～晩期出土石器 (8)



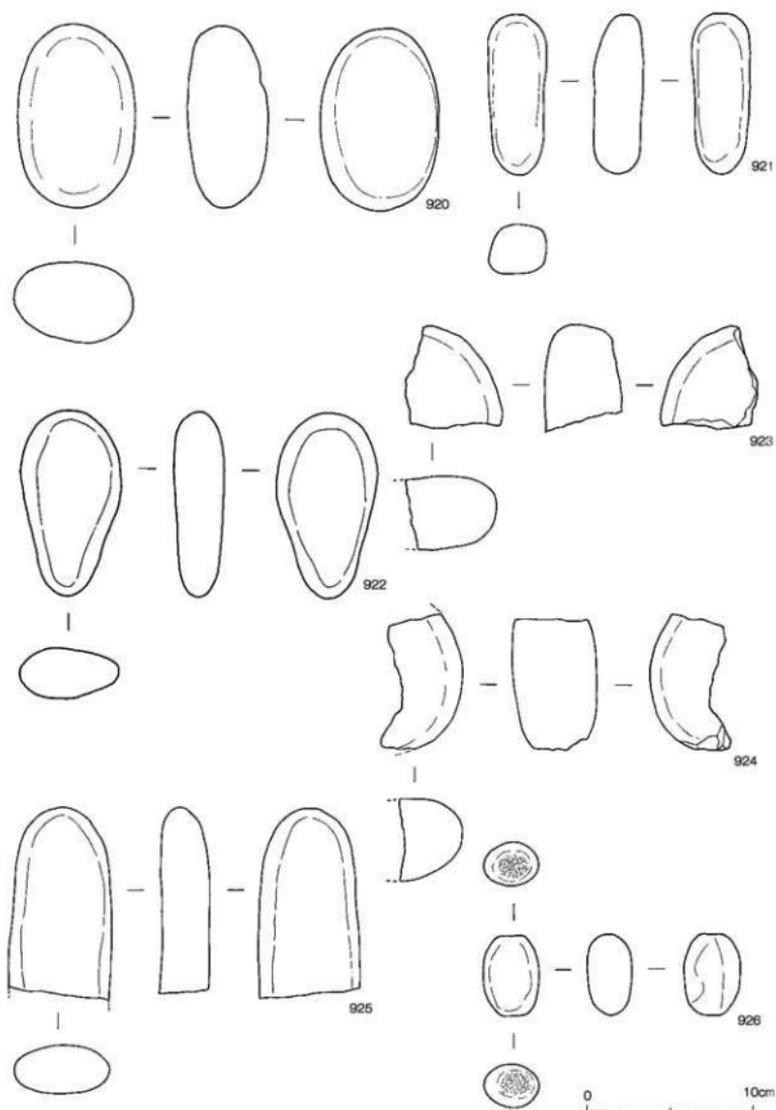
第117図 縄文時代前期～晩期出土石器 (9)



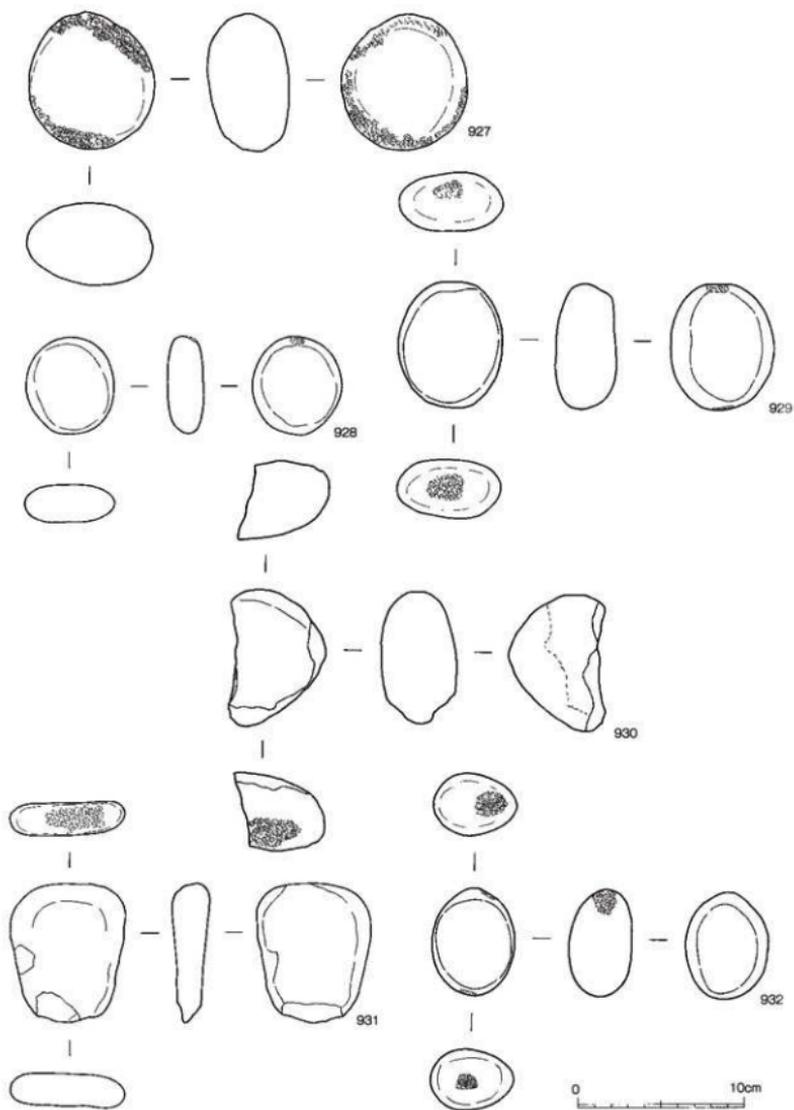
第118図 縄文時代前期～晩期出土石器 (10)



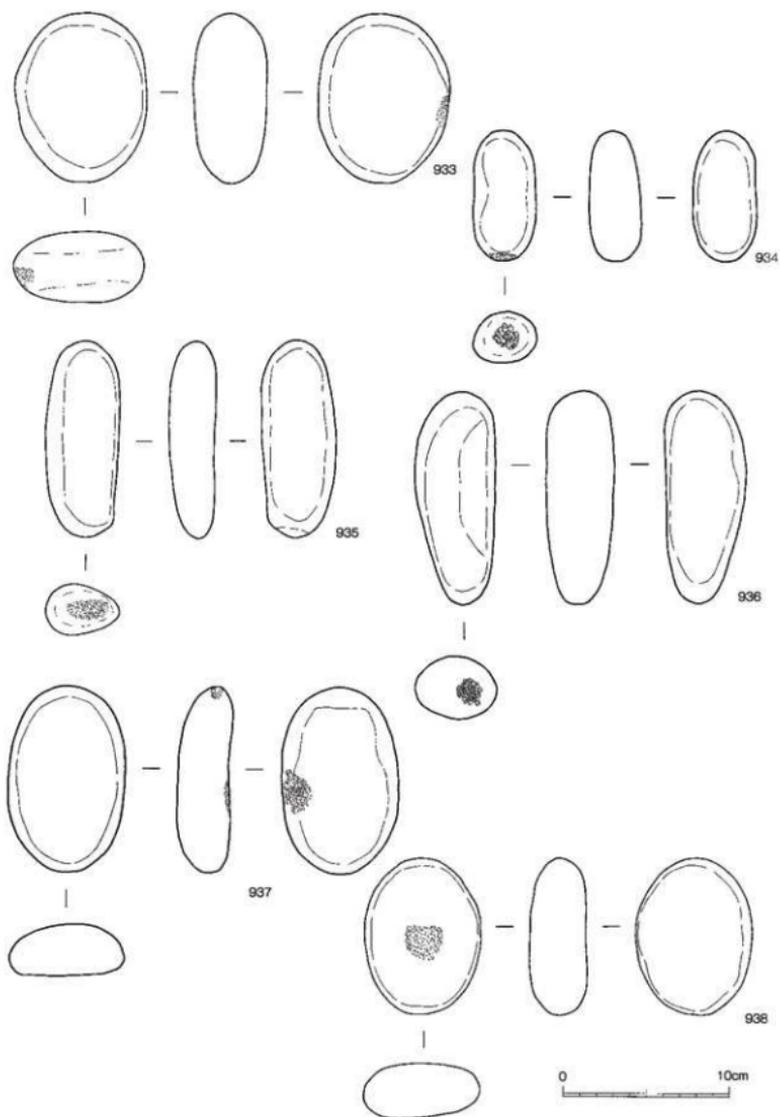
第119図 縄文時代前期～晩期出土石器 (11)



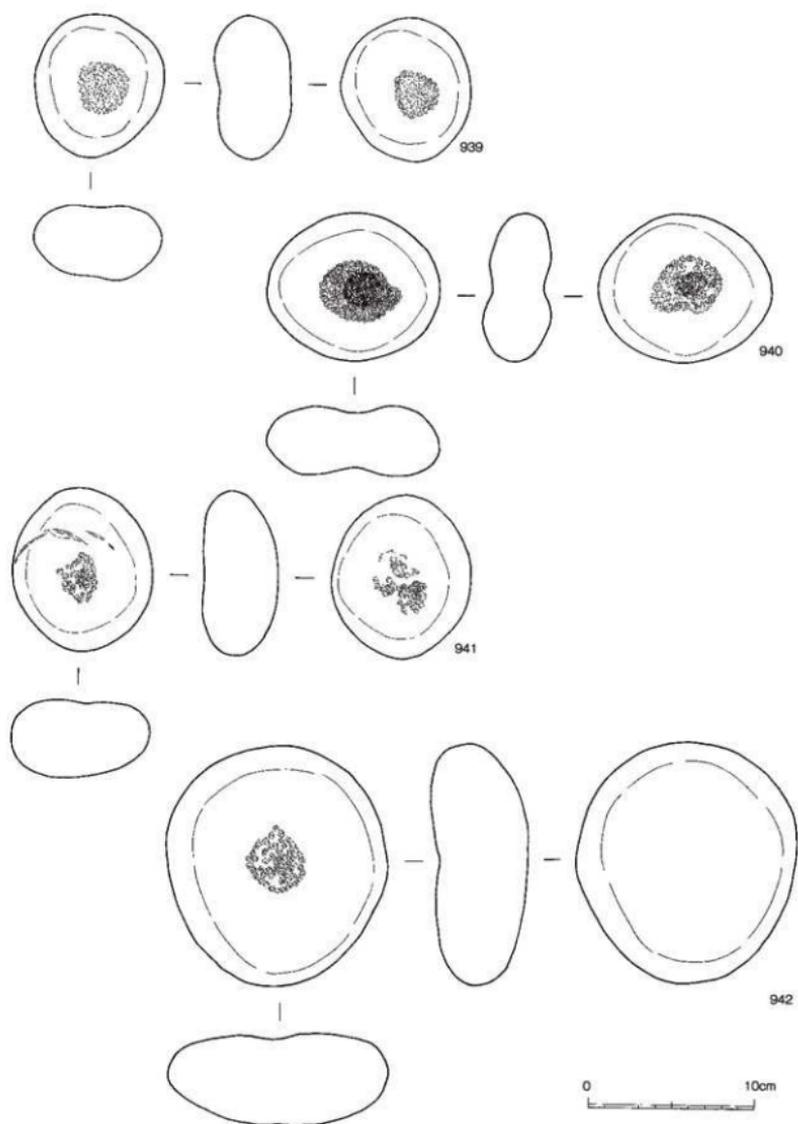
第120図 縄文時代前期～晩期出土石器 (12)



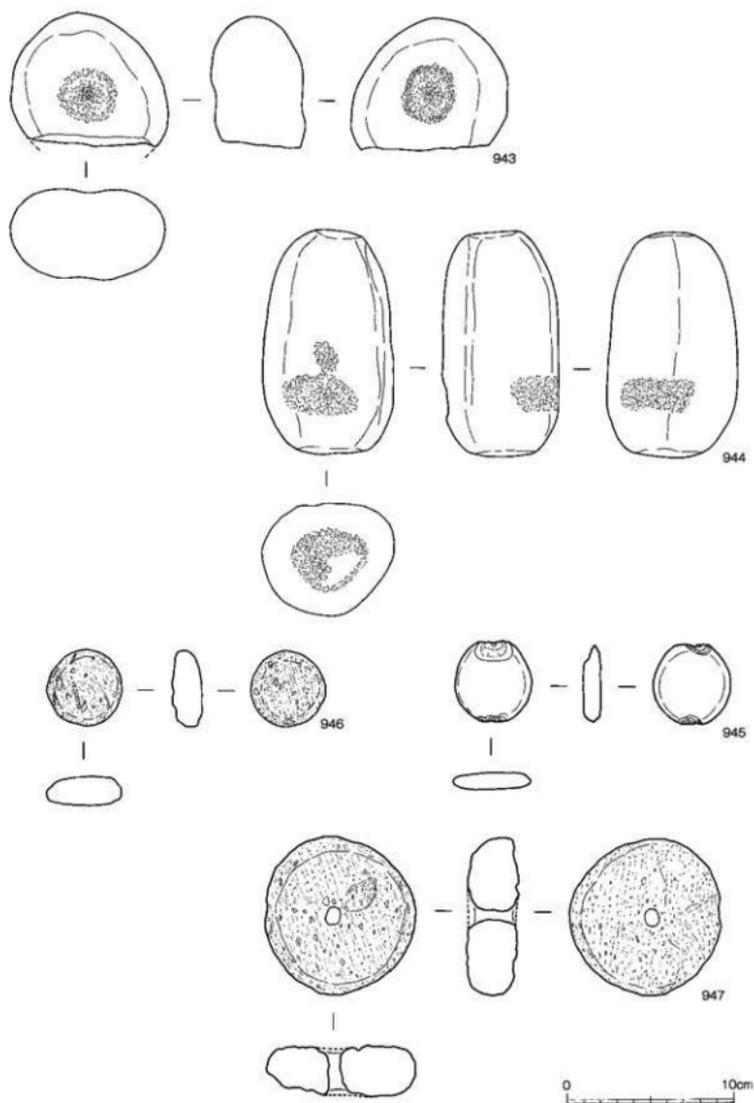
第121図 縄文時代前期～晩期出土石器 (13)



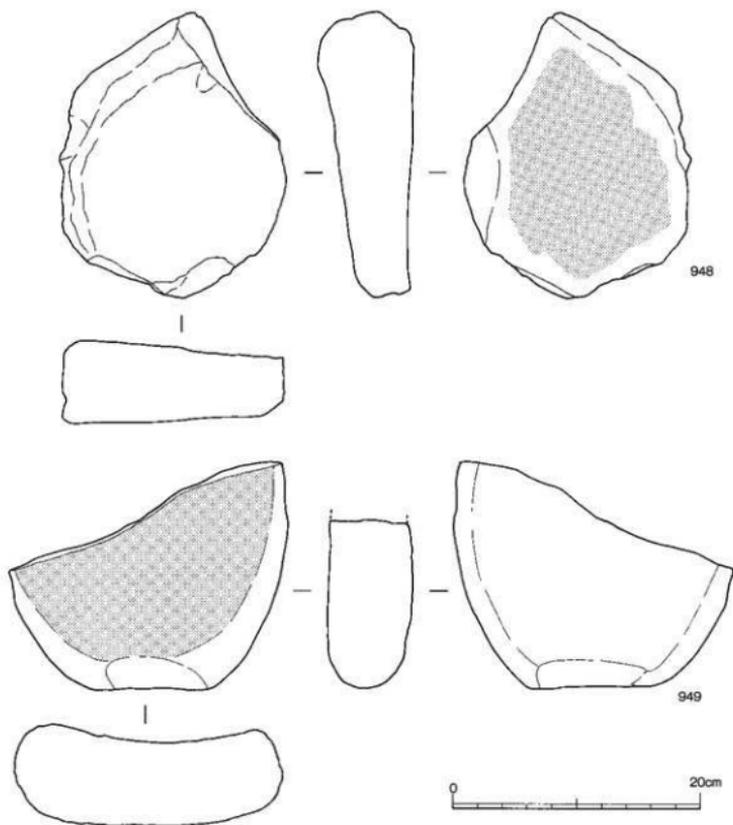
第122図 縄文時代前期～晩期出土石器 (14)



第123図 縄文時代前期～晩期出土石器 (15)



第124図 縄文時代前期～晩期出土石器 (16)



第125図 縄文時代前期～晩期出土石器 (17)

第Ⅵ章 古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物は、調査区の南西側斜面（曲輪3）の部分から住居跡が11軒と遺物が検出された。ただし、表土からは、おびただしい量の破片が出土したことや、表土を除去するとすぐ遺構面が現われることから、現代までかなりの削平を受け、かろうじて11軒の住居跡が残存したものであることが考えられる。この状況から当時、この地にはかなり大規模な古墳時代の集落があったであろうことが伺える。

検出面は、基本的にはⅢa層であるが、層的には不安定であり、その検出面が南側ではⅢ層、北側ではⅦ層に及ぶ場合もあった。また、この曲輪3は同一面で、古墳時代、古代、中世の遺構が検出されるため、その時期区分には苦慮した。なお、この曲輪3以外の地区では古墳時代の遺物・遺構は検出されなかった。

第1節 遺構

古墳時代の遺構は、前述のように11軒の住居跡が検出されている。ただし、2号住居跡は、著しい削平により、床面と思われる硬化面が検出されたのみであり、9号・10号・11号は切りあった関係で検出された。また、1号住居跡から5号住居跡、6号住居跡から11号住居跡の2群にとらえられないこともない。これら住居跡の埋土のほとんどは、Ⅲa層の濁ったものであった。

1号住居跡（第128図）

1号住居跡は、3.6m×3mの方形のプランで、検出面は、基本的にⅢa層である。11軒の住居跡の中では、最も西側に位置する。検出面から床までは20cmと浅い。

埋土からは、縄文時代から古墳時代にかけての小片の遺物が多数出土した。図化は、床着の遺物を中心として行った。

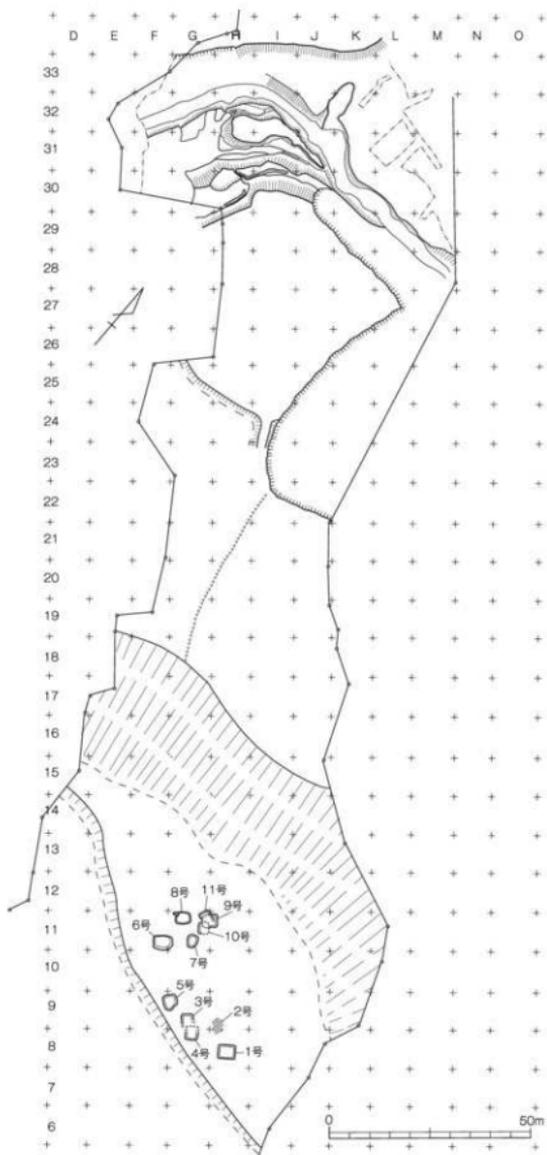
950は、厚さ約2.5mm、最大幅約2.5cmの青銅製の破鏡である（原寸図化）。中央よりややずれた部分に両面から穿孔が行われている。深緑色で表面は非常に滑らかである。文様は観察できないが、図右側の左上部分の盛り上がりが文様の可能性もある。

951は、甕形土器である。胴部から口縁部にかけては、緩やかに屈曲して外反する。頸部から口縁部にかけての外面の調整は、ハケによる掻き上げである。952・953は甕形土器の中空の脚台部分である。ともに、外面はハケ及び接地部は横ナデ、内面は指頭による調整である。柱穴、その他の施設については、精査を行ったが検出されなかった。

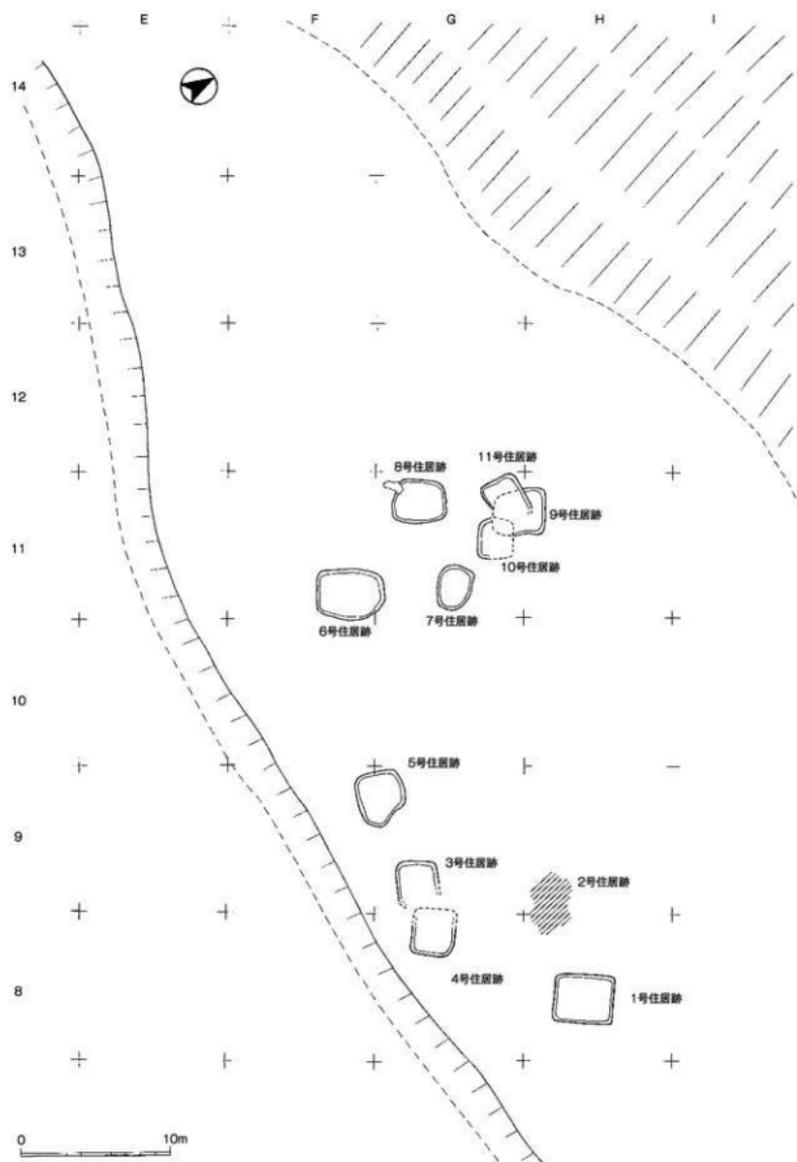
2号住居跡（第129図）

2号住居跡は、1号住居跡から数m西側に位置し、床面と思われる硬化部分が見られ、また、その上面から遺物が出土したため、住居跡として扱ったものである。

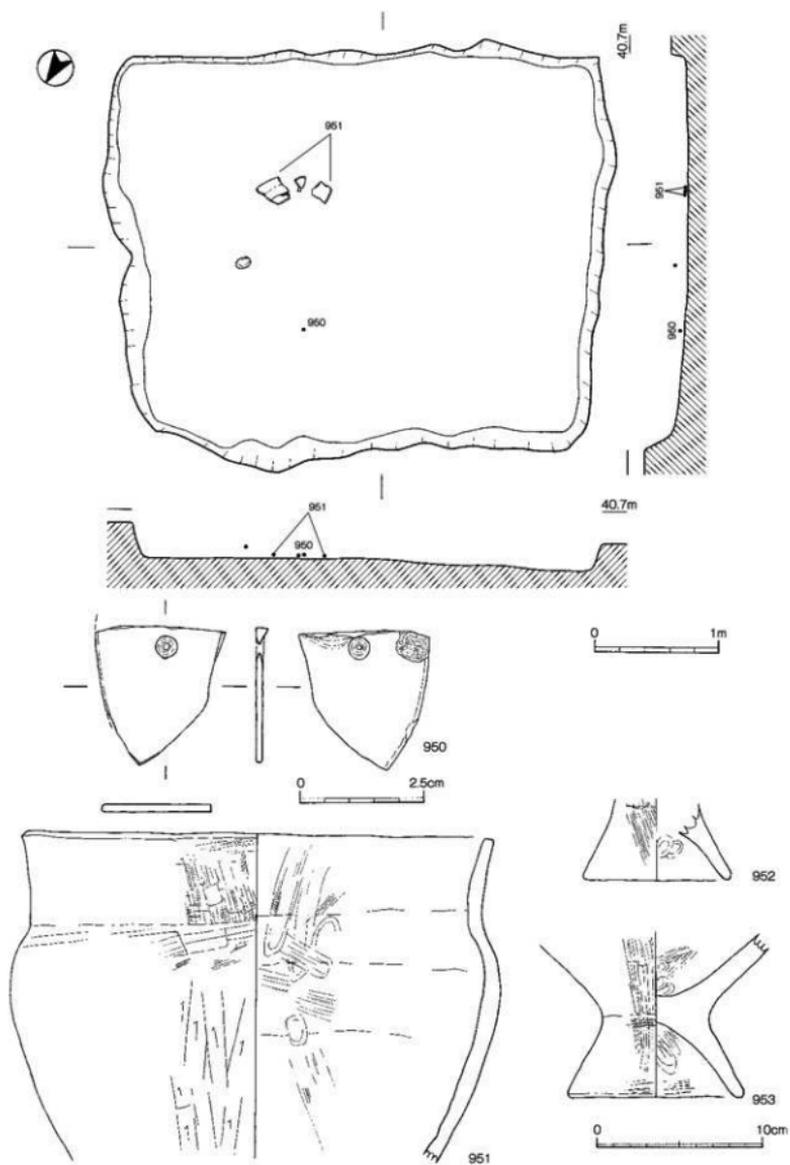
954・955は、甕形土器の脚台部分である。954は、薄手の器壁のものであるが、955は、厚手の器壁で「ハ」の字状に大きく外へ広がるものである。また、944よりも丁寧な作りであり台付鉢の可能性もある。両者ともその調整は、外面はハケ及び接地部は横ナデ、内面は指頭による調整である。956は、高坏の裾部と思われるがその作りは荒い。957・958は、手捏土器である。957は、直径3cm程度の完形品である。958は、直径約9cmで胴部の器形は、957と同様であるが、口縁部



第126図 古墳時代遺構配置図



第127图 住居跡配置図



第128図 1号住居跡及び出土遺物

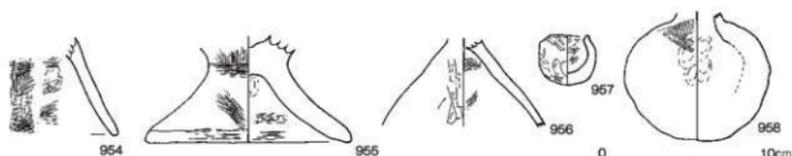
がやや立ち上がっていくものようである。

3号住居跡 (第130図～第132図)

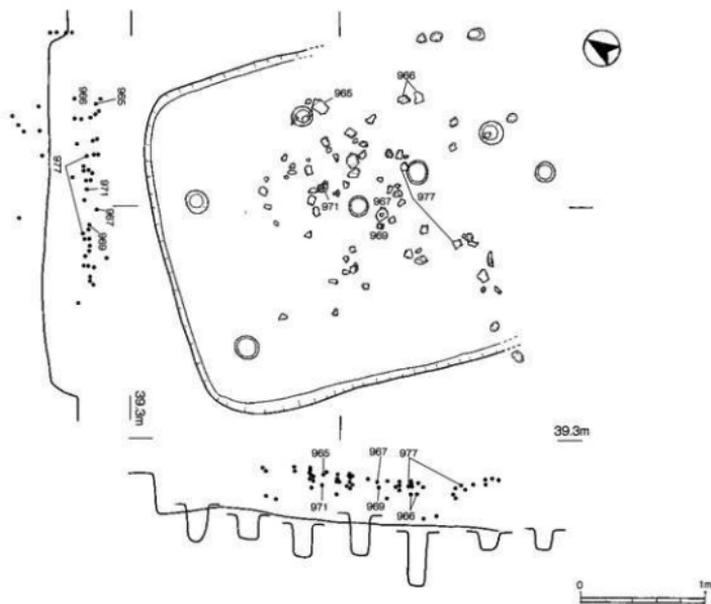
3号住居跡は、東側部分の1/3が消失した状態で検出された。他の住居跡等から考慮すると、3m×3m程度の隅丸方形だったと考えられる。埋土より出土した遺物の量は多く、相対的に甕形土器の出土量が多かったと言えよう。959～977は、甕形土器である。

959～962は、外反する頸部から口縁にかけての破片である。963～966は、胴部から口縁部にかけての破片で、頸部で「く」の字状に外反するものである。頸部から口縁部にかけての調整は、基本的には、ハケによる掻き上げである。967も甕形土器であるが、今までのものに比べると、その大きさは、半分程である。器壁も厚く調整や胎土も粗である。

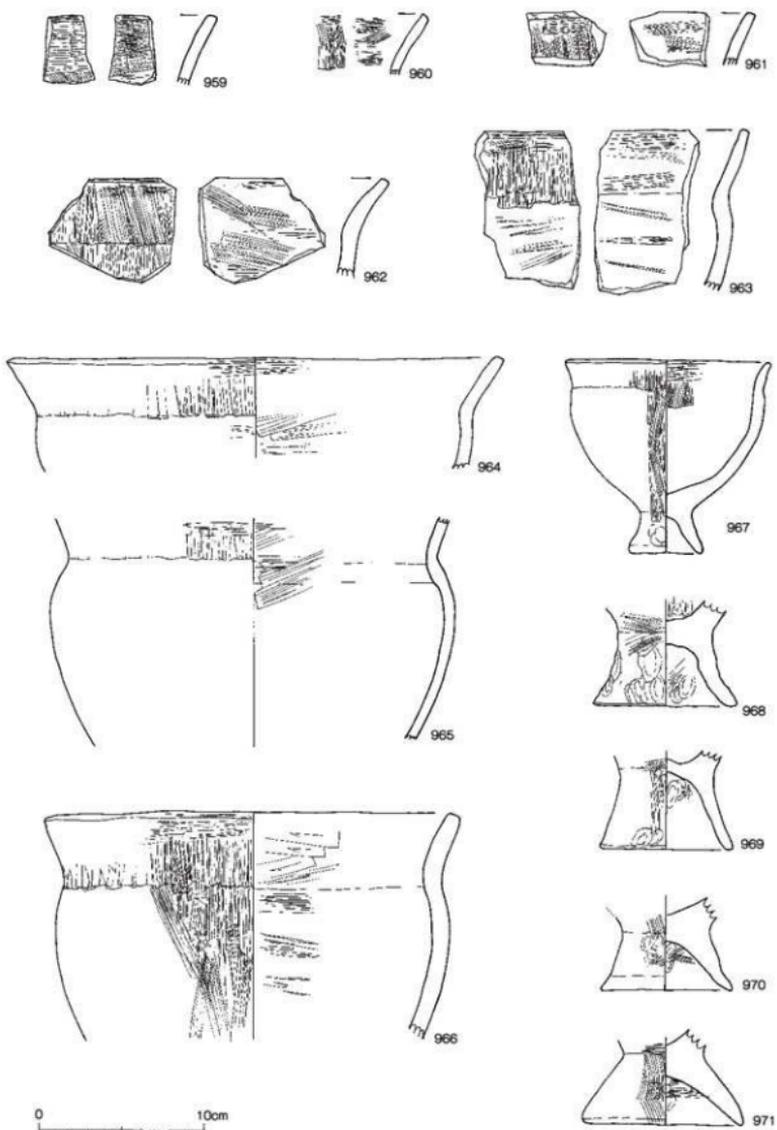
968～972は、甕形土器の中空の脚台である。971は、接地部へ向けてやや内弯し、972は大きく



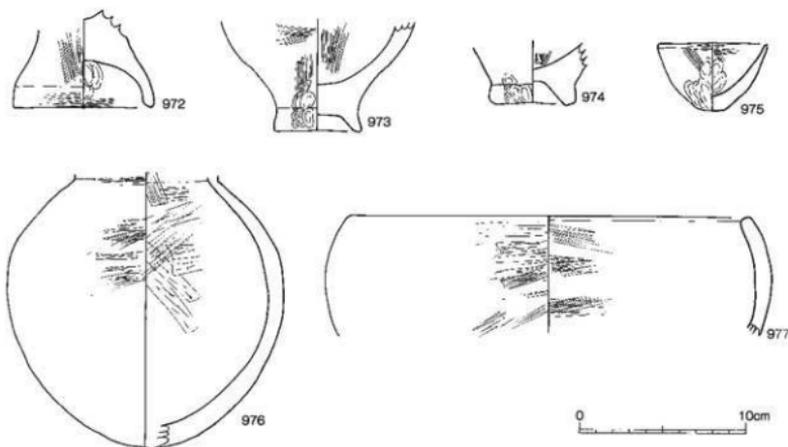
第129図 2号住居跡出土土器



第130図 3号住居跡



第131图 3号住居跡出土土器(1)



第132図 3号住居跡出土土器

内湾するものである。

973・974は、高台状の短い脚を有する甕形土器あるいは、鉢形土器である。975は、口縁部径約5cm程度の鉢状の手捏土器である。976は、丸底ではほぼ球形を呈する壺形土器である。頸部より上部の形態については定かでない。977は、口縁部径約25cm程度の鉢状を呈する土器と思われ、内外面共にハケ及びナデによる調整である。

4号住居跡 (第133図)

4号住居跡は、3号住居跡のすぐ東側にて検出された。4号住居跡は3号住居跡と逆方向の西側1/3が消失した状態で検出された。西側は、3号住居跡と切りあっていった可能性もある。その規模も3号住居跡と同程度だったと思われる。

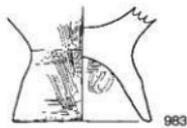
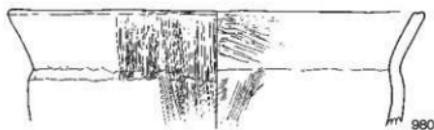
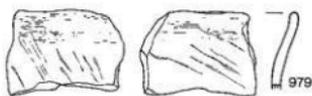
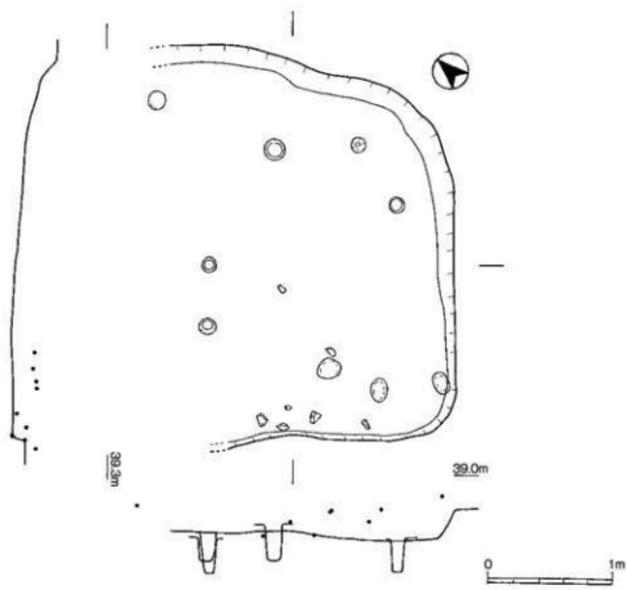
978～980は、甕形土器の頸部から口縁部にかけての破片で、頸部は緩やかな「く」の字状を呈するものである。981は高坏の坏部と思われ、口縁部は甕形土器と同様の緩やかな「く」の字状を呈する。また、978・980・981は、ハケによるいわゆる搔き上げ口縁である。982・983は甕形土器の中空の脚台で982は接地面へかけてやや「ハ」の字状、983はやや内湾である。また、埋土中から磨石が数点検出されたが、縄文時代の磨石の混入と思われる。

検出された柱穴については、3号住居跡も同様であるが、他の時期の柱穴も混在している可能性があり、その構造は明らかにし得なかった。

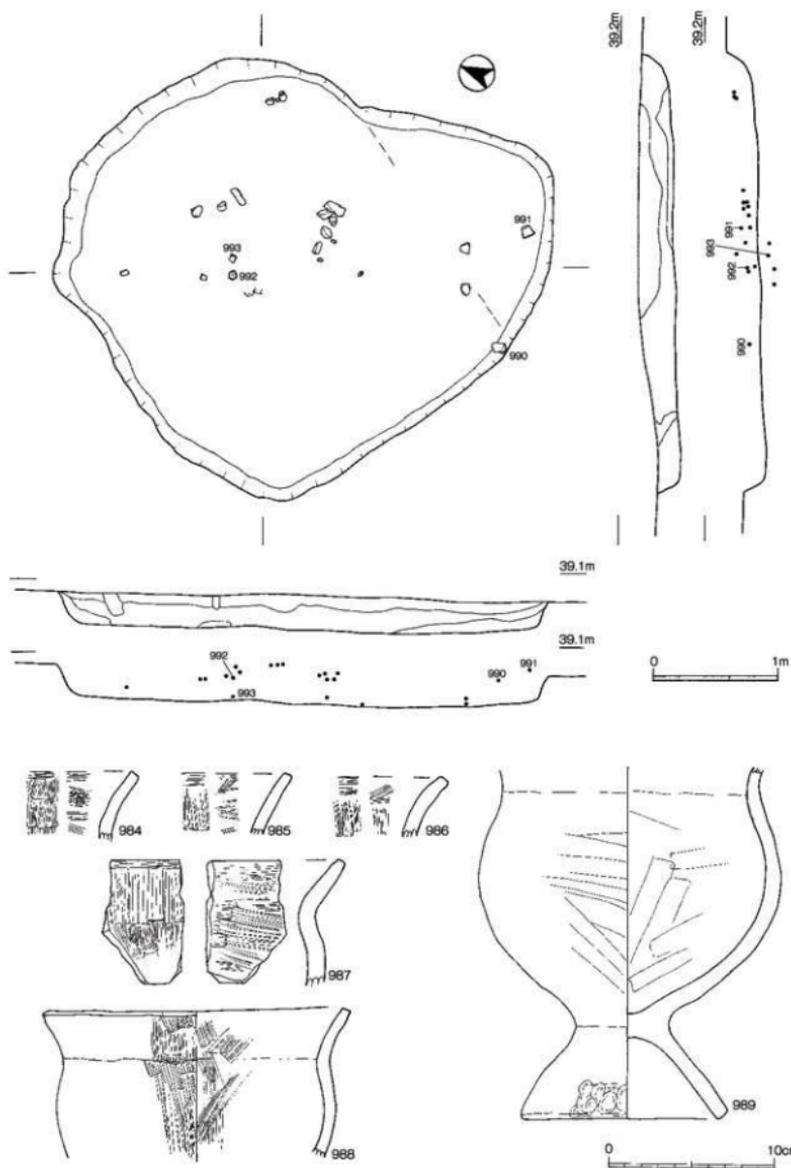
5号住居跡 (第134図・第135図)

5号住居跡は3号住居跡の西側5m程のところで検出された。東側に1mほどの張り出しを持つが他の住居跡の多くが隅丸方形であることから、本来は、南北を長軸とする隅丸方形であった可能性が高い。

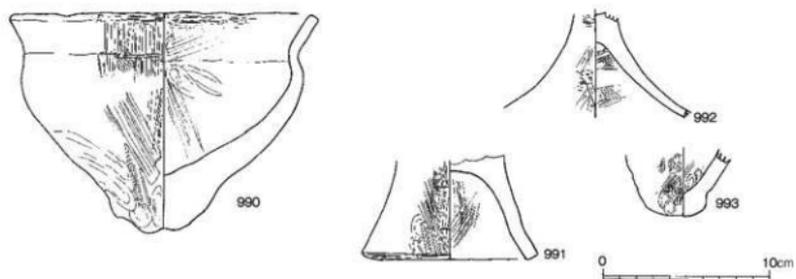
この住居跡の埋土は、下部が濁ったⅢa層とⅣ層の混土、そしてその上部がそれよりやや暗く濁ったⅢa層とⅣ層の混土、検出面は濁ったⅢ層と言うような状況であった。984～986は、甕形土



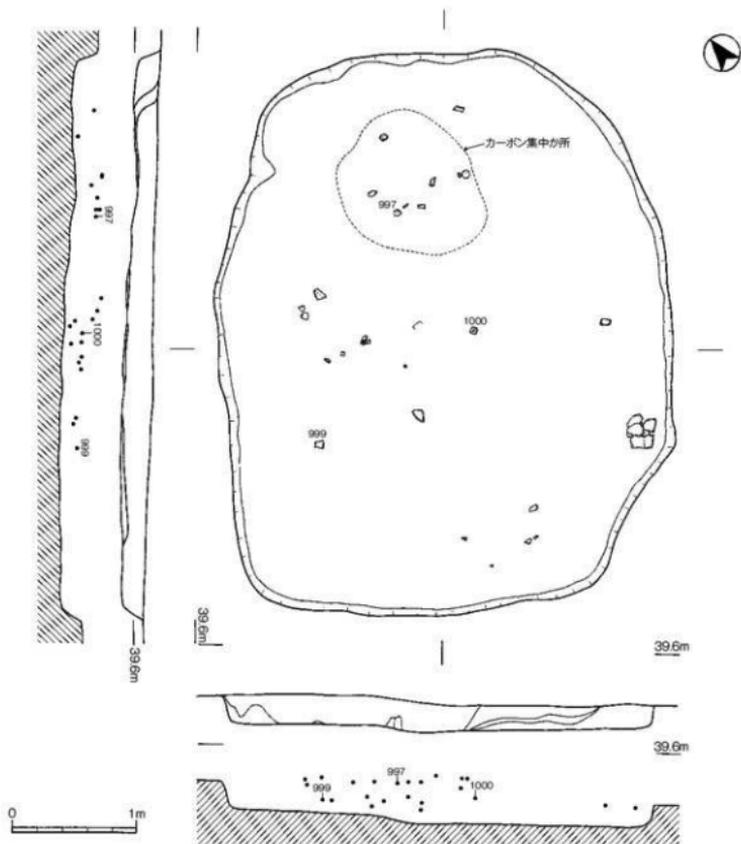
第133図 4号住居跡及び出土土器



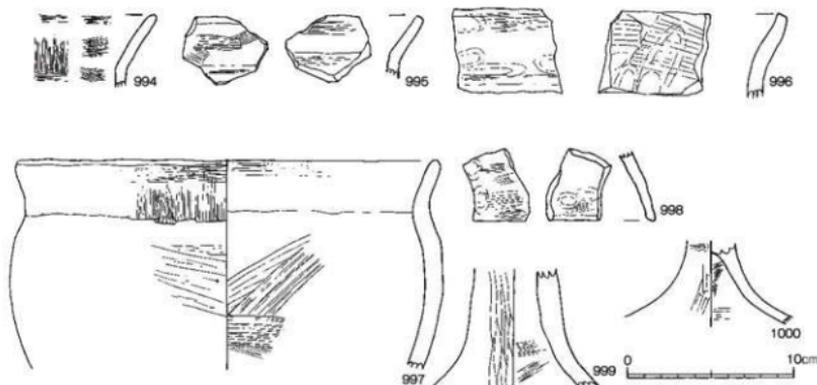
第134図 5号住居跡及び出土土器



第135図 5号住居跡出土土器



第136図 6号住居跡



第137図 6号住居跡出土土器

器の頸部から口縁部、987・988は胴部から口縁部にかけての破片である。いずれも、頸部で緩やかな「く」の字状に外反して口縁部に至るもので、頸部は、ハケによる掻き上げ口縁である。989は、今までの甕形土器とは、器形を異にするものである。口縁部は、欠損するが、球形の胴部から緩やかに外反しながら口縁部へと至るものと考えられる。脚台は、大き目でやや内弯しながら、接地面へと至るものである。

990は脚台部分が欠損したと思われる甕形土器あるいは、鉢形土器である。器壁は厚く、胎土及びその作りは荒い。頸部は内弯した後に外反して口縁へと至る。991は、甕形土器の中空の脚台、992は高坏の裾部である。993は、手捏ね状の鉢形土器の底部と思われる。

6号住居跡（第136図・第137図）

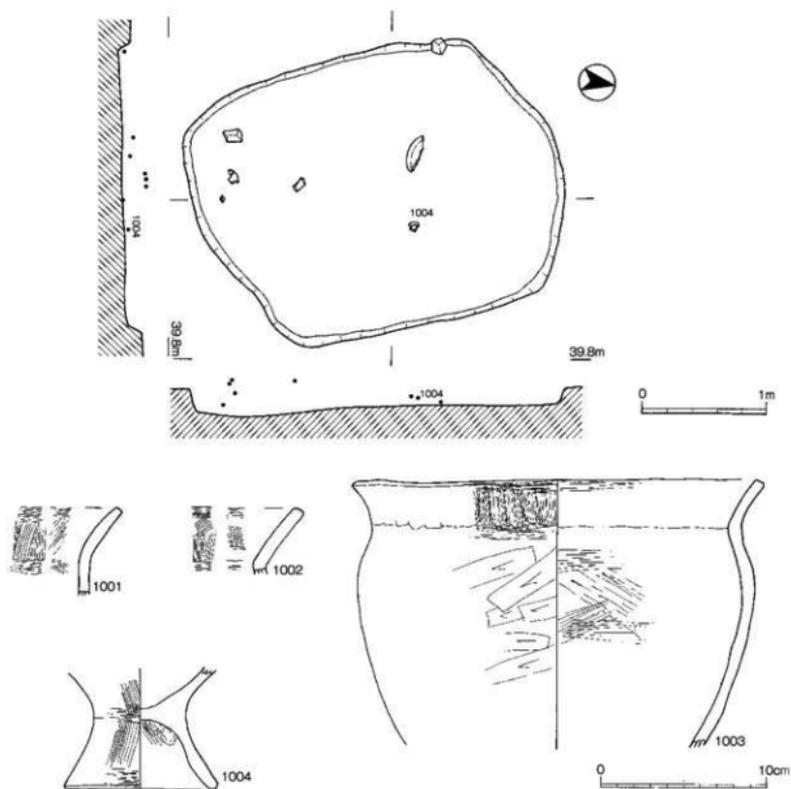
6号住居跡は、11軒の住居跡群の中央よりやや西側に位置する。また、これらの住居跡の中では最大で長辺が4.5m、短辺が3.5mの方形に近い形状である。北東側に炭化物の集中か所が見られた。この炭化物は、検出面でも若干観察されていたもので住居跡が埋まる過程のものである可能性がある。

遺物は、小片や縄文時代等の混入も多く、図化し得たのは数点であった。994～996は、甕形土器の頸部から口縁部、997は、胴部から口縁部にかけての破片である。いずれも、頸部で緩やかに「く」の字状に屈曲し口縁部へ至るものである。998は、甕形土器の中空の脚台であろうか、やや疑問が残る。

999・1000は高坏の裾部で、999の外面は丁寧なヘラミガキである。また、1000は、小さめの高坏と思われるがその作りは丁寧で、裾部は大きく広がるものである。

7号住居跡（第138図）

7号住居跡は、6号住居跡の5mほど北東に位置し、隅丸方形よりやや円形を呈するものである。遺物の出土量は少なかった。1001・1002は、甕形土器の頸部から口縁部、1003は、胴部から口縁部にかけての破片である。いずれも、頸部で緩やかに「く」の字状に屈曲し口縁部へ至るもので



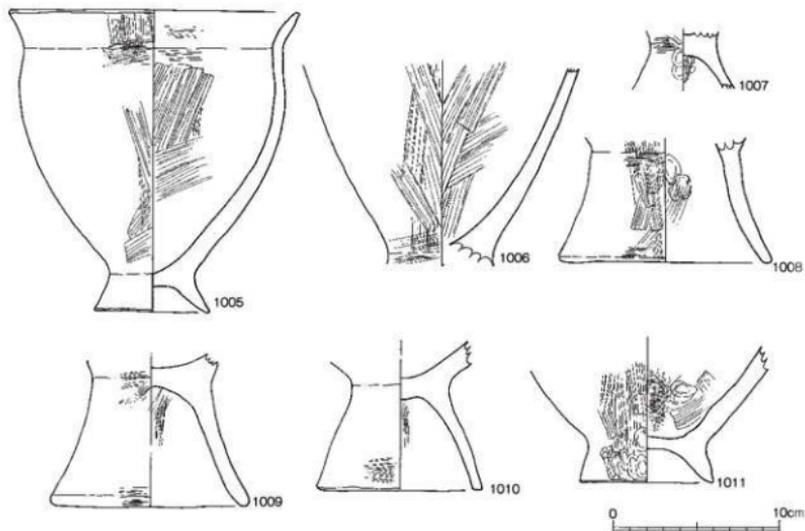
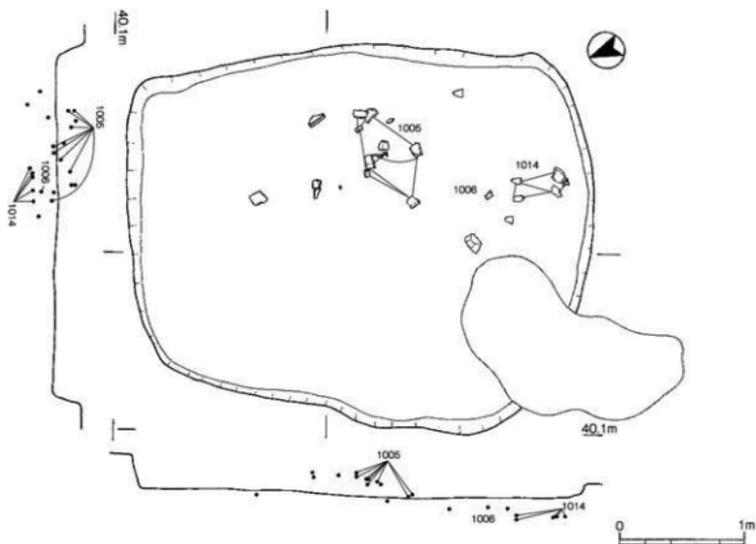
第138図 7号住居跡及び出土土器

ある。いずれも頸部は、ハケによる掻き上げ口縁である。1004は、甕形土器の中空の脚台で、「ハ」の字状に接地面へ至る。

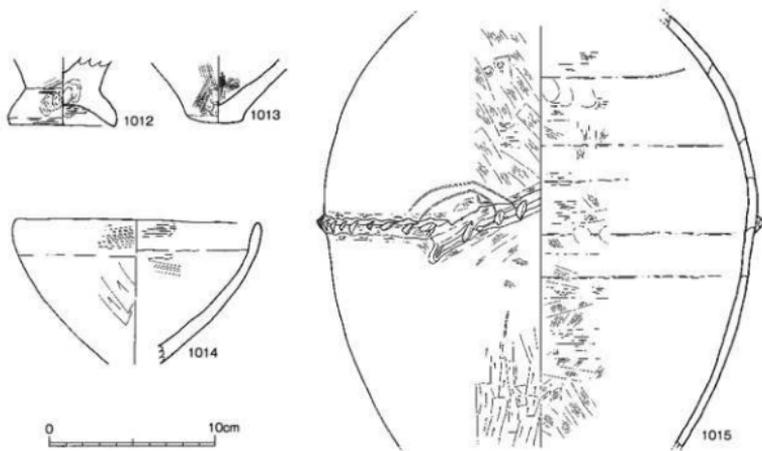
花卉型住居跡の中央よりやや北側から安山岩製の石皿の一部が出土した。縄文時代の石皿の混入か、あるいはその再利用の可能性も考えられるものである。

8号住居跡 (第139図・第140図)

8号住居跡は、住居跡群の中では、11号住居と並んで西側に位置し、3.8m×2.8mと他の住居跡と同様に方形に近いものである。南西側に中世の4号炉跡が住居跡を切っている。埋土中には小片の遺物が多かったが、床着に近い状態と思われる土器片1005と1014などが出土している。1005は、ほぼ完全な形で復元できた。口縁端部は、やや尖り気味で口縁部から頸部・胴部にかけては、緩やかな「く」の字状を呈して低めの中空の脚台へと至る。脚台の先端はやや尖り気味で



第139図 8号住居跡及び出土土器



第140図 8号住居跡出土土器

ある。1006は、甕形土器の胴部片である。

1007から1012までは甕形土器の脚台である。1007は、小型の甕形土器であろうか、それに反し、1008～1010は、1005と比しても大型の甕形土器であろうか。1011・1012は、低い脚台を有する鉢形土器あるいは、甕形土器である。胎土・調整など非常に荒いものである。1013は、丸底ぎみの底部から立ち上がる鉢形土器である。1014は、復元口縁径が約15cmで胴部から緩やかに内弯し、口縁部がやや肥厚する鉢形土器で、口縁部は欠損している。

1015は、壺形土器の胴部で、胴部の上位部分にすれ違う一条の刻目突帯を有するものである。刻目は、棒の工具に繊維を巻きつけたものである。また、すれ違う刻目突帯の下部に幅約2mmほどの沈線が[U]字状に施されている。

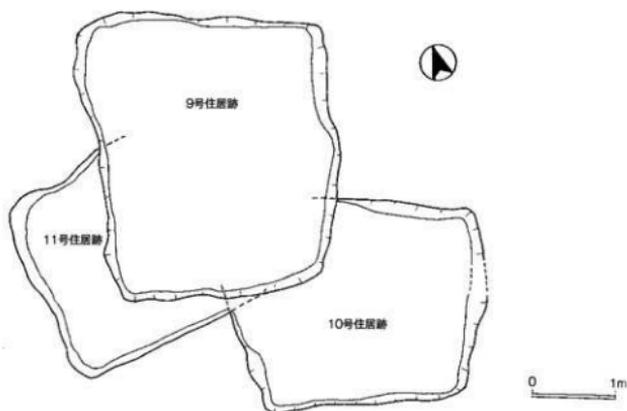
9号・10号・11号住居跡 (第141図～第151図)

9号・10号・11号の三軒は、7・8号住居跡の北側において、お互いに切りあった状態で検出された。当初、プランが見え始めた時点では、間仕切り型の住居跡等も想定して慎重に平面プランの検出にあたった結果、3軒の住居跡が切り合い関係にあることが判明した。北側に9号住居跡があり、南西側に11号住居跡、南東側に10号住居跡が検出された。

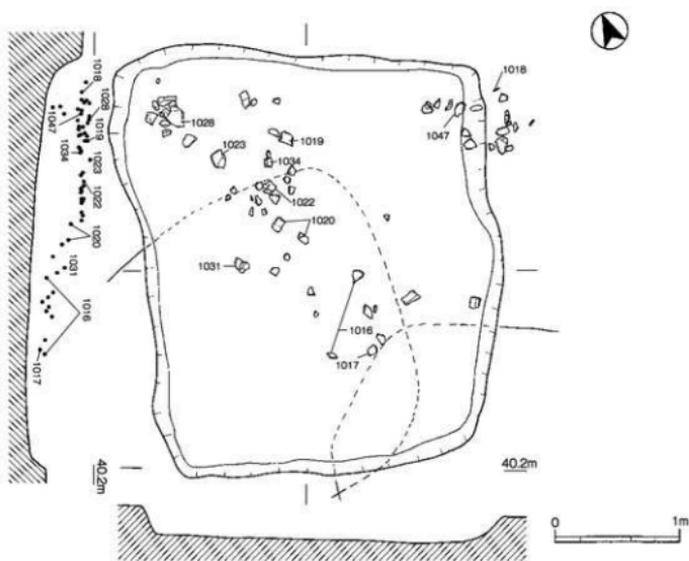
10号住居跡と11号住居跡の新旧関係については、切り合い関係からは、はっきりとしたことはつかめなかった。また、床面のレベル差もほとんどなかったため、遺物については10号住居跡の南側については、混在の可能性もある。

9号住居跡 (第142図～第146図)

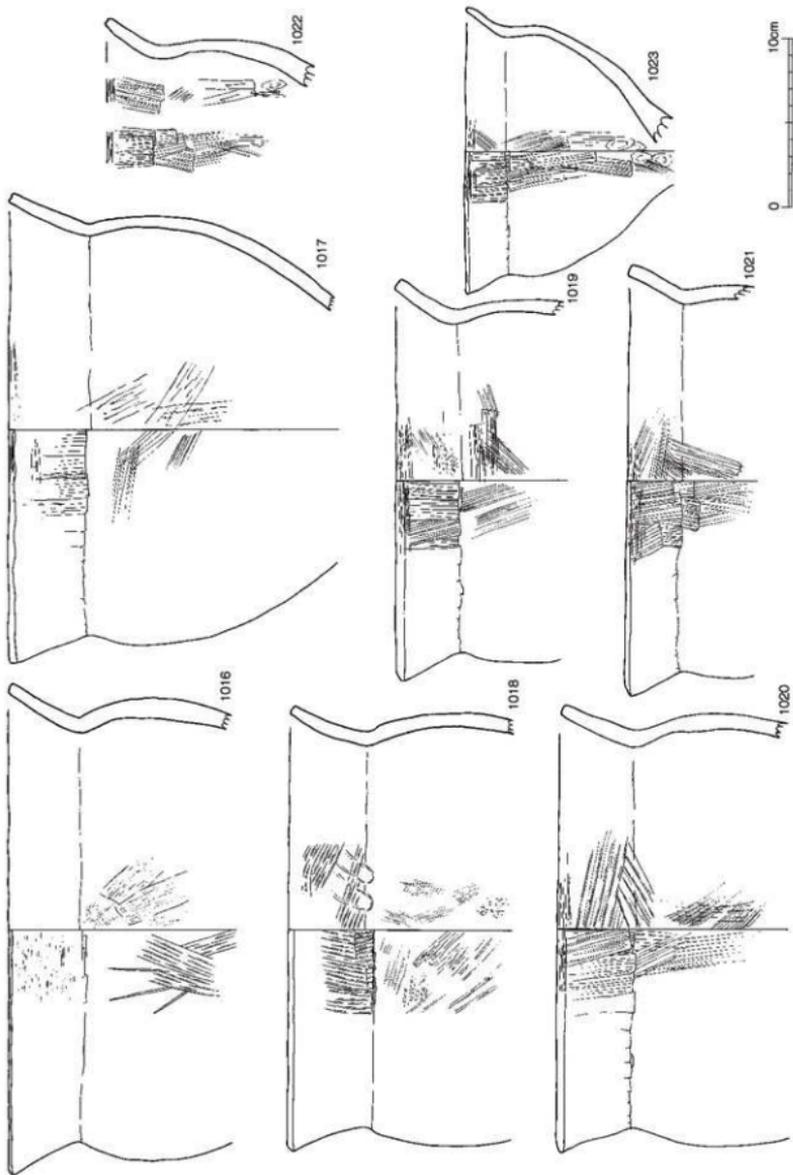
9号住居跡は、上述のように南西側の11号住居跡、南東側の10号を切る形で検出された。平面プランは、他の住居跡と同様の方形でその規模は3.5m×3m程度である。遺物については、検出面及び西側の掘り込み面部分から多量に検出されている。特に西側の掘り込み面より外側部分は遺物の出土状況等から何らかの施設があることも想定して調査を行ったが、遺構は検出されな



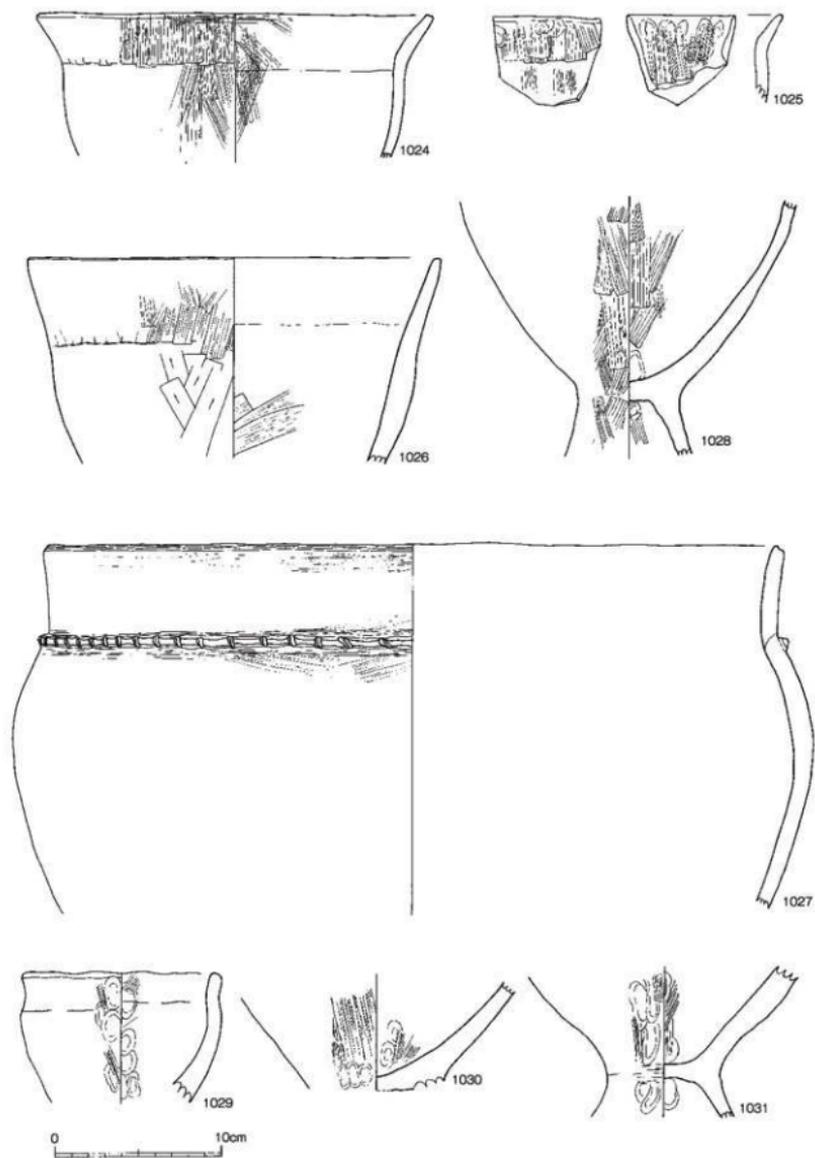
第141图 9·10·11号住居跡位置图



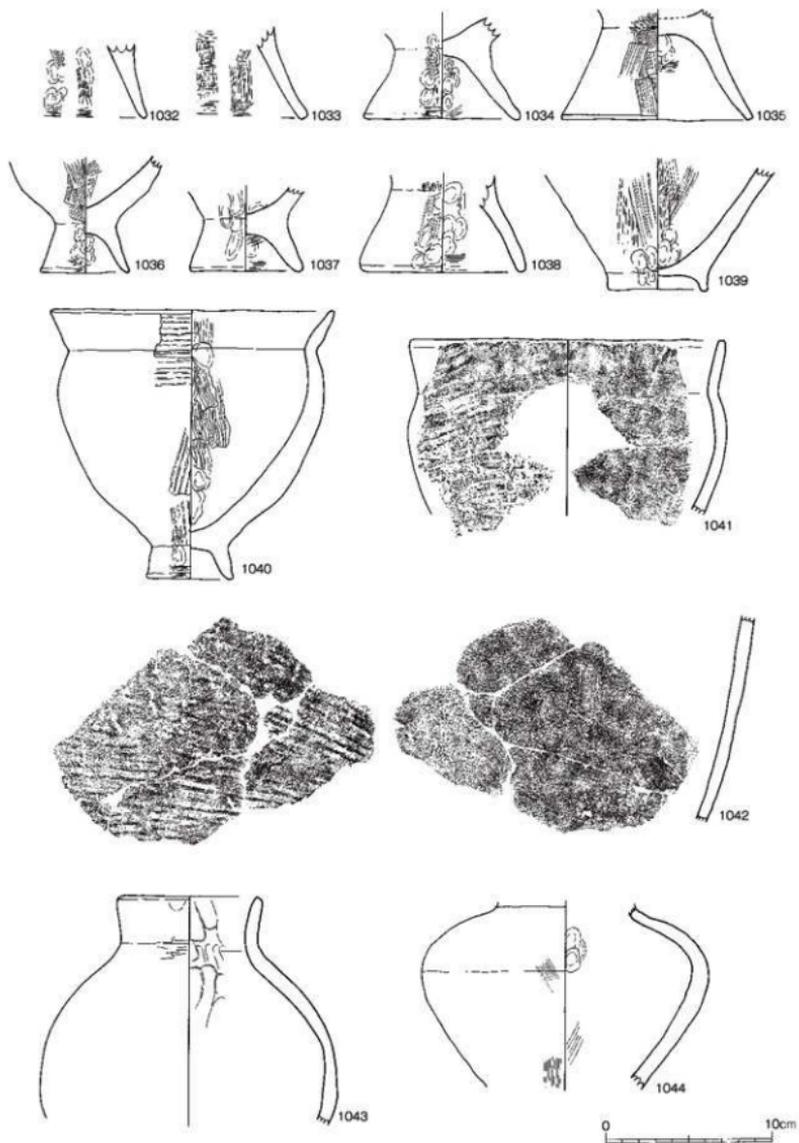
第142图 9号住居跡



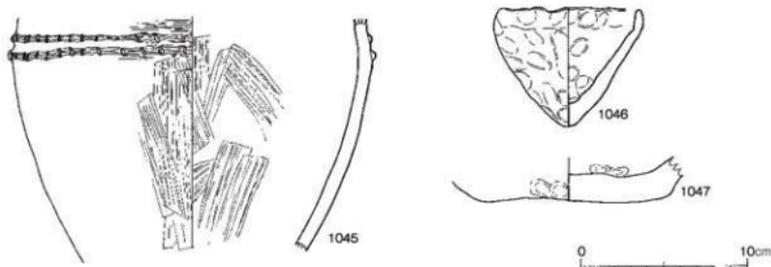
第143图 9号住居跡出土土器(1)



第144图 9号住居跡出土土器(2)



第145图 9号住居跡出土土器(3)



第146図 9号住居跡出土土器(4)

かった。

1016～1025までは、甕形土器の胴部から口縁部に至るものである。頸部で緩やかに「く」の字状に外反するものである。頸部から口縁部にかけての調整は掻き上げ口縁である。また、1017や1021のように頸部内面の稜が明瞭なものもある。1023は、やや小さ目で口縁部に最大径があるもので、器形的には990に近いが、990よりも作りが丁寧である。1025は、小片のため器形その他については定かでない。

1026は、口縁最大径が25cmとやや小さ目で、頸部でやや外反するがほぼ直線状に口縁部へ立ち上がるもので鉢形土器の可能性もある。1029も同様に、鉢形土器の可能性もある。

1027は、この住居跡の中では最も大きな遺物である。最大径が胴部上位にあり、約45cm、口縁部径が約40cmである。大きく張り出した胴部から、頸部で緩やかに「く」の字状にやや屈曲するものの、大きく外反はしない。頸部には、一条の刻目突帯を施す。

1028・1030・1031は、甕形土器の胴部についての破片である。1032～1039は、それらの裾部である。1039は、極端に裾が短いもので鉢形土器の可能性もある。

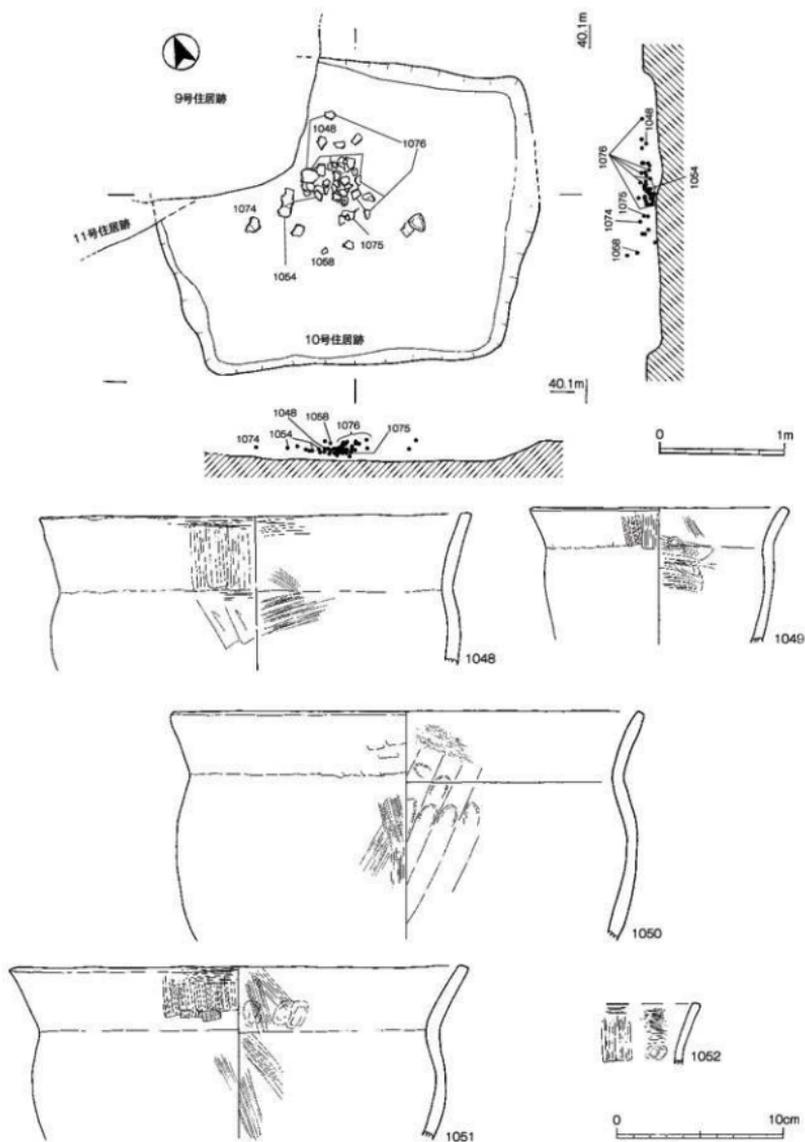
1040・1041は、外面の調整に叩きが施される甕形土器である。また、1042も叩きが施されたもので、内面の調整はナデである。器形については、甕等の大型のものになるものであろうか。ただし、外面に叩きのある遺物は、10号住居跡で数多く出土していることから、10号住居跡の遺物の可能性もある。この叩きのある土器で、完形でその器形が明らかなのは、1040のみである。

1043～1045は、甕形土器である。1043は、胴部中央に最大径があり、頸部から緩やかに口縁部へ立ち上がっていくものであるが、大きく外反はしない。1044は、胴部最大径胴部中央部よりやや上位にあるもので、算盤玉状の器形である。底部と口縁部は、欠損している。1045も1044と同様に底部と口縁部を欠損している。胴部中央よりやや上位に二条の刻目突帯を有する。

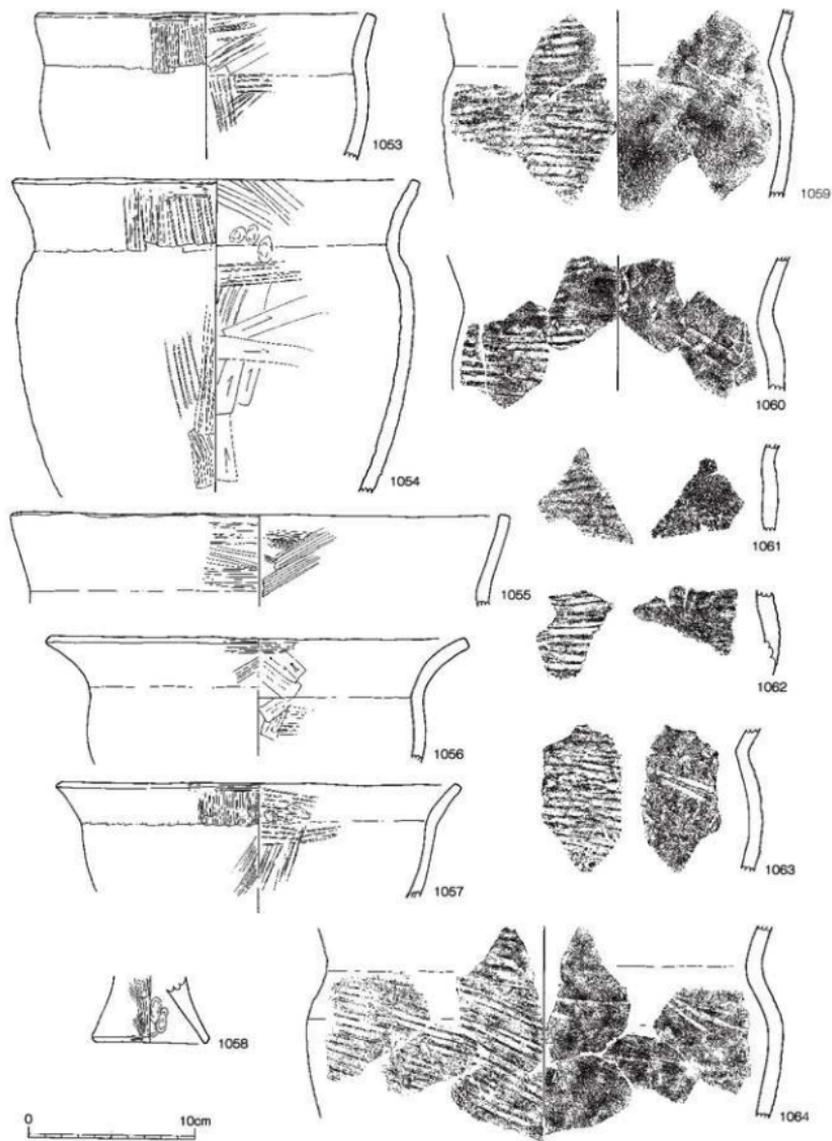
1046は、手捏土器で、逆三角形を呈し、口縁部がやや内弯する。指頭により全体的な調整を行っている。1047は、鉢と思われるが、その他は詳細不明である。

10号住居跡(第147図～第150図)

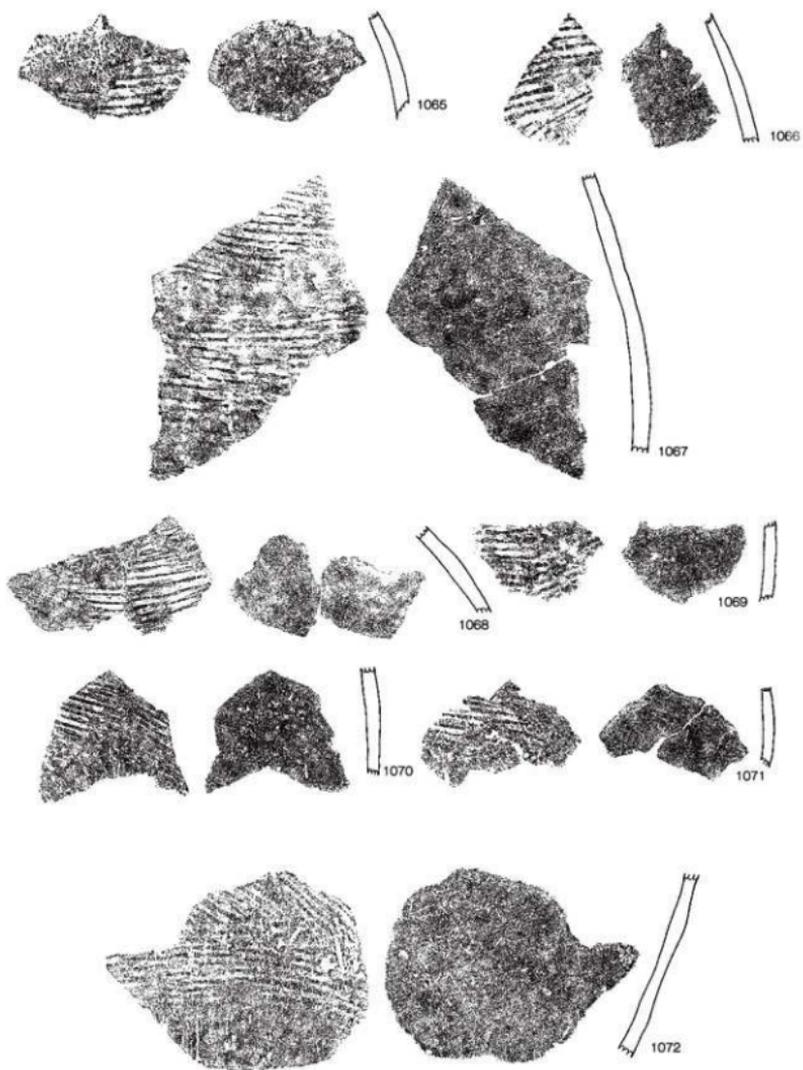
10号住居跡は、9号住居跡に北側を切られた状況で検出された。その規模は3.5m×3m程度の方形であり、他の住居跡と同様に削平が著しく、検出面から床面までは20cm弱であった。しかし、その中央部分では、床着に近い形で大量の遺物が出土した。



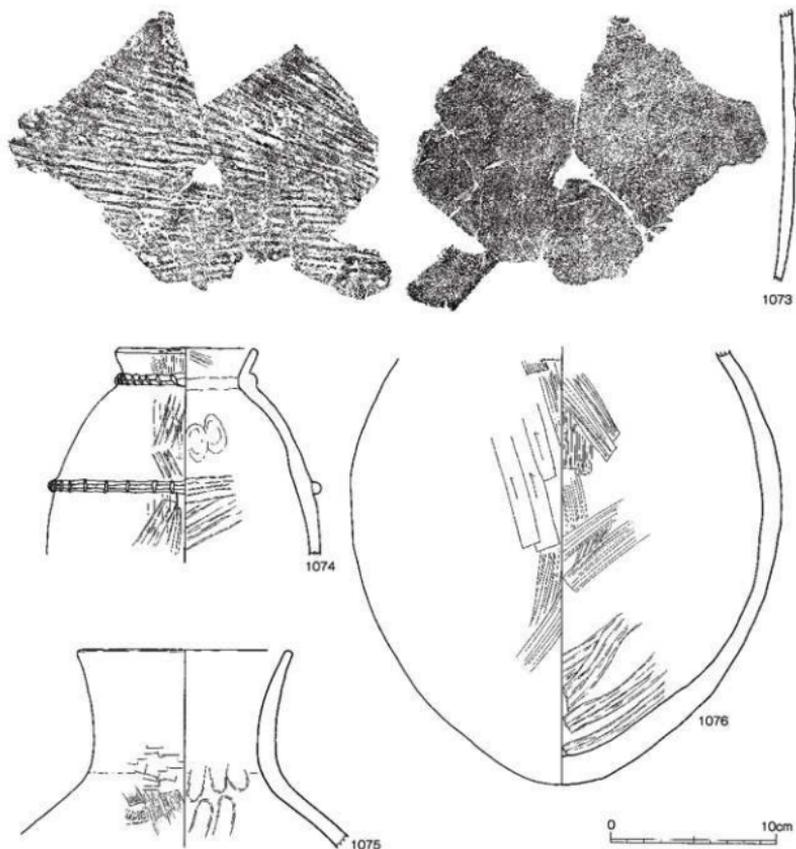
第147図 10号住居跡及び出土土器



第148图 10号住居跡出土土器(1)



第149图 10号住居跡出土土器 (2)



第150図 10号住居跡出土土器 (3)

1048～1057までは、甕形土器の胴部から口縁部に至るものである。頸部で緩やかに「く」の字状に外反するもので、頸部から口縁部にかけての調整は1055と1056を除きそのほとんどが、掻き上げ口縁である。また、これら二個体は、鉢形土器に近い器形の可能性もある。1058は、これらの甕形土器の中空脚台である。

1059～1073は、9号住居跡でも説明したように、外面の調整が叩きであり、内面の調整は若干の当て具痕が見られるものの、基本的に丁寧なナデである。その器形は1059～1064のように、胴部が張り、頸部で緩やかに「く」の字状に外反して口縁部へ至る甕形土器と、1065～1073は須恵器の甕のように大型になるものもある。ただし、甕形土器については、その叩きは、胴部最大径よりやや下位の部分から口縁部にかけて施されており、脚台部分に叩きがあるものは見当たらない。



第151図 11号住居跡

1074～1076は、壺形土器である。1074は、胴部最大径よりやや上位と短い口縁部へ「く」の字状に外反する頸部に刻目突帯を施すものである。1075は、復元口縁径が約12cm、緩やかに外反しながら、口縁部へ至るものである。外面の調整はハケ、内面の調整は指頭ナデである。1076は、卵型を呈するもので、頸部下部から口縁部にかけては、欠損している。色調は、黒褐色をし、外面の調整が粗いケズリとハケ、内面が粗いハケである。

11号住居跡

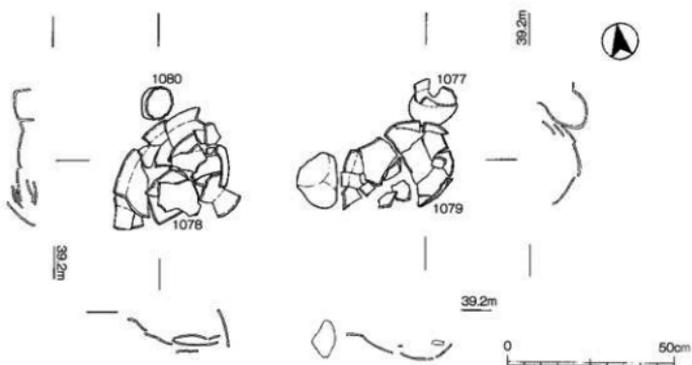
11号住居跡は、9号住居跡に半分以上を切られた状態で検出された。他の住居跡とその規模は同等の3m×3m程度の方形だったと思われる。検出面から床面までは、10cm程度と浅く、埋土からは小片の土器は出土したが、図化し得るほどのものはなかった。

第2節 遺物

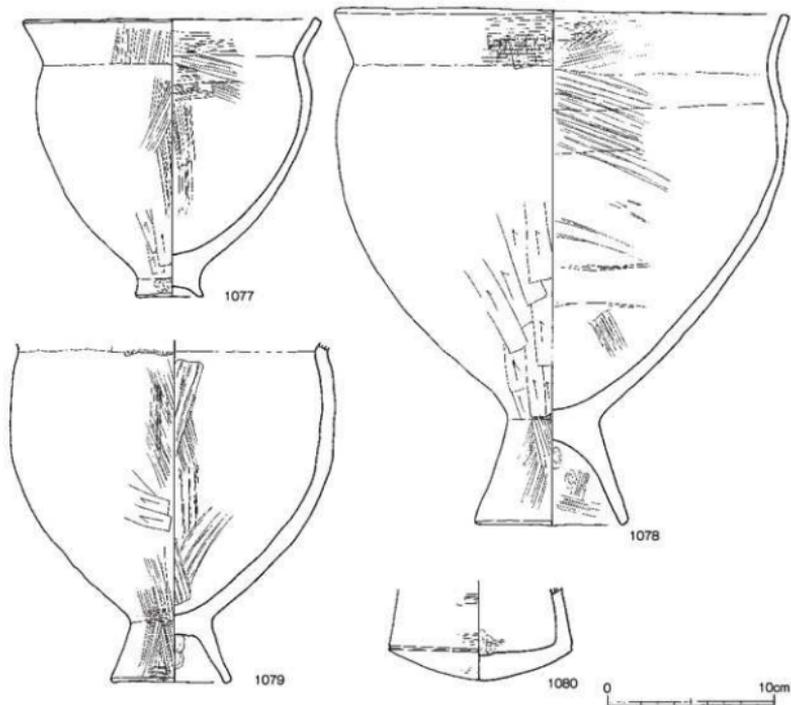
表土や攪乱層からは、多量の土器が出土したが、包含層からの出土は少なかった。なかでも良好な出土状況であったものが、第152図の1077～1080の4点の土器である。1080が上部を削平などにより欠損しているものはほぼ原位置を保っていると思われる。

出土地点は、6号住居跡の南側約2mほど南側である。遺物の下に掘り込みなどの遺構の有無についても精査を行ったが、遺構は検出されなかった。

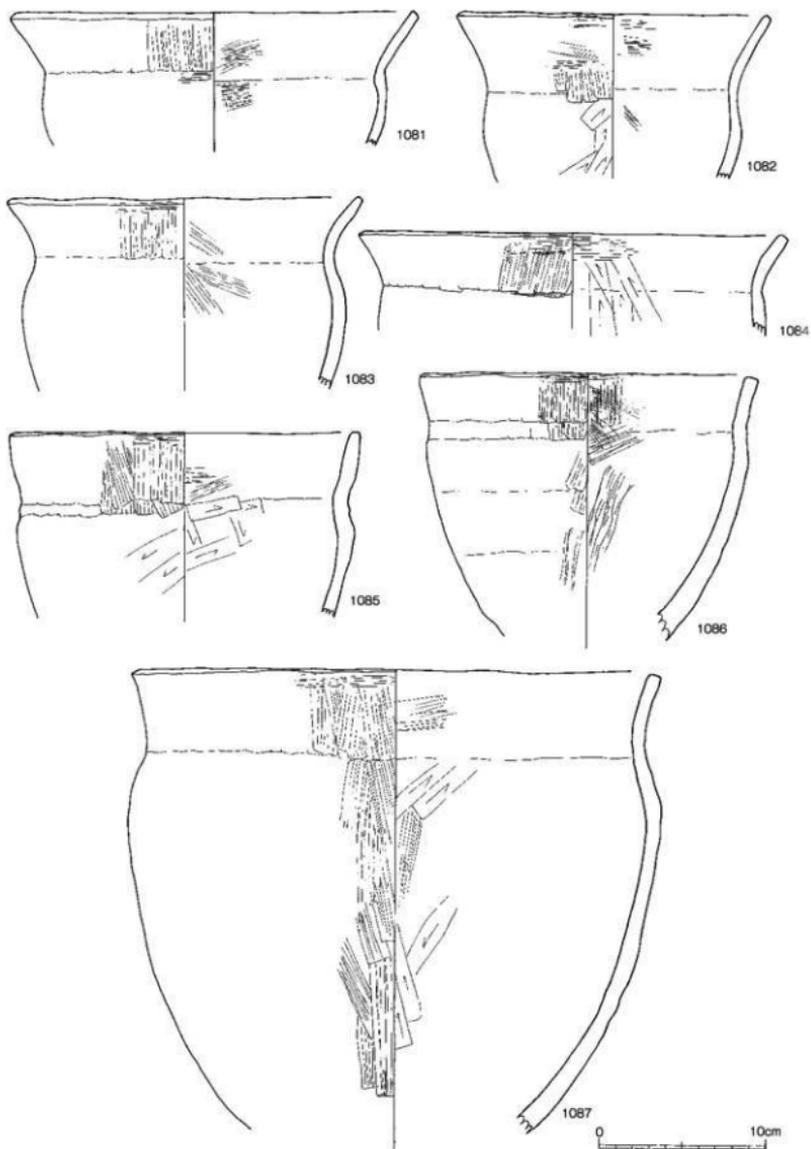
1077は、口縁部がやや欠損するのみで、ほぼ完形で出土した。復元口縁径約17cmで低い中空の脚台から緩やかに球形に近い形で立ち上がり、頸部で「く」の字状に外反するもので、頸部内面には稜線を残すものである。1078は、大型の壺形土器でスマートな中空の脚台から1077同様に立



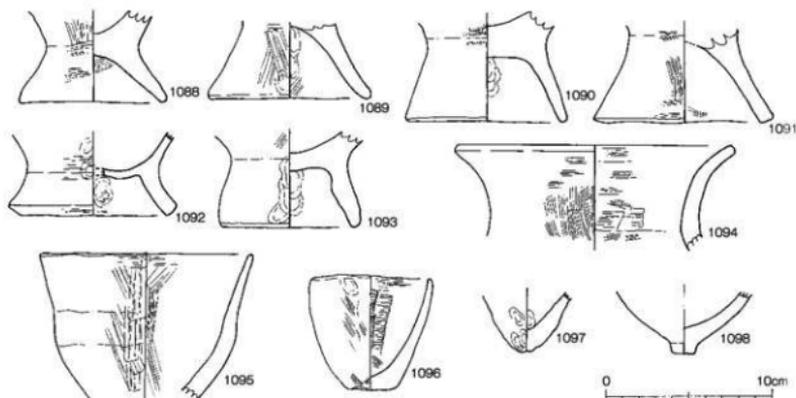
第152圖 包含層出土狀況



第153圖 包含層出土土器 (1)



第154図 包含層出土土器 (2)



第155図 包含層出土土器(3)

ち上がり口縁部は外反するものである。ただし、頸部内面の稜線はほとんど見られず、曲線的である。1079は、1077と1078の中間的な大きさである。口縁部は欠損するもの、外反するものと考えられる。1080は、埴型土器である。現存最大径が約11cm、底部は丸底で底部から胴部への立ち上がり部分に底部と胴部を区別するかのような細い沈線を施す。上部は欠損しているが、鼓状の器形になると思われる。

1077～1088までは、住居跡の周辺に集中して出土し、遺構の可能性もあるものであったが、以下の包含層及び採集品である。1081～1087までは甕形土器であり、その頸部の調整はほとんどが掻き上げ口縁である。1087以外は、復元口縁径が約20数cm程度であるが、1087は35cm程度とかなり大きい。

1081～1084は、器壁も薄く作りも丁寧である。また、頸部から口縁部にかけての「く」の字状の外反も1081を除いて緩やかである。1085・1086は作りも粗く頸部からの立ち上がりもやや外反するだけである。また、1086は、叩きによる調整の可能性もある。

1088～1093は甕形土器の中空の脚台で、直線的に張り出すもの「ハ」の字状に張り出すもの、1092のように底部は薄く短い脚や、1093などのように非常につくりの粗いものなど様々である。

1094は、壺形土器の口縁部で、復元口縁径が約20cmで作りも比較的丁寧である。1095は、鉢形土器の底部の欠損したものと思われる。やや胴部が張り、頸部で若干外反し、口縁端部は細く納める。粘土の接合面も外面から観察できる。

1096・1097は、手捏土器で、1096はジョッキ状、1097は、そのまま口縁部へ至るものと考えられる。1098は、埴型土器の底部で精製された粘土を用い丁寧なナデ調整が行われている。

第Ⅶ章 古代の調査

古代の遺構は、中世の曲輪で言うと、曲輪3（E・F-14区とE・F-11区、F・G-11区、G-8・9区、H-8区の2地域）と曲輪1（I-25区、J-25区）の2か所から検出された。つまり、向柵城跡の北端と南端から検出されたことになる。中央部分（曲輪2）からは古代遺物はほとんど出土しなかったことから、中央部分は生活の場として用いられなかったものと思われる。

古代の遺構は、竪穴遺構1基、円形周溝遺構1基、土坑5基が検出された。また、これらの遺構の周りには多数の柱穴が検出されたが、建物跡として認定できるようなものはなかった。

第1節 遺構

1 竪穴遺構

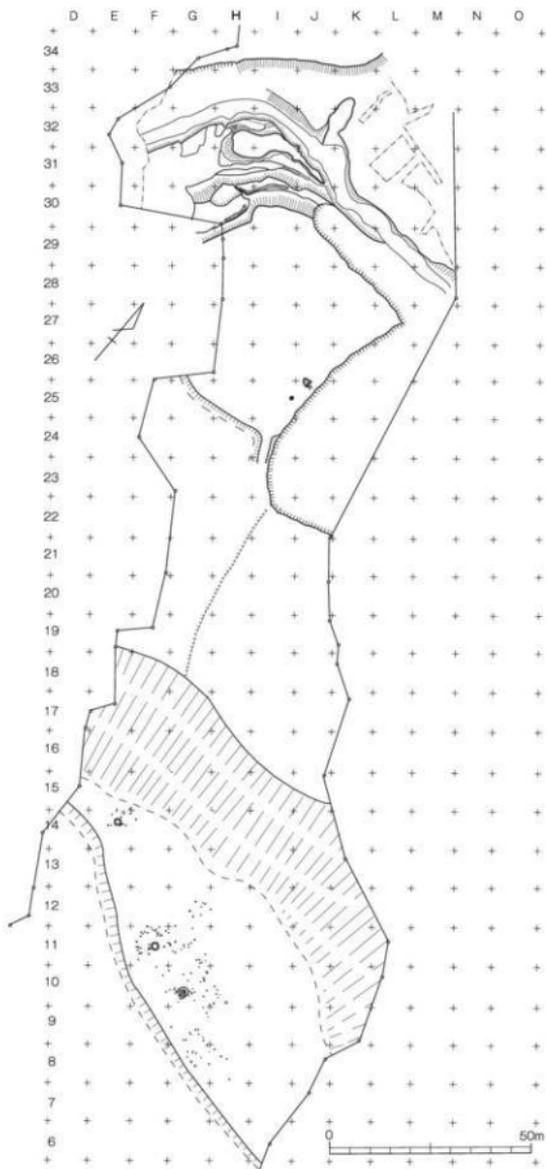
E-14区の中央部から検出された。標高は39.0m～38.8mであり、東から西へ緩やかに傾斜した地形である。掘込は検出面から20cm～23cmの深さがあり、竪穴遺構の西角に土師器の甕がそのまま置かれたような状態で検出された。甕の出土状況が平面プランより若干上面であったため竪穴遺構の本来の掘込み面は、まだ上であったものと考えられる。埋土や出土した土師器の甕から判断して古代のものと思われる。なお、東角の土坑は柔らかな埋土であり、後世に掘られたものである。

この土師器の甕（1099）は図159のような状態で検出された。外面はナデやハケ目が、内面は底部からはケズリが上面に向かい、腹部は左斜め上に向かって施され、また口縁部にはハケ目が施されている。内部の土壌は、埋土とほぼ同じであり、遺物等は検出されなかった。ただし、竪穴遺構の周辺からは、同時期と思われる柱穴が検出されたが、建物、その他の施設としての認定はできなかった。

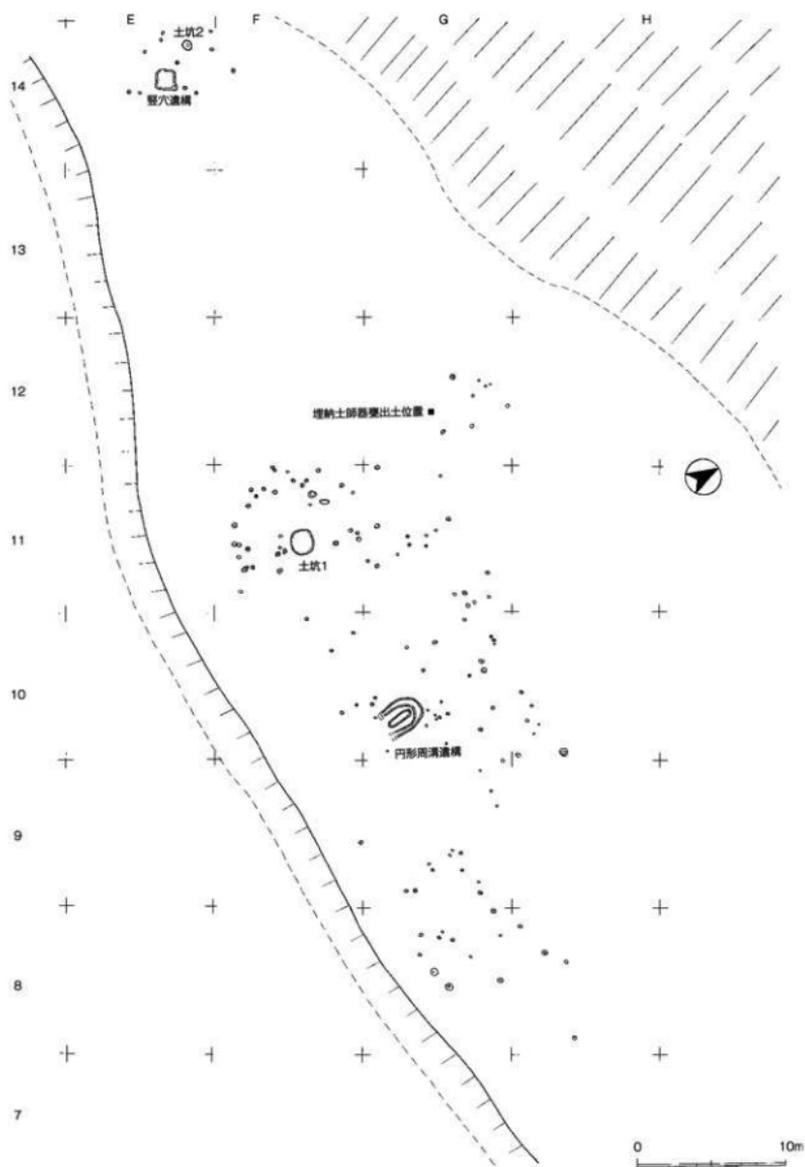
2 円形周溝遺構

いわゆる曲輪3の中央部、G-10区から円形周溝遺構が、標高は39.3m～39.4m、北から南側に傾斜する状態で検出された。遺構の残りは悪く、検出面からその底面まで、深いところでも10cm～20cm前後であり、南端部は、削平されていた。長軸は、ほぼ南北であり、前述のように南側を削平されていることから、遺構は馬蹄形状に見える。土師皿、坏が出土した主体部は、長軸が190cm、短軸は60cm。周溝部を入ると残存状況では、長軸260cm（推定では300cm）、短軸は220cmあった。土師皿、坏、埴の4点が主体部の南側に埋納した状態で検出された。人骨あるいは、木棺などの埋葬に関する遺物が検出されなかったため、「円形周溝遺構」とした。溝の埋土は、Ⅲa層が黒く濁ったもので微細の炭化物等が混入していた。なお、周溝部北側の柱穴は、埋土も柔らかくてこの遺構の埋土とは異なっていたことから、同時代のものではないと判断した。

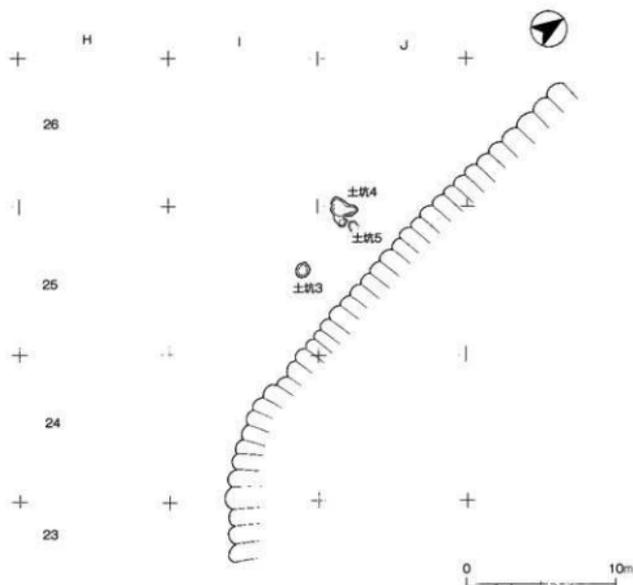
周溝の主体部南側からは、土師器の皿が2点、土師器の坏が2点の計4点が出土した。全て底部の処理はヘラ切り底であり、その後の成形等は若干の板ナデ状のものが観察されるものもある。皿（1100、1101）は2枚重ねの状態、他の坏（1102、1103）は、その南側に並べてあった。これらの土師器の上下からは、目立った炭化物は検出されなかった。皿については、1100が、径が



第156図 古代全遺構配置図



第157图 古代遺構配置図(1)



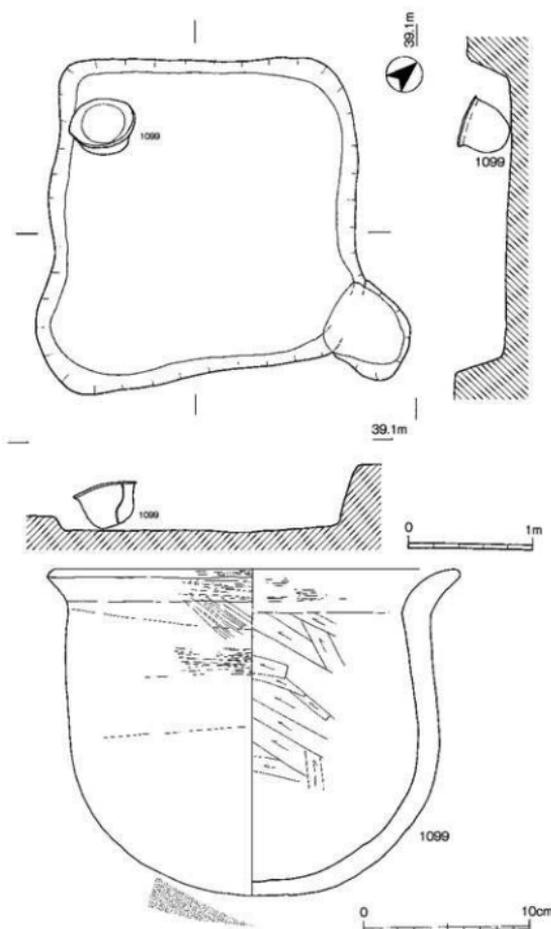
第158図 古代遺構配置図(2)

8.9cm, 器高は0.9cm~1.6cm, 1101は径が8.9cm, 器高は1.8cm~2.0cmと低く, 底部の切り離しは粗い。1102は坏である。径は13.6cm, 器高は4.1cm, 体部は底部からなだらかに内弯して立ち上がり, 口唇部はやや端反る。皿に近い形状なし, 高台は充実した高台である。皿同様に安定感に欠け作りは粗い。1103は坏である。体部は内弯して立ち上がり, 口唇部は端反る。底部の径は約5.8cmあった。板ナデ状の痕跡が若干見受けられるが定かでない。

3 土坑1

F-11区付近は, 土師器の小片が多数出土した部分であり, 遺構の上面にもかなりの土師器の小片が出土している。この土坑の埋土は茶褐色でやや硬質な小さな塊を含む土及び, II層及びIII層の混土と微細の炭化物である。前述のように, 土坑周辺にも古代の土師器が多数出土しており, 土師器の集中出土域として取り上げている。土坑の平面プランは, ほぼ円形で, 遺構からは, 土師器の甕等, 土師器の小片破片が多数出土した。また, 特に1104の下からは多量のカーボンを検出した。中央部に第161図のように2個の石を確認した。土坑の平面プランより若干低い位置に横たわるような状態で軽石が出土し, もう一つは, 敲石もしくは凹石の先を床面に向け, 破損部を天に向けて直立させた様な状態で出土した。平面プランは標高35.1m~35.0mで, 北から南側に傾斜する状態で遺構の端から端の高低差は7cm程度でほぼ水平位置であった。また, 土坑1の中央から西へ約40cm~50cm, 遺構検出面から約15cm下から, 土器と小石の計4点が出土した。

1104は先ほど述べた, 軽石である。扁平な楕円形を呈し, 長径は60cm, 短径は20cmである。1105は石材が安山岩で, 古代において縄文時代の敲石, もしくは凹石を転用したものであると思われる。高さは約24cm, 長径は約14cm, 短径は約9cm程度であった。



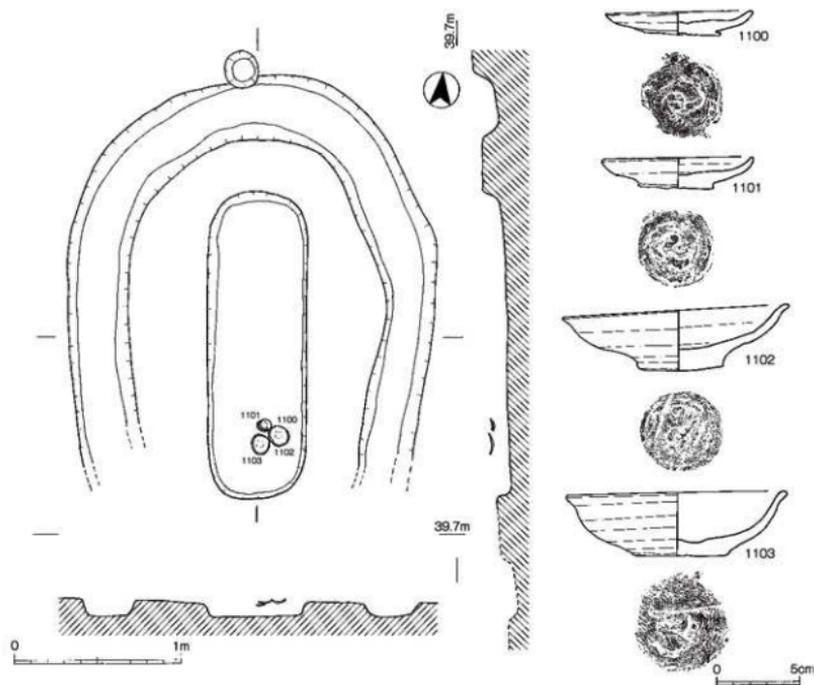
第159図 堅穴遺構及び出土遺物

出土した石器は、縄文時代の石皿や台石の再利用品と考えられる。元來は、検出された状況から、底面に台石を立てその上に石皿を置いていたなどの状況が想定される。石皿の下からの遺物の出土はなかった。1108は、安山岩で、現存長が27.0cm、幅が37.8cm、厚さは13.0cm、重さは20,200gの石皿の半欠品である。図右側の網掛け部分は、擦り面が残存しているが、その左側部分は剥離している。残存している形状から判断して、元來は片面がかなり使い込まれた大型の石皿であったことが伺える。1109は、扁平な凝灰岩で、長さは31.6cm、幅は24.2cm、厚さは7.8cm、重さは6,000gある。所々に磨面を確認できる。1110も扁平な凝灰岩で、長さは27.0cm、幅は

多数出土した土師器の破片から2点(1106, 1107)を図化した。1106, 1107は塊の底部である。いずれも、体部から口縁部を欠損する。1106の高台は「ハ」の字状に開き端部は丸くなる。径は6.9cm、脚部の高さは1.7cmある。内外面とも横ナデである。1107の脚部は充実高台である。ヘラ切り底の高台であり、若干成形の痕跡が伺える。径は5.9cm、高さは1.5cmであった。

4 土坑2

E-14区に位置する。南東5mに堅穴遺構から北西5mの位置に土坑2が検出された。平面プランは、ほぼ円形で直径が約1m、その埋土はⅢa層(濁った色)で、遺構内からは、土師器の塊や甕の破片が多数検出され、微細のカーボンも多く埋土中には含まれていた。その他の遺物としては、縄文時代の石皿、台石等と思われる石器が4つ検出された。なお、この土坑から出土した土師器等については、小片がほとんどであり、図化し得なかった。



第160図 円形周溝遺構及び出土遺物

21.7cm、厚さは7.2cm、重さは4,200gある。所々に磨面を確認できる。

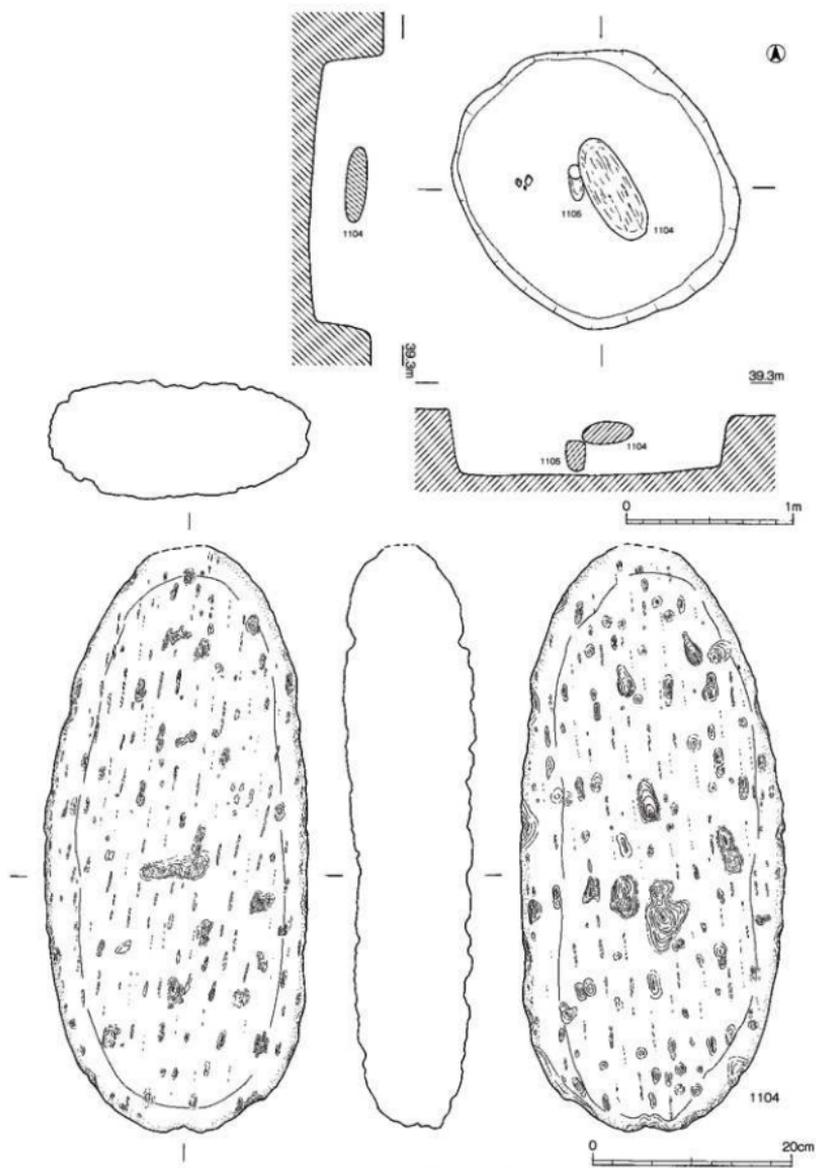
5 土坑3

土坑3・4及び5は、古代の遺物や遺構が多く出土し、この遺跡の古代の中心部であり、いわゆる中世で言う曲輪3付近からは、100m以上北側にある部分から検出された土坑3基である。他には、その数メートル北側から土坑4及び土坑5が検出されたが、それ以外では、古代の遺構が検出されなかったのが、このエリアの特徴であると言える。

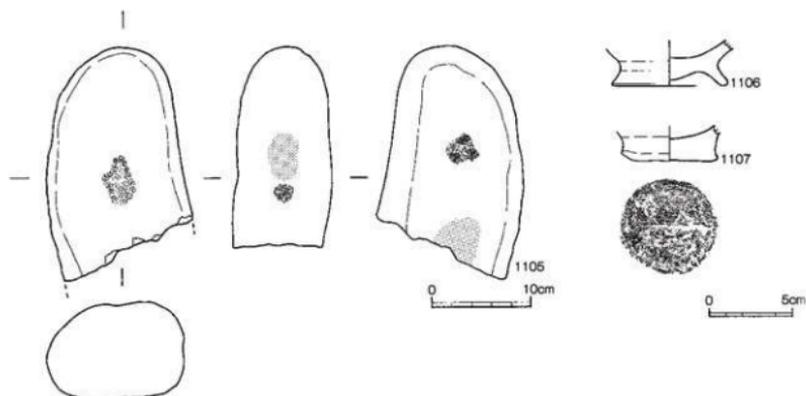
土坑3は、長径が約90cm、短径が約80cmの楕円形の平面プランである。検出面から20cm程度の掘込が確認され、底面は平坦に近い状態であった。埋土中からは、1111の内外黒色土師器の坏が出土した。この坏は、底部がやや丸みを帯び体部中央部付近でやや屈曲して口縁部へと至る。内面はヘラミガキ、外面もヘラミガキを基本とするが、底部から体部への立ち上がりは静止ヘラ削りである。

6 土坑4

土坑4は土坑3において述べたようにいわゆる曲輪3に存在する3個の土坑のうちのひとつである。平面プランは、不定形であり、南西に隣接する土坑5とは一体の施設の可能性もある。西側の土坑と底面の高さが20cm程度高い土坑が連結したような状況で検出された。検出面は、左右



第161図 土坑1及び出土遺物



第162図 土坑1出土遺物

の土坑ともIV層に近く、西側が30cm～40cm、東側が20cm程度であった。

埋土中からは銭貨が多数出土したことから、当初は中世の備蓄銭に近い状況とも考えたが、埋土中の遺物のほとんどが古代遺物小片であること、出土銭貨が古代を中心とすることから、古代の土坑と判断した。出土銭貨は、10枚検出された。西側土坑の中央部から1枚、土坑の連結部から重なった状態で2枚、東側の土坑の中央部の床着に近い状態で2枚、南端より重なった状態で5枚が検出された。これらの銭貨の重なって出土したものは、ほとんどが癒着した状態で出土したが、判読不可能なものは2点で、他の8点は判読を行うことができた。ほとんどが11世紀～12世紀の北宋銭であるが、1113のみが唐銭であった。他の銭貨については、第167図の拓本及び180ページの表の通りである。

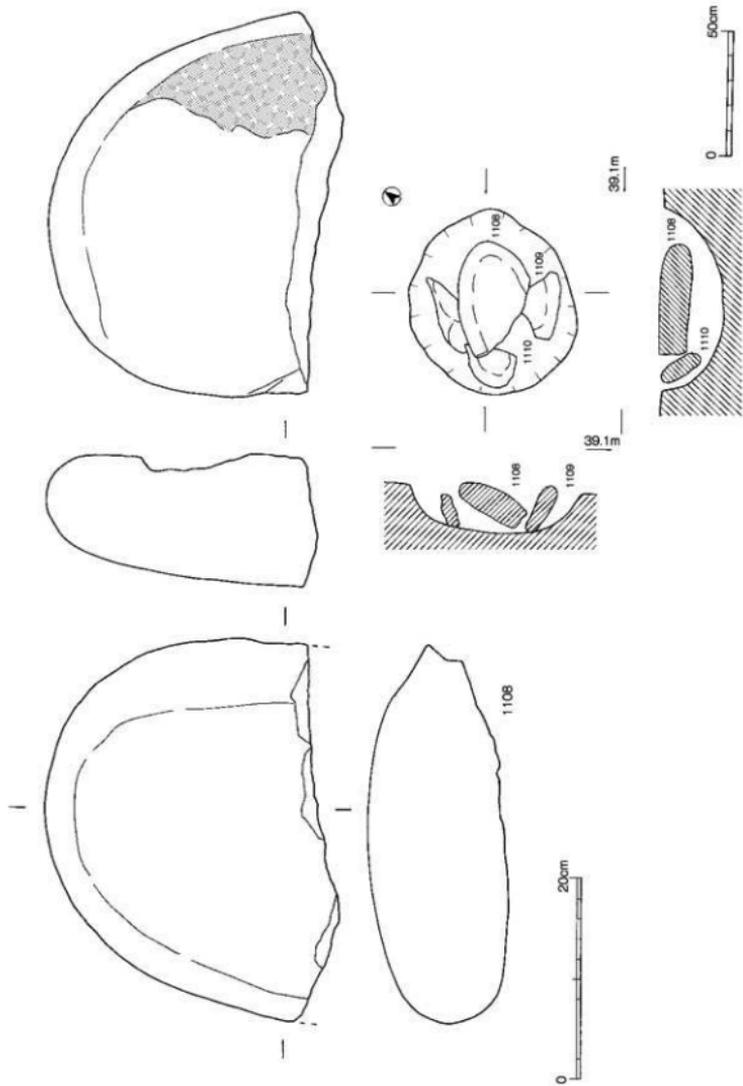
また、他の遺物については、小片が多く、図化し得たのは、1112の内黒土師器のみであった。

7 土坑5

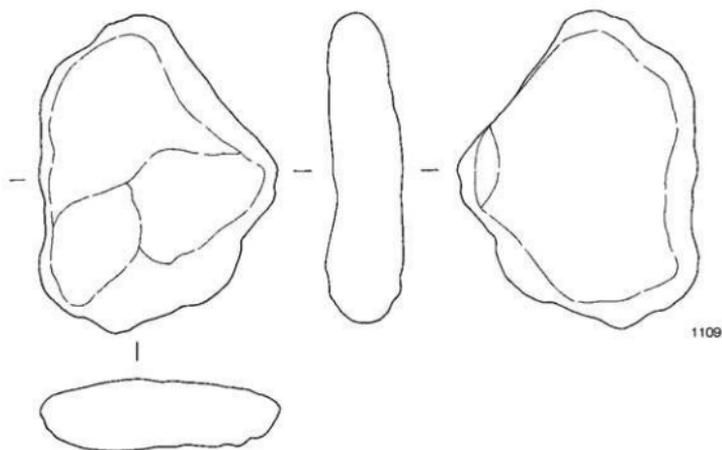
土坑4の南西部に位置し、西側は崖に近く危険を伴うため、半裁して埋土の観察を行って調査を中止した。平面プランは長楕円形と思われ、最大長58cm、検出面からの底部の深さは17cm～20cmであった。埋土の状況が土坑3・4とはほぼ同様であることから、古代の土坑と判断した。

8 埋納土師器甕

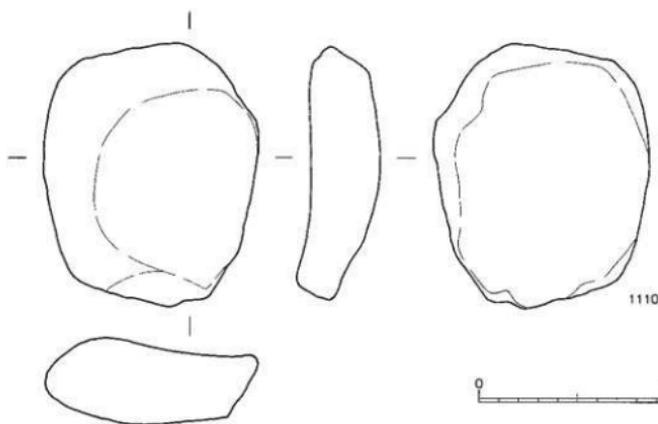
1123は、G-12区においては単独で検出された土師器の甕形土器である。表土直下で検出のため、その上に蓋など何らかの遺物や施設があったかどうかについては不明である。口縁部は、第169図のような状態で、その周辺に散乱した状態であり、復元したところ、ほぼ完形に近い状態であった。器壁は底部から口縁部までほぼ均一で、調整は外面は胴部から底部にかけてハケ目調整、口縁部付近はナデがなされている。内面はヘラケズリが施されている。内面や底部では横方向のやや左斜め方向に、腹部付近では上ないし右斜め上方向に、口縁部付近になると上ないし左斜め上方向に掻き上げられている。口縁部は、ナデが施されている。底部付近は煮沸に用いられたためと思われる煤の付着が見られた。



第163図 土坑2及び出土遺物



1109



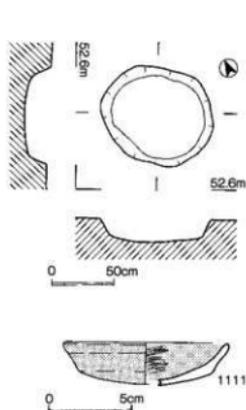
1110

0 20cm

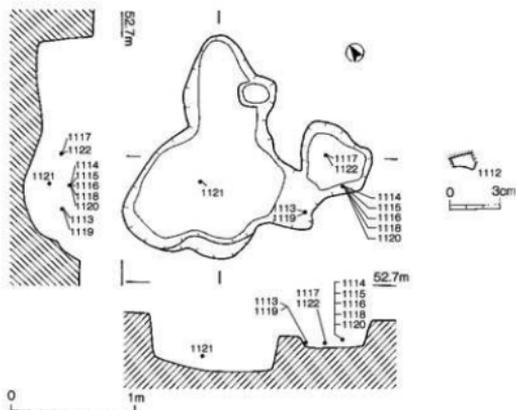
第164図 土坑2出土遺物

土坑4出土錢貨表

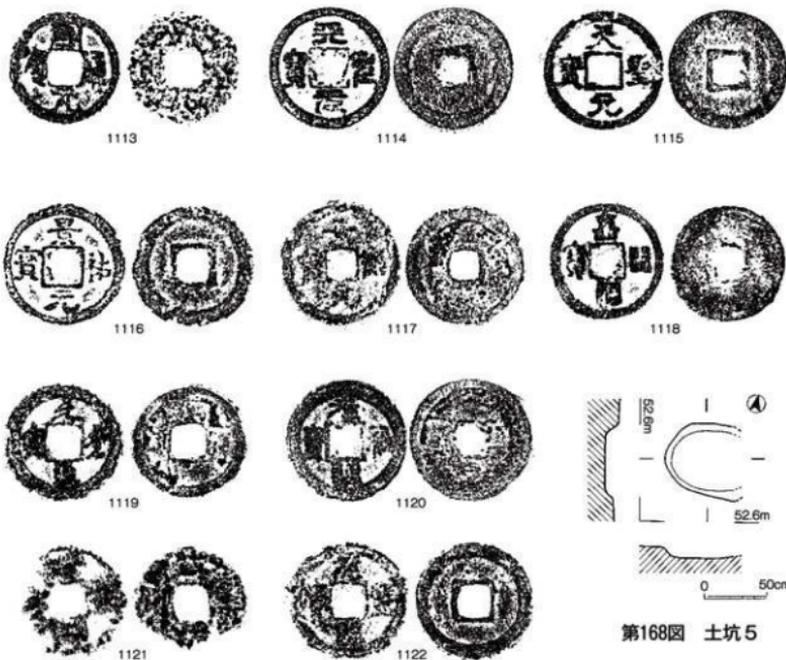
遺物番号	錢貨名	時代	初鑄年	径 (cm)	重さ (g)	遺物番号	錢貨名	時代	初鑄年	径 (cm)	重さ (g)
1113	開元通寶	唐	621	2.30	1.45	1118	嘉祐通寶	北宋	1034	2.30	3.66
1114	天聖元寶	北宋	1023	2.50	3.39	1119	元豐通寶	北宋	1078	2.30	2.70
1115	天聖元寶	北宋	1023	2.50	3.39	1120	元祐通寶	北宋	1093	2.50	2.70
1116	嘉祐通寶	北宋	1034	2.50	2.79	1121	不明	—	—	2.40	(1.53)
1117	景祐元寶	北宋	1034	2.40	2.70	1122	不明	—	—	2.30	2.68



第165図 土坑3及び出土遺物



第166図 土坑4及び出土遺物



第168図 土坑5

第167図 土坑4出土銭貨

単独で発見されたことやその状況から、埋納の可能性も考慮し、掘り込み等についても精査を行ったが掘り込み等は確認できなかった。また、遺物内部の土からも遺物などは検出されなかった。ただし、状況等から、埋納の可能性は否めない。

第2節 遺物

1 土師器

器種として甕・坏・埴・皿などある。

・甕 (第171図・第172図 1124～1141)

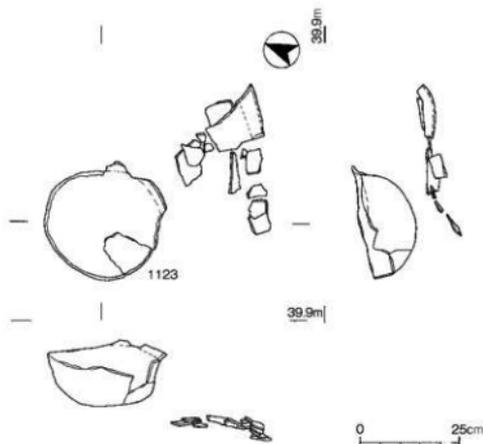
外面がハケナデ・ヘラナデ、内面がヘラケズリで仕上げた甕である。1132のように口縁直径が18cmしかない小型のものから、1128のように31cmある大型のものまである。口縁端近くで外反するものだが、外反する部分が短く逆L字状になるものと、ゆるやかに外反する「く」の字状のもの、如意状のものがある。胴部は1130・1138・1141のように長胴形を呈するものと、1128・1140のように鉢形を呈するものがある。底部は丸底になるものと思われる。1141の内面には同心円状当て具の痕跡がみられる。

・坏 (第173図 1143～1163)

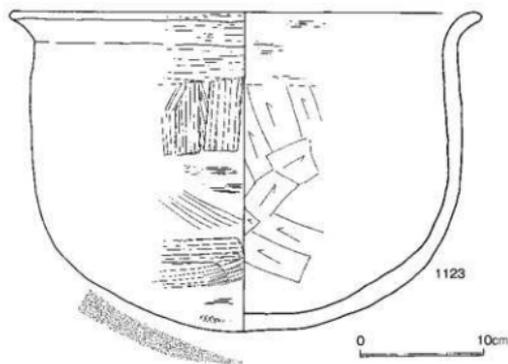
口縁直径が11.6cm～15cm、高さが4.2cm～6.2cm、底部が3.8cm～7.3cmほどの法量をもち、底の切離しはヘラによる。口縁部がやや外へ開いてまっすぐ伸び、丸みをもった底のもの(1143)と、口縁部が外へ開いてまっすぐ伸び、安定した平底のもの(1144～1156)、外へやや開いてまっすぐ伸び、充実高台風の厚い平底をもつもの(1157～1161)、底部が外へ張り出すもの(1162・1163)などがある。1145の体部外面には「上」の墨書がみられる。1157は口縁直径が13.4cm、高さが6.2cmある深い埴状を呈するもので、底の厚さが分厚い。

・埴 (第174図 1164～1172)

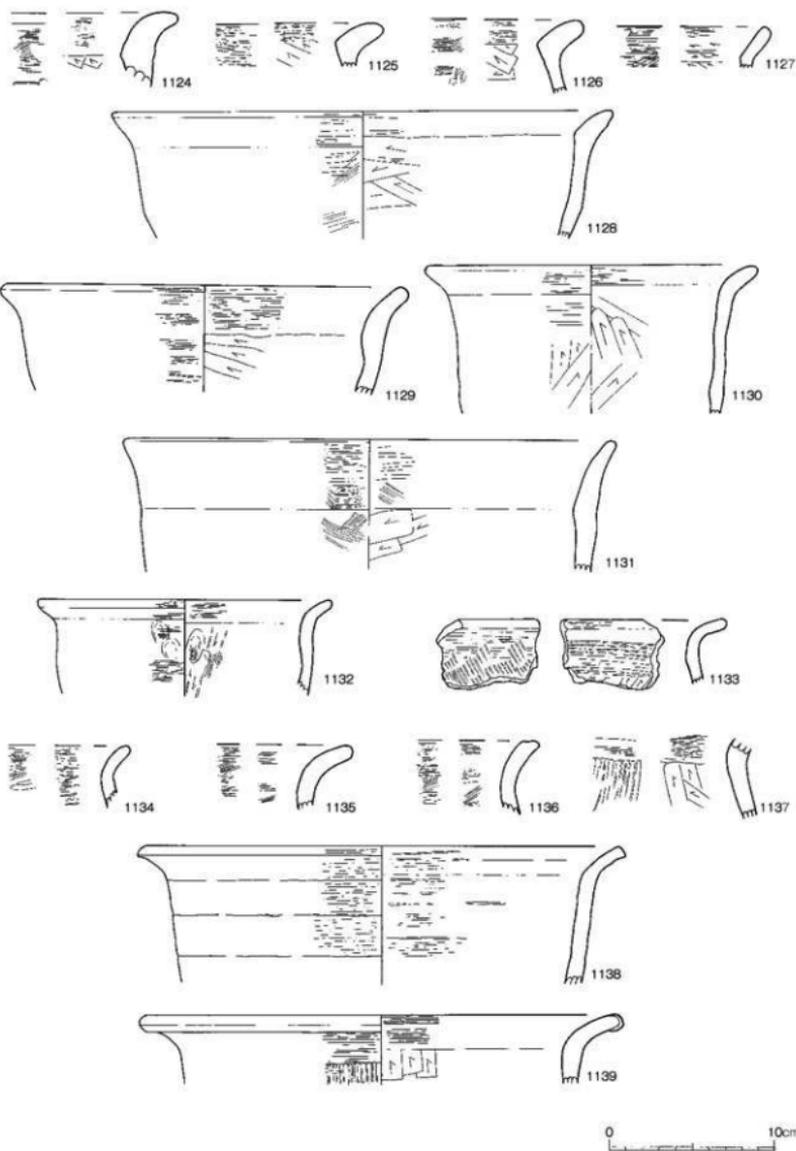
高台付きの埴が出土している。1164は口縁直径が13cm、高さが7cm、高台直径が7.5cmある。



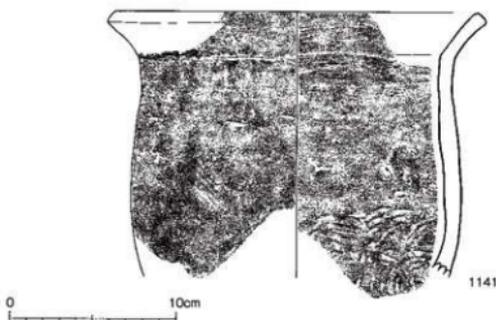
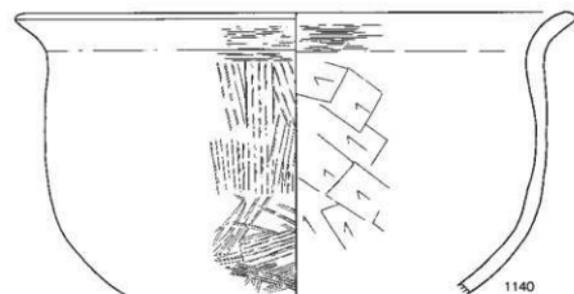
第169図 埋納土師器甕出土状況



第170図 埋納土師器甕



第171图 古代出土遺物 (1)



第172図 古代出土遺物 (2)

が7cmある低い壺である。口縁部は端部が外へ反るもので、「ハ」の字状に開き、端部の尖が低い高台が付いている。1194は外へ開く坏状の器形をしており、「ハ」の字状に開く、端部が丸みをおびた高台が付いている。

内黒土器には、高台付きの壺と、高台付きの皿、充実高台の壺がある。壺は丸みをもった浅いもので、口縁端部は外反するもの(1182)と、直に立ち上がるもの(1184)とがある。口縁直径は14cmのもの(1182)と、17.5cmのもの(1184)とがある。高台は「ハ」の字状に開いているが、長く伸びる高いものと、低いものがあり、端部は丸みをもつものと、尖るものがある。1180の外面上には「大」の墨書がみられる。1195は先の尖った直径7cmの低い高台の付く皿である。1196は直径が7cmの円盤貼付の充実高台となる壺で、底は不安定である。底部切離しはヘラ切りである。

1165は口縁直径が18cmある。1164が丸みをもって立ち上がるのに対して、1165はまっすぐ伸びており、口縁端がやや外反する。高台は「ハ」の字状に踏んばっている。

・皿 (第174図 1173~1179)

底部切離しがヘラ切りの小型皿である。口縁はやや内湾ぎみに立ち上がっており、口縁直径が9cm~10cm前後、高さが2cm足らずである。1176は口縁直径が9cmほどの耳皿である。底は体部からすんなり移るものと、体部との間に段を作るものがある。

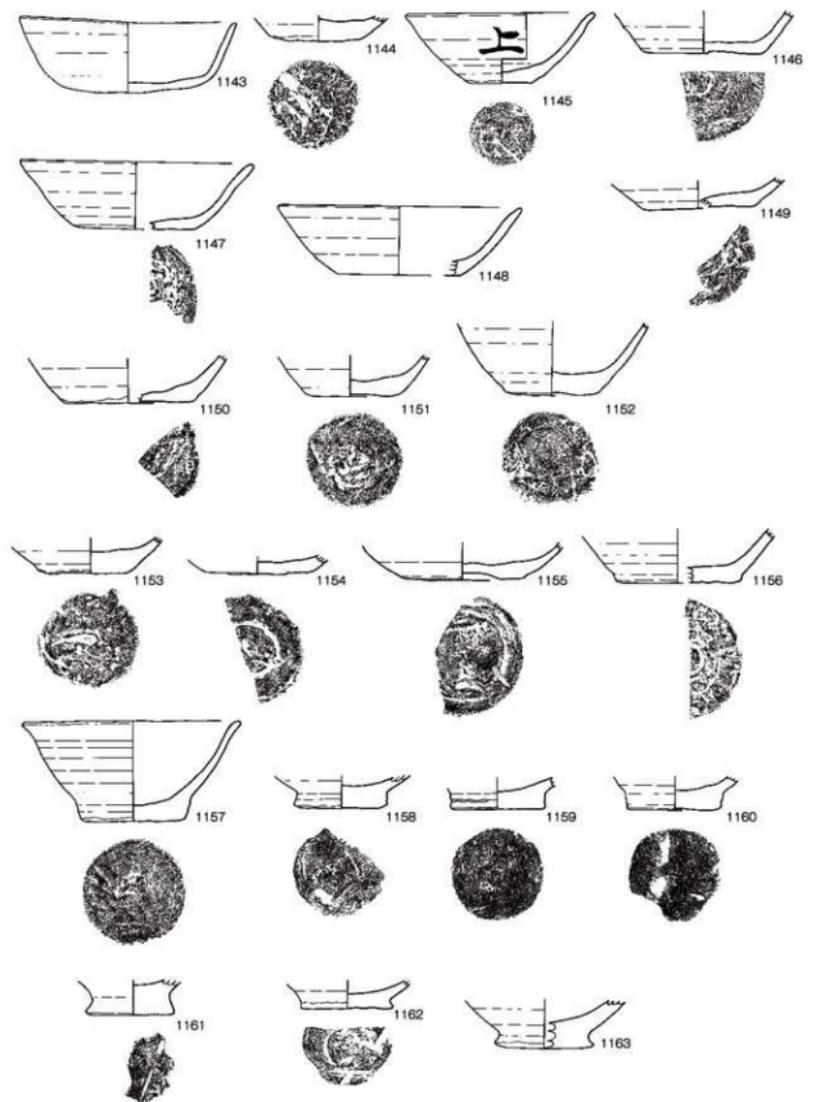
2 青磁 (第172図 1142)

黄緑色を呈する直径が7.5cmの蛇の目高台の青磁碗である。

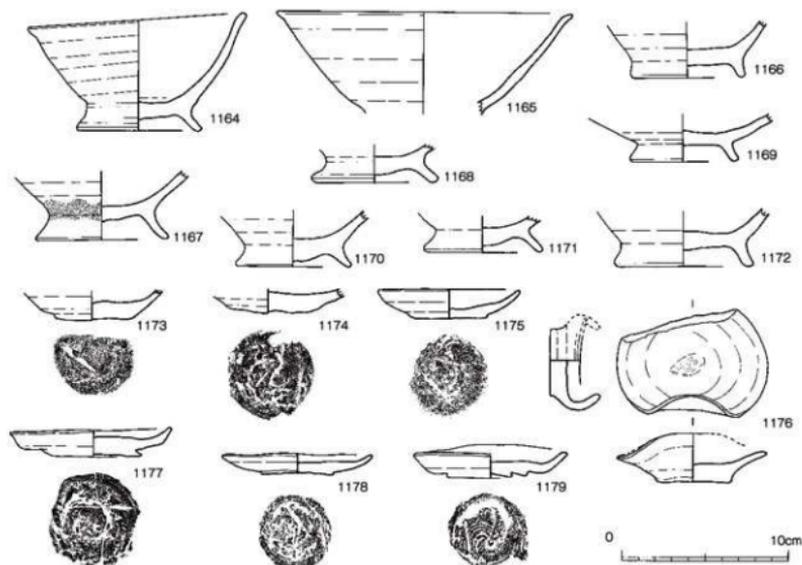
3 黒色土器

(第175図 1180~1196)

内外とも黒色を呈するもの(1183・1194)と、内側のみ黒いものがある。1183は口縁直径が17cm、高さが5.7cm、高台直径



第173图 古代出土遺物 (3)



第174図 古代出土遺物 (4)

4 赤色土器 (第176図 1197~1202)

内面のみが赤い内赤土器 (1197~1200) と、外面の赤い土器 (1201・1202) がある。内赤土器は碗である。直径が小さく、高さの高い器形をし、底から上へ開きながらまっすぐ伸びている。高台は1198や1199のように低いものと、1201のように高いものがある。1198は端部が丸みをおびており、1199と1201は矩形を呈している。1202は丸みをおびて平たい直径が17cmの底をした鉢で、底から胴部へ向かって開きながらまっすぐ伸びている。

5 土製品 (第176図 1203・1204)

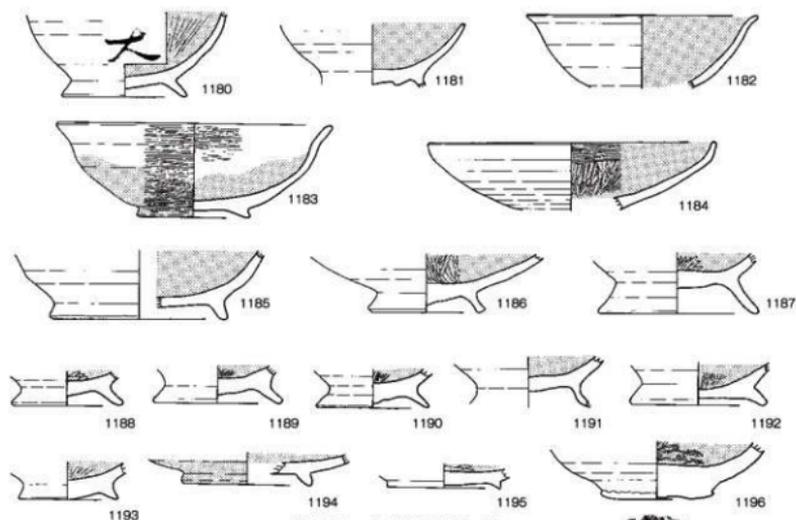
直径が5.5cm、厚さが7mmほどの紡錘車が2点出土している。土師質の焼きで、1203は周辺を丁寧に磨いており、中央に直径7mmの孔が穿たれている。1204は半欠品である。

6 須恵器 (第177図~第179図 1205~1253)

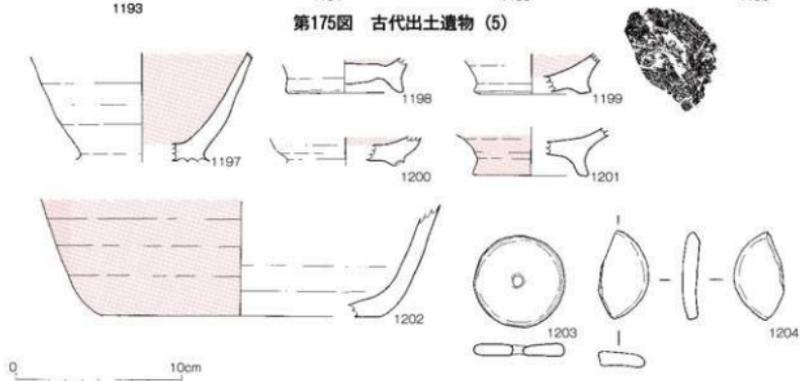
坏蓋・皿・坏身・甕・壺が出ている。

・坏蓋 (第177図 1205~1211)

口縁端が一度平たくなって下へ下がる低い蓋 (1205) と、端部がすんなり下がるやや高い蓋 (1209・1210) がある。1208は直径が18cm、高さが4.8cmある宝珠つまみの蓋で、天井部の厚みは厚い。1209は直径が16cm、高さが2cmの天井部が平らで、口縁部がやや外へ開いてまっすぐ伸びる蓋で、甕の蓋となる可能性もある。1210は直径が18.5cm、高さが4.7cmある断面が矩形を呈するつまみをもつもので、端部は外へふんばるように開いて止まる。



第175図 古代出土遺物 (5)



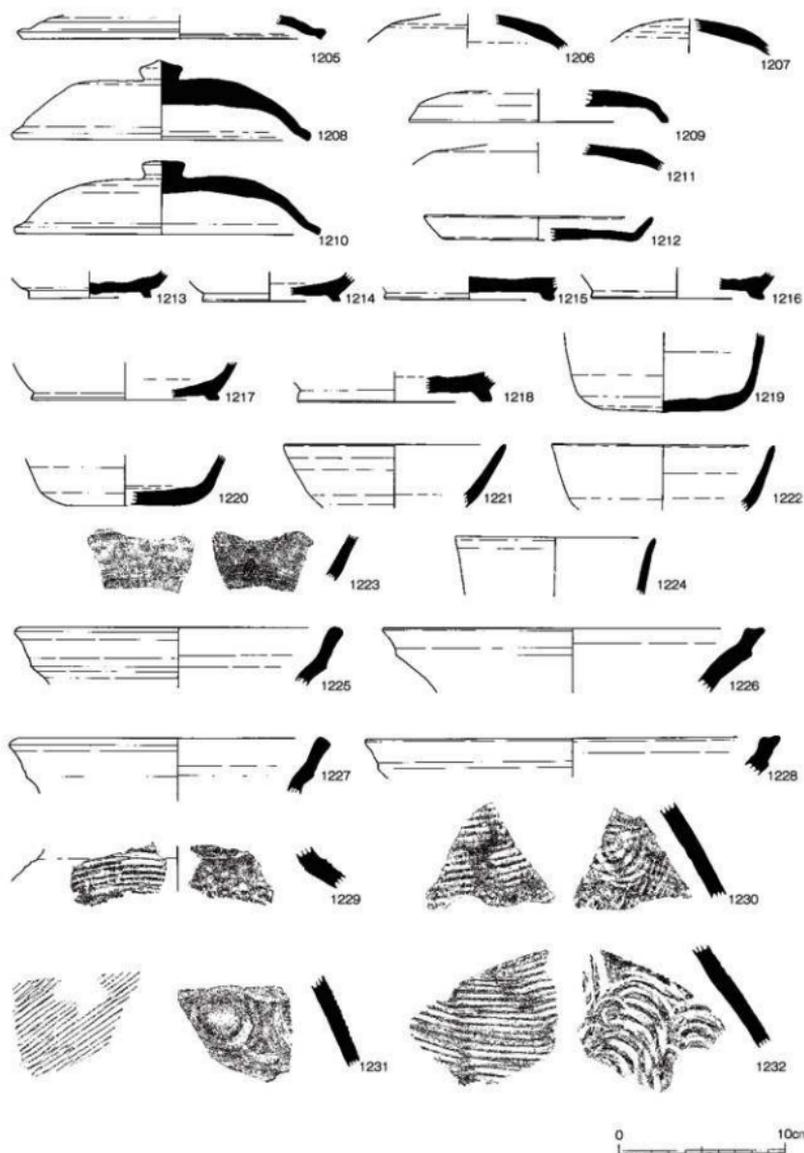
第176図 古代出土遺物 (6)

・皿 (第177図 1212)

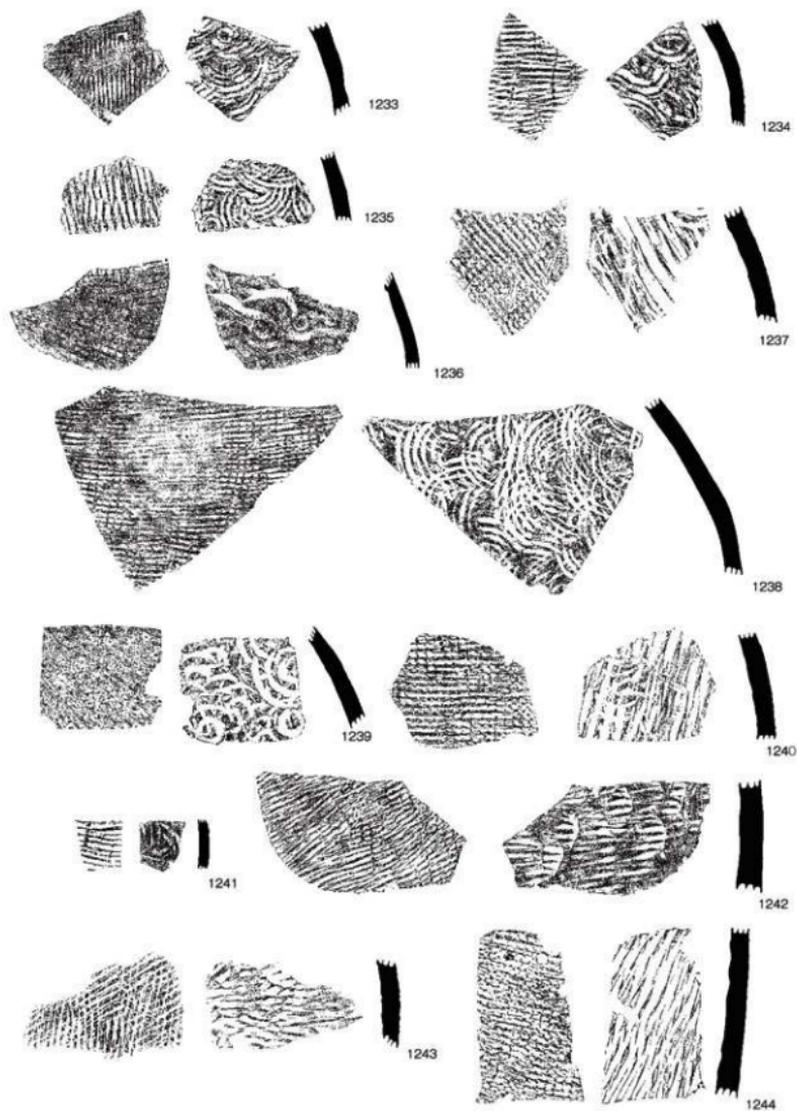
口縁直径が14cm、高さが1.5cm、底部直径が1.5cmの浅い皿で、丸みをもった底から外へ開きながらまっすぐ伸びるものである。

・坏身 (第177図 1213~1224)

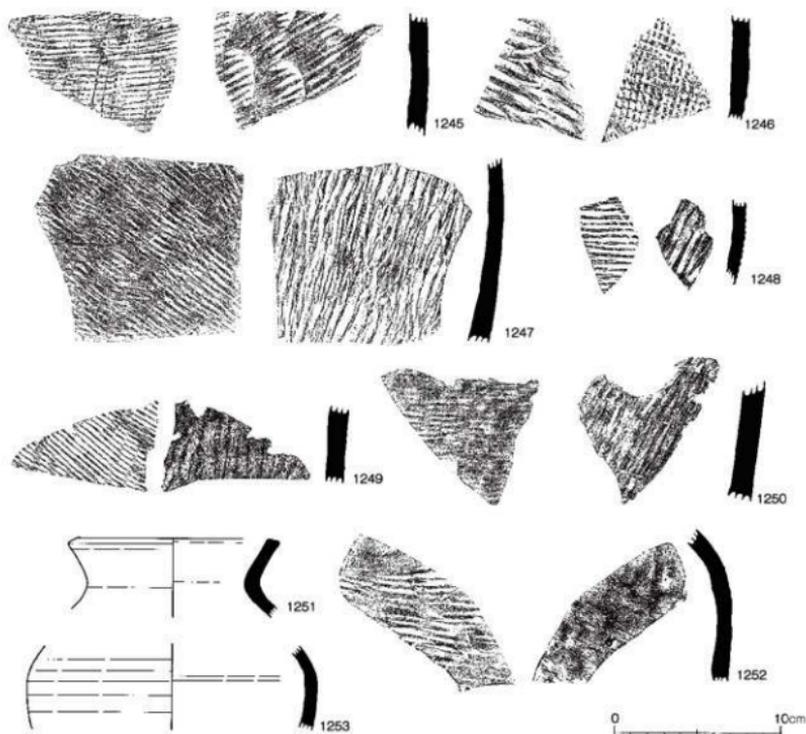
高台付きのもの、丸みをもった底のものがある。口縁部は丸みをもって直に近く立ち上がるものと外へ開きながらまっすぐ伸びるものがある。直径は12cmしかないもの (1224)と、14.5cmのもの (1221・1222)とがある。高台は直径が11.5cmほどで、外へふんばり、端部が矩形を呈する。



第177图 古代出土遺物 (7)



第178图 古代出土遺物 (8)



第179図 古代出土遺物 (9)

・甕 (第177図～第179図 1225～1250)

頸部から外反し、口縁部がさらに外へ反る二重口縁状を呈する。端は丸みをもったもの、矩形を呈するもの、矩形の中央がやや窪むものがあり、直径は18.5cm～25cmある。口縁内面には段をもつ。外面には条痕・長格子・正格子などのタタキがあるが、細かい作りのものが多い。内面には条痕・同心円などの当て具痕があるが、概して細かい。1242・1245の当て具は条痕様のものだが、端は丸みをもっている。1246は一見内外を見間違えようであるが、外面が条痕タタキ、内面の当て具痕が格子である。

・壺 (第179図 1251～1253)

口縁部は直径が11.5cmあり、頸部から外反するもので、肩部が張り、ややすはまりながら底部へ移る。外面は条痕タタキを残すものと、ヘラでナデ消したものとがあり、内面は当て具痕をナデ消している。

第Ⅷ章 中世の調査

向栴城跡は、東シナ海を一望できる遠見番山（標高180m）の裾（標高50m前後）に位置し、北側には堂園平遺跡と迫りしくは谷で隔てた所にできた中世の山城である。南東には江口川が隣接して流れ、近隣の人々が『本丸』と呼んでいる曲輪まで約260m、直近では70m程、河口である江口浜まで約1.5kmある。向栴城跡からは、東シナ海を望むことができる。このことから海上交通において、重要な要所であったと考える。

北から南方向へ順に、堂園平遺跡との境界側の堀、境界になっている曲輪となる。また北から南へ順に行くと、本書では、向栴城跡の大きな空堀を「空堀1」、その隣の曲輪を「曲輪a」、深く急なV字の空堀を「空堀2」、『本丸』の「曲輪1」。その北側にある帯曲輪を「曲輪b」、「曲輪c」。また北から南へ曲輪1から南へ移動していくと、若干低くなった部分を「曲輪2」、幅60m～75m、後世に削平を受けて（以前は曲輪等があったかも知れないが）高さ約10mの崖の下にある曲輪を「曲輪3」と呼称する。

この曲輪3の南から南東の崖部分は、曲輪が延びていたものが後世に削平を受けて現在のように狭くなり絶壁状の崖になったものと思われる。現在は、この部分から3m程度の崖、段々畑、人家、水路、道、田があり、その後、江口川に至る。現在の所どこまで削平を受けたかは明らかではないが、曲輪3から江口川まで70m程である。曲輪3から、南西方向には、東シナ海、江口浜、800m先には伊作田城、振り返れば北東方向800mの所に、鶴丸城が望める。両城を結んだ直線の中央に、向栴城跡が位置する。

現在、向栴城跡の地名は小字で、「上栴」、「中栴」、「下栴」と呼ばれている。中世の発掘状況に当てはめてみると、ちょうど曲輪1が「上栴」、北から南に向かって曲輪2が「中栴」、曲輪3が「下栴」と、重ね合わせることができる。1615年の『一国一城令』の後、近世になって城の役割を終えたと言える。

標高については、調査区内の発掘調査から第181図のようになった。それによると曲輪1・曲輪2ともに53m～51m程、曲輪3は10mほど低く、42m～38.5m程あった。最も高い所でも、曲輪1は53m強、曲輪2は51.5m、曲輪3は41.8mという状況である。

発掘調査は、重機を使って表土剥ぎを行った。人力で包含層の掘り下げ及び遺構の検出を行った。その結果、古代及び中世の包含層であるⅡ層は殆ど残っておらず、Ⅲa層に掘り込まれた遺構の検出を中心に発掘調査を行った。特にⅢa層は、「第Ⅵ章 古墳時代の調査」の中で述べたように、古墳時代、古代、中世の遺構が同一面で検出されるため、その時期区分については苦慮した。

第1節 遺構

遺構については、北側から空堀及び帯曲輪、各曲輪内の施設等について順に述べていくが、土坑、炉跡、中世墓等については、比較検討の観点から、まとめて述べることにする。

(1) 曲輪及び空堀（第182図～第184図）

本城の一番大規模な施設が、堂園平遺跡との間にある曲輪と空堀である。発掘調査前の地形が第182図、調査後の地形が第183図・第184図である。

また、帯曲輪及び空堀の断面図が第185図で、その堆積状況とその堆積順については、図中に記した通りである。

帯曲輪及び空堀からは、旧石器から現代にいたるまでの遺物が大量に出土している。そこで、中世に関するもの、縄文の磨石等を再利用したと思われるもの及び時期は異なるものの、採集品としても意味のあるものについて第186図～第192図で掲載した。

・空堀1

断面逆台形で、平均した底面幅は4mである。曲輪側の斜面はほぼ垂直で、部分的に縦方向の浅い溝が切られていた。底面は特に造作は見られない。東側は崩落のため斜面の造作はわからない。北側の斜面も特別な造作は確認できなかった。自然地形を利用したものと考えられるが詳細は不明である。曲輪1との比高差は、部分的によってかなりの違いはあるが、H-30区の部分では、10mを越えるものである。

なお、この空堀は現在でも掘り底道として使用されており、第4図のように本城西北側の田園地帯へと続くものであり、中世においても使用されていた可能性もある。

・空堀2

この空堀は、帯曲輪の外側に構築されていた。西側が半分ほど流失している。残存部分を見ると、断面は逆台形で底に平坦面があり、帯曲輪側の縁に浅い溝を切っていたようである。幅は、曲輪側を凹凸させることにより不規則となっており、狭いところで約1m、広いところで約4mである。狭いところでは平坦面はほとんどない。空堀1の底面との高低差は1.5m程あり、直接降りられるような造作は全くなかった。投げ弾にでもしたのか、砂岩の円礫が散在していた。

・曲輪a

空堀2の外側に構築されたものである。空堀2の底面との高低差は1m程度で、西側が広い。「おたまじゃくし」のような残存形状である。西側は、若干の平坦面があるが細かく抉られた部分が多いため細かい構造は分からないが、空堀1との間に犬走りのような細長い平坦面を2段めぐらせている。曲輪平坦面との高低差は1.6m程度、犬走りと空堀1底面との高低差は1.8m程度である。

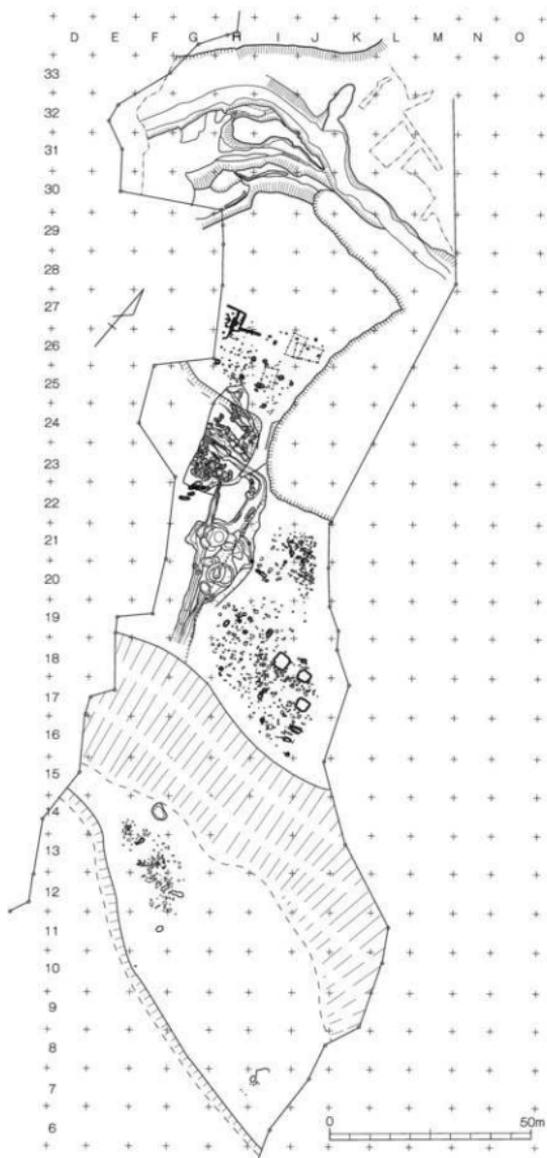
西端はこの犬走りから平坦面上がれる小路のような造作も見られる。曲輪平坦面で見られる細かい抉れが何らかの遺構であったことも可能性として想定できるが、具体的には明らかにできなかった。東側は平坦面がほとんどなく、断続的に凹凸がある。この部分は内側の空堀2にやや広い平坦面が構築されていることから、この部分については土壘的な機能を想定する方が妥当かもしれない。曲輪上端と空堀1底面との高低差は2mを超える。

・曲輪b

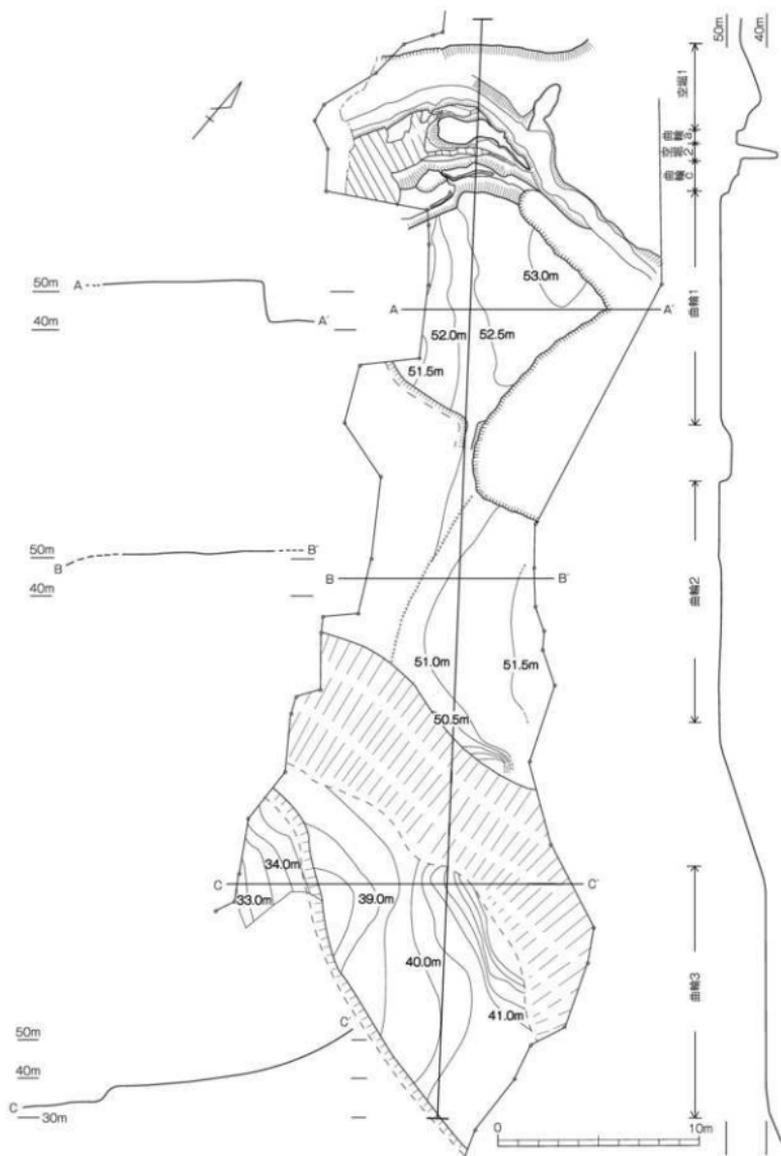
調査区内では、帯曲輪が2段に高さをやや違えて構築されていた。より主郭に近い(より標高の高い)曲輪は幅が6m～7m、若干空堀側に傾斜するがほぼ平坦といえる。主郭側の縁に浅い溝を部分的に設けている。空堀側には何の造作も認めなかった。調査区外に続く想定される。

・帯曲輪c

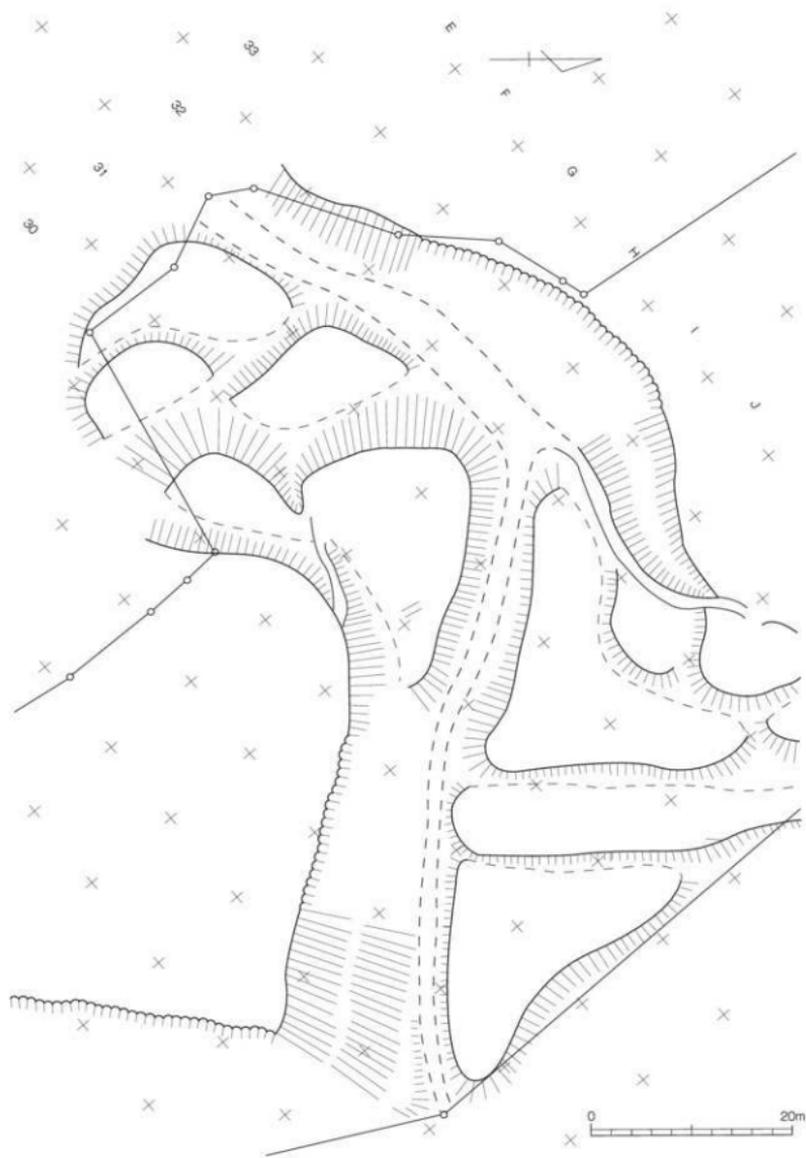
曲輪bの下に構築されていた。幅が約3m、曲輪bより狭いものの平坦面を有する帯曲輪である。同じく主郭側の縁に浅い溝を設けていて、こちらの方が長く遺っていた。空堀側には造作は



第180図 中世遺構配置図



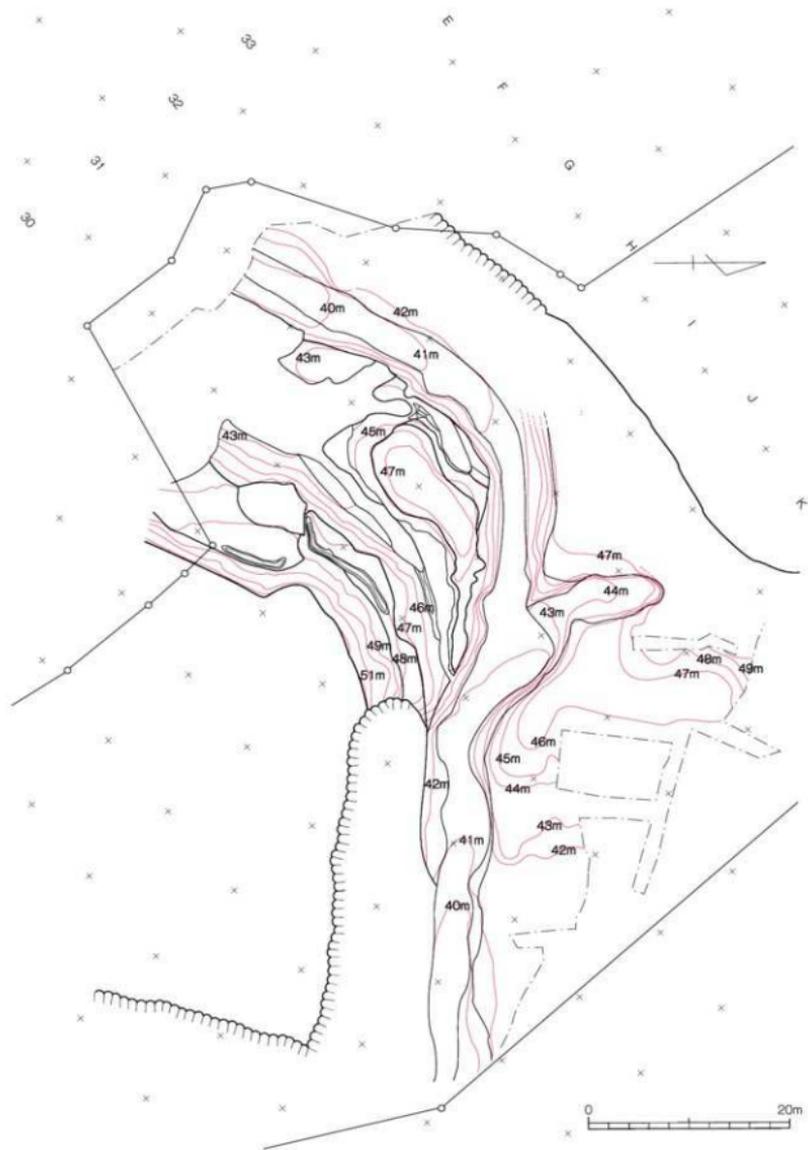
第181図 向栢城跡地形図及び横断・縦断面図



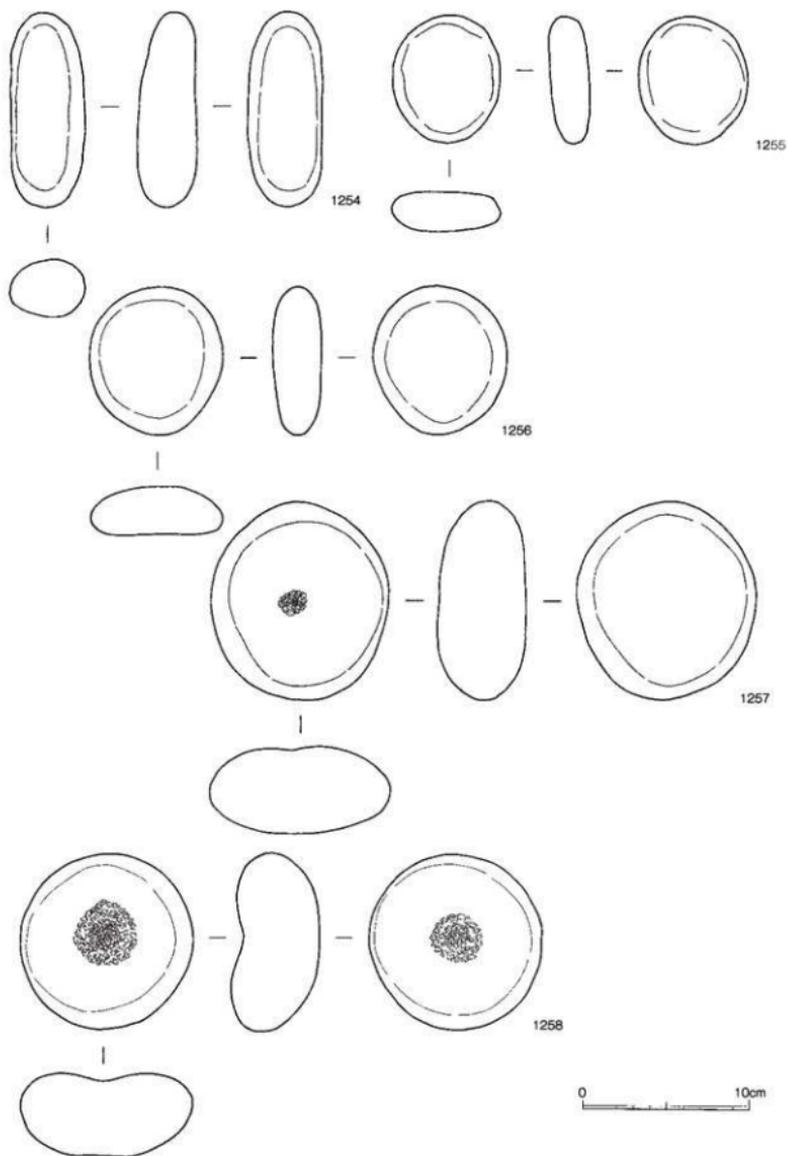
第182図 発掘調査前空堀及びび帯曲輪等



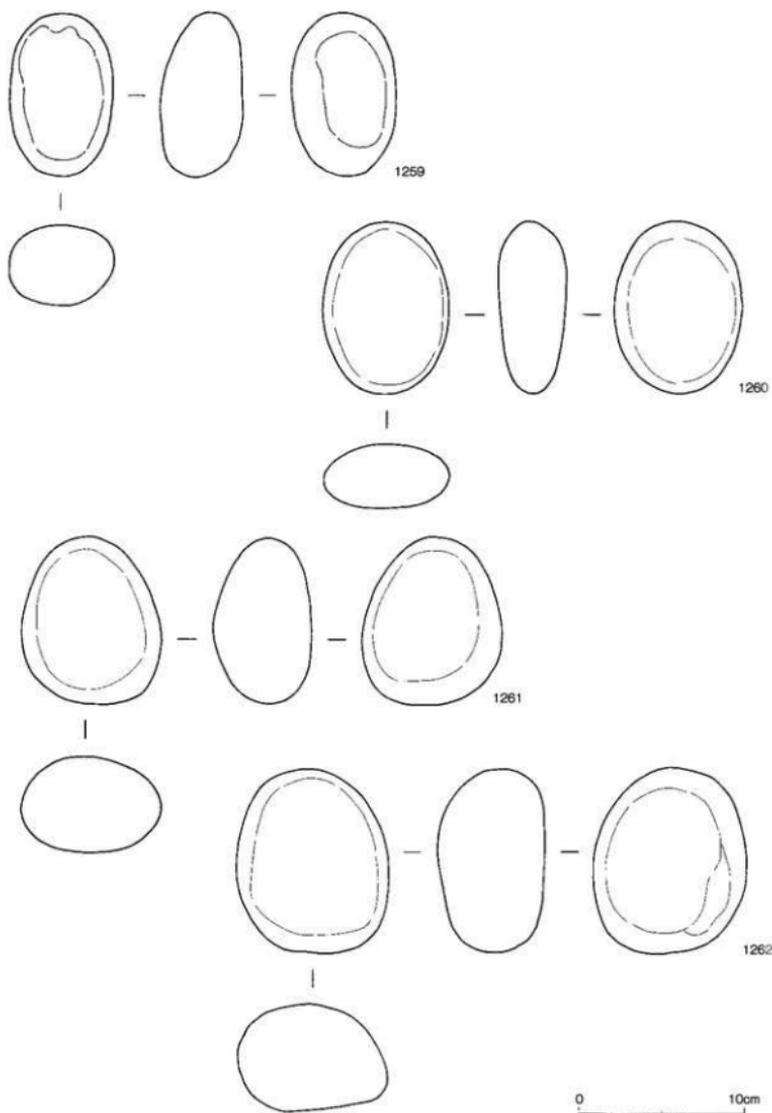
第183図 発掘調査後空堀及び帯曲輪等



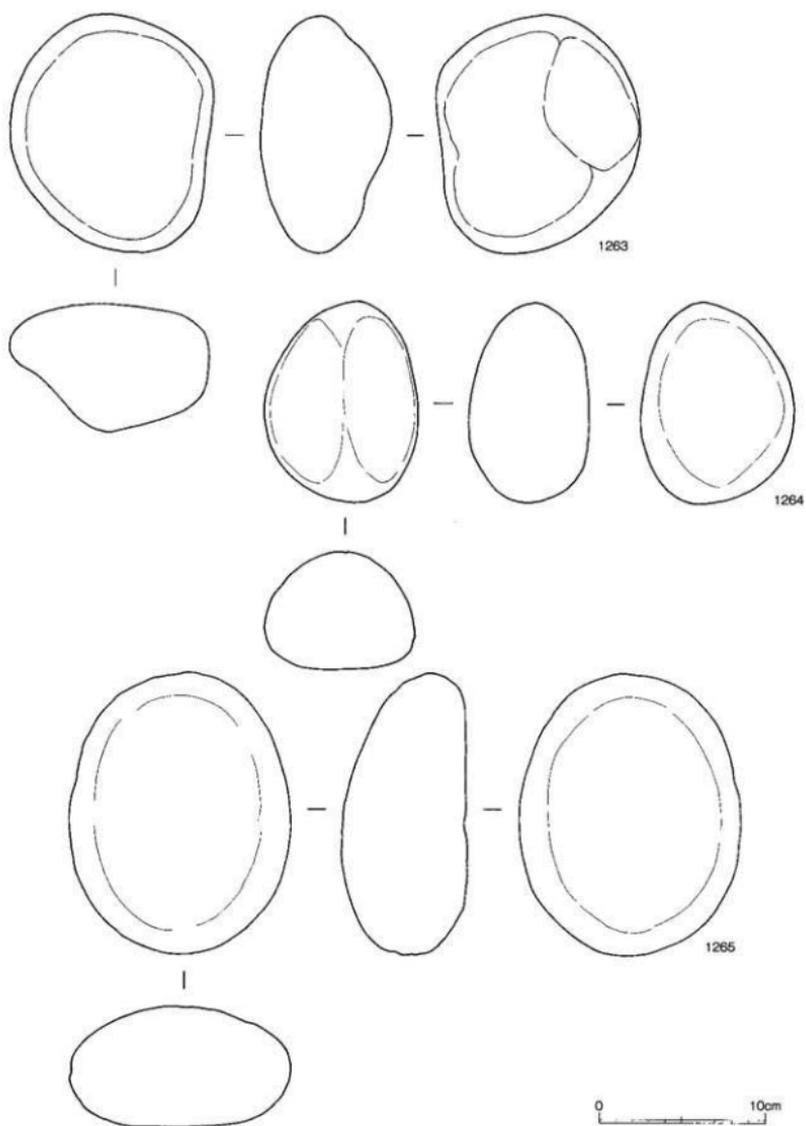
第184図 発掘調査後空堀及び帯曲輪等コンタ図



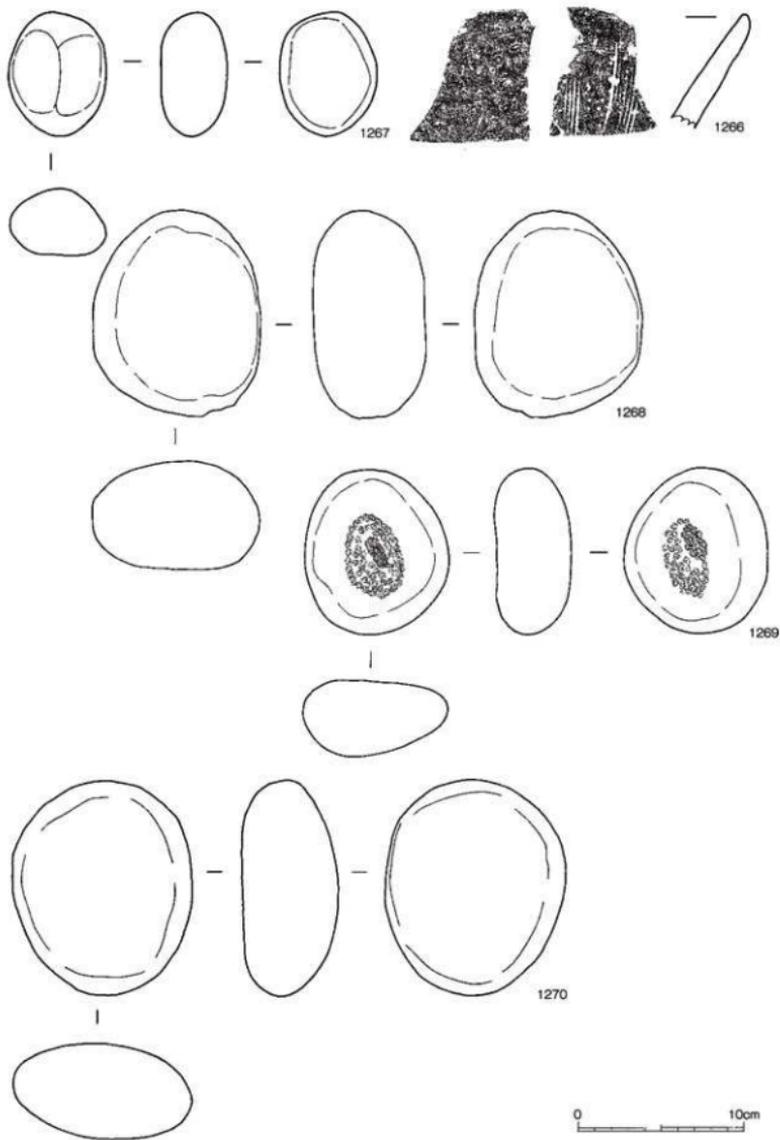
第186図 空堀1出土遺物(1)



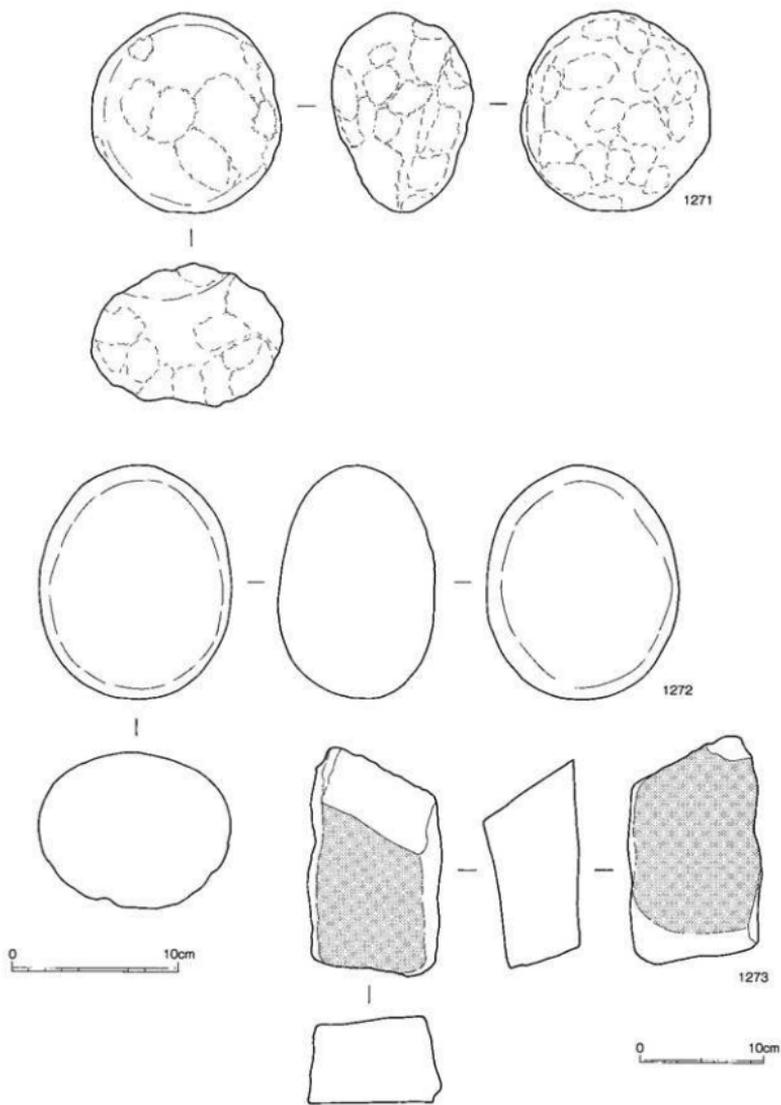
第187図 空堀1出土遺物(2)



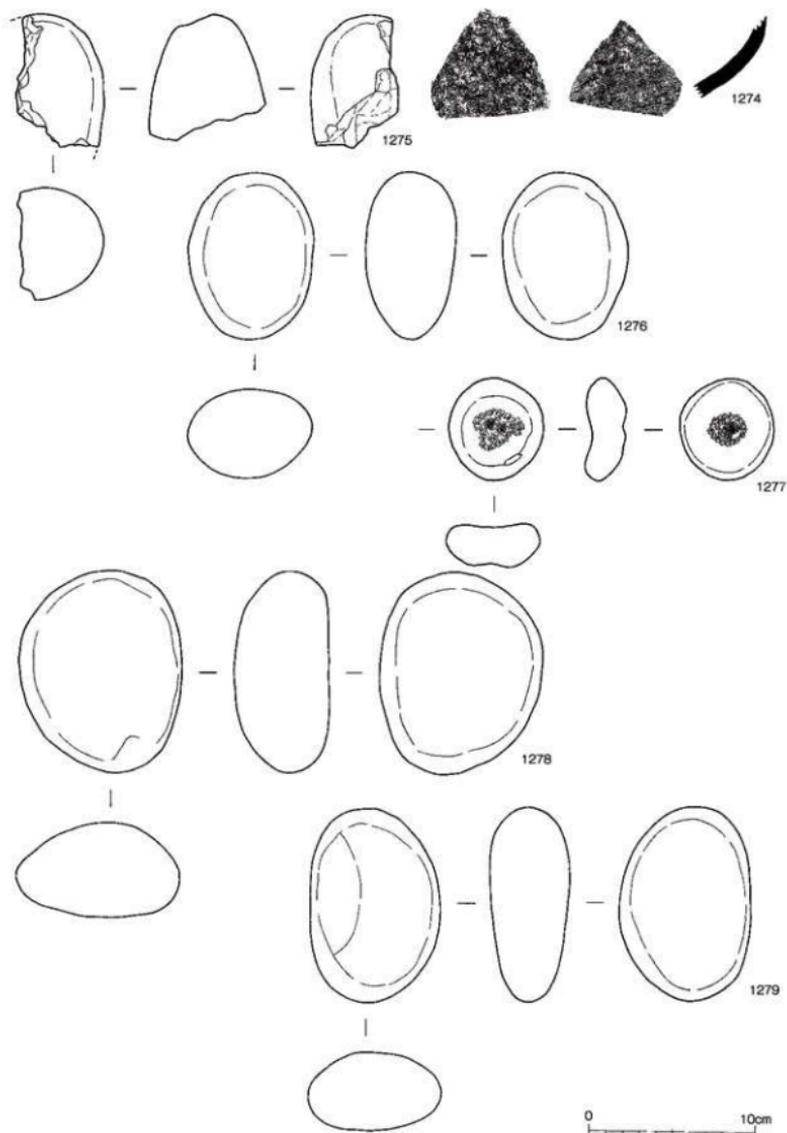
第188図 空堀1出土遺物(3)



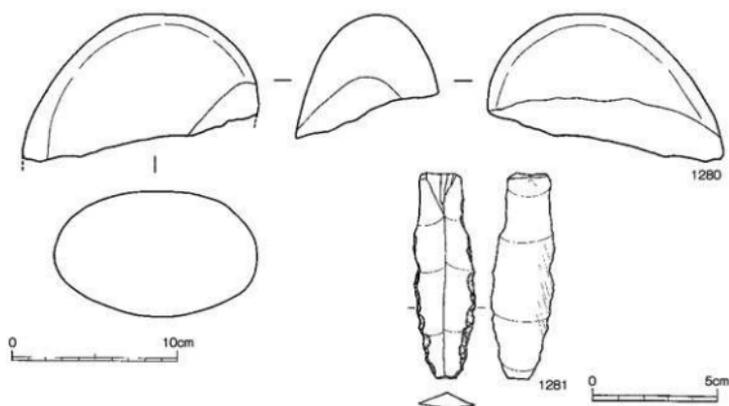
第189図 曲輪a出土遺物 (1)



第190図 曲輪a出土遺物 (2)



第191図 曲輪b出土遺物



第192図 曲輪C出土遺物

認められなかった。東側は崩落のため、全容はわからない。

・出土遺物（第186図～第192図）

1254～1265は、空堀1から出土したものである。1254～1262は、磨石や凹石などの転用品と考えられる。ただし、転用品だけでなく、流入品も含まれている可能性もある。1263～1265は、その大きさが小児頭大程度のものであり、投弾として使用された可能性の高いものである。

第189図・第190図は、曲輪aからの出土遺物である。1266は、土師質の擂鉢で、精製された粘土を用い、内面に数条の条線が見られる。1267と1269は、本来縄文の石器であったと思われる、磨石と凹石である。1270～1272は投弾と思われる。1273は、表と裏に擦面が観察されることから、砥石の一部と考えられる。

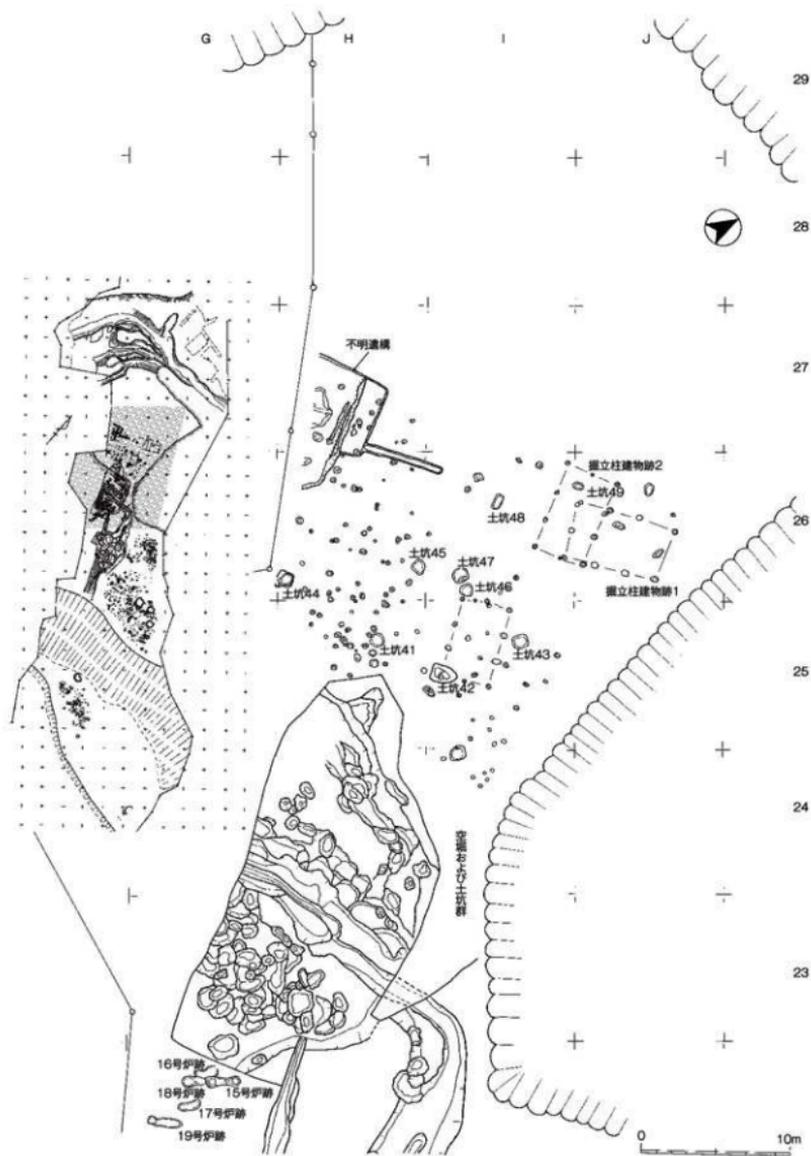
第191図は、曲輪bからの出土遺物である。1275～1277は本来縄文の石器であったと思われる、磨石と凹石である。1278・1279は、その大きさと表面が荒いことから、投弾と考えられる。1274は、中世須恵器で、内面にハケ目を有するものである。

第192図は、曲輪cから出土した遺物である。1280は、欠損品であるが残存部分から考えるとかなり大き目の投弾だった可能性が高い。1281は硬質頁岩と思われる石質で、片面は主要剥離面を残し、両側縁部に鋸歯状の調整を施すもので、旧石器時代の遺物であり、桑波田武士氏の提唱している「岩清水型削器」である。

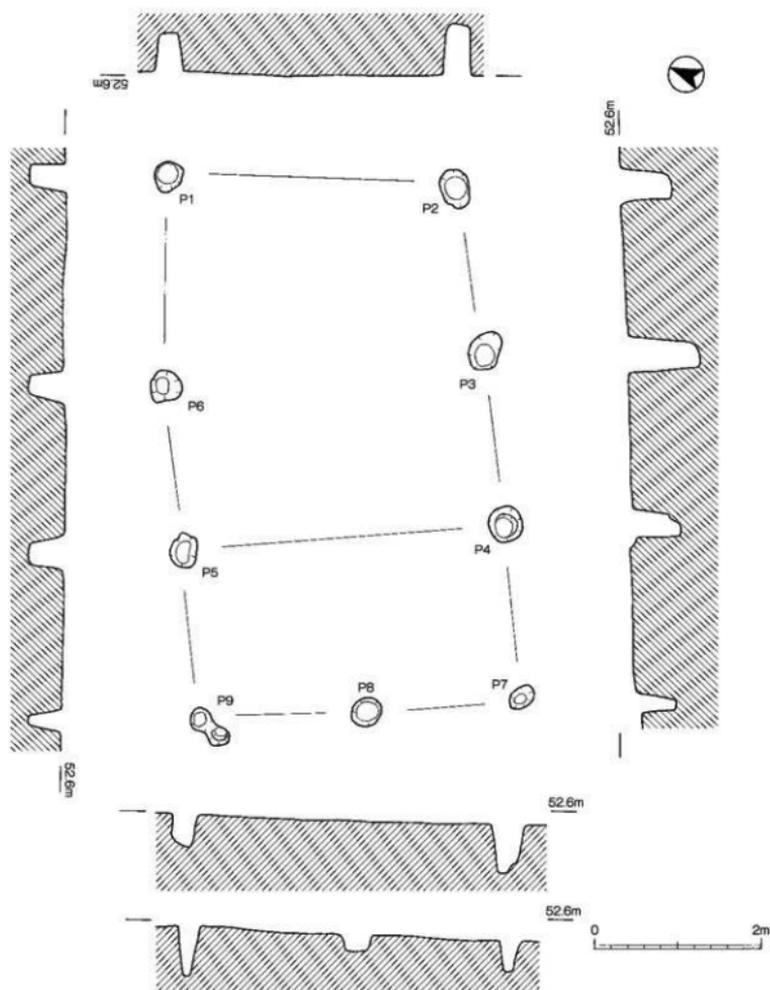
(2) 曲輪1（第193図）

曲輪1は、現在でも本丸であったという言い伝えがあった曲輪である。以前、大規模なシラスの採取により西側は消失している。この曲輪1は、中央部分には、遺構が集中するがそれより北側から空堀までの間には、中世と思われる遺構が存在しないことから、近現代において削平されたものと思われる。

曲輪1からは、3軒の掘立柱建物跡と多数のピット及び西側に性格不明な遺構が検出された。また、曲輪1南端から曲輪2にかけて、大規模な土坑群及び空堀等が検出されている。以下、これらの施設及び出土遺物について順に述べていく。



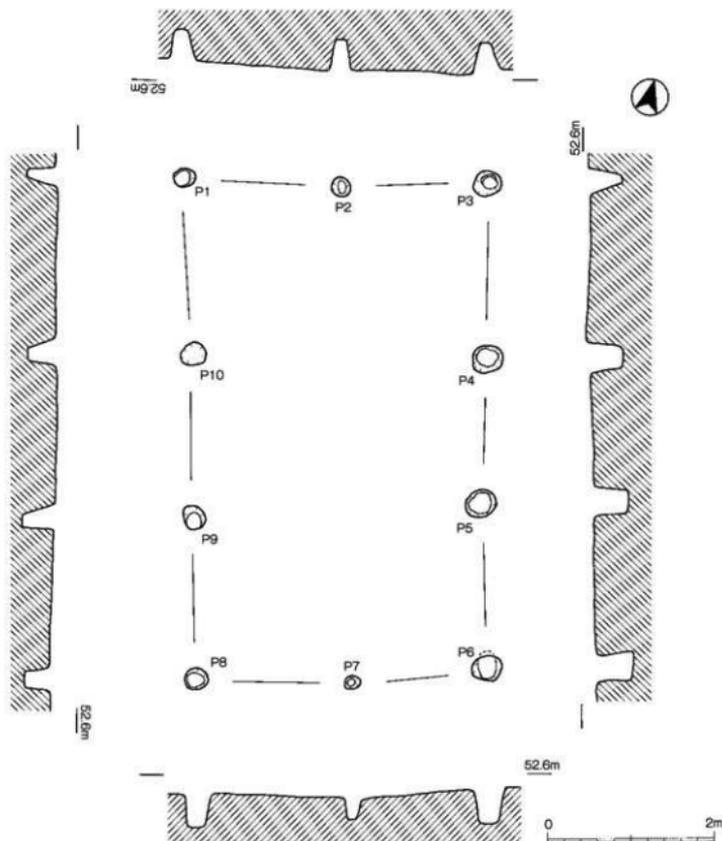
第193図 曲輪 1 遺構配置図



第194図 掘立柱建物跡1

・掘立柱建物跡

向柵城跡から、中世に属するものとして3棟の掘立柱建物跡が検出された。3棟とも、標高約50mの本丸にあたる曲輪1に位置している。掘立柱建物跡1と掘立柱建物跡2は、遺構の切り合いから時期的差が考えられる。また、掘立柱建物跡1のみは庇を有するものである。各建物の計



第195図 掘立柱建物跡2

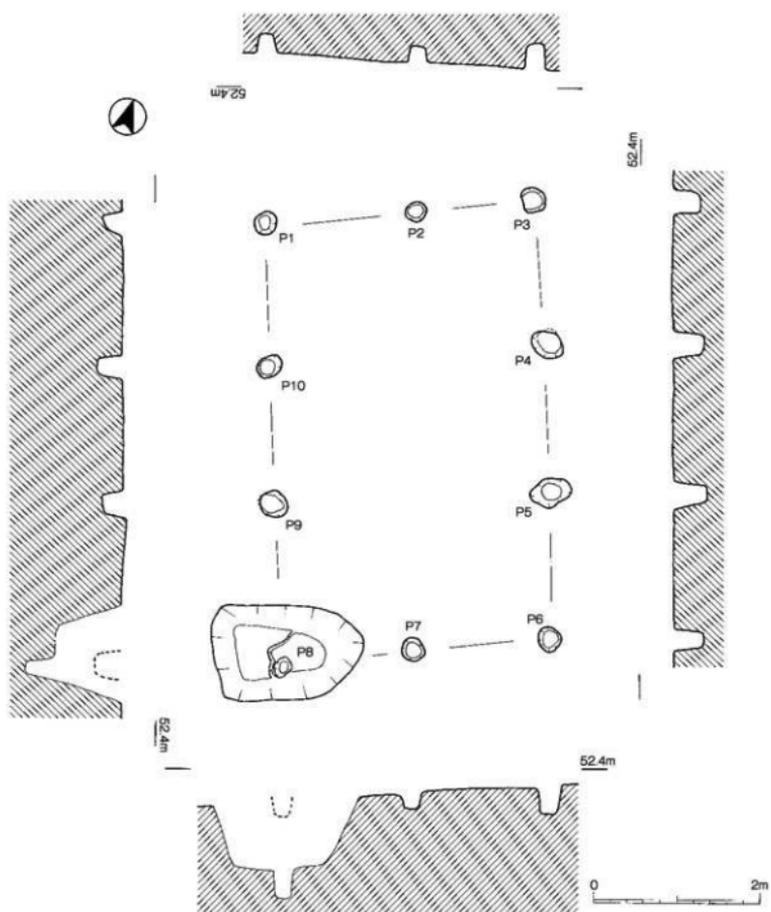
測値は、計測表を参考にされたい。

掘立柱建物跡1 (第194図)

本遺構は、J-26区で検出された。長軸方向をほぼ東西に設定しており、他の2棟とは異なる。また、この遺構のみは西側に庇を設け、1間×2間の建物である。柱穴は3棟の中で最も規模が大きく、深さは約51cmである。P9のみは1か所に複数の柱穴がある。柱穴の径や、深さが不揃いであるのが特徴である。

掘立柱建物跡2 (第195図)

本遺構はI・J-26区で検出された。長軸は南北に設定されており、建物の規模は2間×3間である。床面積は約22㎡であり、内部面積は3棟の中で最も大きいものである。柱穴は比較的規

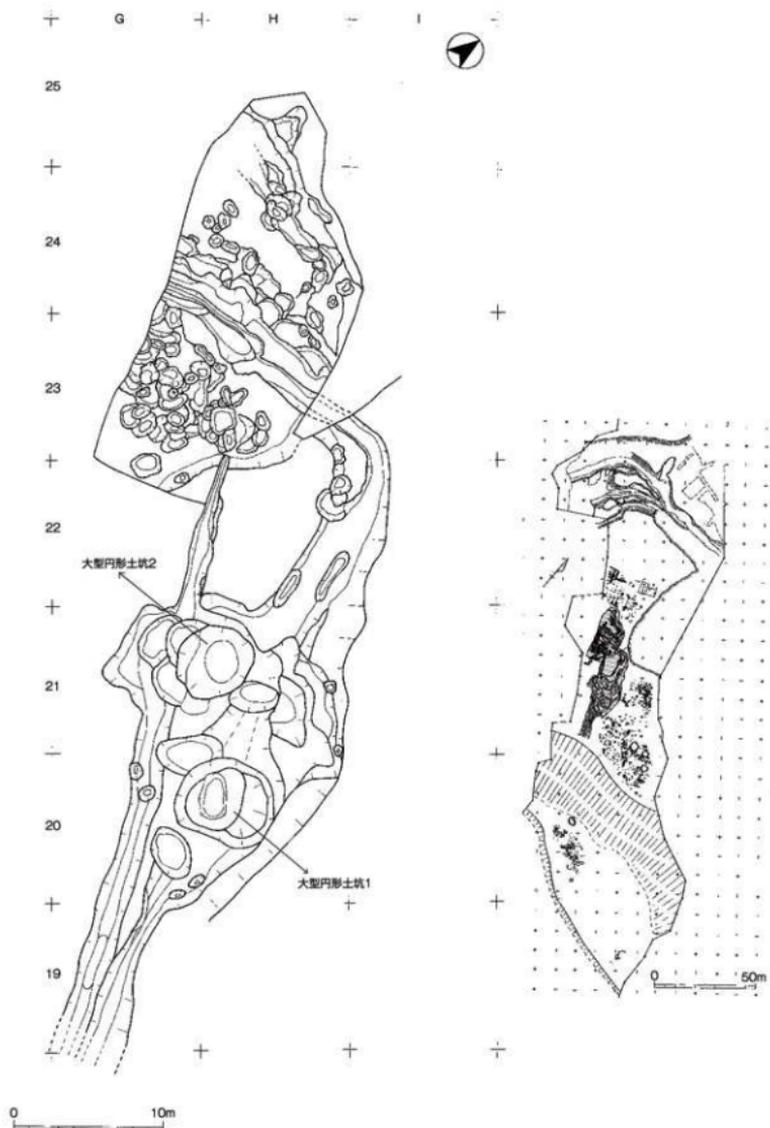


第196図 掘立柱建物跡3

則正しく並ぶ。掘立柱建物跡1との切り合いが確認できるが、使用時期の差は特定できない。

掘立柱建物跡3（第196図）

本遺構は、掘立柱建物跡2の南に位置するI-25区から検出された。長軸は南北で、規模は2間×3間である。柱穴は平均して径が34cm、深さが31cmである。全体的に柱穴の深さが浅いが、これは削平されたためと考えられる。平面プランは楕円形から円形まで様々である。P8は最大幅1.8mの掘り込みの中にあり、径は25cm程度である。掘り込みと建物との関連は明確ではなかった。



第197図 空堀及び土坑群

掘立柱建物跡1 柱穴計測表・柱穴芯芯間計測表

柱穴番号	柱穴 (単位: cm)			柱穴番号	梁間柱間 (m)	柱穴番号	桁間柱間 (m)	桁行間 (m)	
	長径	短径	深さ (総深)						
1	38	33	46	棟部	P 1~2	3.50	P 2~3	2.10	4.20
2	49	33	62		3~6	3.90	3~4	2.12	
3	52	36	86		4~5	3.94	5~6	2.05	
4	45	40	60				1~6	2.60	4.65
5	42	32	44	平均	3.92		2.22		
6	41	38	43	底部	P 7~8	1.90			
7	36	23	48		8~9	2.10			
8	38	33	20						
9	29	25	40(60)						
平均	41.11	32.56	51.13						

掘立柱建物跡2柱穴計測表・柱穴芯芯間計測表

柱穴番号	柱穴 (単位: cm)			柱穴番号	梁間柱間 (m)	柱穴番号	桁間柱間 (m)	桁行間 (m)	
	長径	短径	深さ (総深)						
1	27	22	38	棟部	P 1~3	3.72	P 3~4	2.15	5.95
2	25	22	39		4~10	3.58	4~5	1.80	
3	35	30	40		5~9	3.50	5~6	2.00	
4	40	30	45		6~8	3.55	8~9	1.95	6.15
5	37	33	40				9~10	2.05	
6	37	30	44				1~10	2.15	
7	20	16	26		平均	3.59		2.02	
8	28	26	30(39)						
9	31	25	40						
10	31	27	35						
平均	31.10	26.10	38.56						

掘立柱建物跡3柱穴計測表・柱穴芯芯間計測表

柱穴番号	柱穴 (単位: cm)			柱穴番号	梁間柱間 (m)	柱穴番号	桁間柱間 (m)	桁行間 (m)	
	長径	短径	深さ (総深)						
1	30	27	24	棟部	P 1~3	3.28	P 3~4	1.75	5.40
2	27	23	20		4~10	3.45	4~5	1.80	
3	33	27	33		5~9	3.40	5~6	1.80	
4	43	32	39		6~8	3.28	8~9	2.00	5.45
5	51	36	40				9~10	1.68	
6	32	27	36				1~10	1.77	
7	30	26	21		平均	3.35		1.80	
8	28	22	34						
9	36	31	30						
10	32	24	30						
平均	34.20	27.50	30.70						

・空堀及び土坑群（第197図）

曲輪1の南端から曲輪2の西側半分ほどにかけて、検出された大規模な遺構である。空堀は数本あるが、基本的には、G-14区から東へ直線的に延びI-23区で直角に曲がってG-19区へ直線的に至る。曲輪2と曲輪3の間の斜面でもその断面が観察できることから、中世にはまだ南へ続いていたものであることがわかる。

G・H-23・24区では、この空堀の両側に小さな土坑が数多く検出されている。また、北側の空堀は、数段の階段状を呈していることから曲輪2からと曲輪1への登り口と思われる。H-24区の北側にも土坑及び溝状の遺構と階段状の遺構があるのはそのためであろうか。

H-20・21区を中心にこの空堀の中央の直径約5mほどの大型の土坑が検出された。いくつもの土坑が階段状に掘られているのが特徴である。北側の小さな土坑群とは対照的であり、小土坑群と大型の土坑群を繋ぐように1本の溝状遺構も検出されている。これらの空堀及び土坑群の堆積状況等は第198図・第199図の通りである。また、これらの遺構群中からは、大量の遺物が投げ込まれたような状況で出土した。特に大型円形土坑2からの出土が著しかった。

・大型円形土坑2出土遺物（第200図～第204図）

この土坑からは前述のように、雑多なものが投げ込まれたような状態で出土したため、そのほとんどを一括遺物として取り上げた。

土師器・土製品・陶器（第200図）

1282・1283は、土師器の皿である。内外面ともに煤が付着している。1284は、土師質の捏鉢で内外面ともナテ仕上げである。1285は、底部が直径20cmを超す須恵質の大型の捏鉢か、内面にハケ目調整を施すものである。1286は輪の羽口であり、図の左側部分は高温にさらされていたために、ガラス化している。

1287～1289は、備前系の播鉢の口縁部である。1287は口縁部がほぼ直行、他はやや内弯し、いずれも内面に数条の条線が施されている。1290は、瓦質の播鉢の底部で、条線が放射状に施されている。1291は、常滑焼であるが、部位については定かでない。

瓦質土器（第201図・第202図）

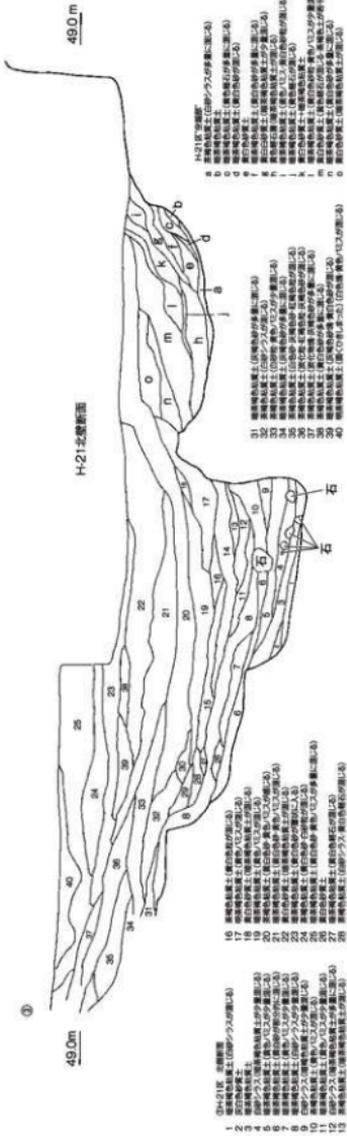
1292～1295は、瓦質の茶釜である。1295以外は鈔より下位に多量の煤が付着していることから、湯釜として大量の湯を沸かすために用いられた可能性が高い。1292は、花型のスタンプ文及び波状の曲線が施され、取っ手が取り付けられていたと思われる。1293は花型及び巴状のスタンプがほとんど施されている。取っ手については残存していないため定かでないが、1292と比べると、取っ手が取り付けられていた可能性が高い。1296は、これらの蓋である。

投弾等（第202図・第203図）

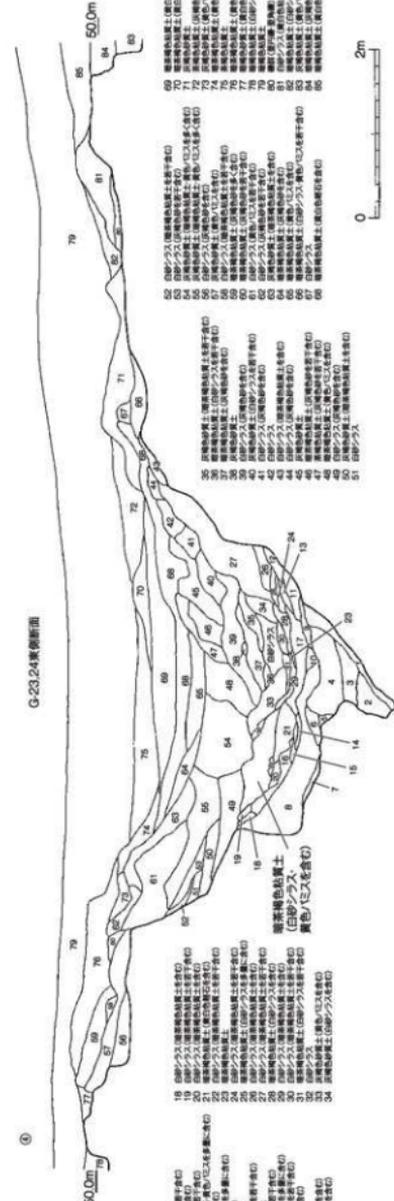
1297～1302は、縄文時代の磨石などが流れ込んだものか、もしくは、投弾としての転用品であろうと考えられるものである。1303の磨製石斧も同様である。この石斧は、両面及び側面を丁寧に研磨しており、刃部は使用による刃こぼれが観察される。

陶磁器（第204図）

1304は、白磁の皿で口縁端部が端反る。1305は、青磁の碗の底部から体部へかけての部分である。焼成が不良で発色も黄色に近く、線描による蓮弁文が施されている。1306も青磁の碗で見込



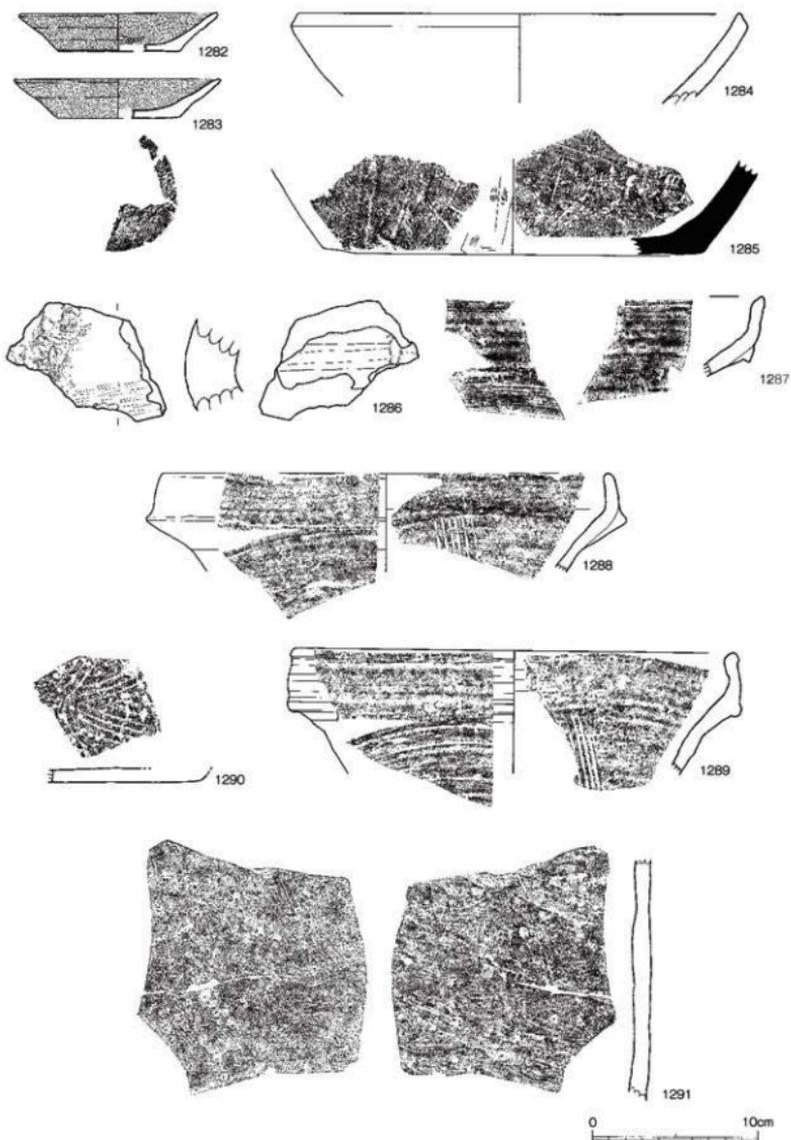
- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42



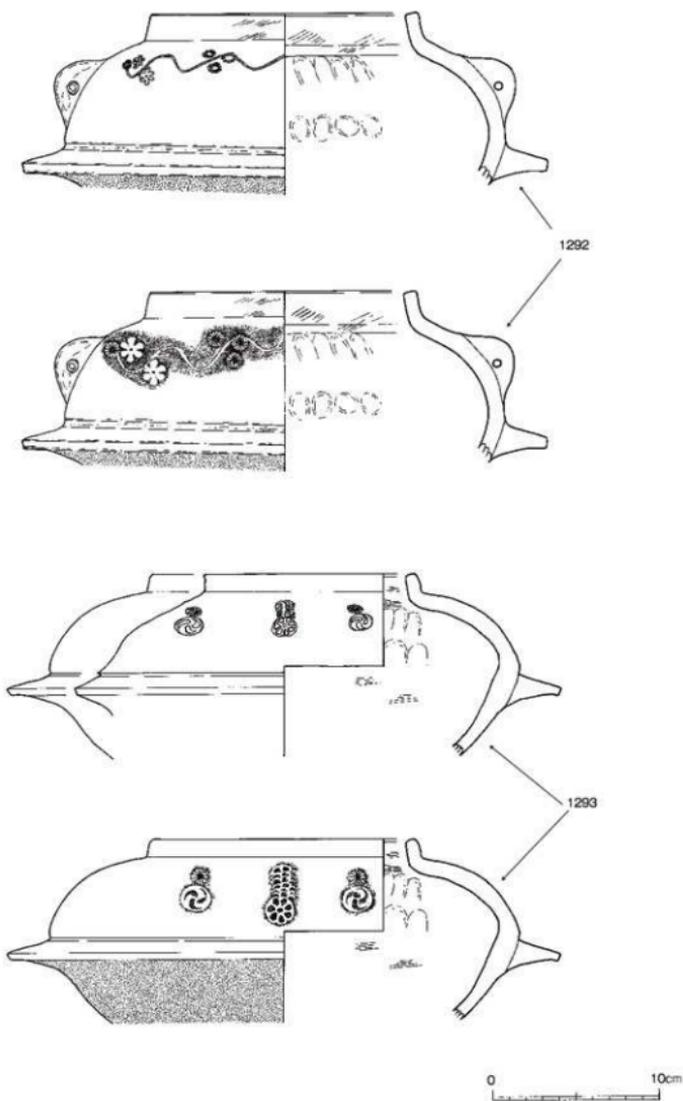
- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
- 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62

第199図 空堀及び土坑群断面図 (2)

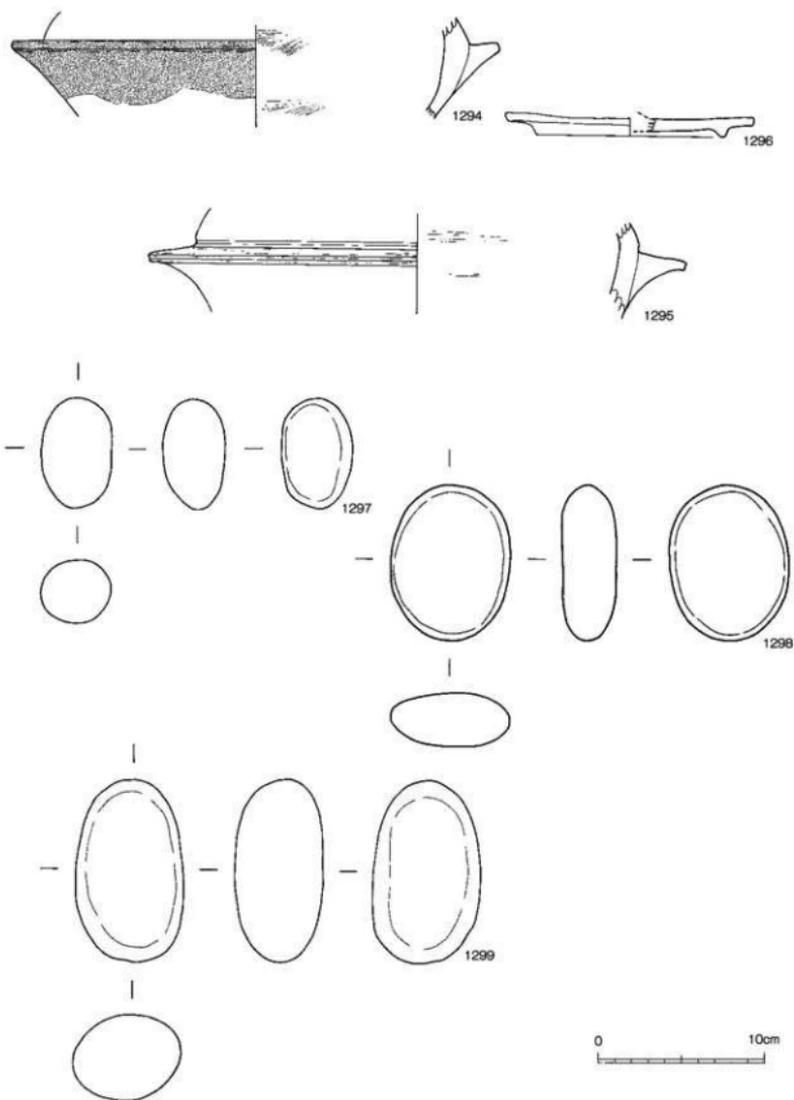




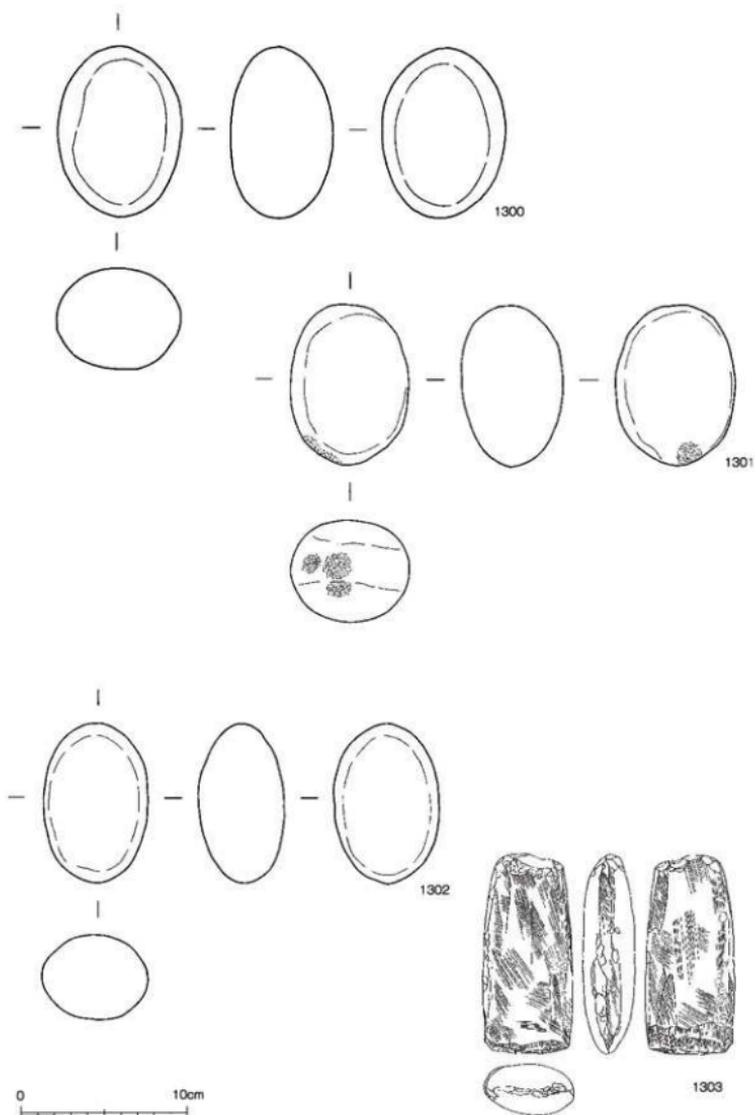
第200図 大型円形土坑2出土遺物 (1)



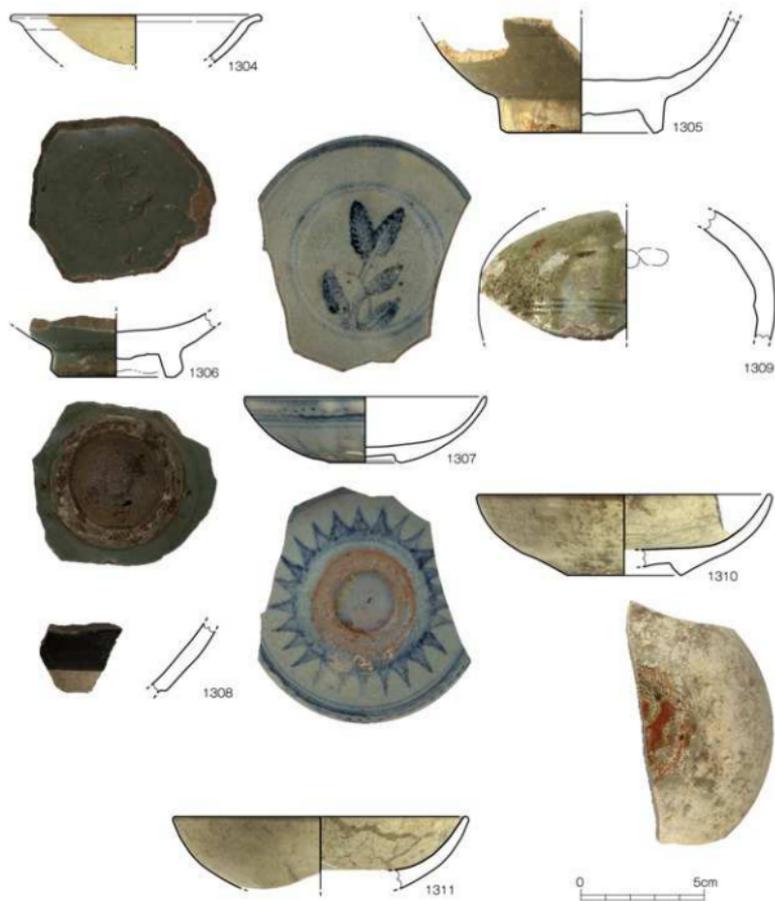
第201図 大型円形土坑2出土遺物(2)



第202図 大型円形土坑2出土遺物(3)



第203図 大型円形土坑2出土遺物(4)



第204図 大型円形土坑2出土遺物(5)

みに印花文を施す。畳付から高台内面は粗い釉掻きによる露胎である。1307は、口縁径約10cmの青花の皿である。見込みに草花を描き外面に芭蕉門を描く。底部は碁笥底を呈している。1308は、美濃系天目碗の体部である。釉掛けは薄く鉄釉の発色は、黒褐色である。1309は、瀬戸系の壺の肩部付近で、肩部径は約15cmで、その下位の部分に2本の沈線を施している。

1310・1311は、白土粉青の青磁で、碁笥底の丸皿である。碁笥底には砂が多く付着し、1310は高台内に「こげ」が観察される。双方は同一個体の可能性もある。

・空堀及び土坑群出土遺物（第205図～第216図）

土師器（第205図）

空堀及び土坑群からは、大型円形土坑2と同様に雑多なものが投げ込まれたような状態で出土したために、そのほとんどを一括遺物として取り上げた。

1312～1319は土師器であり、いずれも糸切底である。1312～1318までは、土師器の皿で1317の口径がやや大き目である以外は、ほとんどが10cm内外の口径である。1312・1313は、底部と体部の境をあまり意識せずに体部へと立ち上がる短い体部で器高も低い皿類である。

1314は、皿としたが小片のため器種についても疑問が残る。1315の体部はやや外反し、端部が尖るもの、逆に、1316～1318は底部と体部の境が明瞭で、体部が直線的あるいは、やや内弯気味のものである。1319は、坏と思われるものである。

土師質・須恵質・瓦質土器等（第205図）

1320は、土師質、1321は須恵質あるいは陶質の播鉢で、いずれも、内面に条線を施すものである。1322は口縁部が内弯し、平坦な口唇部が内傾する茶褐色の陶器である。備前系の播鉢であろうか。1323は茶釜、1324は瓦質の火舎あるいは花鉢の脚部である。1323は、1292などと同様に鈔の下位部分には煤が大量に付着していることから、茶釜としての用途よりも、湯釜としても使用されたものと思われる。

銭貨（第205図）

1325は、琉球銭の「大世通寶」で、初鑄年は1454年である。（第44表参照）

陶磁器等（第206図～第209図）

1326～1333は、龍泉系青磁で、13世紀頃から16世紀前半頃までとかなりな時間幅がある。1333が皿でそれ以外が碗である。1326・1327は、蓮弁を施すものである。1328は、外面口縁部に沈線状の細い線を施すもの、1329・1330は、口縁部が端反るものである。1331は線刻文で、やや口縁端部が膨らむ。1332は底部で、施釉は畳付にまで及び、高台内は露胎である。

1334は、白磁の碗で口縁下部がやや窪むようにして端反るものである。

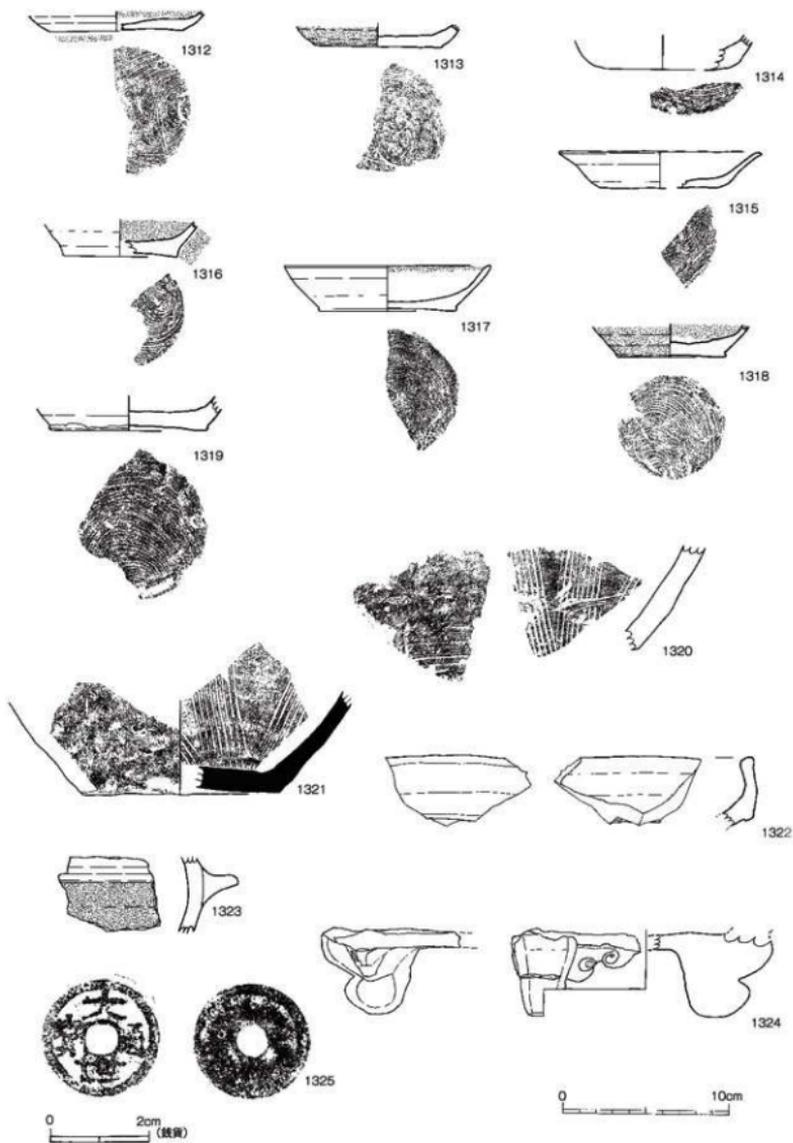
1335・1336は、漳州窯系の青花である。1335は芭蕉文の碗で、高台内にこげあるいは煤が観察され、釉は浅い色である。1336は、萐筍底の丸皿であり、ヒト型の寿の文字を施す。釉は、灰オリーブである。

1337～1348（第207図・第208図）は、常滑焼の大甕である。1337が口縁部、1338・1339が頸部近く、1340・1341が胴部近くの屈曲部である。1345には、格子目状の叩きの痕がみられる。これらのほとんどが同一個体と思われるものである。釉掛けは、胴部最大部よりやや下位にまで及んでいるようである。

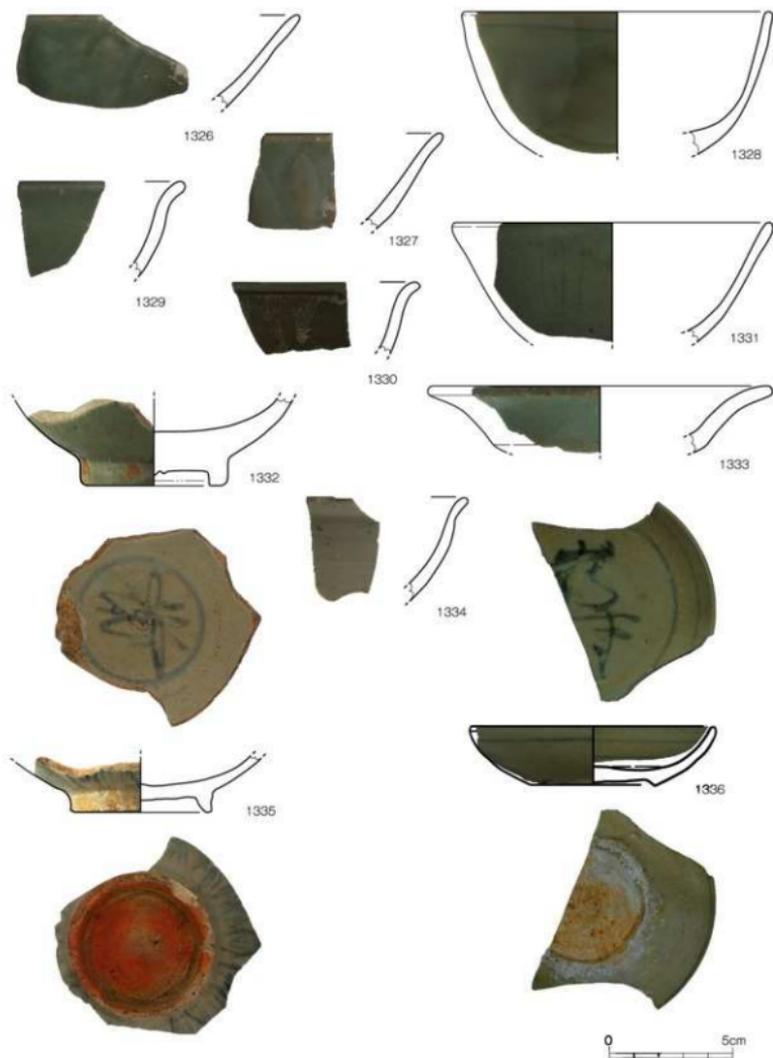
1349（第209図）は、黒色に近い陶器の甕で、胴部最大径が約40cm、胎土はにぶい黄橙色である。

その他（第209図）

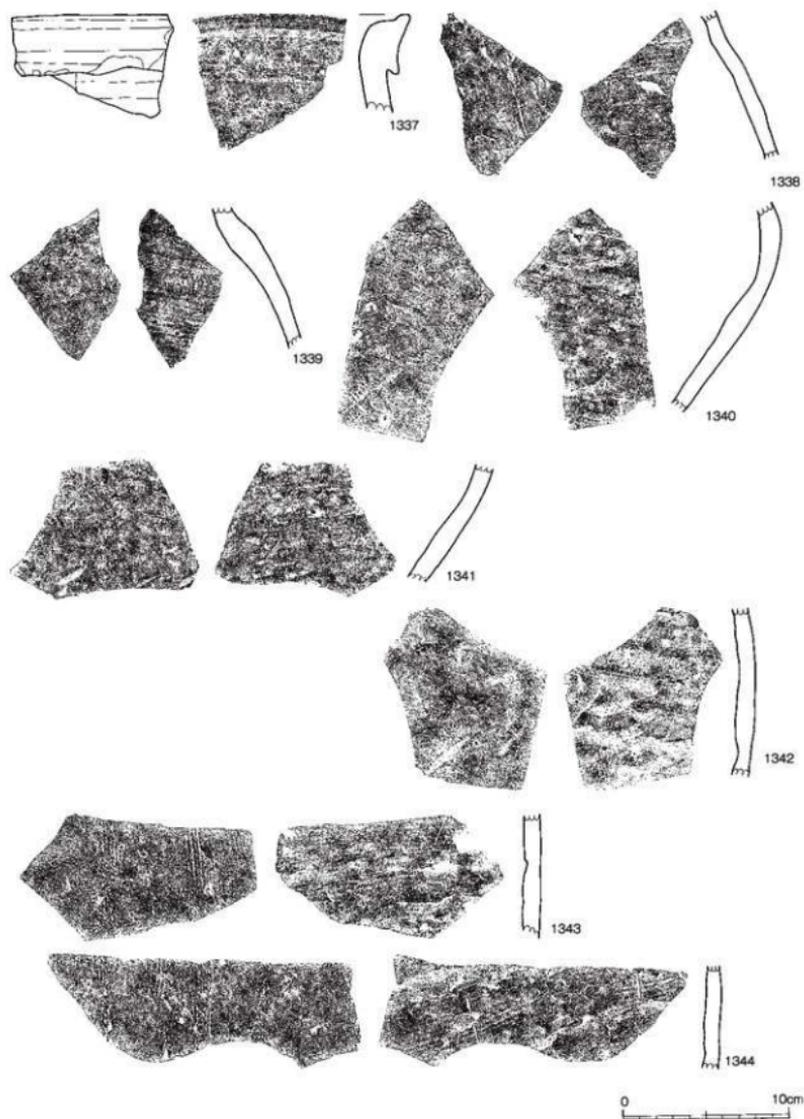
1350～1352（第209図）は、流れ込みと考えられる遺物で、ほとんどが古代以前のものである。1350・1351は須恵器である。1350は、甕の肩部で、外面が平行タタキ、内面のあて具が同心円状であり、1351は、高台付の坏と思われるものの底部片である。



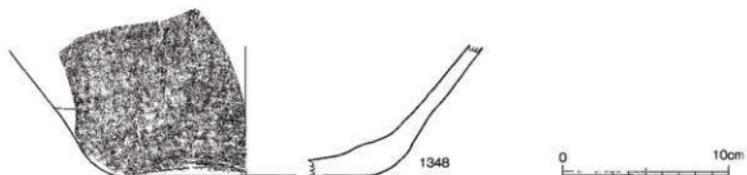
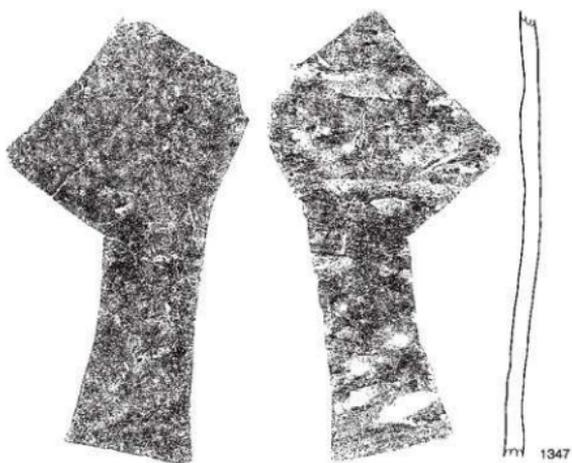
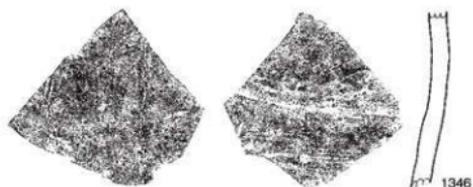
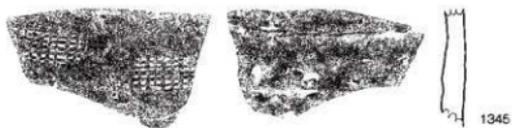
第205図 空堀及び土坑群出土遺物 (1)



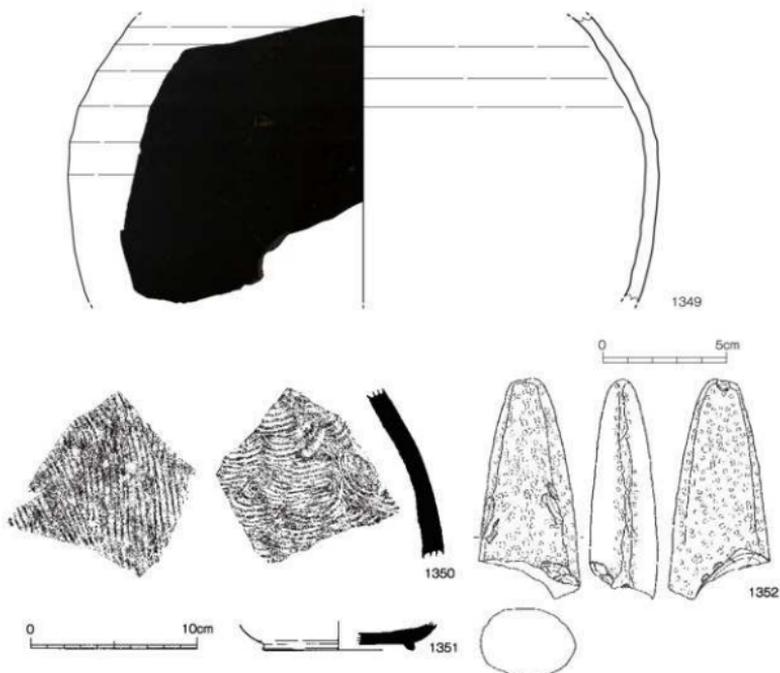
第206図 空堀及び土坑群出土遺物 (2)



第207図 空堀及び土坑群出土遺物 (3)



第208図 空堀及び土坑群出土遺物 (4)



第209図 空堀及び土坑群出土遺物 (5)

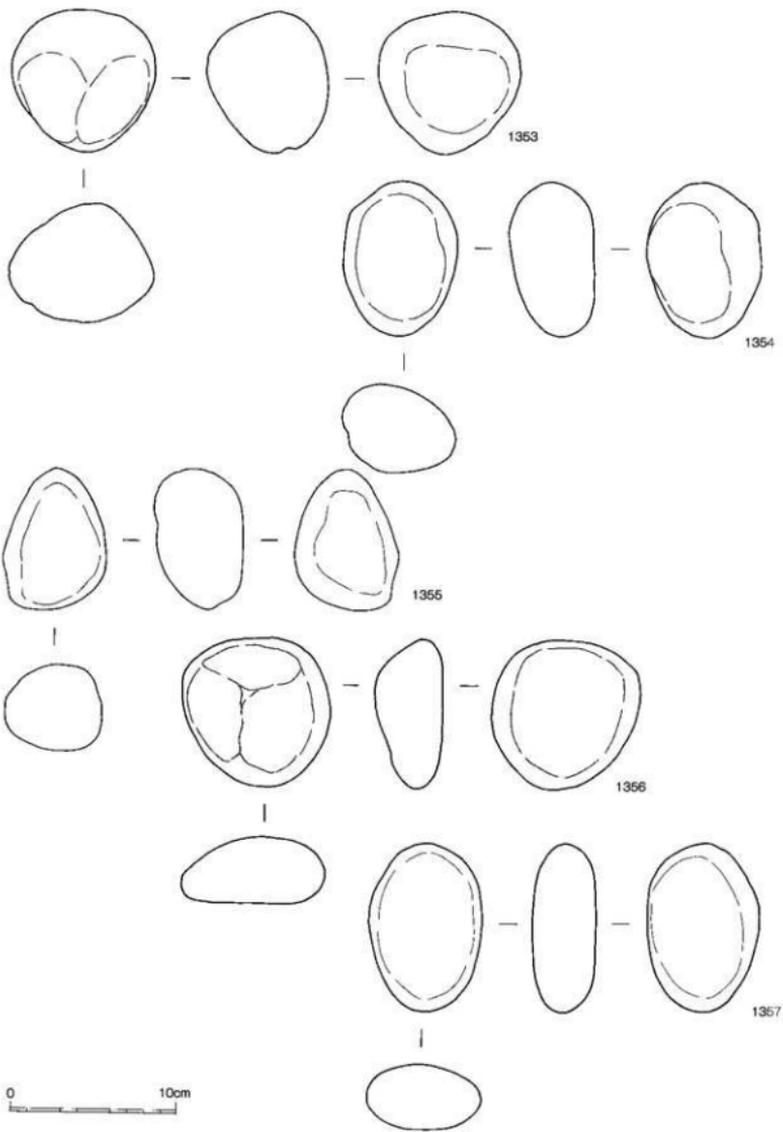
1352は丁寧な敲打成形により成形した石斧であるが、刃部を欠損している。石質は安山岩である。

投弾等 (第210図～第216図)

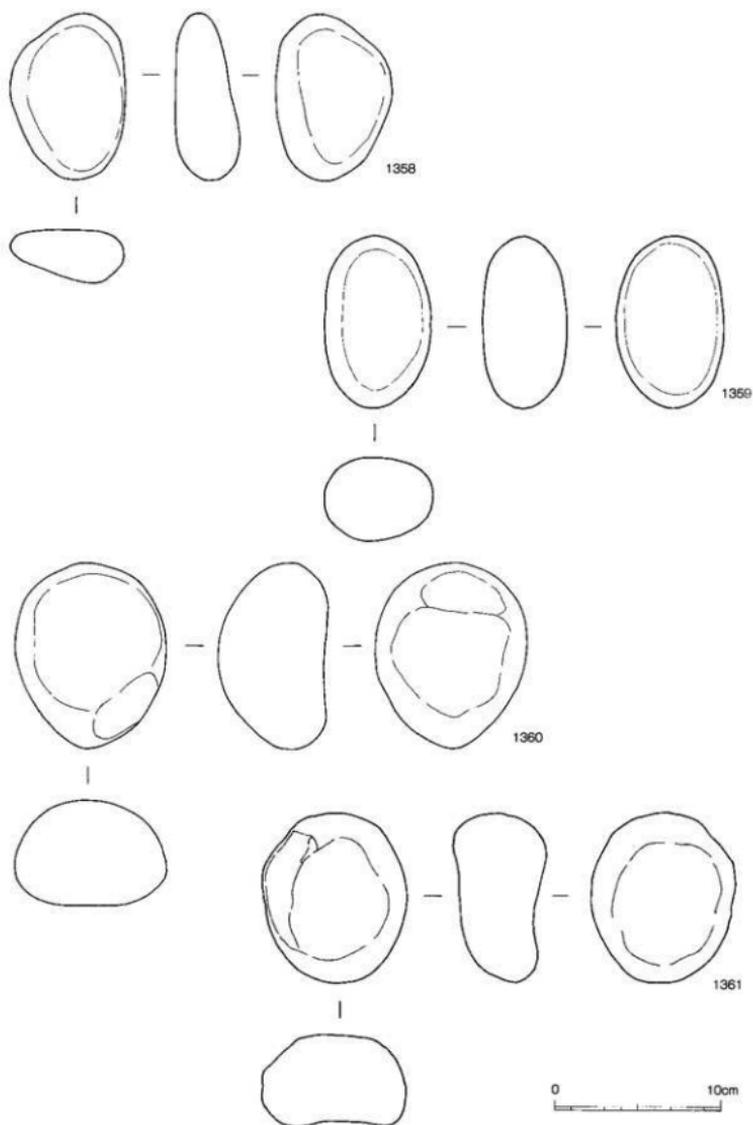
空堀及び土坑群の投弾も大型円形土坑2と同様に縄文時代の磨石・敲石・凹石等及び自然の円礫が出土している。縄文時代の磨石等については、流れ込みか、それらを投弾として転用したかについては、自然礫の出土状況と同様に規則性らしき状況は見られなかったためその判別は不可能であった。縄文時代の磨石等あるいは、それらの転用品と思われるものとして、1357・1359・1365・1369・1372・1375・1378・1379がある。

1357・1359は砂岩製の磨石で、全面が滑らかなものであり、1365は、捺痕が部分的に観察されるものである。1369は、敲打痕のある半欠品である。1372はやや大型の磨石、1375は、長径が10cm以下の小さ目の安山岩製の磨石である。1378は、円形の凹石、1379はやや大型の凹石である。

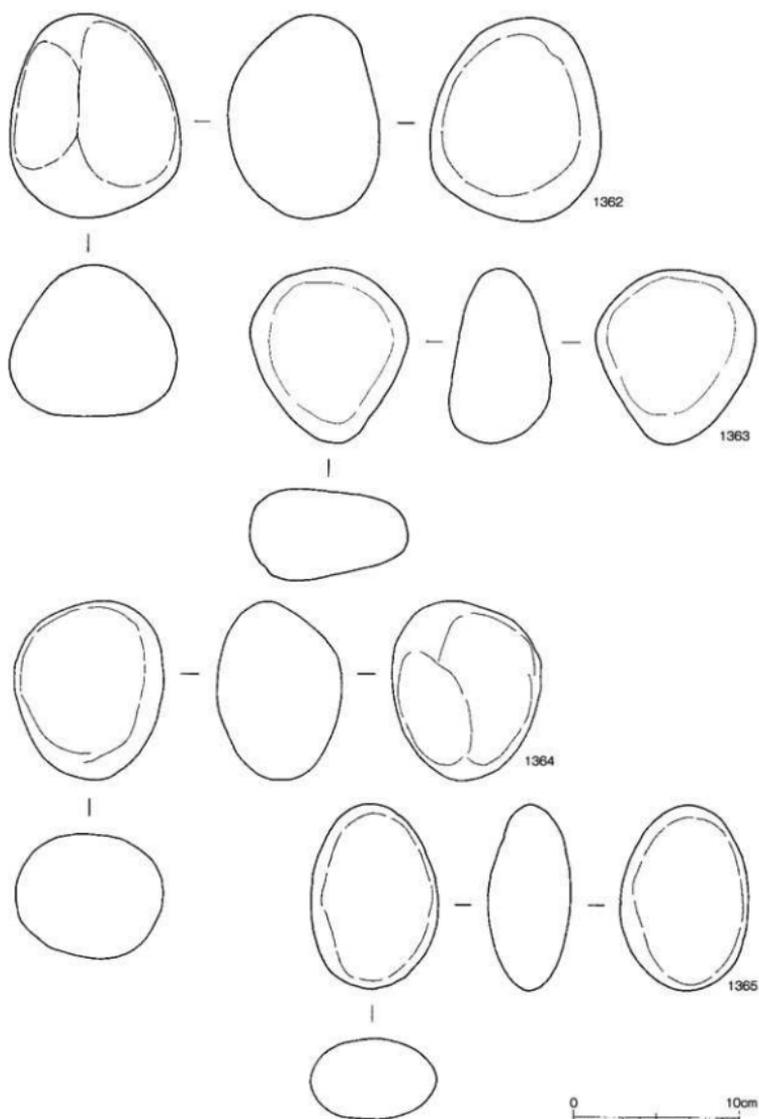
1353～1356、1358、1360～1368、1370・1373は、最大長約10cm程度での自然の円礫であり、石質は安山岩と砂岩のいずれかである。また、1374・1376は、両手で頭に抱え上げて投げ落としたのでは、と思われるような大きなものもある。特に1376は、半欠品であるが完形であれば4kg以上の重量であったろうと思われる。



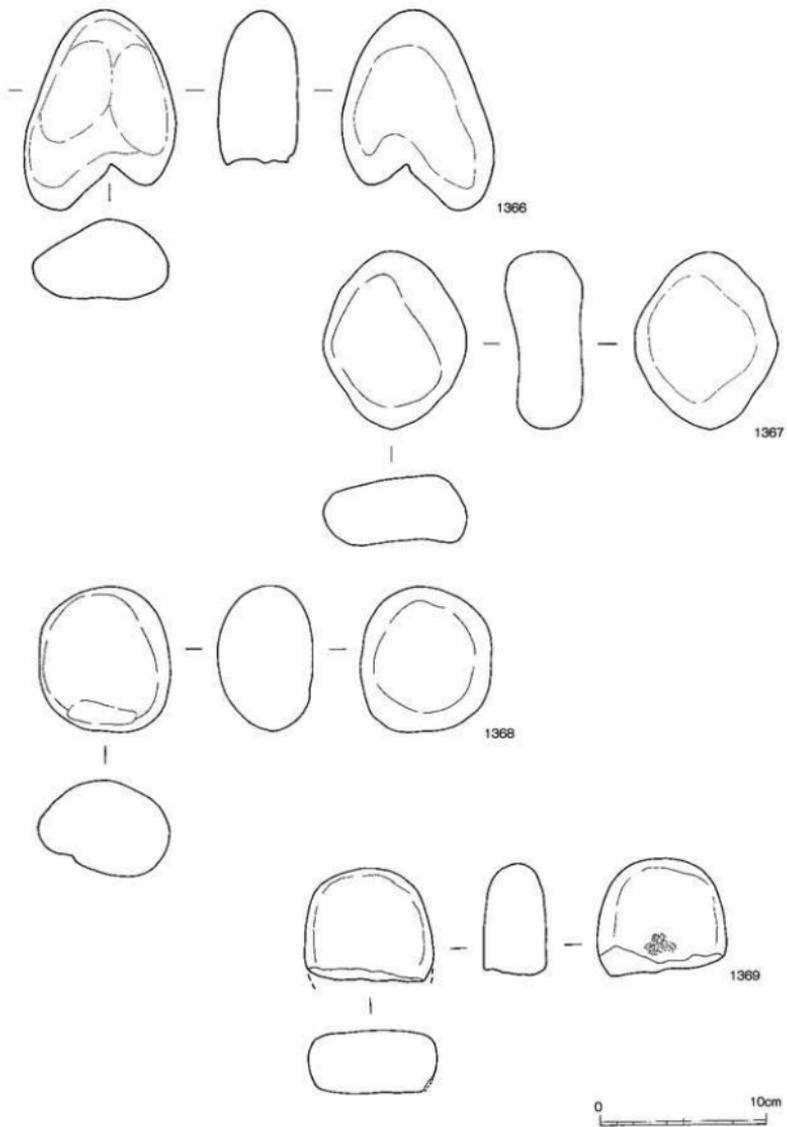
第210図 空堀及び土坑群出土遺物 (6)



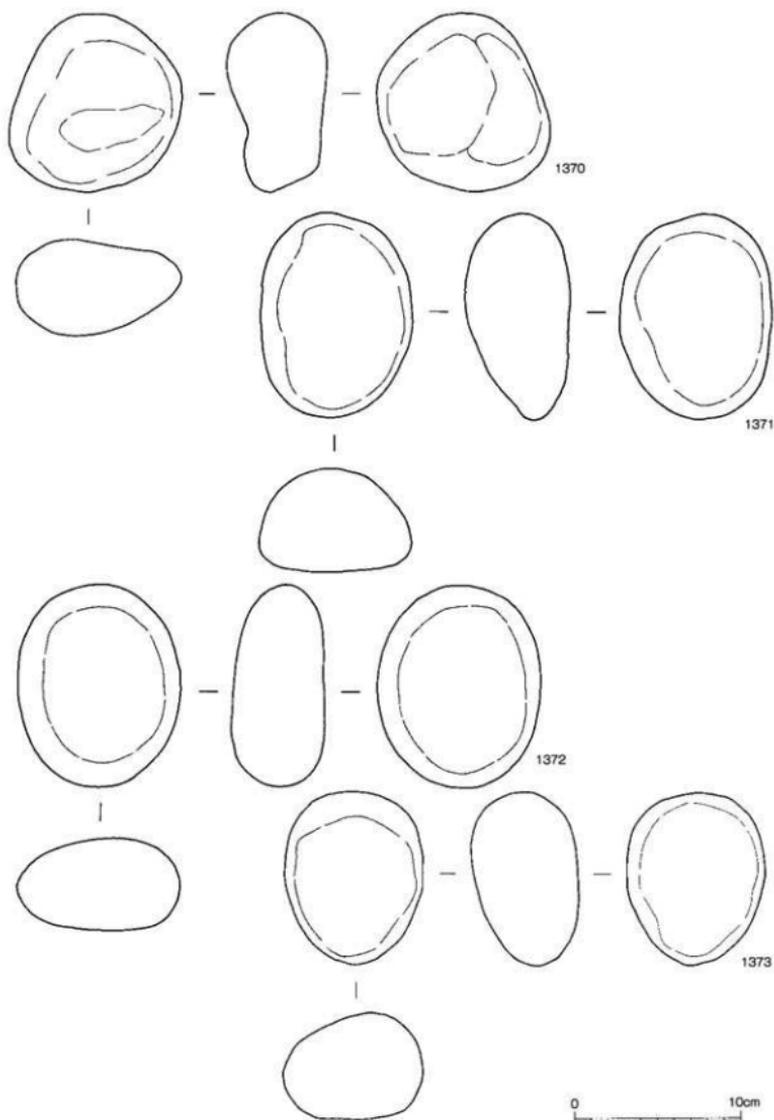
第211図 空堀及び土坑群出土遺物 (7)



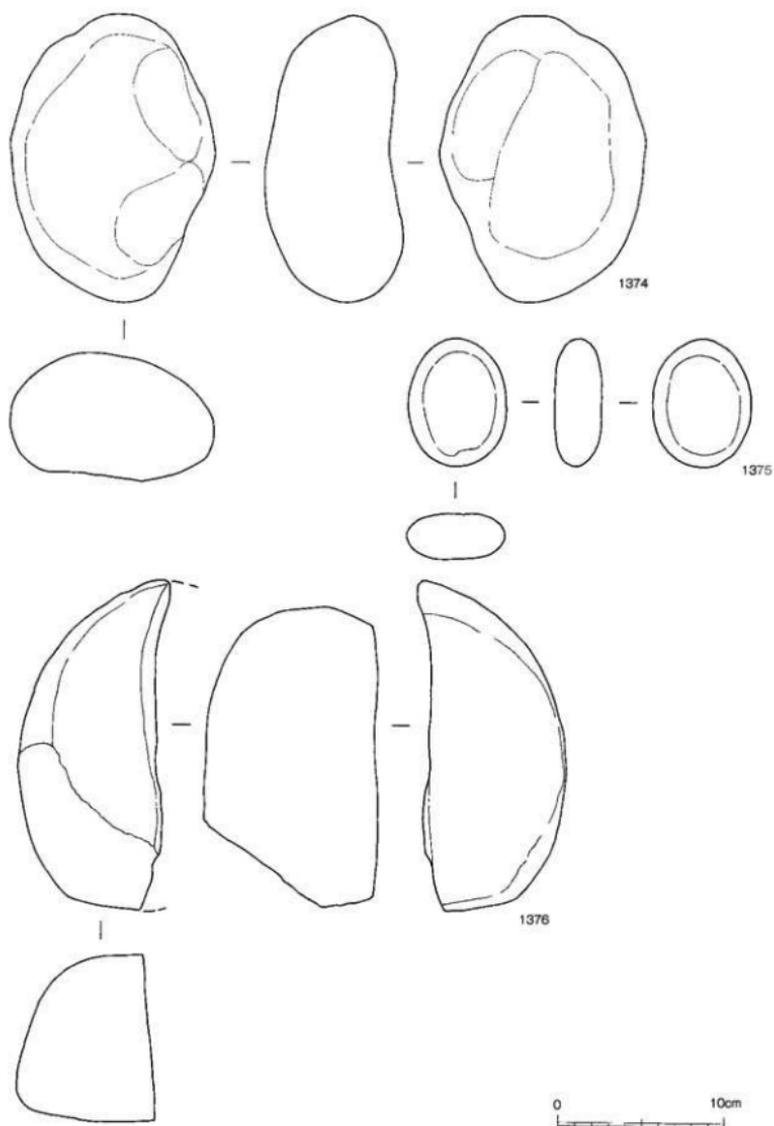
第212図 空堀及び土坑群出土遺物 (8)



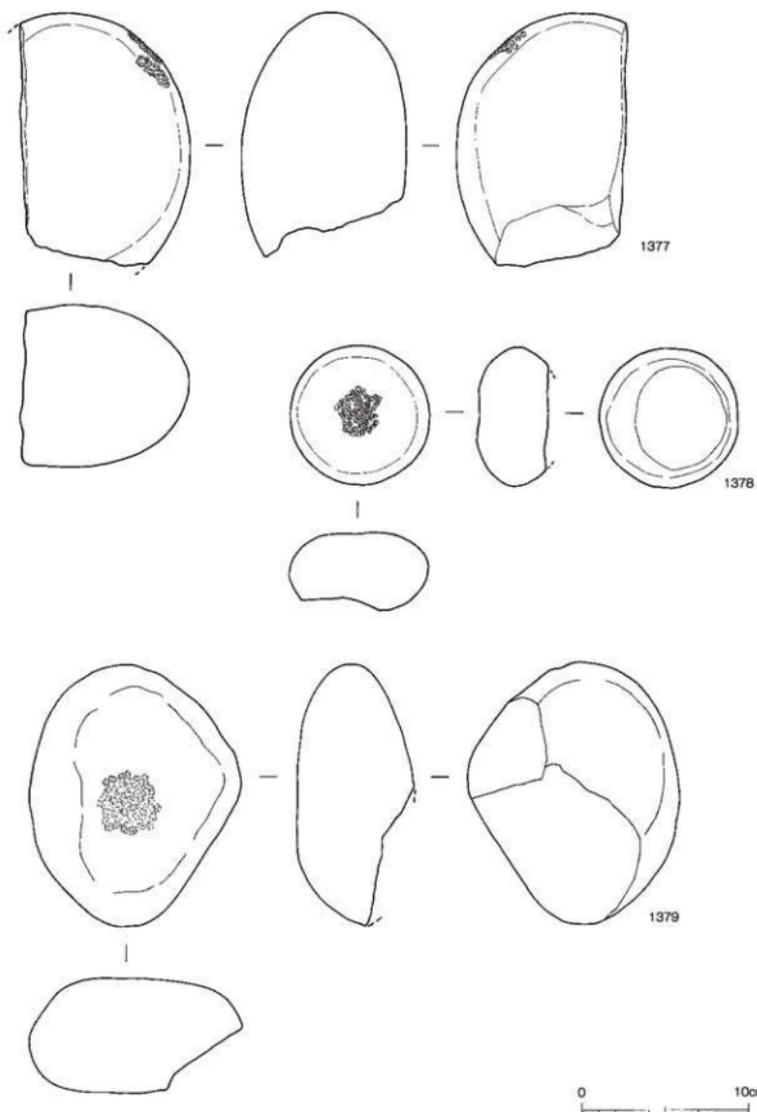
第213図 空堀及び土坑群出土遺物 (9)



第214図 空堀及び土坑群出土遺物 (10)



第215図 空堀及び土坑群出土遺物 (11)



第216図 空堀及び土坑群出土遺物 (12)

(3) 曲輪2 (第217図)

曲輪2は、やや南西に傾斜しているだけで、空堀及び土坑群の部分を除けばほぼ平坦である。この曲輪は、本城の調査区内の曲輪では最も遺構数の多かった曲輪である。遺構としては、曲輪1から伸びる空堀及び土坑群の他に、堅穴遺構3基、炉跡14基(曲輪1との境部分を含む)、土坑と認定したものの37基、中世墓3基及び無数の柱穴等である。堅穴遺構以外の遺構は、曲輪3でも検出されていることから、比較検討からも、曲輪3の特徴及び出土遺物の説明の後に、曲輪2・3の中世墓、土坑、炉跡について合わせて順に述べていくものとする。

・堅穴遺構

曲輪2から3基の堅穴遺構が検出された。これら3基は、曲輪2の南東部、I・J-17・18区に集中している。遺構内からの遺物の出土は少なく、堅穴遺構3からは中世の遺物が3点出土したのみである。

堅穴遺構1 (第218図)

本遺構はJ-17区から検出されたものである。検出面は、Ⅲ層のアカホヤ面である。平面プランは隅丸方形でその規模は3m×3mである。検出面からの深さは側壁部分で約40cm、中央部で約20cmと中央部の床面が盛り上がる構造である。南南東側の張り出し部は階段状を呈しており、出入り口の可能性もある。また、側壁に沿った床面は全体的に中央より低いことから、壁帯溝を意識したものであろうか。南側の張り出しについては、そのプランを確認できなかった。なお、中央セクションベルトの堆積状況は、第218図に記した通りである。

堅穴遺構2 (第218図)

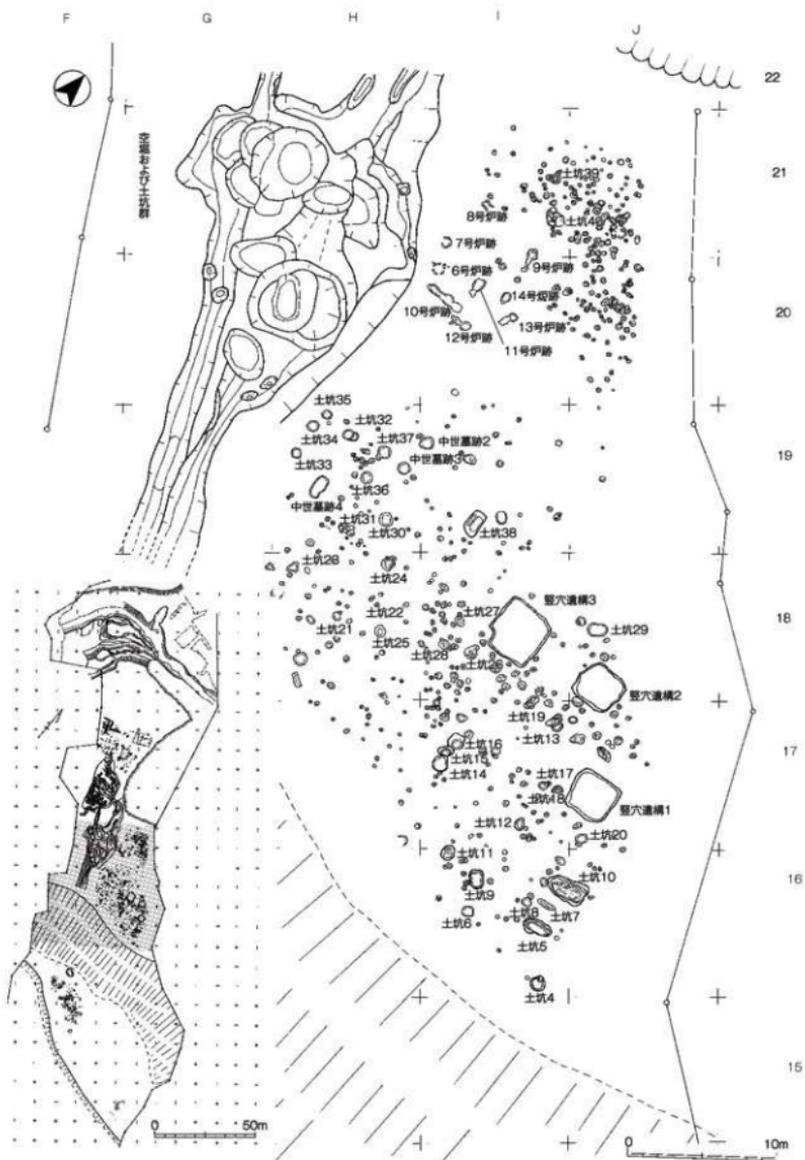
本遺構はJ-18区で検出されたものである。検出面は、Ⅲ層のアカホヤ面である。平面プランは隅丸方形を呈し、その規模は2.9m×2.7m、検出面からの深さは平均的な床面までが約20cmである。西側から東側側壁の床面に沿って逆「L」字状の幅・深さ共に約15cm、南南東側壁と南側壁床面に沿って、長さ約1m幅約15cm、深さ15cm壁帯溝が検出された。また、これらに沿うような形で、11本の柱穴が確認された。

柱穴の規模はほぼ同じであり、プランは楕円形のものが多い。壁面近くにある土坑は、後世の攪乱である。なお、検出面から床面までが20cm程度と浅いことから、上面の削平が著しかったものと思われる。

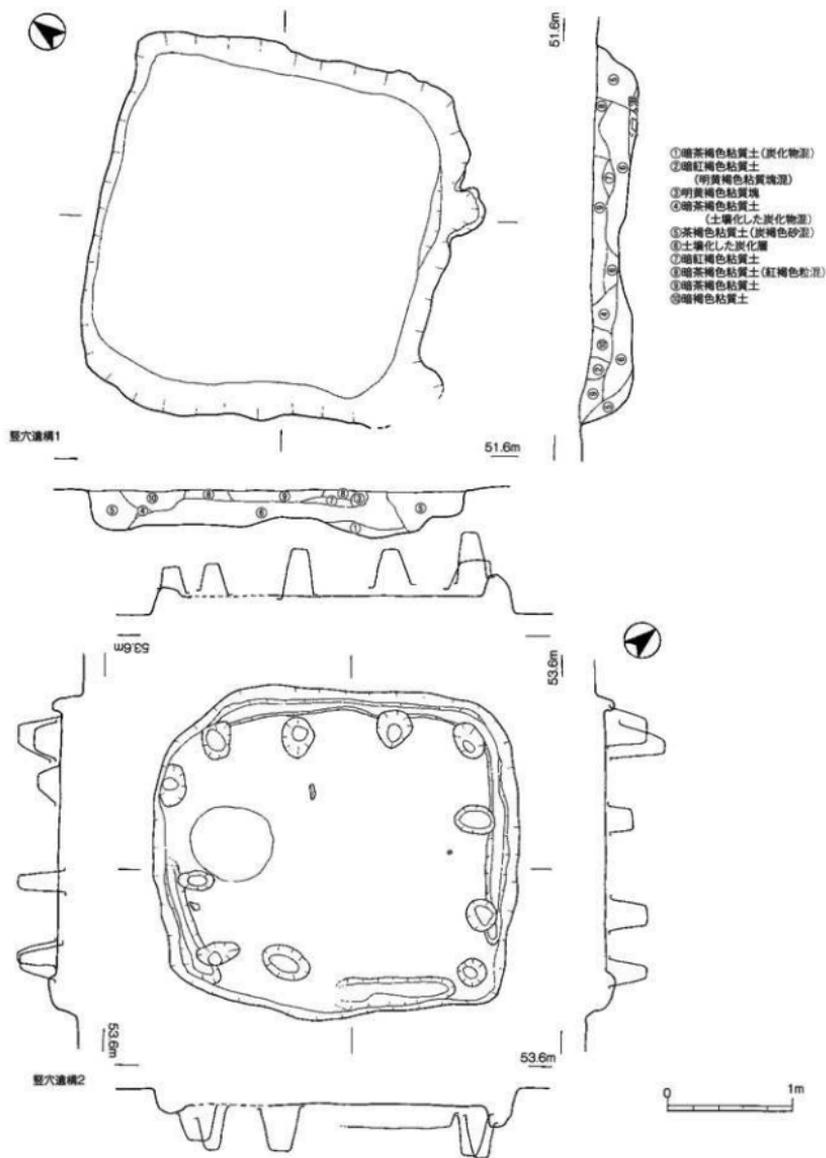
堅穴遺構3 (第219図・第220図)

本遺構は、I-18区で検出された。検出面は、Ⅲ層のアカホヤ面である。平面プランは、長方形を呈し、規模は3.9m×3.5m、深さは約50cmである。遺構の北東部と北西部の壁に沿って壁帯溝状の溝が検出され、この溝には、炭化物が集中して堆積していた。溝に付随して柱穴が2本確認された。柱穴としたが柱との関連があるかは定かではない。遺構全体の埋土は、主に黒茶褐色土が占めるが、この中からもシラスブロックの他に炭化物が部分的に確認された。

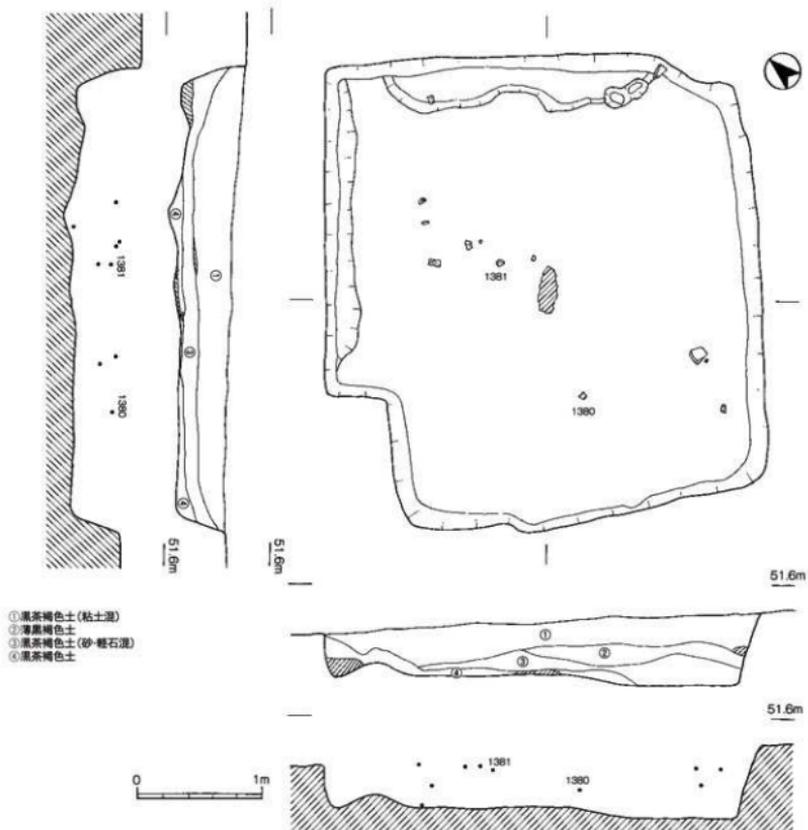
遺物は小片が数点出土した。図化し得たのは、3点であった。1380は瓦器質の播鉢である。内面に櫛状の条痕が確認できる。1381は土師器の皿である。口径は8.2cmを測り、底部から直線状に口縁部へ立ち上がるものである。底部切り離しは、糸切りである。1382は龍泉系青磁の14世紀代の端反りの碗である。



第217図 曲輪2遺構配置図



第218図 竪穴遺構1・2



第219図 竖穴遺構3



第220図 竖穴遺構3出土遺物

(4) 曲輪3 (第221図)

曲輪3は、発掘範囲の中ではもっとも標高が低く、約40mである。南西へならかに傾斜しており、南側は後世に畑地として削平されたものと思われる。この曲輪からは、大き目の投弾、被熱したと思われる黒色化した投弾類、中世墓1基、土坑3基、炉跡5基及び青磁碗と土師器の埋納遺構などが検出されている。

曲輪2の中世墓、土坑や炉跡についても、ここであわせて述べていく。

・投弾等 (第222図～第224図)

曲輪3の投弾は、そのほとんどが小児頭大あるいは、それ以上の大きさのものである。重量は2kg～3kgが平均的であるが、1386は、6kgという重量である。どれも自然石であり、石質は砂岩が主である。また、1385・1386は、被熱のために表面が黒色に変色している。空堀や土坑群で出土したような、つぶてのような自然石はほとんどなく、大型のものが多いのが特徴である。なお、Ⅲ層の包含層から出土した石については、縄文時代の磨石、敲石や凹石として第V章でとりあつかった。

(5) 曲輪2・3共通の遺構

・中世墓1 (第225図・第226図)

中世墓1は、曲輪3の中央部であるF-11区から検出された。平面プランは、やや台形に近い隅丸方形で、主軸はほぼ南北である。北壁辺が1m、南壁辺が1.2m、南北の主軸は2.2mである。検出面はⅢ層である。検出面から床面までの深さは、約25cmであることから、現代までにかなり削平されたことが伺える。人骨については、残存していたものの、骨粉状でその詳細は、不明である。

出土遺物は、土師器1点・洪武通寶2点・鉄釘3点でほとんどの遺物が中央部に集中している。土師器は、口縁径約12cm、器高約3cm、底部径約6cmの糸切底である。平坦な底部からやや内弯しながら口縁部へと至る。口縁部の外面には、煤が付着していた。釘3本は、腐食が激しく図化できなかった。土師器よりやや低いレベルで検出された。

洪武通寶2枚が出土した部分は、幅約数cm・長さ10cm程度の緑青の広がりが見られ、わずかではあるが繊維の痕跡も観察された。このことから、洪武通寶は、ある程度の枚数を布状の袋等に入れて供献したものと想像される。

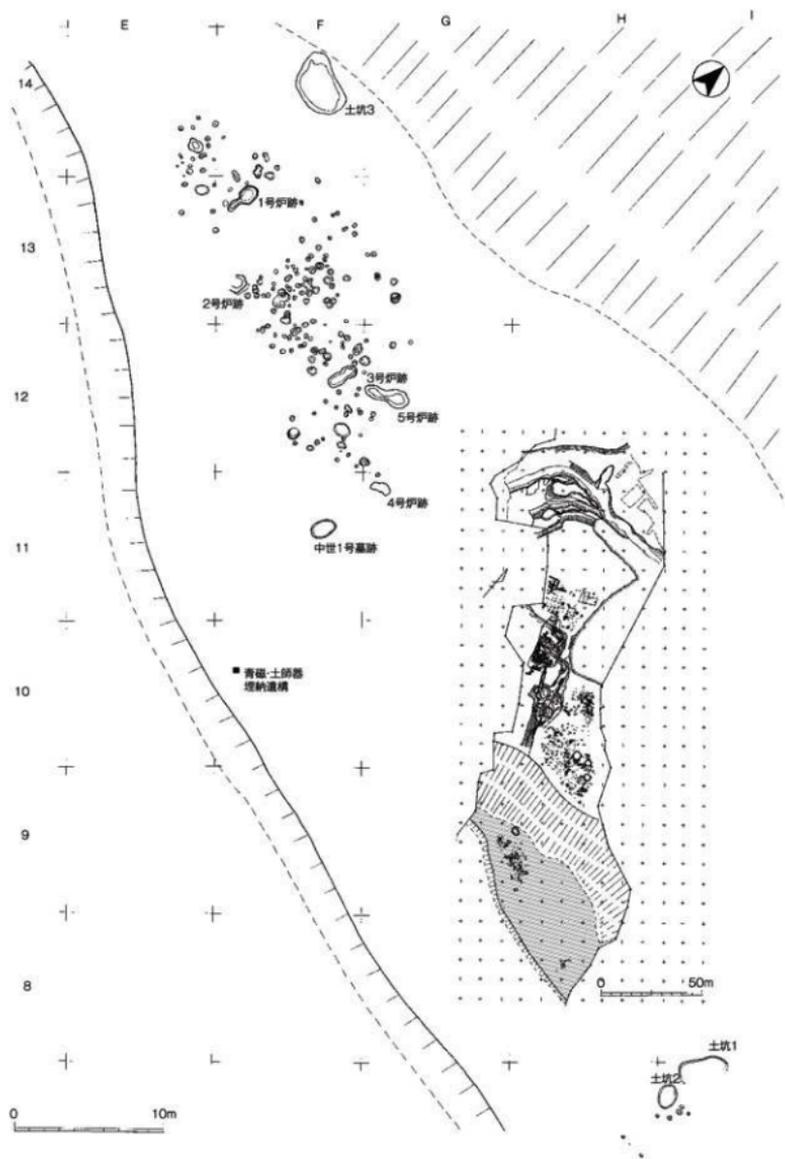
中世1号墓が土坑墓であったか、木棺墓であったかについては、鉄釘が中央部で出土したことから、客観的な材料がないためにどちらともいえない。

・中世墓2

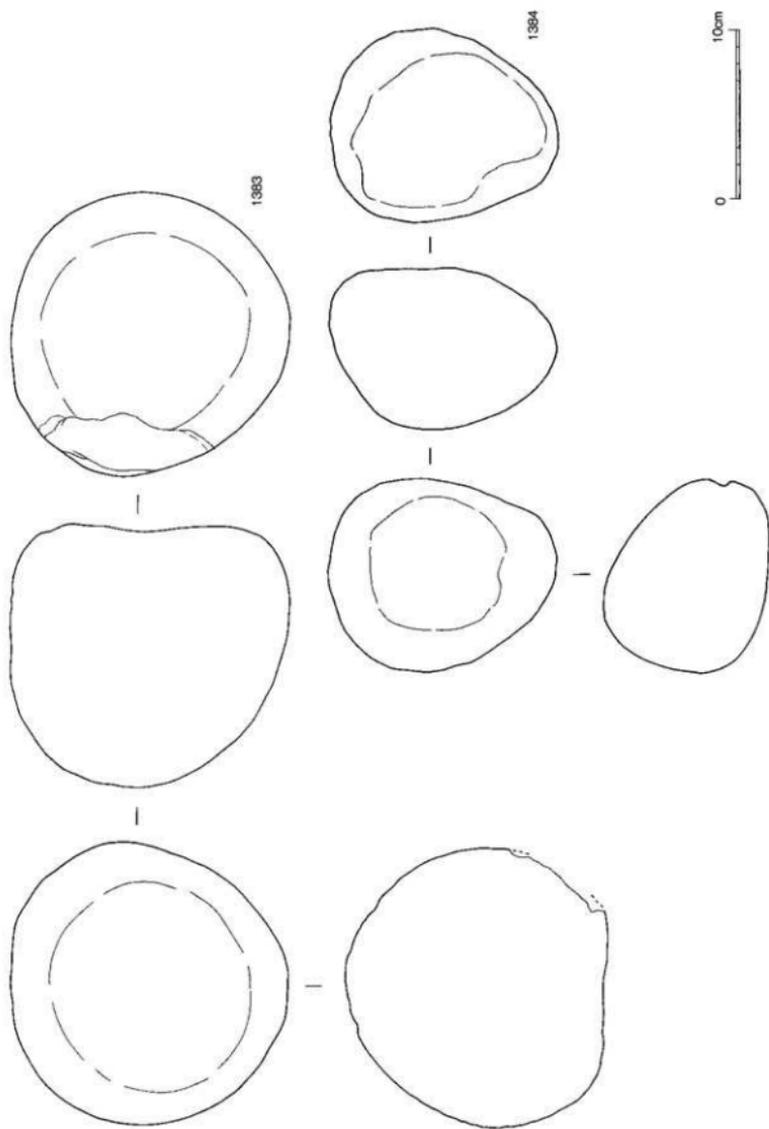
中世墓2は、曲輪2の中央部よりやや西側であるI-19区から検出された。平面プランはほぼ円形で、その直径は80cmである。

この中世墓2からは、人骨は出土しなかったが、鉄釘と思われる小片が埋土より数点出土したこと、南側数mのところに、次に述べる中世墓3が検出されたことや中世墓3とその埋土が全く同一で、遺構の形状も近いことから、中世墓としたものである。

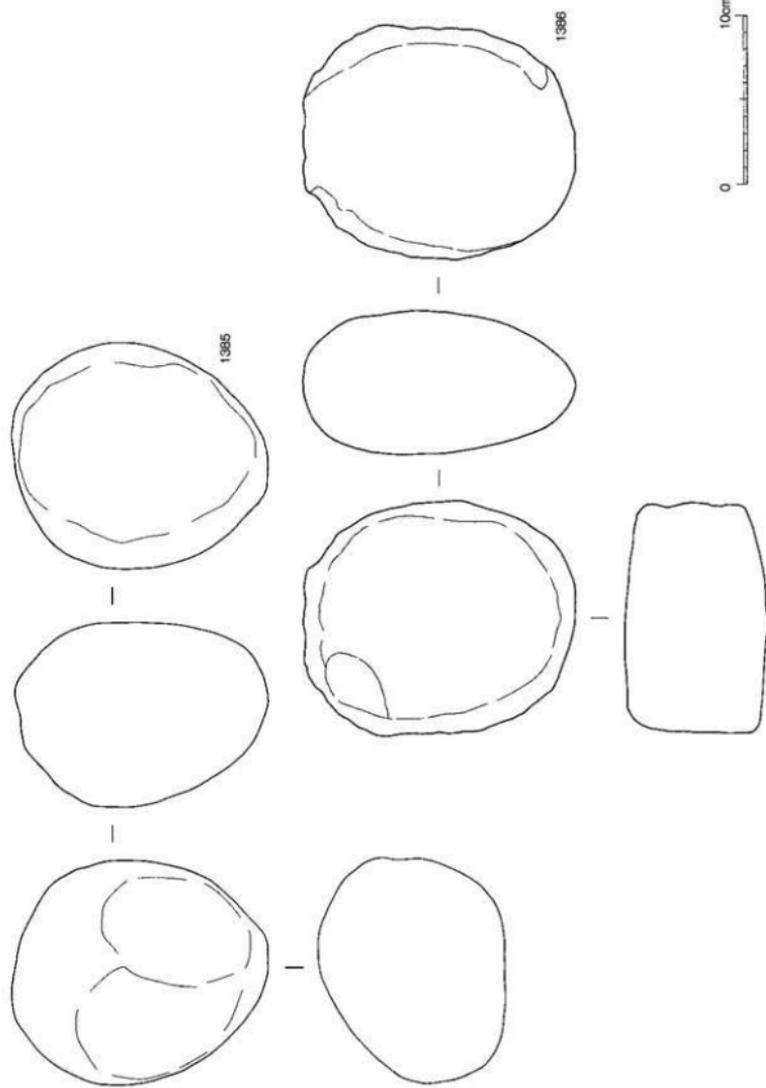
なお、この周辺には中世墓2及び中世墓3に、その埋土や遺構の形状が類似した直径が80cm～1mで円形に近い土坑33～土坑37がある。人骨や遺物等は、出土していないが、これらは、中世



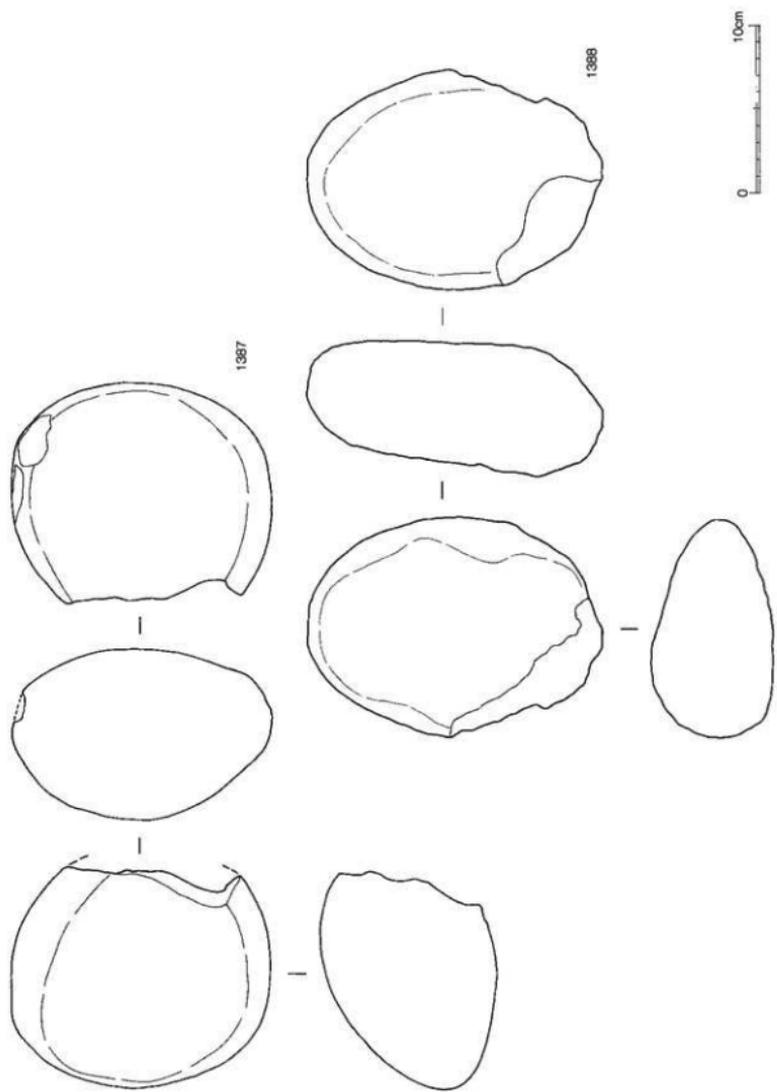
第221図 曲輪3遺構配置図



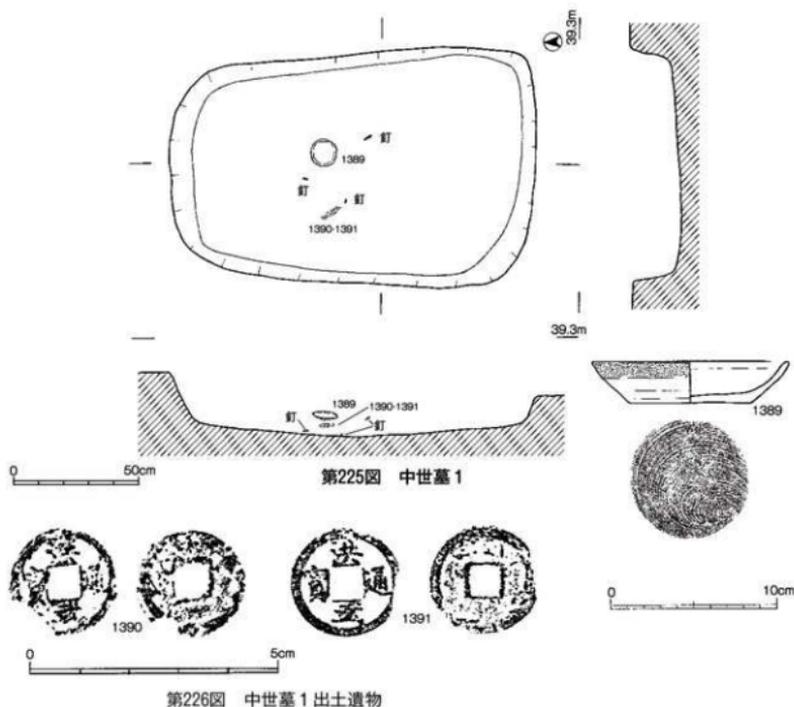
第222図 曲輪3出土遺物(1)



第223図 曲輪3出土遺物(2)



第224図 曲輪3出土遺物 (3)



墓の可能性があるのであると言えよう。

・中世墓 3 (第228図)

中世墓 3 は、曲輪 2 の中央部よりやや西側である I-19 区、中世墓 2 から南に約数 m のところで検出された。平面プランは、ほぼ円形でその直径は、約 80 cm である。

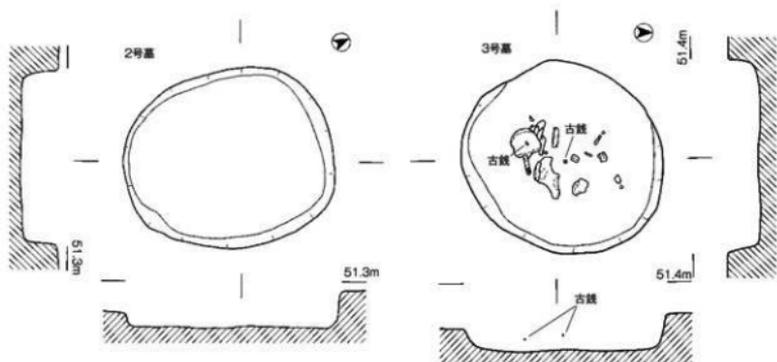
人骨の残りは良好ではなかったが、主な骨について、ご指導をいただいた平成 9 年度当時の鹿児島大学歯学部の小片教授、竹中助手によると、南側左の大きな骨が前頭骨、その下から南へ伸びるのが左上腕骨、その右側が骨盤であるということであった。

遺物としては、古銭が 2 枚出土している。1 枚は前頭骨のやや上、もう 1 枚は遺構の中央部で、レベルは 2 枚ともほぼ同じである。腐食が激しく、銭貨の種類は不明である。

この遺構を中世墓としたのは、周辺に古代や近世の遺構がほとんどないこと、同一グリッド内に洪武通寶が供献された中世墓 4 が存在していることから、中世墓と認定したものである。

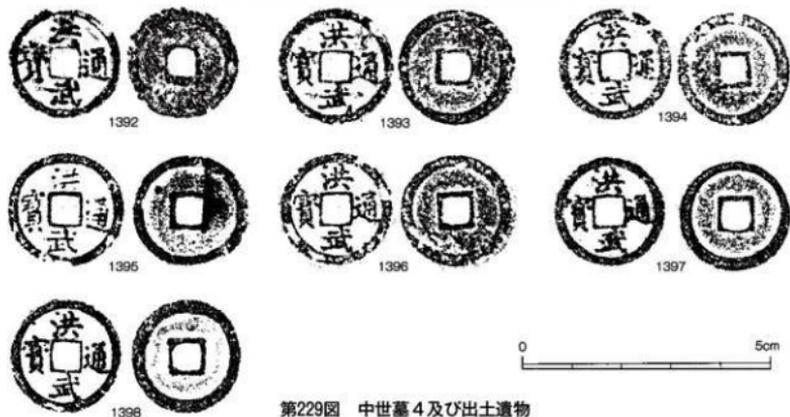
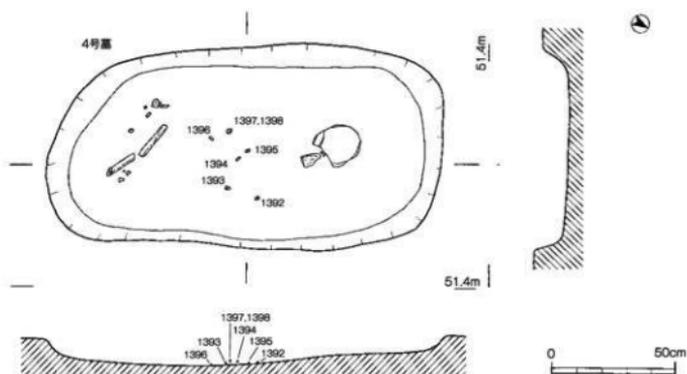
・中世墓 4 (第229図)

中世墓 4 は、曲輪 2 の中央部よりやや西側である H-19 区、中世墓 3 から南へ 8 m のところで検出された。平面プランは、ややいびつな隅丸方形である。長軸が約 1.5 m、短軸が 80 cm である。主軸は、北北西から南南東にかけてである。人骨の残りは良好ではなかったが、主な骨について、3 号墓と同様にご指導をいただいた平成 9 年度当時、鹿児島大学歯学部の小片教授、竹中助手に



第227図 中世墓2

第228図 中世墓3



第229図 中世墓4及び出土遺物

よると、頭位は北、伸展葬であるが、手・腕・脚の状況は不明、性別・年齢も不明であるということであった。

遺物は、遺構中央部に床着状態で洪武通寶が7枚出土している。

なお、1号墓でも述べたが、検出面から床面までの深さが、どの中世墓も浅いことから、現代までかなりの削平を受けたことが伺える。

・土坑

分布図（第193図・第217図・第221図）

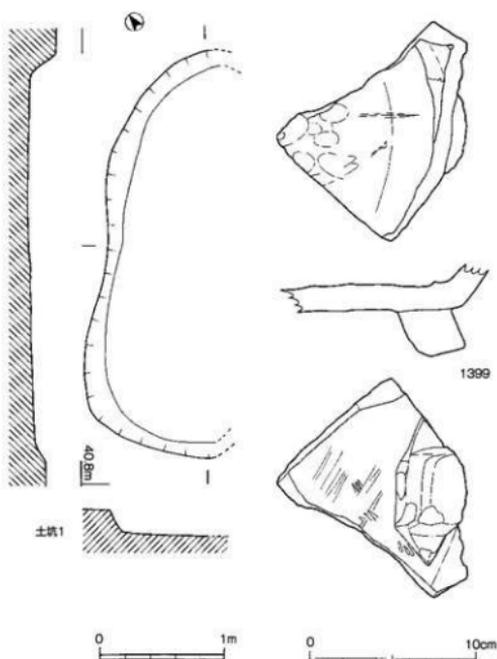
実測図（第230図～第239図）

中世の土坑と認識されるものは、曲輪1～曲輪3で49基検出された。ただし、古代の遺構と重複しているため、古代の土坑の可能性のあるものもある。

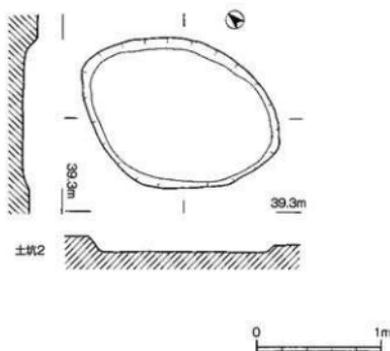
土坑1は、曲輪3の最南東部に土坑2と並ぶよう検出された。長軸が3.3mでやや東へ傾く。東側半分は、攪乱されている。埋土中から土師質の火舎か火鉢の底部で脚付きのものが出土している。

土坑2は、長径1.7m、短径1.2mの楕円形で土坑1の南側数メートルの場所に位置する。出土遺物はなかったが、埋土等から中世と判断した。また、土坑1・土坑2の周辺には数個のピットが確認された。建物とは、認定できなかったが、埋土等から同時期中世と判断した。

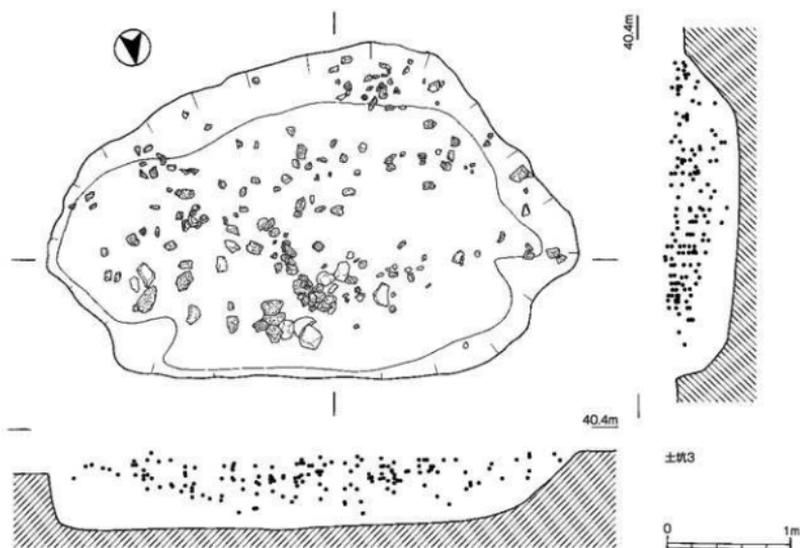
土坑3は、曲輪3の北西部、曲輪2の直下に位置する不定形で大型の土坑である。長径が約4m、短径が約3mである。埋土内の遺物のそのほとんどが軽石であり、断面から観察すると水溜りに軽石が浮いたような状態に感じられる。遺物としては、1400のやや端反りの白磁及び1401の土師質の播鉢と器種については不明であるが、瓦器質の1402が出土してい



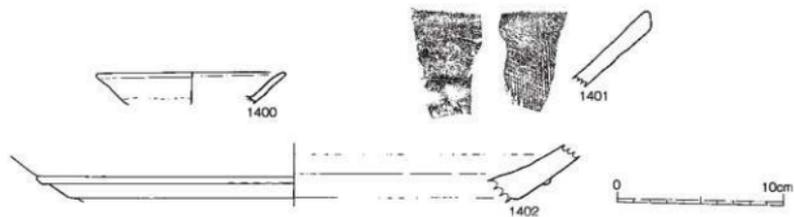
第230図 土坑1及び出土遺物



第231図 土坑2



第232図 土坑3



第233図 土坑3出土遺物

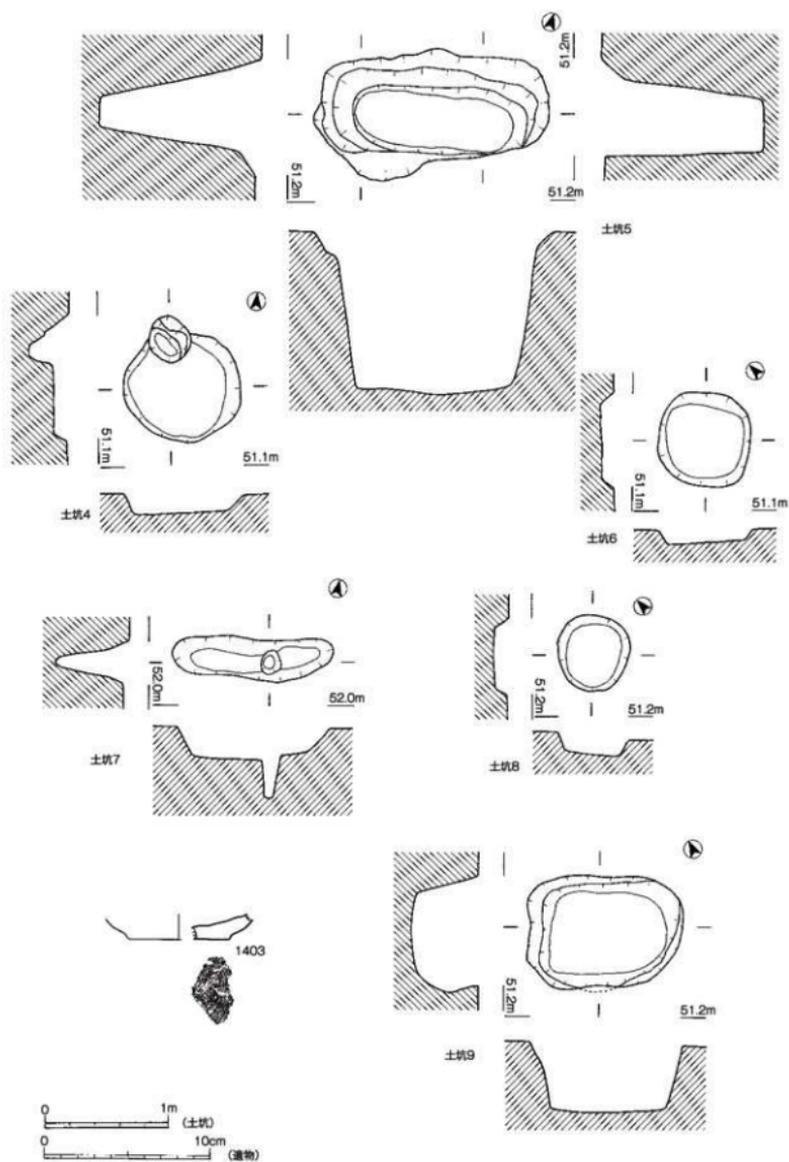
る。現場の状況では、大型の水溜りか、曲輪2から落下した水により穿たれたもののように感じた。

以下の土坑については、タイプ別の分類を試みたがその形状はさまざまであったので特徴のある土坑について述べていくことにする。他については、土坑観察表を参考にされたい。

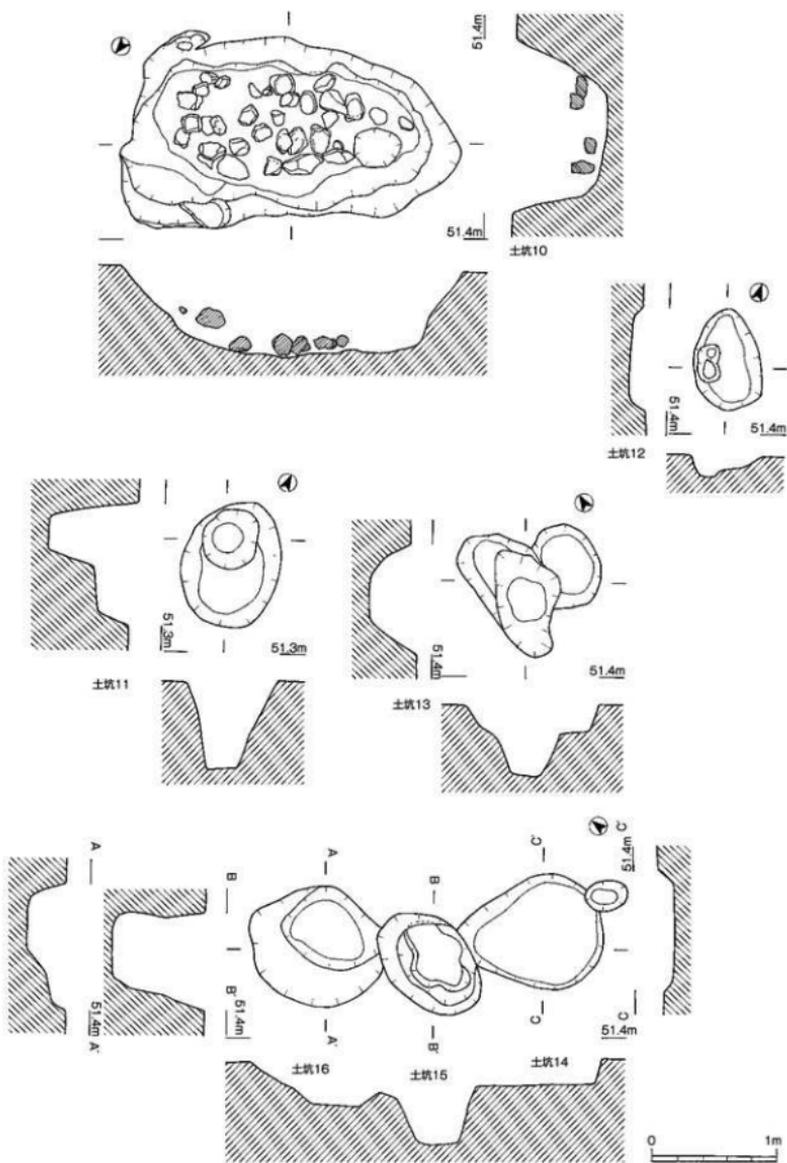
土坑10は、曲輪2の南側の斜面近くに位置し、長軸約3m、短軸約2m、深さ約1mで底面までに階段状の段のある不定形なものである。埋土中からは、底面に近い状態で、投弾と思われる小児頭大の安山岩や砂岩の自然石が観察された。土坑33～土坑37は、中世墓でも述べたが、その形状や周りの中世墓の分布状況から中世の墓孔の可能性がある。

・炉跡（第240図）

本遺跡からは、19基の炉跡が検出された。これらは、全調査区の中で3か所の地点に集中している。



第234図 土坑4～土坑9及び出土遺物



第235図 土坑10～土坑16

第1地点は、曲輪3のF・G-11～14区であり、1号炉跡～5号炉跡が所在している。第2地点は曲輪2のI-20・21区であり、6号炉跡～14号炉跡が所在している。第3地点は同じく曲輪2のG-22区であり、15号炉跡～19号炉跡が所在している。

第1地点

1号炉跡（第241図）

本遺構は、F-13区に位置する。南北方向を軸とし、平面形は楕円形を呈し、全長は約2mに及ぶ。壁面は赤褐色の粘土で形成されており、約6cmの幅で硬く焼けている。焚き口部にも確認でき、残存状態は良い。炉内に数点の拳ほどの礫が確認された。床面までの深さは19cmである。埋土は主に黄褐色粘土であるが、そのほかに炭化物や壁面と同じ赤褐色粘土塊も含まれていた。灰出し部の南端には炭化物の集中域が確認された。

2号炉跡（第241図）

本遺構は、F-13区に位置する。炉部の粘土壁が東側から南側にかけて60cm残存していた。また、土層断面からわかるように、床面のみが残存である。床面はかなりの火を受けたと考えられる。赤褐色の粘土壁の下部にはかなり多くの炭化物が確認された。赤褐色粘土と、炭化物の混土が東側へ広がりをもせている。炉壁の厚さは12cmであり、大型の炉であったと考えられる。

3号炉跡（第241図）

本遺構は、F-12区に位置する。ほぼ南北方向を軸とし、平面形はくびれのある長楕円形を呈す。全長は約2mで、床面までの深さは約30cm程であった。厚さ5cm程の赤褐色粘土壁が炉部を巡り、焚き口部で一部欠損している。焚き口部の黄白色粘土塊は焚き口部の粘土が崩れたものと考えられる。埋土は主に茶褐色土であるが、一部炭化物や赤褐色の粘土塊を含んでいた。灰出し部の両端には大小2基のピットが確認された。

4号炉跡（第241図）

本遺跡は、G-11区に位置する。この遺構は他の炉跡と違い、粘土等による成形がみられない。形態的には、他の炉跡同様の楕円形もしくは瓢箪形である。床面は焼け、暗褐色土が硬化しているが、南西部は硬化したブロックがあるのみである。また、埋土中には炭化物集中域が確認できた。出土遺物には縄文土器、成川式土器、中世の土師器などの小片がある。

5号炉跡（第242図）

本遺構はG-12区に位置する。トレンチに切られており、平面形が定かではない。部分的に炉壁の赤色粘土が残存する。埋土は主に炭化物を含んだ黄褐色土であり、床面には炭化物の集中域がみられた。炉部の深さが浅くなるのは、削平されたためである。

第2地点

6号炉跡（第242図）

本遺構は、I-20区に位置する。平面形は円形で、直径約80cmである。粘土壁は厚さ約10cmで、明赤褐色を呈している。いたる所で欠損しているため、全体形は明らかではない。焚き口部の粘土壁は、ゲート状に並んでいたと思われる。埋土には、黄白色の粘土が部分的に確認された。

7号炉跡 (第242図)

本遺構は、I-21区に位置する。平面形は円形で、直径は約85cmである。粘土壁は厚さ約10cmで、橙色を呈する。炉の奥壁に付着するように、炭化物の層が確認された。床面は平坦ではなく、最も深いところで26cmである。

8号炉跡 (第242図)

本遺構はI-21区に位置する。炉壁は一部のみの残存であり定かではないが、1号炉跡と同形のものと考えられる。これまでとは違い、焚き口部に炉壁が無く、炉部から灰出し部までが一連の構造である。埋土は主に、土壌化した炭化物の層が占める。

9号炉跡 (第242図)

本遺構はI-20区に位置する。ほぼ南北に軸を設定し、全長は1.65mである。炉壁は12cmと厚く、赤褐色を呈する。南側の灰出し部には、若干の灰白化した粘土が堆積していた。焚き口部の炉壁へ覆いかぶさるように堆積している。また、炉部の奥壁下には土坑が確認された。深さは50cmであり、埋土は黒茶褐色粘質土である。

10号炉跡 (第243図)

本遺構はI-20区に位置する。東西に軸を設定する。この遺構はこれまでと違い、円形の炉部が2つ繋がった形で検出された。斜線部で示した部分は暗茶褐色を呈している。明赤褐色の炉壁が、遺構のくびれ部分で繋がっている。使用時期の差も考えられるが、詳しい用途は定かではない。中央の炉部では、下層から炭化物の層が確認された。西側へ続く灰出し部を含めると、全長はおよそ3mに及ぶ。

11号炉跡 (第243図)

本遺構はI-20区に位置する。平面形は楕円形を呈し、軸はほぼ南北である。炉壁は厚さ15cmほどで、一部欠損している。灰出し部には、固結した黄白色の粘土が堆積している。明赤褐色の炉壁とは明らかに色調が異なり、後から堆積したことがわかる。床面は平坦で、船底状を呈す。深さは28cmである。

12号炉跡 (第243図)

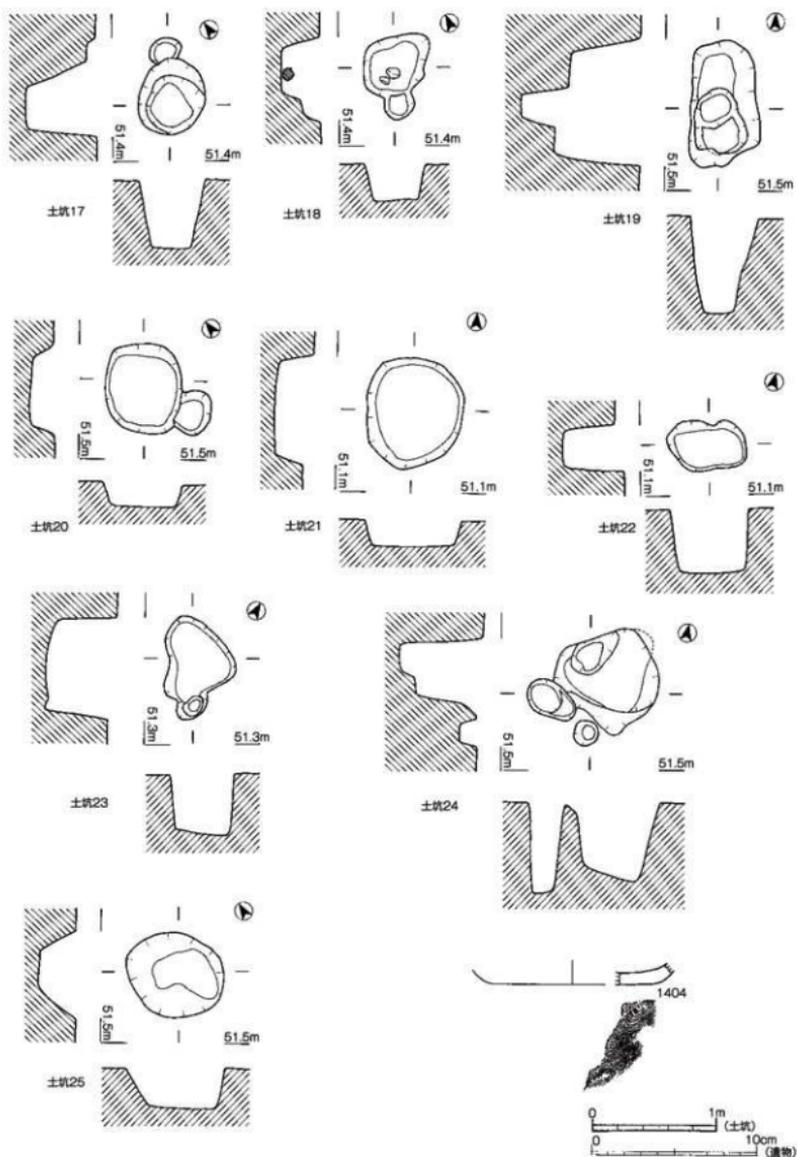
本遺構はI-20区に位置する。この遺構は9号・11号炉跡と同じく、灰出し部には後から堆積した黄白色の粘土が確認された。黒褐色の埋土が灰出し部へ続いており、全長は1.2mを越える。床面はわりと平坦であり、深さは18cmである。

13号炉跡 (第243図)

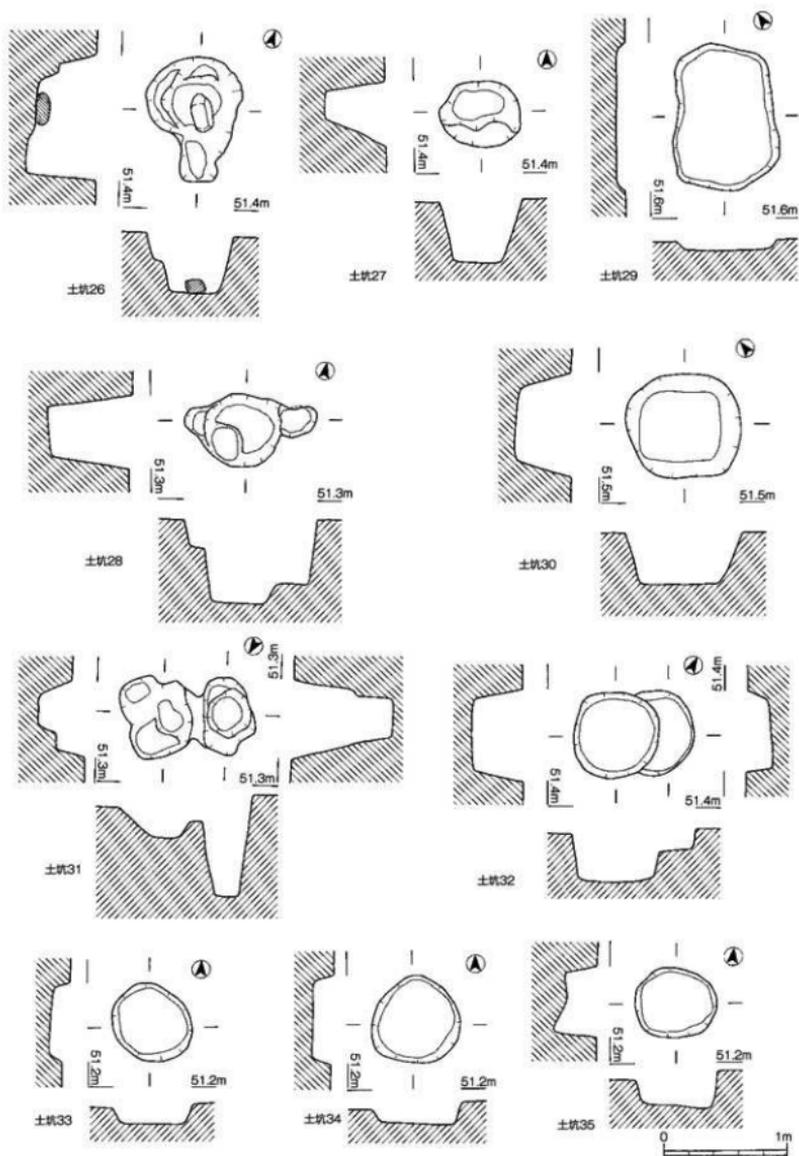
本遺構はI-20区に位置する。この遺構も9号・11号炉跡と同形で、灰出し部に固結した明黄褐色の粘土が堆積していた。炉壁の内面には炭化物が付着している部分があり、残存状態は良くない。炉部の埋土は5層に分けられ、最下層の暗褐色粘質土は灰出し部へ続いている。床面は平坦で、深さは28cmである。

14号炉跡 (第243図)

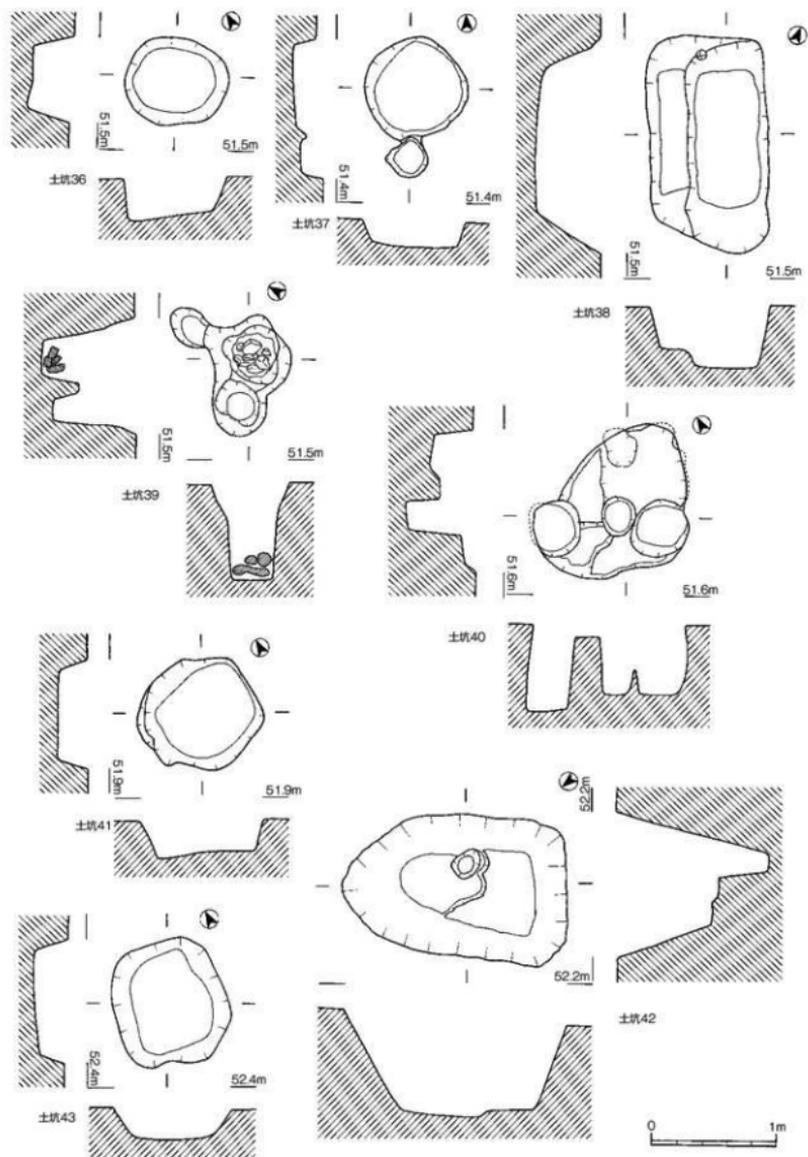
本遺構はI-20区に位置する。円形炉であるが、やや南側へ膨らむ形をしている。また、遺構の南側には、ぶい黄褐色の粘土塊が散在していた。遺構との関連性が考えられるが、用途は明らかではない。埋土は4層から成り、深さは36cmである。



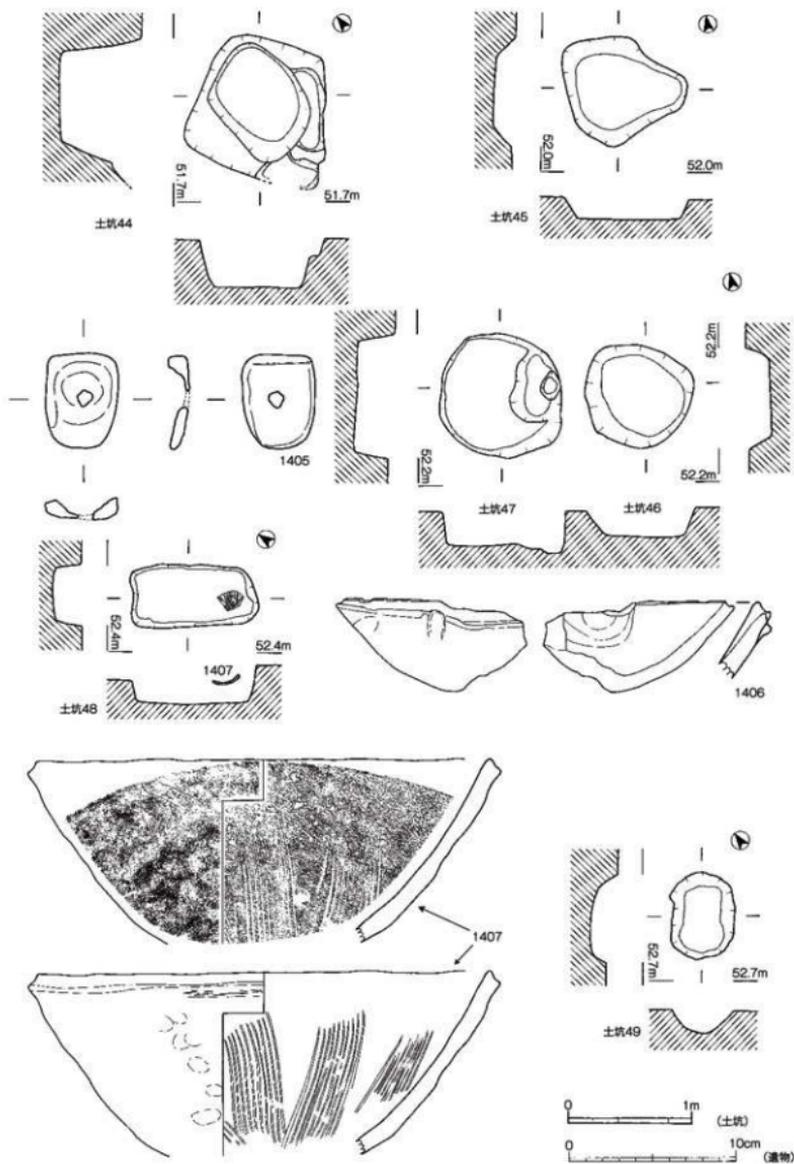
第236図 土坑17～土坑25及び出土遺物



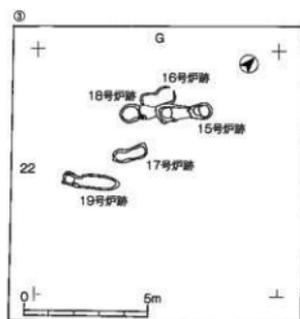
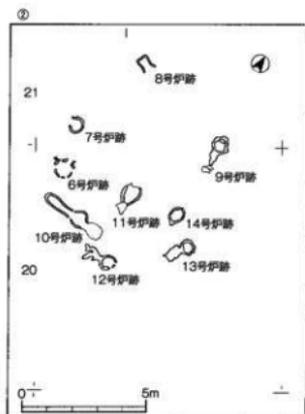
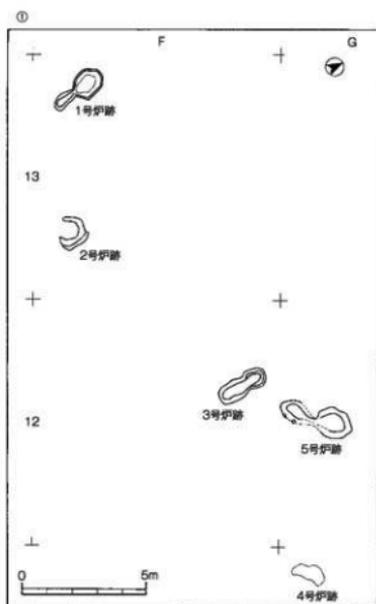
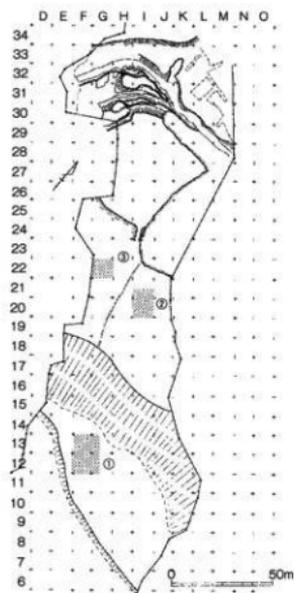
第237图 土坑26~土坑35



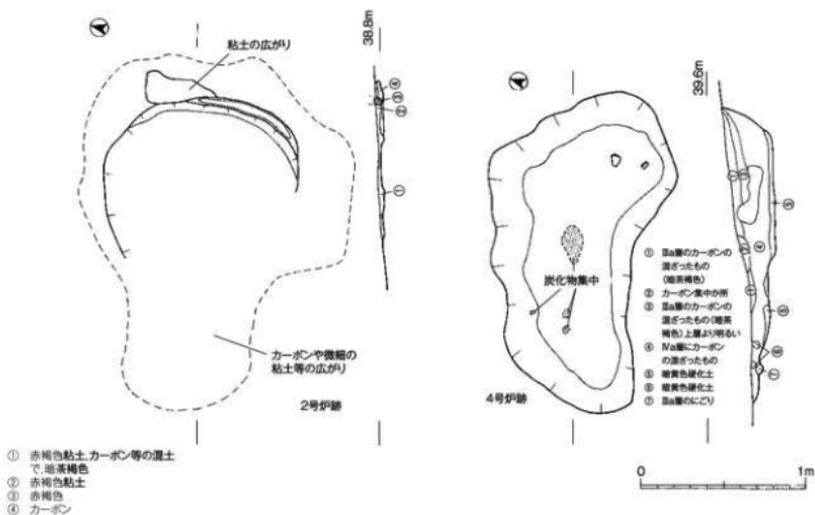
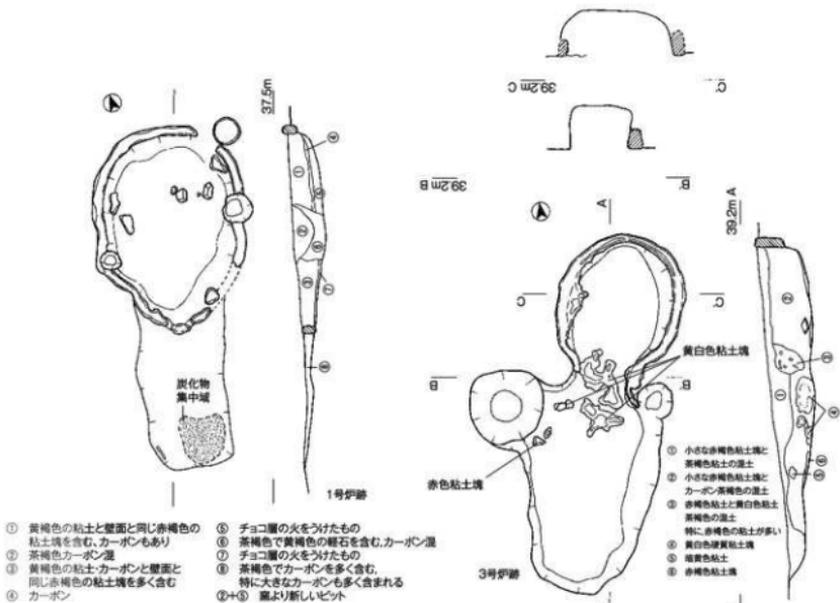
第238图 土坑36~土坑43



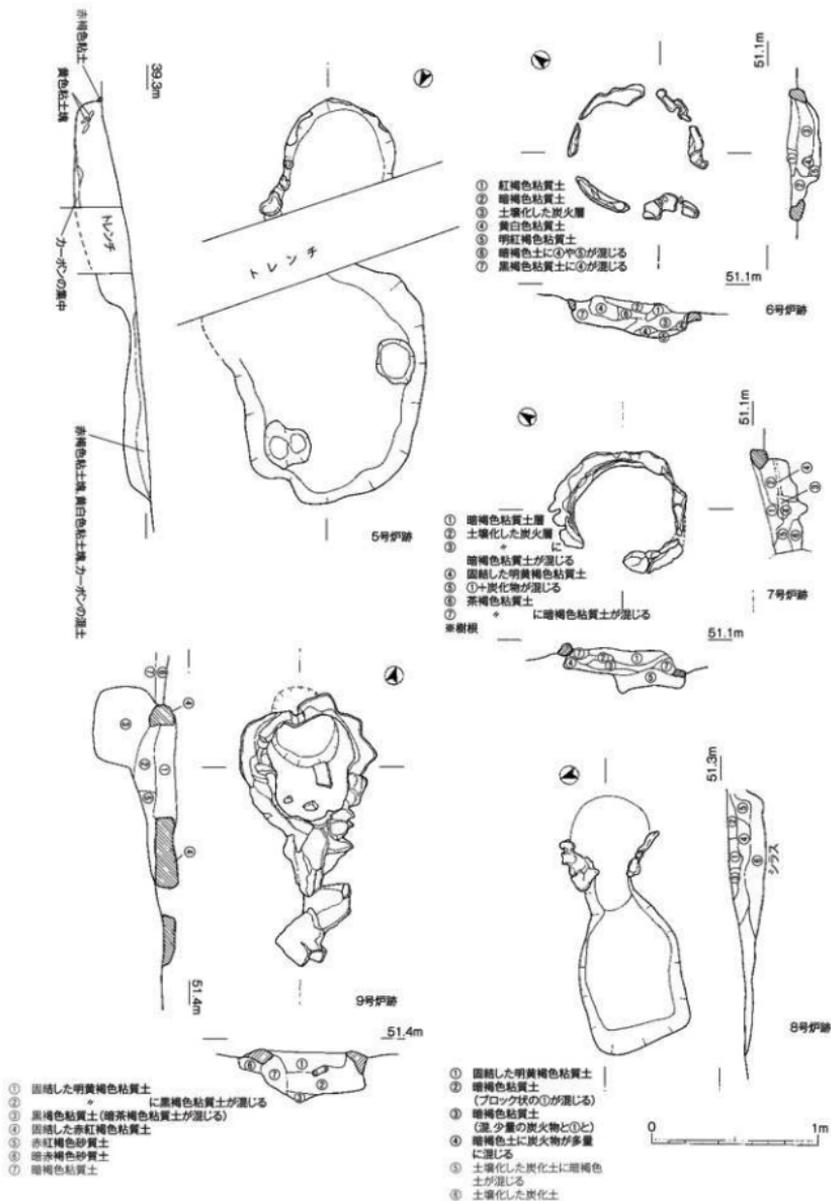
第239図 土坑44～土坑49及び出土遺物



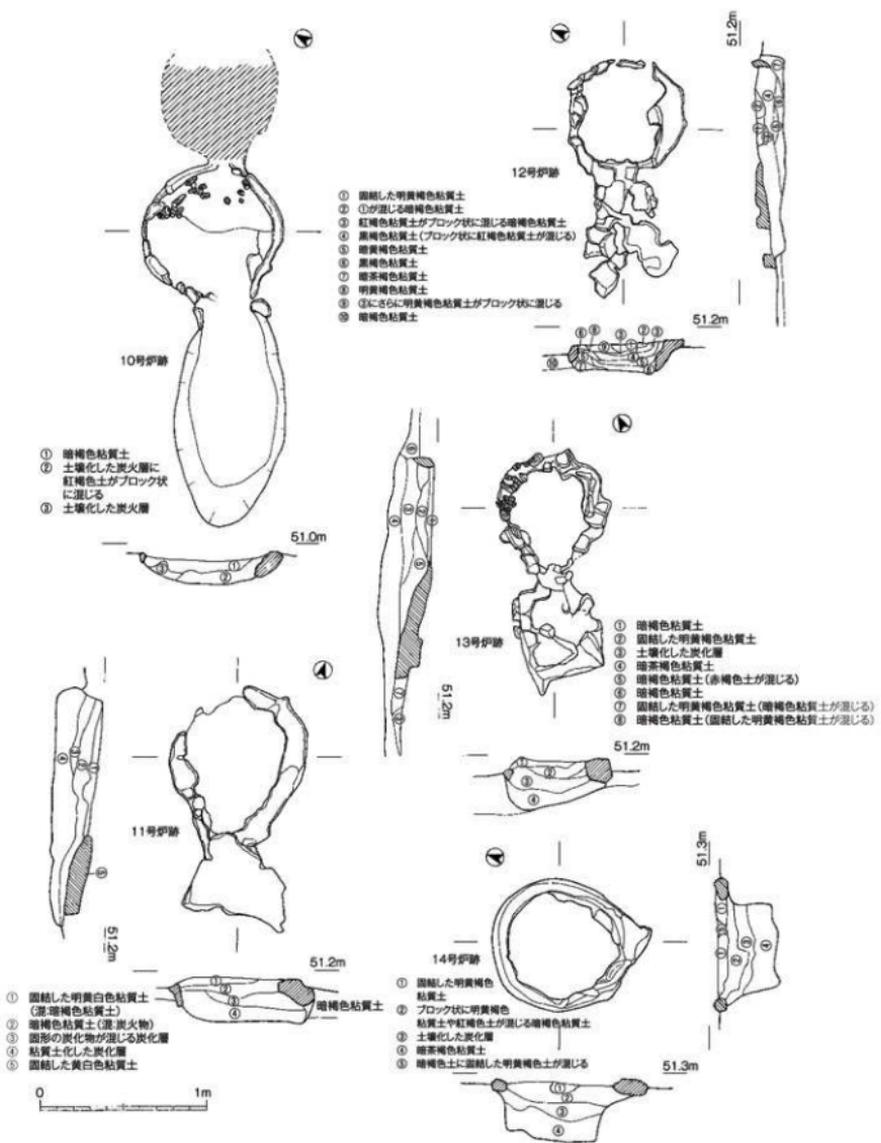
第240图 炉迹位置图



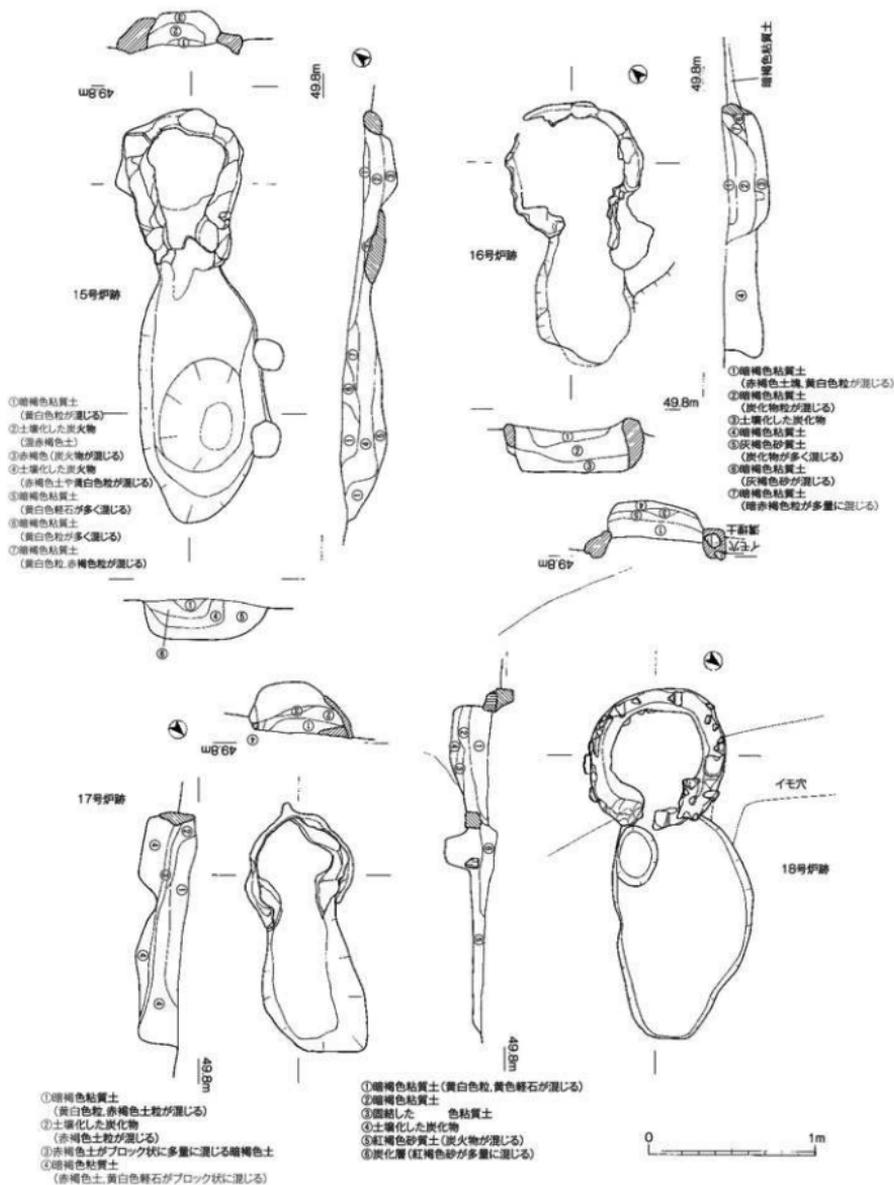
第241図 1号炉跡～4号炉跡



第242図 5号炉跡～9号炉跡



第243図 10号炉跡～14号炉跡



第244図 15号炉跡～18号炉跡

第3地点

15号炉跡 (第244図)

第3地点に集中する5基の遺構は、G-22区に位置する。5基とも、軸を北東から南西に設定している。本遺構は全長2.5m、炉部の深さは20cmである。炉壁の残存状態が良く、焼き口部にも確認できる。灰出し部は5層の埋土から成り、深さ28cmと深い。16号炉跡、及び18号炉跡が隣接している。

16号炉跡 (第244図)

本遺構は全長1.5m、炉部の深さは25cmである。平面形はくびれのある楕円形を呈する。焼き口部に炉壁は残存していないが、床面には僅かに段を有する。灰出し部の埋土は暗茶褐色粘質土で、深さは約25cmである。炉壁は良く焼けており、明赤褐色を呈する。北側の炉壁は薄く、残存状態が良くない。埋土には灰白色の粘土粒が混じっている。

17号炉跡 (第244図)

本遺構は溝状遺構に切り合う形で検出された。全長1.45m、炉部の深さは32cmである。平面形はくびれのある楕円形で16号と同形である。床面には段があり、炉部と灰出し部に分かれる。

4層から成る埋土は、炉部から灰出し部まで一連に堆積している。炉部の表土には、一部赤褐色の粘土塊が確認できた。これは粘土壁が崩れたものと考えられる。

18号炉跡 (第244図)

本遺構は溝状遺構といふ穴に切り合う形で検出された。全長2.1m、炉部の深さは23cmである。灰出し部を持つ円形炉である。厚さ15cmの炉壁が垂直に立つ。赤褐色を呈し、一部灰白の粘土塊が混じる。この炉壁は焼き口部にも確認された。また、遺構内には1基のピットが検出されたが、用途は明らかではない。

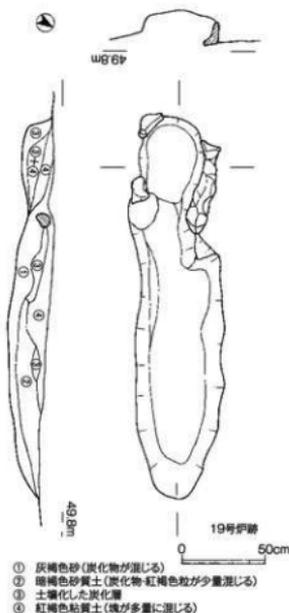
19号炉跡 (第245図)

本遺構は全長約2.3mで、長楕円形を呈す。炉壁内面は、炭化物が付着して黒褐色を呈していた。焼き口部には炉壁が無く、炉は蹄鉄形を成している。床面は平坦で、灰出し部が長い。検出面は全体的に赤褐色を呈しているが、炉部のみ黒褐色であった。

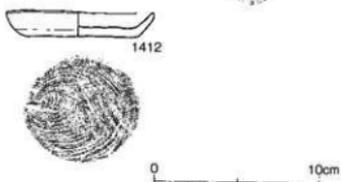
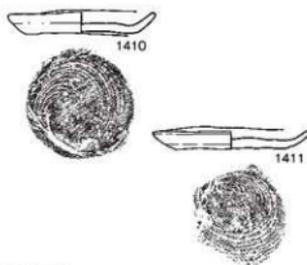
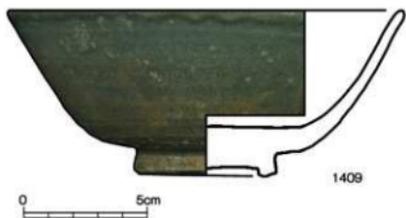
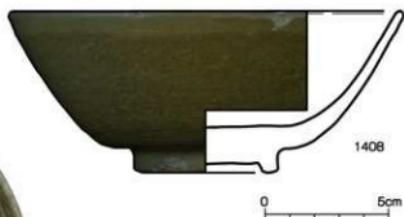
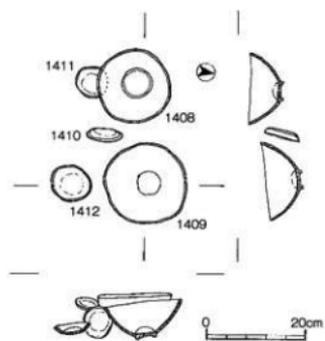
(6) 埋納遺構及び不明遺構

・埋納遺構 (第246図)

埋納遺構は、曲輪3のF-10区、南側の落ち際に検出された。青磁碗が口縁を上にしてほぼ正位置に置かれ、1408の体部の下に1411が、1408と1409の間に1410の土師器が立ったような状態で、1412が1409のやや南側に口縁を上に向けて置かれていた。掘り込みやその他の施設がないか精査を行ったが確認には及ばなかった。しかし、状況から埋納遺構の可能性のあるものと判断した。



第245図 19号炉跡



第246図 青磁及び土師器埋納遺構

1408・1409は、龍泉系の青磁碗である。両方とも見込みには櫛描が描かれ、畳付から高台内は、露胎であり、高台は削りだし高台である。

1410～1412は土師器の皿で、3点とも糸切底、底面径約6cm、器高1cm～2cm前後で、比較的造りは粗いものである。その時期は、並んで出土した青磁から判断すると、2枚とも龍泉系初期の13世紀頃と言えよう。

・不明遺構（第247図）

この性格不明の遺構は、曲輪1の西側、H・I-26・27区を中心に検出された遺構で、半分は調査区外へ伸びている。約5mの方形になるであろうと思われる浅い掘り込みに、南東端から幅80cmの浅い直線状の溝が西へ向かって5mほど延びる。

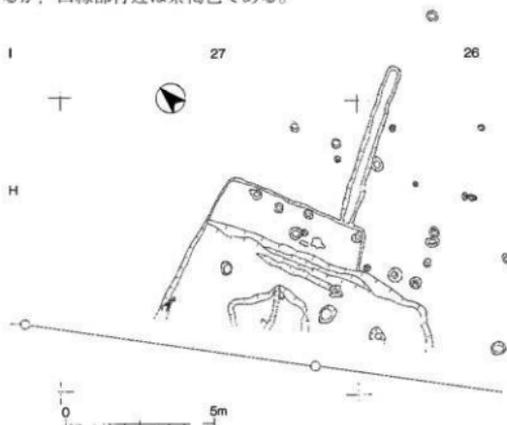
この遺構の一部か、あるいは、この遺構を切るようにH-27区から26区への南北の線を一辺とする浅い階段状の遺構で、南側は26区で西側へ折れる。そして、周辺にはたくさんの柱穴が散在している。非常に浅く、表土直下の遺構であり、いろいろな埋土の混入もあったため、時期判定には苦慮し、現在でも疑問は残るが、中世の遺物が多量に出土したことから、中世の章で報告することにした。

1413～1415は、土師器の糸切底の坏、1416は、やや肉厚の皿で、内底面を中心にススの付着が著しい。1417は、土師質、1419は須恵質の擂鉢、1418は土師質の捏鉢である。1420～1428は、外面が格子目叩き、内面にハケ目のある棒万丈系の中世須恵器と思われる。

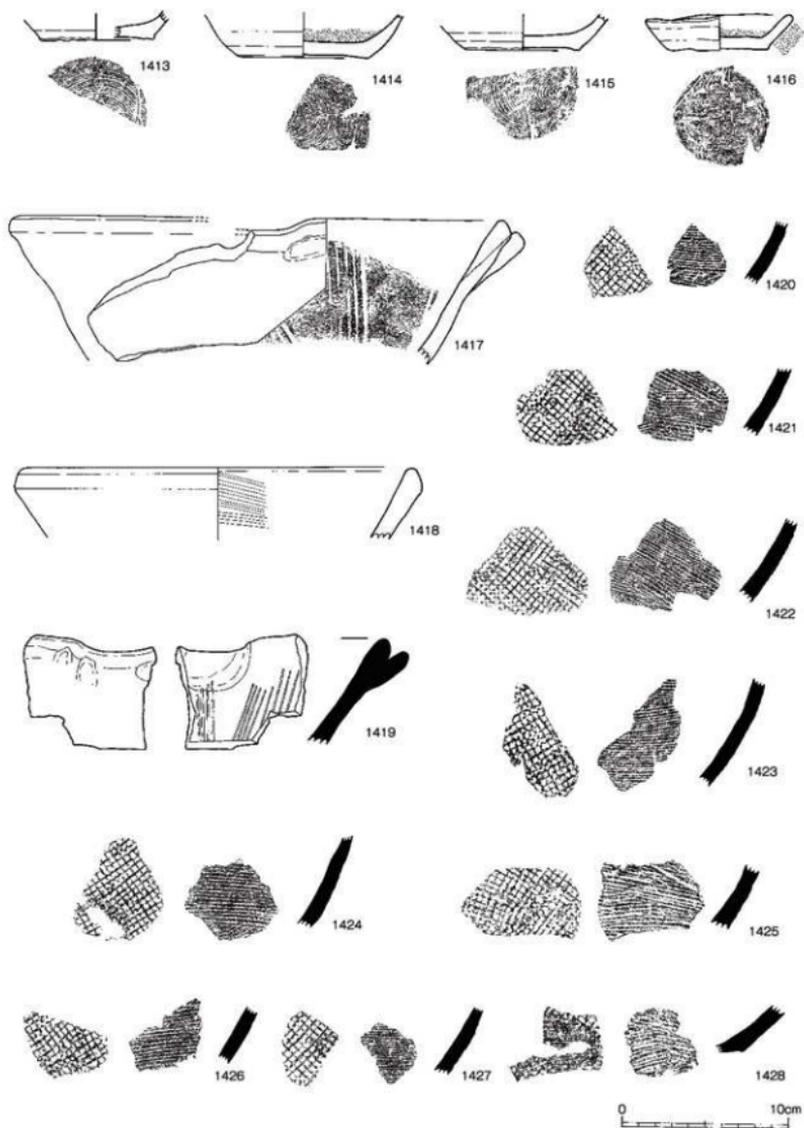
1429～1438は、龍泉系の青磁である。1436は、蓮弁文の小型の盤あるいは皿であり、それ以外は碗である。1434は、二次焼成を受けたような痕跡がある。1435は、高台内兜巾であり、1437は、見込みに印花文を施す。

この性格不明の遺構は、上述のような青磁出土の中心であり、その時期は14世紀～15世紀を中心とするものであることが特徴である。

他の遺物としては、1439が白磁の玉縁口縁の碗、1440は美濃茶碗で、色調は内外とも基本的には黒褐色を呈するが、口縁部付近は茶褐色である。



第247図 不明遺構



第248図 不明遺構出土遺物 (1)